

丸 山 遺 跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）

埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

1998

岐 阜 縿

財團法人 岐阜県文化財保護センター

序

国府・古川盆地へ流れ出す荒城川。その流域には縄文時代の人々の生活の足跡が数多く残されています。丹生川村折敷地五味原に発見された五味原遺跡群はその最上流部に位置します。

丹生川ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は平成5年度から始まりました。西田遺跡、カクシクレ遺跡、牛垣内遺跡の既に知られていた3遺跡に加え、平成6年の試掘調査によって丸山遺跡・たのもと遺跡が発見され、5遺跡の調査を行うことになりました。

丸山遺跡の調査は他の4遺跡同様県土木部河川課宮川上流河川開発工事事務所から岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

今回の調査の中で、飛驒地方では産出が確認されてない「琥珀玉製品」が発見されました。縄文時代の琥珀産出の中心は関東・東北地方であるとされ、当時の人々の広い範囲に渡る交流を物語るものであります。飛驒地方の一角に所在する遺跡が遠い地方との繋がりをもっていたことにあらためて驚きの念を抱かれます。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関各位の温かい御理解御協力を賜り感謝申し上げます。

また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なる御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人岐阜県文化財保護センター
理事長 篠 田 幸 男

例　　言

1. 本書は岐阜県大野郡丹生川村折敷地字丸山に所在する丸山遺跡(08761)の発掘調査報告書である。丸山遺跡は、平成5年度に行われた丹生川ダム水没地内の試掘調査の際に新たに発見された遺跡である。
2. 本調査は、丹生川ダム建設に伴うもので、県土木部河川課宮川上流河川開発工事事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は平成8年度に実施し、野村宗作と上出巳吉が担当した。
4. 本書に掲載した遺物の実測は、次の者が行った。
　土器（拓本を含む）　横井さだ子　畠中裕子　荒井尚子
　石器・石製品　　上出巳吉　牛丸富士子
　琥珀玉製品　　野村宗作
　土製品　　古田奈緒子
5. 遺構図面・遺物実測図トレイスは次の者が行った。
　中村映子　柚村幸子　脇淵純子
6. 遺物の写真撮影は佐藤右文氏に委託して行った。
7. 本書の執筆は、第2章第1節は清見村立清見小学校教頭岩田修氏に玉稿を賜った。第1章第2節第3章第2節・第5節および第4章第7節は上出巳吉が執筆した。第3章第3節第4節・第4章第6節は野村宗作が執筆した。第4章第2節1号住居跡出土遺物および第4章第3節I群土器・第4章第4節は谷口和人が執筆した。第4章第8節弥生土器は藤田英博が執筆した。他は伊藤秀雄が執筆した。編集は伊藤が行った。
8. 事前地形測量は㈱興栄コンサルタントに委託して行った。
9. 空中写真撮影は㈱イビソクに委託して行った。
10. 琥珀玉製品の保存処理並びに産地同定は元興寺文化財研究所に委託して行った。
11. 土壌に残存する脂肪の分析は㈱ズコーシャに委託して行った。
12. 発掘調査にあたっては次の方々や諸機関から御助言・御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）
　寺村光晴　藤田富士夫　樋口昇一　上村透　会田進　宮下健司　田代孝　長井正欣　久々忠義　神保孝造　加藤三千雄　光永真穂　山下勝年　森崇史　藤本健三　岩田修　下畑五夫　浅田貞由　飛驒考古学会　丹生川村教育委員会　上宝村教育委員会　南知多町教育委員会
13. 発掘調査作業員ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の者の参加を得た。
　青木茂　石本国夫　岩下てつ　小椋あや子　川合美智子　川浦泉　川上正　倉谷渡　高橋公芳　高橋なよ　高原みか　田口慶子　田邊直子　谷島喜代三　玉田忠男　中谷義男　西田正三　野中一郎　平野はるえ　坊田洋子　三村昇子　宮ノ脇季信　山本良秋　鷺見博　横井さだ子　畠中裕子　荒井尚子　牛丸富士子　古田奈緒子　中村映子　柚村幸子　脇淵純子
14. 遺構記号は次のとおりである。SB：住居跡 SK：土坑 SX：不明遺構 P：ピット
15. 土層および遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土』（1993）を参照した。
16. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

序言

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経緯	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地形・地質環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構	10
第1節 概要	10
第2節 基本的層序	11
第3節 竪穴住居跡	17
第4節 土塙墓	20
第5節 土坑その他の遺構	20
第4章 遺物	29
第1節 遺物の概要と分類	29
第2節 遺構出土の遺物	31
第3節 包含層出土の土器	40
第4節 丸山遺跡の底部	80
第5節 土製品	82
第6節 琥珀玉製品	84
第7節 遺物包含層出土の石器	91
第8節 弥生土器その他	124
第5章 自然科学的分析	126
第1節 丸山遺跡出土琥珀分析報告	126
第2節 丸山遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析	128
第6章 まとめ	135
引用・参考文献	136

図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景・発掘状況・遺構・琥珀玉出土状況
図版2 遺物包含層出土の縄文土器 I群
図版3 遺物包含層出土の縄文土器 I群
図版4 遺物包含層出土の縄文土器 I群
図版5 遺物包含層出土の縄文土器 I群
図版6 遺構出土の縄文土器
図版7 遺構出土の縄文土器
図版8 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版9 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版10 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版11 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版12 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版13 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版14 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版15 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版16 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版17 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版18 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版19 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版20 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版21 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版22 遺物包含層出土の縄文土器 II群
図版23 琥珀玉製品・土製品
図版24 弥生土器・中近世陶器類
図版25 遺物包含層出土の石器(1)
図版26 遺物包含層出土の石器(2)
図版27 遺物包含層出土の石器(3)
図版28 遺物包含層出土の石器(3)
図版29 遺物包含層出土の石器(4)

挿 図 目 次

- 第1図 丸山遺跡位置図..... 1
第2図 遺跡付近の地形区分..... 4
第3図 高原川水系の縄文遺跡..... 7
第4図 丸山遺跡周辺地形図..... 10
第5図 土層図(1)..... 12

第6図	土層図(2).....	13
第7図	地区設定図.....	14
第8図	丸山遺跡遺構図.....	15
第9図	第1号住居跡.....	17
第10図	第2号住居跡.....	18
第11図	第3号住居跡.....	19
第12図	土坑(1).....	22
第13図	土坑(2).....	23
第14図	土坑(3).....	24
第15図	土坑(4).....	25
第16図	土坑(5).....	26
第17図	土坑(6).....	27
第18図	第1号住居跡出土の縄文土器・石器.....	31
第19図	第2号住居跡出土の縄文土器・石器.....	33
第20図	第3号住居跡出土の縄文土器.....	33
第21図	第3号住居跡出土の石器.....	34
第22図	土坑出土の石器.....	34
第23図	土坑出土の縄文土器.....	35
第24図	土坑出土の縄文土器 (SK22出土)	36
第25図	遺物包含層出土の縄文土器 I群 1 ~ 4 b 類.....	41
第26図	遺物包含層出土の縄文土器 I群 4 b ~ 5 a 類.....	43
第27図	遺物包含層出土の縄文土器 I群 5 a ~ 5 c 類.....	45
第28図	遺物包含層出土の縄文土器 I群 5 c ~ 5 d 類.....	46
第29図	遺物包含層出土の縄文土器 I群 5 d ~ 8 類.....	49
第30図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 1 類.....	51
第31図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 2 類.....	53
第32図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 2 類.....	55
第33図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 2 類.....	56
第34図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 2 類.....	57
第35図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 3 類.....	59
第36図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 3 類.....	60
第37図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 4 類.....	61
第38図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 4 類.....	63
第39図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 4 類.....	64
第40図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 5 類.....	66
第41図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 5 類.....	67
第42図	遺物包含層出土の縄文土器 II群 6 類.....	70

第43図	遺物包含層出土の縄文土器II群 6類	71
第44図	遺物包含層出土の縄文土器II群 6類	72
第45図	遺物包含層出土の縄文土器II群 7類	74
第46図	遺物包含層出土の縄文土器II群 7類	75
第47図	遺物包含層出土の縄文土器II群 7類	76
第48図	遺物包含層出土の縄文土器III群	78
第49図	遺物包含層出土の縄文土器IV群	79
第50図	遺跡分布図	80
第51図	土器片利用の円盤	82
第52図	土製品（土偶・不明土製品）	83
第53図	琥珀玉製品(1)	85
第54図	琥珀玉製品(2)	86
第55図	遺物包含層出土の石器(1)	92
第56図	遺物包含層出土の石器(2)	95
第57図	遺物包含層出土の石器(3)	96
第58図	遺物包含層出土の石器(4)	99
第59図	遺物包含層出土の石器(5)	100
第60図	遺物包含層出土の石器(6)	103
第61図	遺物包含層出土の石器(7)	104
第62図	遺物包含層出土の石器(8)	106
第63図	弥生土器・中近世遺物	125
第64図	試料中に残存する脂肪酸組成樹状構造図	132
第65図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	133

表 目 次

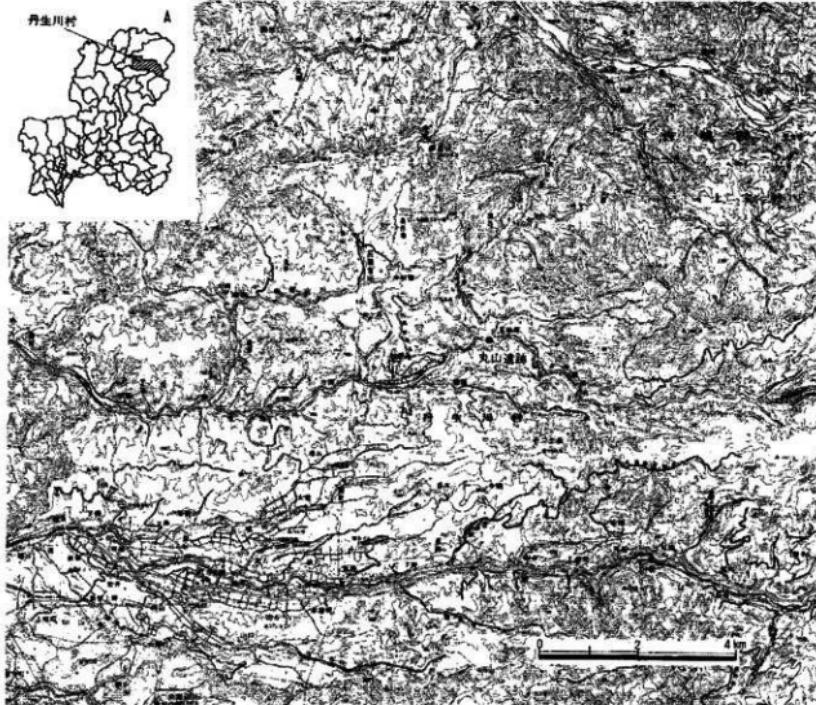
第1表	上宝村の縄文遺跡	9
第2表	土坑觀察表	28
第3表	底部圧痕の比較	81
第4表	網代の種類の比較	81
第5表	琥珀玉製品觀察表	84
第6表	石器計測表	107
第7表	琥珀分析結果	127
第8表	土壤試料の残存脂肪抽出量	129
第9表	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	129
第10表	" 脂肪のステロール組成	130
第11表	試料中に分布するコレステロールとシスステロールの割合	131

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

今回、丸山遺跡が発掘調査の対象となったのは、宮川上流河川開発工事事務所による丹生川ダム建設による。丹生川ダム水没地内埋蔵文化財緊急発掘調査の経緯については「西田遺跡」の発掘調査報告書に記述されているので割愛する。

丹生川ダム水没地内には岐阜県遺跡地図によって「牛垣内遺跡」と「カクシクレ遺跡」が知られており、事前調査によって「西田遺跡」の存在が明らかになっていた。しかし、水没予定地内にさらに新たな遺跡が存在する可能性が想定できため平成5年度および平成6年度に周辺の試掘調査を実施した。当該地の試掘調査は平成6年度に実施された。西田遺跡の西側に隣接する小丘陵地で水田部に22ヶ所のトレーナチを設定し重機によって掘削した。人力による精査および掘削土内の遺物の有無確認などを行った。その結果5ヶ所のトレーナチより遺物が出土した。また土層観察などから遺物包含層の存在が確認できたため文化財保護法第57条に基づき新発見の遺跡としての手続きを行った。当該地は小字名をとって「丸山遺跡」(08761)として認定され調査に至った。



第1図 丸山遺跡位置図

第2節 調査の経緯

発掘調査は、丹生川ダム水没地域内の最終年度の発掘調査として、平成8年4月22日～11月12日まで実施した。同年4月3日現地を視察するが、全面雪に覆われており長靴がなければ歩行できない状態であった。4月中旬までに発掘調査の準備を行い、4月22日より5日間重機を使用して第1層となる表土を掘削した。以下、2週ごとに調査経過を記述する。

- 第1・2週（4.30～5.10）作業員に調査方法を指導し、調査区内の環境を整備した。5月8日、調査始め式を行う。グリッド（区）は北から南にA～J、西から東に1～18区と設定して杭打ちを行った。調査地区の東側16～19区を掘削し、特にH16区周辺より出土する遺物が目立った。
- 第3・4週（5.13～5.24）C15、16区とG15～18区の2地区を重点的に調査し、G17区より石錨（21点）など遺物が多数出土。円形プラン（SK3）を確認。C15、16区では遺構は確認されず。
- 第5・6週（5.28～6.7）調査地区東側のH15～H17区にかけて土器片が多く出土。G16区よりSB1のプランを確認する。SB1の南北2カ所に土坑（SK22、SK32）が重なる。
- 第7・8週（6.10～6.21）F11～F12区の黒色土より縄文早期の土器片が集中して出土した。SB3内を掘削し柱穴を検出する。
- 第9・10週（6.24～7.5）調査地区西側のE F G H 8～E F G H 12区を重点的に調査を進めた。F13では縄文早期の土器片が出土。遺構は検出されなかった。
- 第11・12週（7.9～7.18）引き続き西側地区的調査を進める。E F 8～E F 10区を約60cm掘削。III層黒褐色土まで掘削。遺物包含層である。
- 第13・14週（7.22～8.2）F10区を南西に向かう谷とG13からH11の南西に向かう小川を確認。小川には礫が入り込み周辺には、土器片や石器が多数出土した。
- 第15週（8.5～8.9）F10からG9の南西に流れる谷に土砂が約130cm堆積していることを確認。
- 第16・17週（8.19～8.30）調査地区西側谷部の掘削続行。雨のため思うように進まなかった。
- 第18・19週（9.2～9.13）G 9区にて黒色土中に直径50cm程の焼土を検出。焼土下より打製石斧が1点出土する。
- 第20・21週（9.17～9.27）SB1、SB2を掘削。遺物数点が出土。SB3でも土器片や石器などが出土。住居跡中央部より赤く焼けた地床炉を検出した。
- 第22・23週（10.1～10.11）E F 12～14区を重点的に掘削した。E 13区のIII層に焼土を検出し、周辺から遺物が出土した。F13区より縄文早期の土器片が多数出土した。SK3の柱穴を掘削する。
- 第24・25週（10.14～10.25）SK22の土坑より琥珀玉製品が出土。SK25から縄文中期の土器が出土。E 13～F 12区III層の数カ所に直径30～40cmの範囲で焼土を検出し、周辺から土器が固まって出土。
- 第26・27週（10.28～11.8）土坑の断面実測を行い全掘。土坑の密集するG 16、17区を再測量。SK30より石皿が出土。11月8日調査納め式実施。
- 第28週（11.11～11.12）現場の発掘調査を終了し、遺物・用具等を飛驒出張所に搬入。以後、岐阜県文化財保護センター飛驒出張所にて整理作業に入った。

第2章 遺跡の環境

第1節 地形・地質環境

1. 地形的特徴

丹生川村五味原地域は、わずかに緩斜面と河岸段丘がみられ、そこには縄文時代以降の人跡が発見されている。この五味原の平坦地は、荒城川本流と主な支流である大脇谷との合流地点付近に発達している。(第2図)丸山遺跡は、荒城川本流沿いに位置し、河川によって形成された地形上に位置している。

近隣には、6500年前のアカホヤ火山灰層が確認されているので、それ以前からこのような地形形成が始まっていたと考えられる。現在この辺りの荒城川の河床には岩盤が露出していることから、全体的に浸食環境にあったが、扇状地状の緩斜面と低位河岸段丘がみられることから一時期は堆積物が集積するようなことがあったのだろう。荒城川流域には、低位段丘はよく発達しているが、中位段丘でこのような扇状地状の緩斜面はあまりみられない。

2. 地質的特徴

この付近の地質は、中生代白亜期(約6千5百万年前)に噴火した大雨見山層群中の酸性火山岩である明ヶ谷溶結凝灰岩層と、新生代第四紀更新世中期(60万年前)に噴出した上宝火砕流堆積物の分布域である、これらの火山岩は、いずれも大規模な火砕流堆積物であり、高温で堆積して自らの熱で軽石などが溶結した、いわゆる溶結構造を有している。

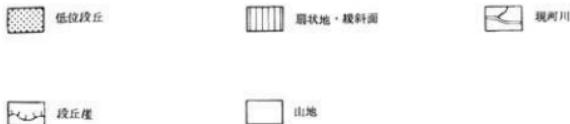
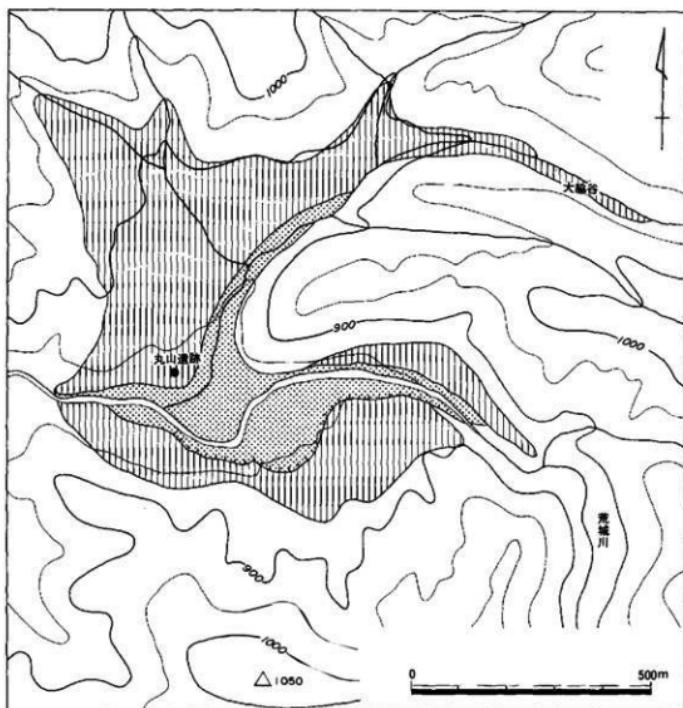
明ヶ谷溶結凝灰岩層の特徴は、笠原氏によれば最大層厚300mであり、流紋岩イサイトー流紋岩で粗粒のカリ長石・石英・斜長石・黒雲母・单斜輝石などの鉱物を含んでいる。少し上流側には、上宝火砕流堆積物が広く分布している。上宝火砕流堆積物は流紋岩質で、斑晶として斜長石・石英・黒雲母などで、溶結構造をもつ本質レンズを多く含む。かなり多孔質で加工しやすいが石器としては柔らかすぎるのであまり利用されていない。また、周辺には古生層の荒城川層が見られ、河川の礫中にも緑色岩、泥岩などが多く存在している。五味原グラノファイアも分布している。

このように、石器や炉石には、多孔質で柔らかい上宝火砕流堆積物は使用しないで、比較的硬い大雨見山層群の流紋岩類をよく利用している。

大雨見山層群の溶結凝灰岩と上宝火砕流堆積物(溶結凝灰岩)は、いずれも溶結構造をもつ、かなり風化に対しての抵抗力の弱い岩石であることから、五味原地区の緩斜面形成の一要因になったことが考えられる。

〈参考文献〉

- 笠原 芳雄(1988) 大雨見山層群—飛騨外縁帯の白亜紀末期の湖成層と火砕流堆積物—
飛騨の大地をさぐる 教育出版文化協会



第2図 遺跡付近の地形区分

第2節 歴史的環境

五味原遺跡群第1集西田遺跡調査報告書では、丹生川村の縄文遺跡について概観した。同第2集カクシクレ遺跡報告書では荒城川水系の縄文遺跡について述べた。当調査報告書では、五味原遺跡群が所在する折敷地五味原に隣接する上宝村の縄文遺跡について概観してみたい。後述するように丸山遺跡において主体を占める中期初頭の土器群と同種のものが上宝村上灘下野切遺跡においても確認されていることなどから五味原からトヤ岬を越えて交流が想定できるからである。

上宝村は、丹生川村の北方に隣接する。東西約40km南北約15km。中央部を高原川が流れる。高原川は県境付近で宮川と合流し富山県からは神通川とその名称を変え日本海に流れ出している。村内には双六川・藏柱川など高原川の支流が形成する小段丘に多数の縄文遺跡が所在する。

上宝村の縄文時代研究は、昭和3年田中正太郎の報告にもとづいて上宝村・神岡町合わせて9ヶ所の縄文遺跡が報告されていることに始まる。その後の調査で昭和10年「飛驒石器時代遺跡地名表」では29ヶ所が紹介されている。また、昭和10年代には林魁一が踏査にもとづいて上地ヶ根、一重ヶ根、今見、葛山、岩井戸、在家、本郷、吉野、中山、見座、新田、藏柱などの遺跡を紹介している。昭和20年代後半には、当時、上宝第一中学校教員であった石原哲彌による調査^{註1}が行われ、それを受け昭和33年には大江命、下形式による「上宝村の先史時代」が刊行されている。

ここでは、上宝村の縄文遺跡を時期別に概観する。

草創期についてはその様相が不明である。早期については、向野遺跡が押型文土器を出土する単純遺跡として注目される。押型文の文様は楕円文がもっとも多く山形文がつぎ、格子目文は僅少である。原体を横回転させた施文方法のものが一般的で稀に縱施文や帯状施文のものがある。高山市ひじ山遺跡のものに最も近いといわれている。他に押型文土器を出土している遺跡は下尾ノ上遺跡、大首遺跡宮の上遺跡などである。

前期の遺物を出土した遺跡は10ヶ所ほどが報告されているが、他の時期の遺物に少しづつ混じる程度のものが多く前期主体の遺跡は今のところ確認されていない。その中で枕石岩陰と大檜遺跡では前期末の結節状浮線文土器が出土している。また、上灘下野切遺跡では西日本系前期末大歳山式土器が出土している。

中期前半を代表する遺跡は上灘下野切遺跡である。主体となる土器は五領ヶ台式・鷹島式土器と東海地方に分布の中心を持つ中期初頭の土器である。更に北陸系の撫糸文を施す土器片も出土している。丸山遺跡の主体を占める土器と類似しており興味深い。

中期中・後半期の遺物を出土する遺跡は上宝村内には多く。本郷内野・中野・在家・大檜などの各遺跡が代表的である。北陸系の上山田・古府・串田新式を始めとして勝坂・阿玉台や加曾利E式など中期中葉以降の各期の型式土器が見られる。吉野地区内に所在する豊受神社を中心とする宮の上遺跡では加曾利E式期の住居跡が1軒発見されている。また、本郷内野遺跡では炉内に土器を敷きつめた例が報告されている。

後期・晩期の遺物量は少ない。後期については大檜遺跡に壠之内式併行式土器、大首・在家・中垣内の各遺跡には気屋式類似。大檜・新田など遺跡には加曾利B式類似土器。在家・大檜遺跡には西日本系縦帶文系土器が出土している。晩期については、長倉道場遺跡で大洞B式、大首遺跡からは大

洞C式が出土している。牧の巾遺跡では長野県千曲川流域の佐野式併行期の土器が出土している。更に中山遺跡には安行3aや大洞A式土器、杖石岩陰では北陸系の中屋式や大洞A'期の浮線文土器などが出土している。

1997年10月27日から約10日間の日程で愛知学院大学麻生優教授による杖石岩陰の調査が行われた。調査報告^{註2}によれば縄文時代から古代までの焼き物類が出土し、縄文時代早期3点、前期24点、中期3点、後期6点、晚期最終末13点、時期不詳縄文土器119点、土師器19点とされる。縄文時代早期の土器は肉厚で繊維を含む。前期の土器は北白川下層II式および諸磯系のものや羽状縄文のもの、大歳山式のものなどがある。後・晚期の土器では八日市新保式と思われるものや、玉抱き三叉文や磨消縄文のものなどがある。また、晚期最終末水神平式が1点報告されている。

石器については、打製石斧1点、礫器1点、台石3点、敲石5点、叩石3点、磨石18点、石鎚25点、剥片鎌1点、礫石錐10点、石錐5点、スクレイパー9点などである。石器組成では、石鎚、磨石、礫石錐の多さと打製石斧の少なさが特徴的である。石材は、地元産の溶結凝灰岩の物がもっとも多く、黒曜石や下呂石もみられる。

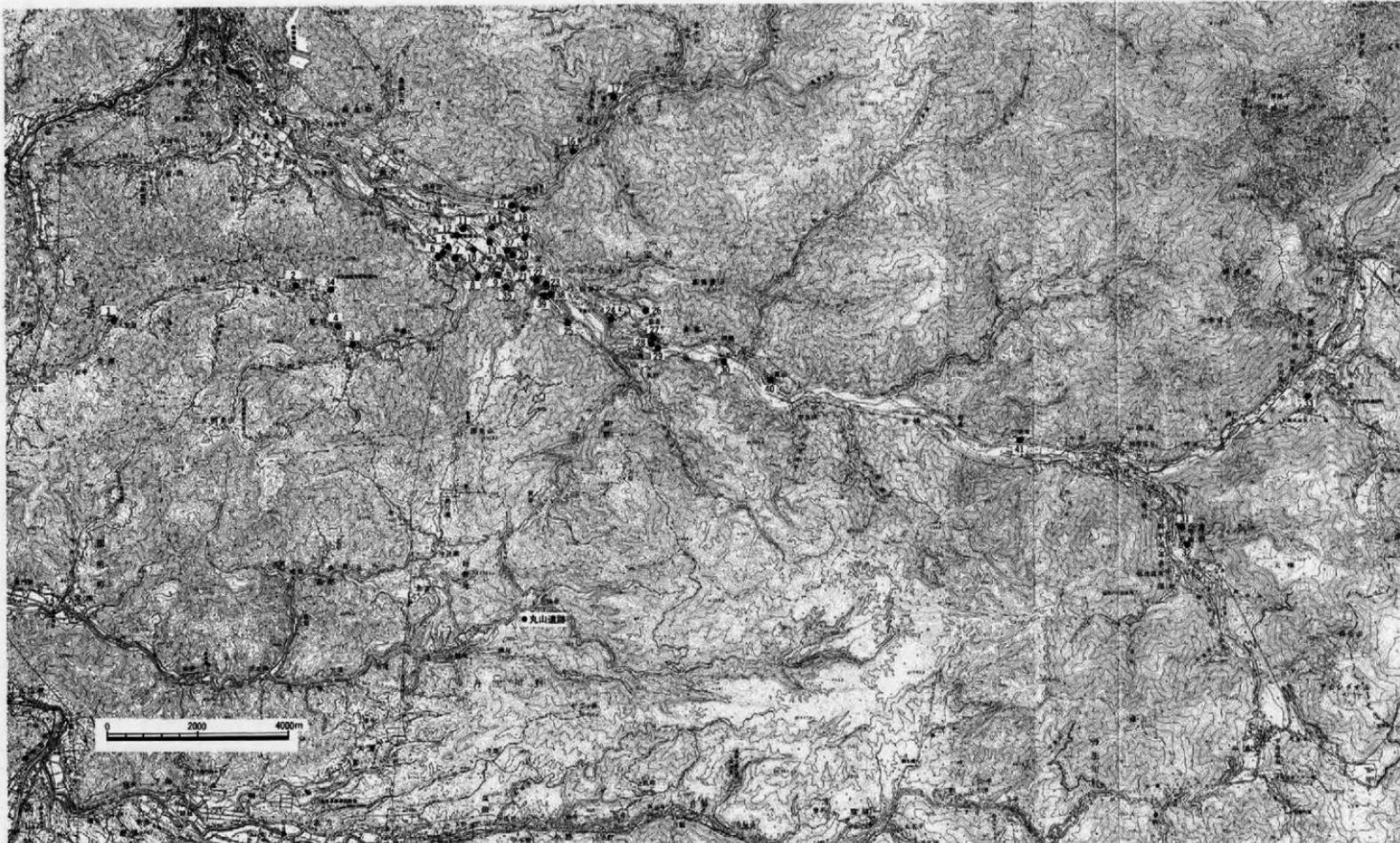
また同報告では、遺跡の性格について、立地条件などから高原川に対する物見台としての使用を示唆している。

上宝村の東側には北アルプスの急峻な山々が控えており文化の伝播を考える場合には高原川に沿う北陸地方との繋がりを想定するのが自然である。しかし、確実に信州文化圏のものが流入していることを考えると北アルプスの一角にその窓口を考えなければならない。

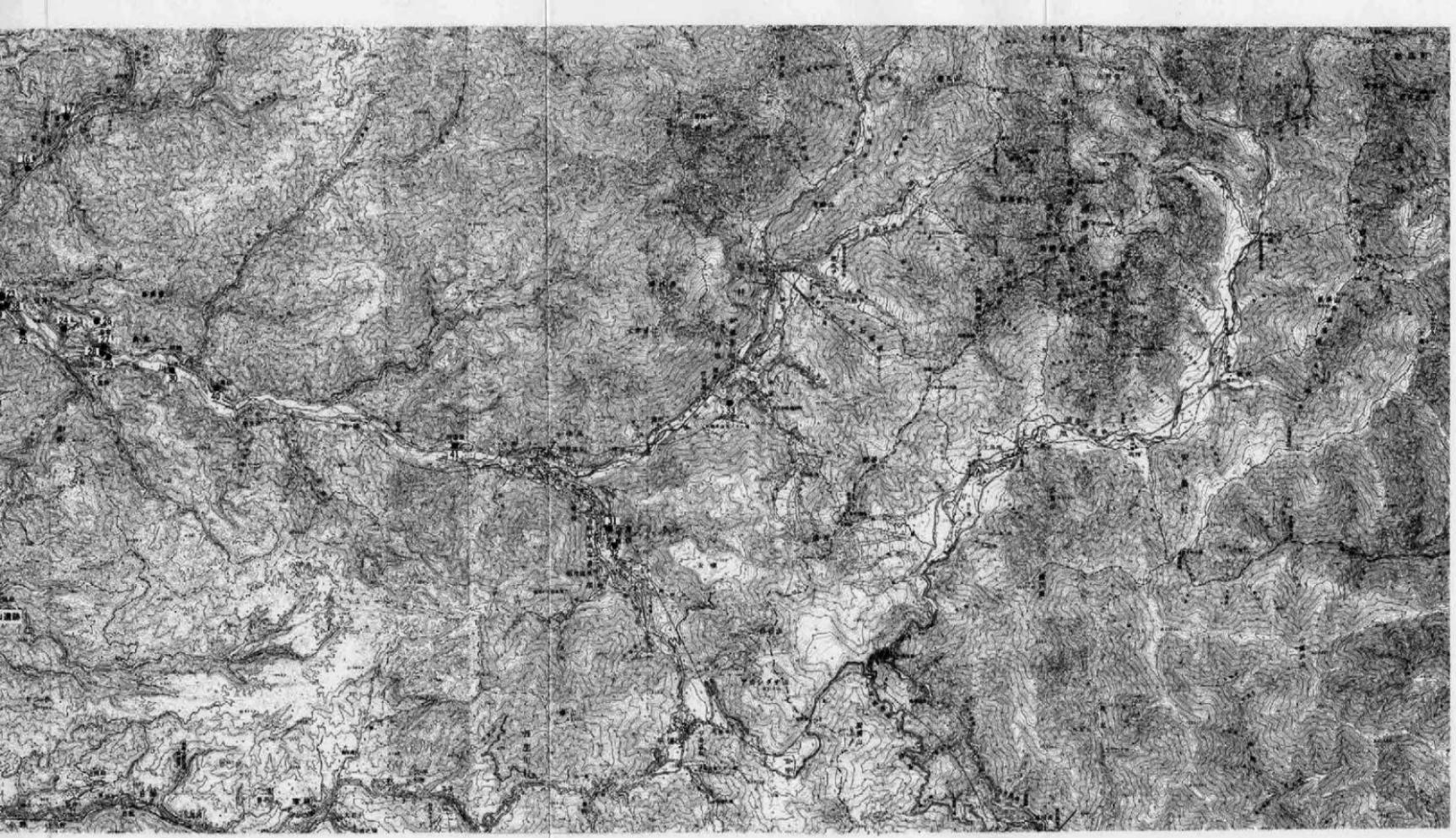
五味原遺跡群と上宝村を結ぶルートは五味原の北方に位置するトヤ峠を通るものである。峠を越えた上宝村側には養谷などの集落が存在する。また、西田遺跡第2章2節歴史的環境でも触れたように中世においては北吉城を支配した戦国武将江馬氏の勢力が五味原の地まで伸びていたことなどからも高原川流域と荒城川流域の交流はトヤ峠によることが想定できる。(伊藤秀雄)

註1 故石原哲彌氏が昭和20年代後半に調査・採集した遺物は、最近まで本郷中学校に保管・展示されていたが現在は上宝村教育委員会に保管されている。その膨大な資料数に上宝村の縄文文化の深さを一見にして理解することができる。1988年、当時上宝村派遣の社会教育主事であった本永義博は上宝村教育委員会の調査事業の一貫として本郷中学校保管土器の再整理を行っている。それによれば土器総数は2189点である。縄文時代早期70点、前期20点、中期777点、後期100点、晚期95点、時期不詳1119点、須恵器8点である。また、石器は546点である。これらのデーターは「本郷中学校保管の縄文土器・石器」(1988 上宝村教育委員会)としてまとめられている。

註2 日本における洞穴遺跡の構造論的研究 1998 麻生 優



第3図 高原川水系の橋文遺跡



第3図 高原川水系の縄文遺跡

第1表 上宝村の縄文遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考(参考文献)
1	荒原遺跡	吉城郡上宝村荒原西ヶ洞	「上宝先史」「地名表」
2	藏柱上野遺跡	吉城郡上宝村藏柱上野	「地名表」
3	堂殿遺跡	吉城郡上宝村藏柱堂殿	「県史」「地名表」前期
4	下垣内遺跡	吉城郡上宝村藏柱下垣内	「地名表」
5	中垣内遺跡	吉城郡上宝村吉野中垣内	「上宝先史」「地名表」
6	宮ノ上遺跡	吉城郡上宝村吉野宮ノ上	「県史」「地名表」早期中期後期晚期
7	田影遺跡	吉城郡上宝村本郷田影	「上宝先史」「県史」「地名表」早期
8	本郷内野遺跡	吉城郡上宝村本郷内野	「上宝先史」「県史」「地名表」前期中期
9	在家遺跡	吉城郡上宝村在家ノ瀬戸	「上宝先史」「県史」「地名表」中期後期
10	本郷遺跡	吉城郡上宝村本郷下野	
11	猫田平遺跡※	吉城郡上宝村吉野猫田平	「県史」「地名表」中期
12	中野遺跡	吉城郡上宝村吉野中野	「上宝先史」「地名表」中期
13	向野遺跡	吉城郡上宝村本郷向野	「上宝先史」「県史」「地名表」早期
14	中古瀬遺跡	吉城郡上宝村見座中古瀬	「上宝先史」「県史」「地名表」中期後期
15	桃原遺跡	吉城郡上宝村双六桃原	「地名表」晚期
16	中洞遺跡	吉城郡上宝村双六中洞	「地名表」中期後期
17	中沢遺跡	吉城郡上宝村双六中沢	「地名表」中期後期
18	中山遺跡	吉城郡上宝村中山えんだ	「上宝先史」後期晚期
19	牧ノ巾遺跡	吉城郡上宝村見座牧ノ巾	「上宝先史」「県史」前期晚期
20	下尾ノ上遺跡	吉城郡上宝村宮原下尾ノ上	「上宝先史」「県史」早期・前期
21	宮原遺跡	吉城郡上宝村宮原森脇	「県史」「地名表」早期前期
22	キク煙遺跡	吉城郡上宝村宮原キク煙	
23	新田谷戸遺跡	吉城郡上宝村新田谷戸	「上宝先史」「地名表」晚期
24	岩井戸遺跡	吉城郡上宝村岩井戸西ヶ平	
25	大橋遺跡	吉城郡上宝村新田大橋	「上宝先史」「地名表」前期中期後期
26	道場遺跡	吉城郡上宝村長藏道場	「地名表」中期後期
27	小屋倉平遺跡	吉城郡上宝村長倉小屋倉	
28	長倉平遺跡	吉城郡上宝村長倉平	「地名表」中期後期晚期
29	学校川原遺跡	吉城郡上宝村長倉平	「地名表」晚期
30	杖石岩陰遺跡	吉城郡上宝村長倉細越	「上宝先史」「地名表」早期～晚期
31	上地ヶ根遺跡	吉城郡上宝村一重ヶ根上地ヶ根	「上宝先史」「地名表」
32	大首遺跡	吉城郡上宝村一重ヶ根大首	「上宝先史」「県史」「地名表」早期中期～晚期
33	八王子遺跡	吉城郡上宝村神坂八王子	「地名表」中期後期
34	長表遺跡	吉城郡上宝村藏柱長表	
35	宮の横遺跡	吉城郡上宝村在家宮の下	
36	下タ平遺跡	吉城郡上宝村吉野下タ平	
37	ヤナツボ遺跡	吉城郡上宝村宮原マセド	
38	下野切遺跡	吉城郡上宝村宮原上瀬	「上宝先史」「県史」「地名表」前末～中初
39	下野平遺跡	吉城郡上宝村宮原上瀬	
40	萬山遺跡	吉城郡上宝村萬山岩之本	
41	田頃家遺跡	吉城郡上宝村田頃家上ノ平	

1～41の遺跡は岐阜県遺跡図鑑1990岐阜県教育委員会による。

「県史」一岐阜県編 1972 「岐阜県史」通史編纂部

「上宝先史」一上宝村編 1958 「上宝村の先史時代」 大江 伸 下影 武

「地名表」一飛騨考古学研究会 1935 「飛騨古跡時代遺蹟地名表」

※田道跡地区では横戸平とあるものを1990岐阜県道路地図で訂正。

第3章 遺構

第1節 概要

丸山遺跡は、標高850m前後の準錐性小丘陵上に位置する。牛垣内遺跡から続くやや急峻な斜面は当遺跡のあたりでなだらかになり約60mで荒城川に接する崖となる。荒城川との比高は約30mである。移転した住宅の前には水田・畑が数段にわたって造成されていた。造成のため遺跡全体として遺構の残存状況は不良であった。

発掘調査にあたっての地区の設定は国土座標に合わせ第7図のように $8 \times 8\text{ m}$ の区画を設定し北から南へA・B・Cとし、西から東へ1・2・3と番号を付けてグリッド名を表すことにした。

耕作土および後世の埋土は重機を利用して除去した。その際に小字名にもなっている通称「まるやま」と呼ばれる祠のあった小山にトレーンチ設定し一部深掘をおこなったがその地点では遺物包含層は確認できなかったため調査区から除外した。

旧地形は北から南に緩やかに傾斜しており、調査区の西よりの地点で北から南に向かう幅約8mの埋没谷が2本確認できた。現在は水が流れてもおらず湧水も認められない。

検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、土塙墓1基 土坑65基、ピット群である。遺物は、縄文早期と前期末～中期初頭および少量の後・晩期の土器、石器類約3万点である。



第4図 丸山遺跡周辺地形図

第2節 基本的層序

牛垣内遺跡から続く斜面は当遺跡付近でなだらかになる。なだらかになった丘陵に丸山遺跡が位置する。調査区域内を北から南に流れる川が2本埋没していた。西側に位置する川の周辺は急斜面の麓付近のため、数多くの礫が谷に向かって散在していた。また、谷となった場所は、礫や土砂の流れ込みのため層位が複雑になっていた。東側の地区は、きめの細かな土の層が広がり、住居跡や土坑などの遺構が検出された。調査前は民家や水田・畠があり、開田のために土地は削平され北側が削り取られてしまっていた。そのため残存状況としては不良であった。

土層は耕作土などの表土が第I層、第III層が遺物包含層であり、第V層が地山となっている。

第I層 暗褐色土（10YR3/3）表土

長年、耕作土や民家の地盤として利用されてきた表土である。調査区東側は、水田として利用されていたため赤み（明褐色7.5YR5/8）を帯びた敷き土が1～5cmの厚さでこの層の中に含まれていた。暗褐色の土が10～30cm程堆積している。砂粒や小石、細かな炭粒や土器粒が混入していた。

第II a層 黒褐色土（7.5YR3/1）

赤みを帯びた敷き土の下の層で、やや粘性があり固くしまった土である。黒褐色土の中に炭粒や小粒の石（ $\phi 1 \sim 4$ mm程）が多く混入していた。

第II b層 暗褐色土（10YR3/3）

赤みを帯びた敷き土の下の層で、やや粘性があり固くしまった土である。土中に炭粒や小粒の石を多く含み、この層の下部には砂や卵大～拳大の川原石が多量に混入していた。

第II c層 暗褐色土（10YR3/3）

土質は粘性は少なく、固くしまった土である。角の取れた拳大～人頭大の礫が多く混入している。拳大の礫の間に非常に多くの砂（ $\phi 1 \sim 5$ mm）や小石が堆積して川だったことがわかる。

第III a層 黒色土（10YR1.7/1）

土質は粘性が少しあり、きめの細かなしまりのある土である。炭粒（ $\phi 1 \sim 4$ mm）や土器粒が少し混入するが、砂などは含まれない。調査区東側では縄文中期の遺物が出土した遺物包含層である。

第III b層 黑褐色土（10YR2/2）

土質は少しぶつかりがあり粘性が少しある。炭粒（ $\phi 2 \sim 3$ mm）や砂（ $\phi 1 \sim 2$ mm）が少し混入していた。

第III c層 黒色土（7.5YR1.7/1）

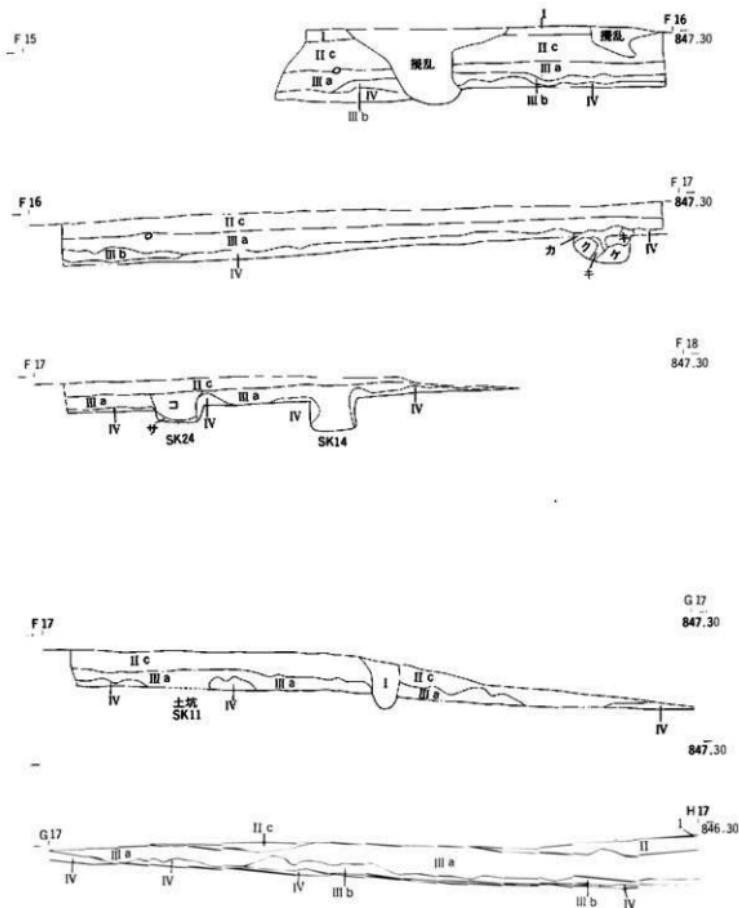
土質はしまりがあり粘性が少しある。砂などは含まれず、きめの細かな土で炭粒（ $\phi 1 \sim 4$ mm）や土器粒が少し混入する。

第IV層 暗褐色（10YR3/4）～によい黄褐色（10YR4/3）

土質はしまりや粘性がある。きめの細かな土で炭粒（ $\phi 2 \sim 3$ mm）が少し混入していた。III層の暗褐色やV層の黄褐色が混ざり合う層で場所によりまばらになるところもある。

第V層 黄褐色（10YR5/8）

地山。炭や砂などを含まず、きめの細かな粘土質の層である。粘性やしまりがあり地山となる。



部分的な層

ア、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性少なく、土にしまりがある。
　　拳大の石が混入する。

イ、黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性があり、土にしまりがある。

ウ、褐灰色土 (10YR5/1) 粘性少なく、土のしまりがある。

エ、褐色土 (10YR4/4) 粘性少なく、土のしまりなし。

オ、暗褐色土 (10YR3/3) 粘性少なく、土のしまりなし。
　　砂を多量に含む。

コ、黑色土 (10YR2/1) 粘性あり、土にしまりがある。

サ、にじい黄褐色土 (10YR4/3) やや粘性があり土にしまりがある。

カ、褐色土 (10YR4/4)

粘性なく、土にしまりなし。
　　炭化物 (3mm以下) や明褐色の土がまばらに入る。

キ、明褐色土 (10YR6/8) 粘性があり、土が固くしまりがある。

ク、黒褐色土 (10YR3/1) 炭化物 (5mm以下) が混入する。

ホ、粘性がある。土はやわらかいがしまりがある。

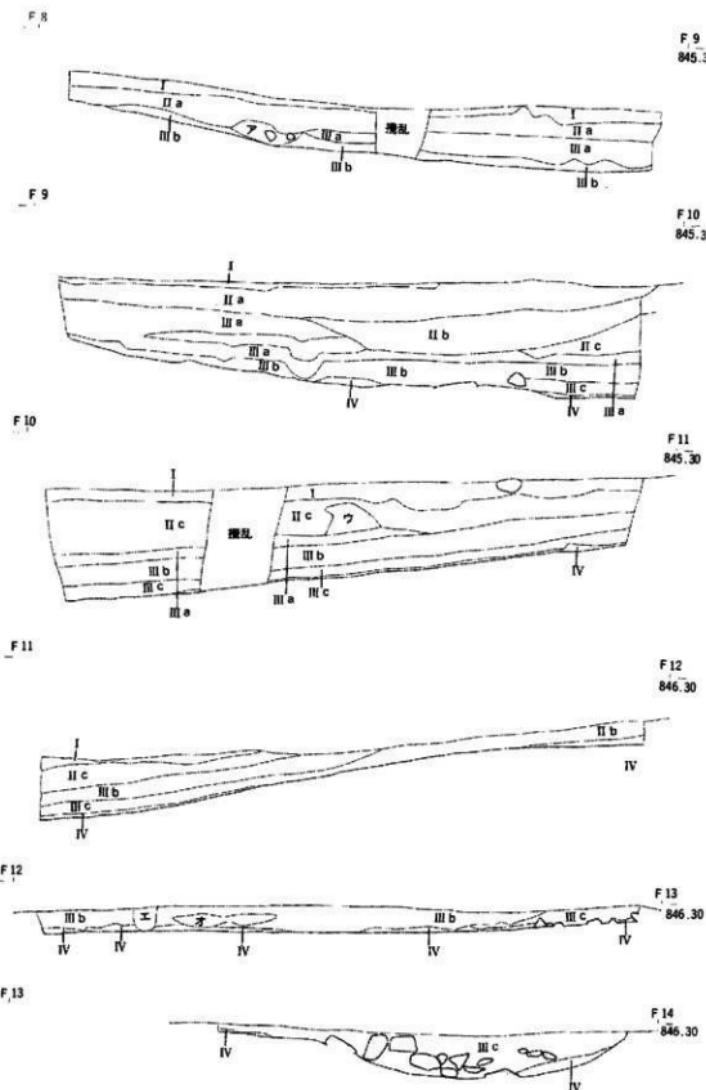
明褐色の土が僅かに混入する。

やや粘性があり、土は固くしまりがある。

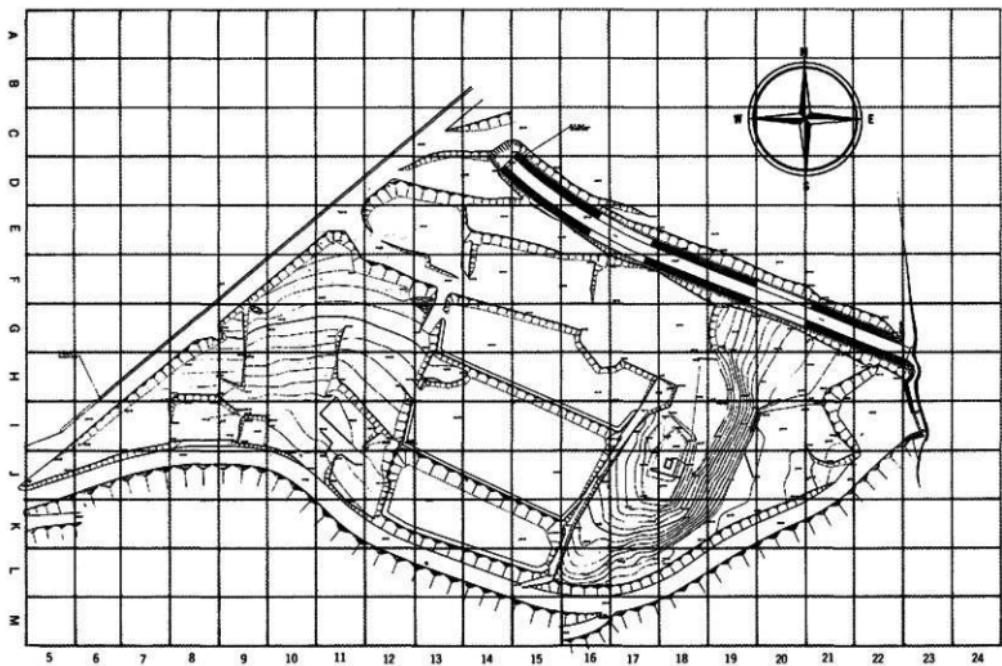
炭化物 (5mm以下) が少し混入する。

やや粘性があり土にしまりがある。

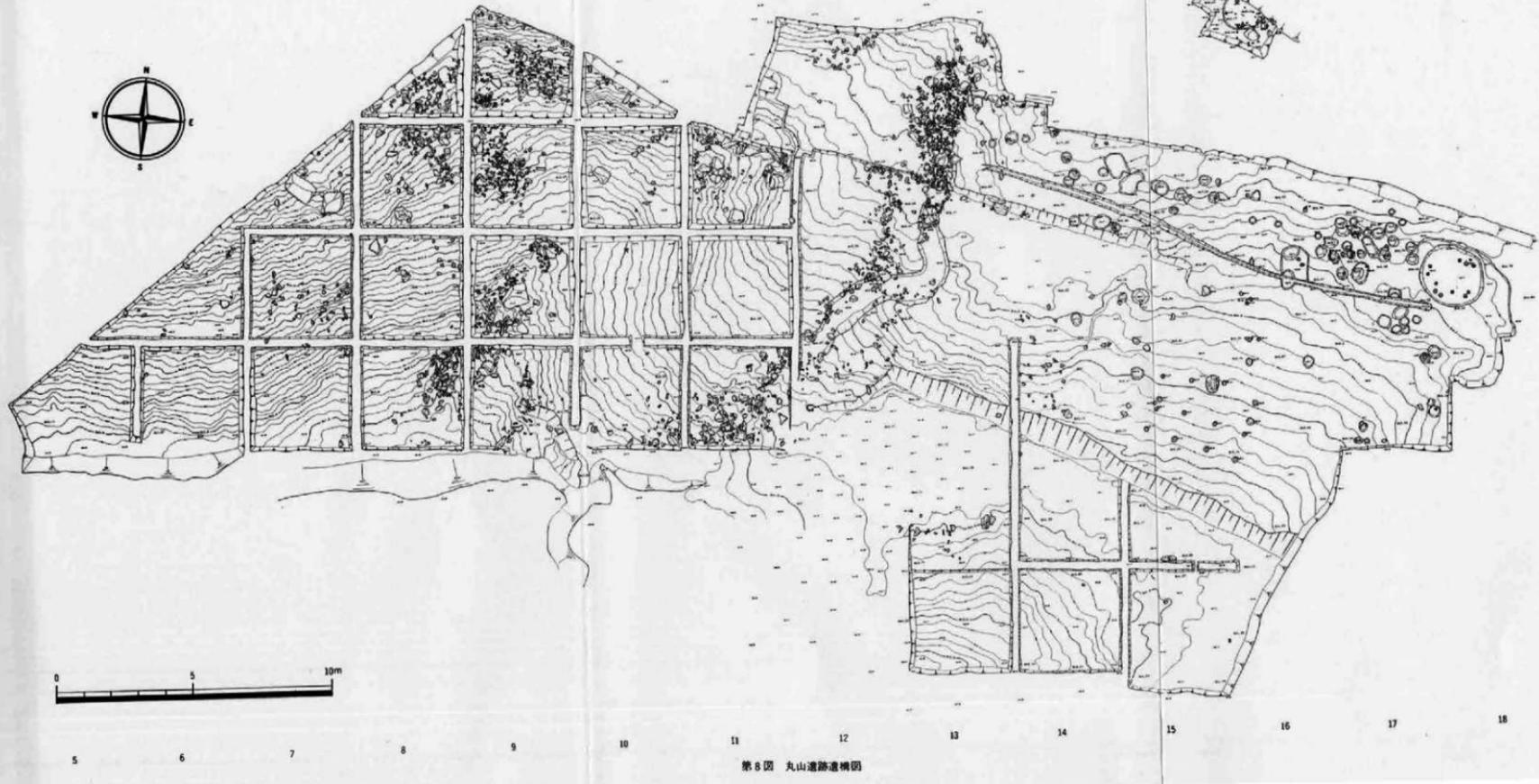
第5図 土層図(1)



第6図 土層図(2)



第7図 地図説明図



第3節 積穴住居跡

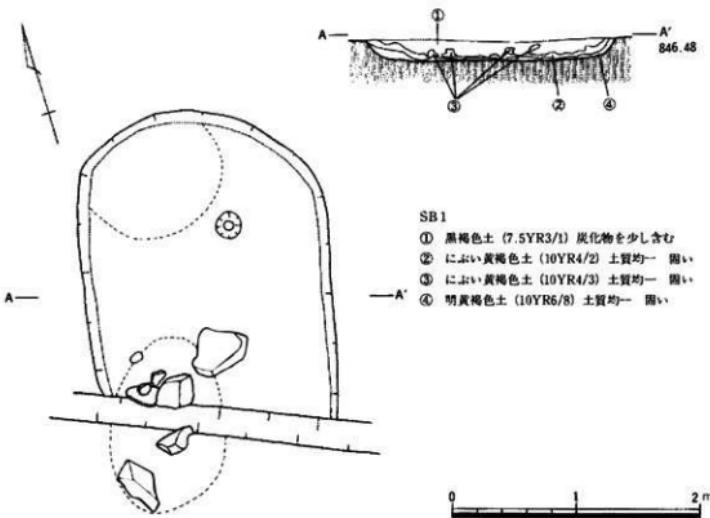
第1号住居跡（第9図 図版1）

第1号住居跡は調査区東よりのG16グリッド北側で検出された。遺物包含層を掘り下げていく段階で黒褐色のはば楕円形を呈するプランが確認された。楕円形プランの南側は長径約50cmの土坑(SK32)と重複していることが確認できた。また、水道管理設のために遺構の南側は削りとらわれていた。覆土は、しまりのある黒褐色土で、そのなかに遺物や少量の炭化物が見られた。床面付近ではにぶい黄褐色から明褐色と変化していた。住居は、黄褐色の地山を掘り込んで作られる。床面は明褐色でよくしまっており、南に約10cmの高低差で傾く。覆土掘削の段階で北側に85×115cmの土坑(SK22)が掘り込まれていることが明らかになった。南側の水道管理設や土坑の重複のために床面の完全な検出はできなかった。住居の平面形は1.85×2.85mの楕円形で、床面積は推定で5.74m²である。主軸方向は不明である。壁も南端部が削平されていたためすべてを検出することはできなかったが、検出された壁高は14~15cmと平均していた。柱穴と思われるビットが1基確認された。直径20cm、深さ15cmである。

1ヶ所のみで、はたして柱穴と断定できるかどうか疑問が残る。炉跡は認められなかった。

出土遺物は縄文時代早期の上ノ山II式・入海I式塙屋中層A式などの土器片が数十点出土している。石器はチャートのフレークが3点出土している。

出土した土器などから縄文時代早期の住居跡と推定できる。



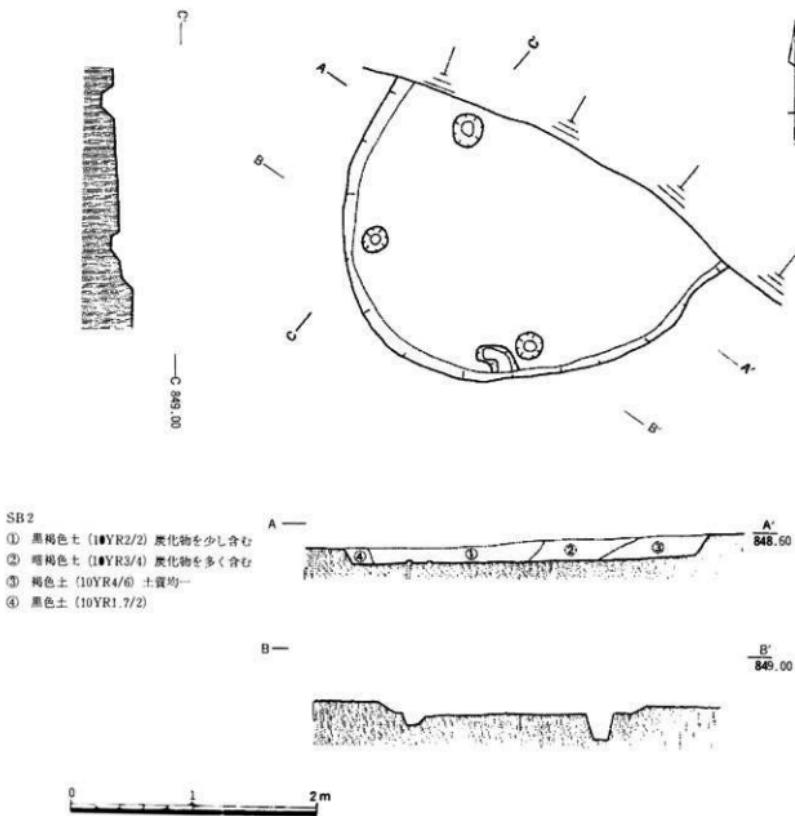
第9図 第1号住居跡

第2号住居跡（第10図 図版1）

第2号住居跡は調査区北東D15・16グリッドおよびE15・E16グリッドに位置する。住居跡の北東部は流路溝工事によって1/2以上削り取られていた。直径約2.7mを計り橢円形のプランを呈すると思われる。覆土は黒褐色および暗褐色で遺物が含まれていた。床面は、黄褐色の地山を掘り込んでつくられており、硬くしまっていた。東にやや傾き高低差は11cmあるが、ほぼ平坦である。壁高ははっきりしていたか5.2~5.9cmと低かった。柱穴は3ヶ所確認された。直径23~30cm、深さ8.1~20.7cmである。炉跡は確認できなかった。

出土遺物は北陸系の半截竹管文を施すものや、連続爪形文を有するものなど十数点出土している。石器は、フレーク・チップ類が10点余り出土している。

出土遺物からみて縄文時代中期初頭の住居跡と考えられる。



第10図 第2号住居跡

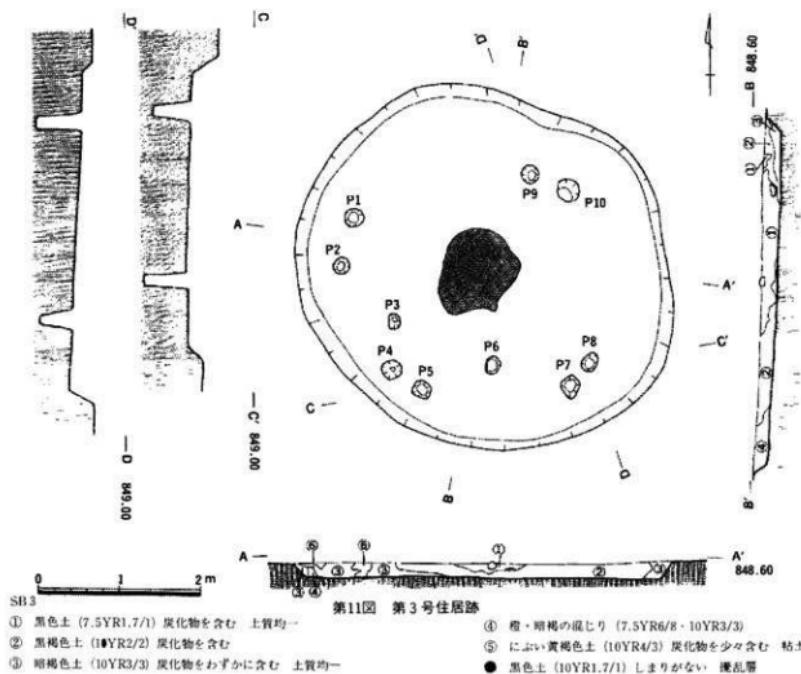
第3号住居跡（第11図 図版1）

第3号住居跡は、調査区の東端G17およびG18グリットの北よりに位置する。遺物包含層を掘り下していく段階で黒色の円形プランが確認できた。住居跡の上層は馬小屋として長期間使用されていたため土層がかなり変化しておりプランを検出するのに困難を極めた。また、覆土も理解に苦しむ変化がみられた。1層は黒色土、2層は黒褐色、3層は暗褐色、4層は橙色と暗褐色がまばらに入り混じっていた。5層は黄褐色、6層は黒色などと単純ではなかった。覆土が複雑であったわりには床面はよくしまった状態で明確に検出できた。しかし、後世の土坑跡が残存していたり、試掘坑が一部掘り込まれていたりしていたため全面検出はできなかった。床は南東にやや傾斜し高低差は約13cmあるがほぼ平坦である。壁高は15~25cmである。柱穴は10ヶ所検出された。主柱穴はその深さなどからP₁・P₅・P₈・P₉などが考えられる。炉は地床炉で、住居跡のほぼ中央に円形に近い状態で検出された。土はよく焼けており明褐色を呈し半割断面では皿状に焼け込み、その深さは中心で8cmまで達していた。

出土遺物は、鷹島式と思われる薄手の連続爪形文を有する土器や北陸系の半截竹管文を施す土器などが出土している。また五領ヶ台式や東海系の土器も伴っている。さらにこの時期の粗製土器なども出土している。石器は、石鎚11点・石錐1点・凹石1点・フレークなどが出土した。

出土遺物などから縄文時代中期初頭の住居跡と考えられる。

(野村宗作)



第4節 土壙墓（SK22）（第13図 図版1）

位置と検出状況

G11グリット、1号住居跡内の北側に位置し、住居跡の床面検出の段階で楕円形の黒褐色土層が残り、床面を掘り込んでいることが理解できた。したがって、1号住居跡（縄文早期）より新しい遺構であるが検出面より上層の掘り込みや土層については明らかにすることことができなかった。位置的には住居跡と完全に重複していた。

平面形

121cm×91cmの楕円形を呈し、長軸方向はN-75°Eで深さは北壁で46cm。1層黒色土（10YR1.7/1）で、少量の炭化物を含んでいる。2層も黒色土（10YR2/1）で、3～4層にかけては黒褐色や黄褐色となり、底部地山に達する。なお、この覆土は箇にかけ更に洗浄したが2～3mmの小礫以外目につくものはなかった。

遺物

プランの南側を半割する過程で、南西に約20cm、深さ29cmのところで琥珀製の糸玉状管玉が6個連續の状態で検出された。（第13図 図版1）土壤底面より6cm上部である。しかし、劣化が激しく、1個は検出と同時に崩壊し、更に1個が検出後まもなく崩壊したが、一部は土中に残存していた。従つて、4個のみ原形を留めて取り上げることができた。

琥珀は劣化がきわめて激しく、かつ脆いため少しの振動でも崩壊する。そこで、遺物の周辺を石膏で固めそのままの状態で取り上げ、元興寺文化財研究所保存科学センターに復元・保存処理を委託した。その処理中に7個目の玉が検出された。

また、琥珀検出面で纖維入りの小土器片が出土したが、これは縄文早期の土器片で土壙内の堆積土層の観察から混入と思われる。

時期

時期を明瞭に示す遺物は、土壙内からは検出されなかった。周辺出土の土器は縄文時代前期末から中期初頭のものであった。したがって、土壙の時期はこれらの中間にその可能性が求められる。一方玉自体の観察からしても、後述するように縄文時代前期末から中期初頭に所属すると推定されるので、この時期の間に考えるのがもっとも妥当であろう。しかし、No1、2、4、5は行田遺跡出土のものに最もよく似ているので、前期に含まれる可能性がきわめて大であろう。

（野村宗作）

第5節 土坑その他の遺構（第12図～17図）

検出された65基（土壙墓を含め）の土坑は、全体に散在しているわけではなく調査地区の北部中央（F14、15区）に16基の1群と北東部に23基（FG16、17区）と9基（GH17区）の2群の集まりが見られる。

形態については円形7基、楕円形4基、不定形4基である。土坑の規模として上端部の最大幅が、円形で35～138cm、楕円形で110～168cmである。円形の土坑の場合80cm代のものが17基（30%）あり70～90cmに最大幅を持つものが33基（58%）にのぼる。楕円形の土坑の場合は4基とも1m以上であり、琥珀が出土した土壙墓（SK22）も121×81cmの楕円形である。同じ程度の大きさの土坑が他に2基

(SK32, SK49)検出しているが、土壤の性格を表す遺物が出たのは、琥珀玉が出土したSK22だけである。その他の特徴としてはフラスコ状の形態をもつ土坑が7基検出しているが、堅果類などの炭化物が出土せず土坑の性格が明確でない。

円形の土坑

SK12は76×81深度46cm底部が固く平底を呈している。上層は黒褐色土で炭や人頭大の石が混入し底面より2~4cm漸移層内では縄文中期初頭の土器片が出土している。SK14は72×79深度39cm。底部が平底で固くしまり、覆土の黒褐色土には多くの炭が含まれ土器片や石鎌が出土した。SK18は87×88深度44cm。底面が固くしまり、黒褐色の覆土に人頭大の石と中期初頭の土器片が混入していた。SK25は59×50深度23cm。底部が平底を呈している。覆土より新崎式土器が下部を欠損し横に倒れた状態で出土した。SK30は風倒木痕と思われ、掘り起こした部分に石皿が混入している。

フラスコ状の土坑

SK17は67×63深度31cm。比較的小型の土坑で頭部を持ち底部が広がるフラスコ状を呈している。卵大の川原石が中心より東側に数多く混入していた。SK19は77×75深度36cm多少フラスコ状を呈している。黒褐色土に人頭大の石や多くの炭、中期初頭の土器片が混入していた。SK27は87×80、深度50cmで平底を呈している。黒褐色の覆土に炭が多く含まれ、その下より中期初頭の土器が出土した。SK48は85×95深度40cm。底部が平底を呈し、暗オリーブ褐色の覆土より磨石と中期初頭の土器片が出土した。SK55は80×73深度34cm。底部が平底を呈している。人頭大の石を含むが出土遺物はなかった。SK63は3号住居跡に重なる土坑で94×101深度70cm。底部が平底を呈している。覆土からの遺物は出土していない。

橢円形の土坑

SK24は168×75深度20cm。丸底を呈している。黒色土より中期初頭の土器片と凹石が出土している。SK32は143×78深度17cm底部が平底を呈している。黒褐色土の覆土に炭が多く混入し、人頭大の石を数点含まれている。SK49は110×83深度34cm。底部が丸底を呈している。暗オリーブ褐色の覆土に炭が多く混入し人頭大の石が数点含まれている。

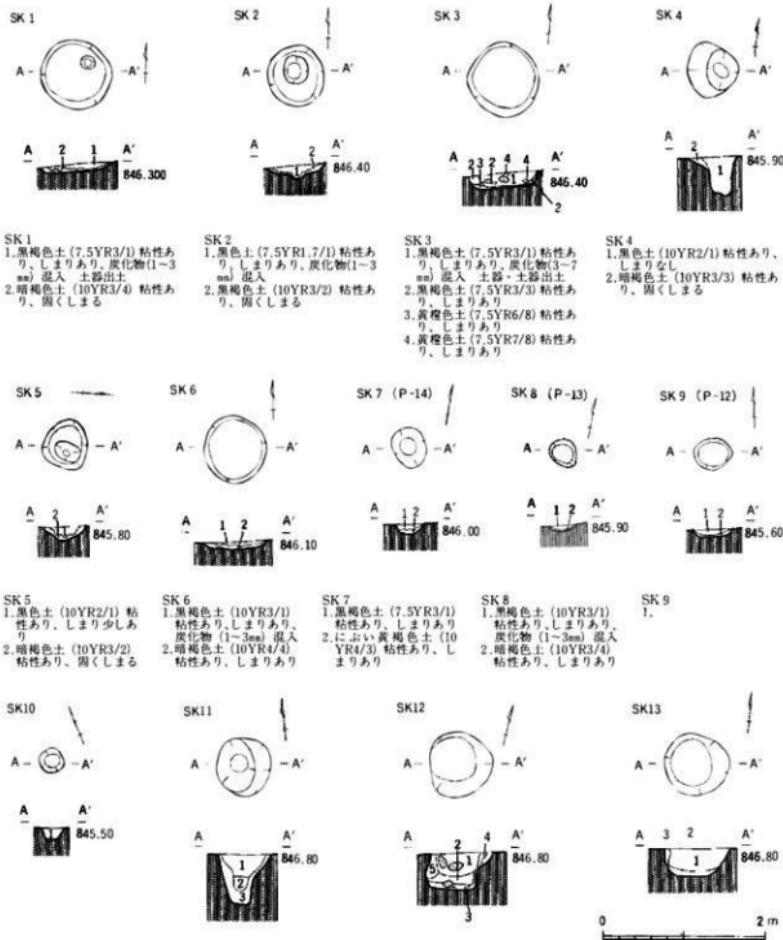
不定形の土坑

SK20は111×160深度65cm。土坑が重なった様相を呈する。遺物は、中期初頭の土器片が多く出土している。不明構造としてF14~F15区の位置にSX1とSX2の2基を検出した。SX1は147×186cm、深度24cmであるが底部より10cm上部に段をもち、凹凸がある面が広がる。形状は不定形である。遺物はRFが1点出土する。SX2は122×210cm、深度27cmであるが底部より約10cm上部に段をもち凹凸がある面が広がる。形状は不定形である。遺物は出土しない。

堀立柱建物跡

堀立柱建物跡はH15~H16区に位置し、3列の柱穴が確認された。1列は東西方向に2.15m・2.35m・2.20mの間隔で4つ柱穴があり、2列目・3列目までの間隔がそれぞれ2.0mである。

(上出巳吉)



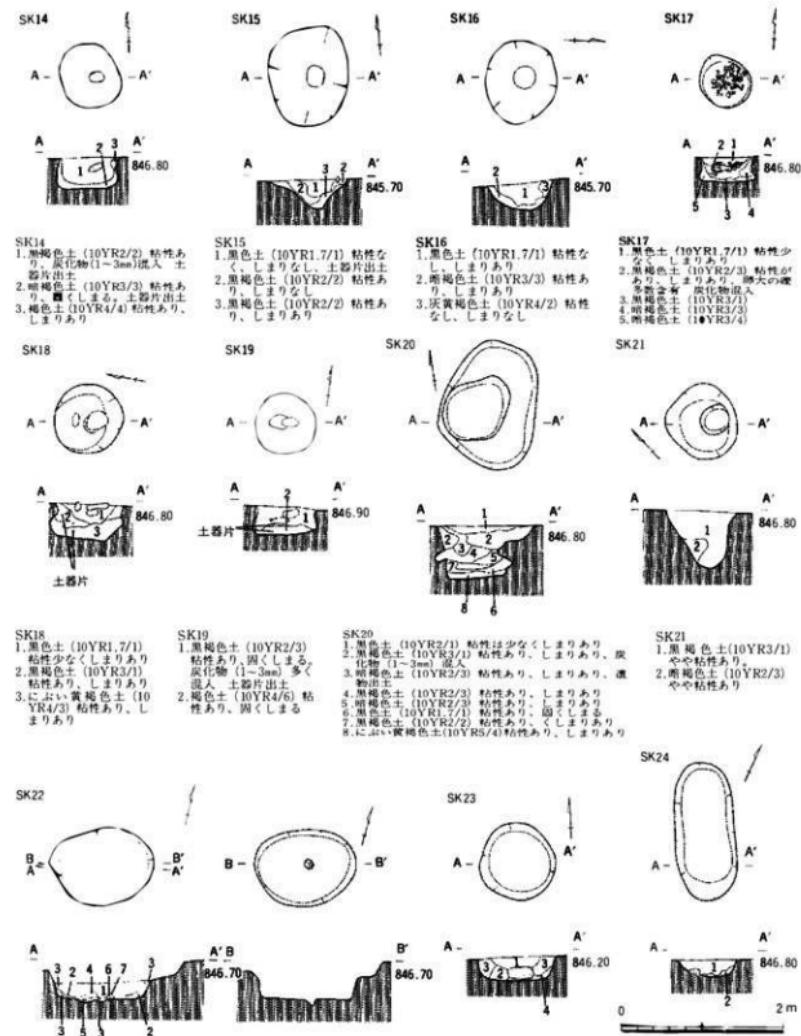
SK10
1. 黒色土 (10YR1.7/4) 粘性あり、固くしまる。石器出土

SK11
1. 喜欅色土 (10YR3/1) 粘性あり、しまりあり、炭化物 (1~3mm) 小石 (2~5mm) 混入
2. 喜欅色土 (10YR4/4) 粘性あり、しまりあり、10mm程の炭化物混入
3. 喜欅色土 (7.5YR6/8) 粘性あり、固くしまりあり、炭化物 (4~6mm) 混入 石器出土

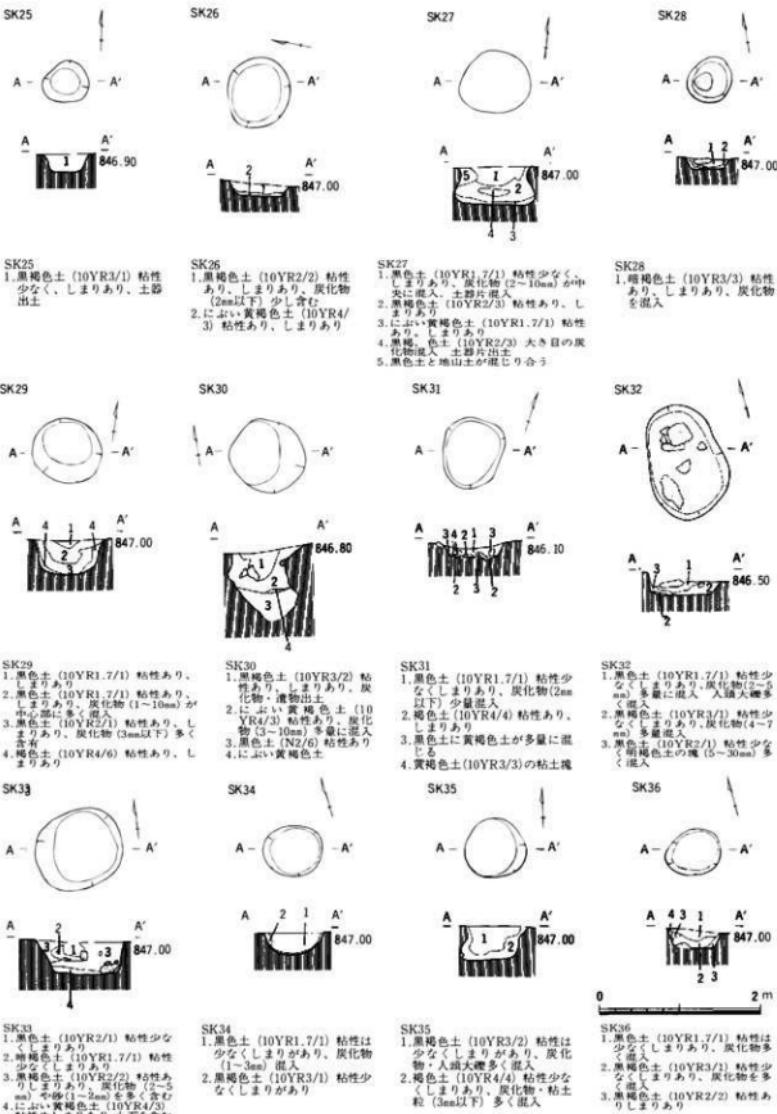
SK12
1. 喜欅色土 (10YR3/1) 粘性あり、しまりあり、炭化物 (5~10mm) 上部に混入
2. 喜欅色土 (10YR3/1) 粘性あり、しまりあり、炭化物混入
3. 喜欅色土 (10YR3/3) 粘性あり、固くしまる、底面 2cm 上に土器出土
4. 黑色土 (10YR4/6) 粘性あり、しまりあり
5. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり、しまりあり

SK13
1. 喜欅色土 (10YR2/2) 粘性あり、しまりあり、土器片出土
2. 喜欅色土 (10YR3/3) 粘性あり、固くしまる
3. 黄褐色土 (10YR5/6) しまりなし

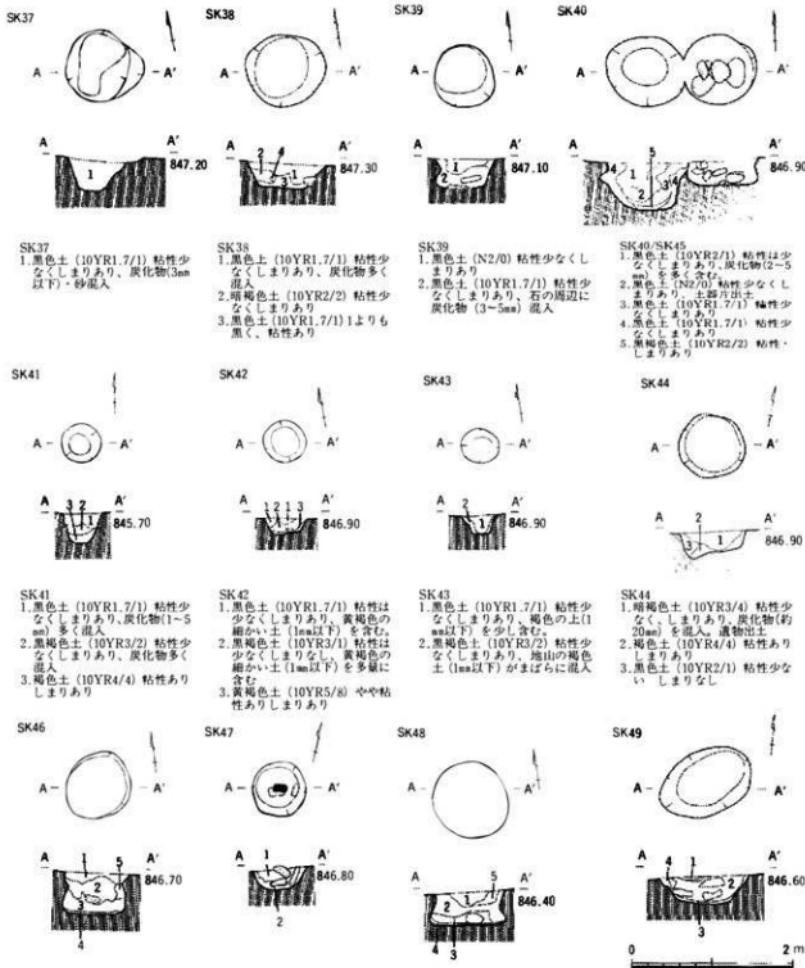
第12図 土坑 (1)



第13図 土坑(2)



第14図 土 坑 (3)



SK46

1. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性少
なくしまりあり、炭化物 (3
mm以下) 少量混入
2. 黑褐色土 (N2/0) 粘性少
なくしまりなし
3. 黑褐色土 (10YR2/2) 粘性少
なくしまりあり、炭化物
(3-5mm) を多く含む
4. 黑褐色土 (10YR1.7/1) 粘性少
なくしまりあり
5. 黑色土 (10YR1.7/1) 粘性少
なくしまりなし

SK47

1. 黑褐色土 (10YR2/1) やや粘性
あり、しまりあり、黄褐色の
細かい土 (1mm以下) を多く含
む。
2. 黑褐色土 (10YR3/3) 粘性あ
りしまりあり

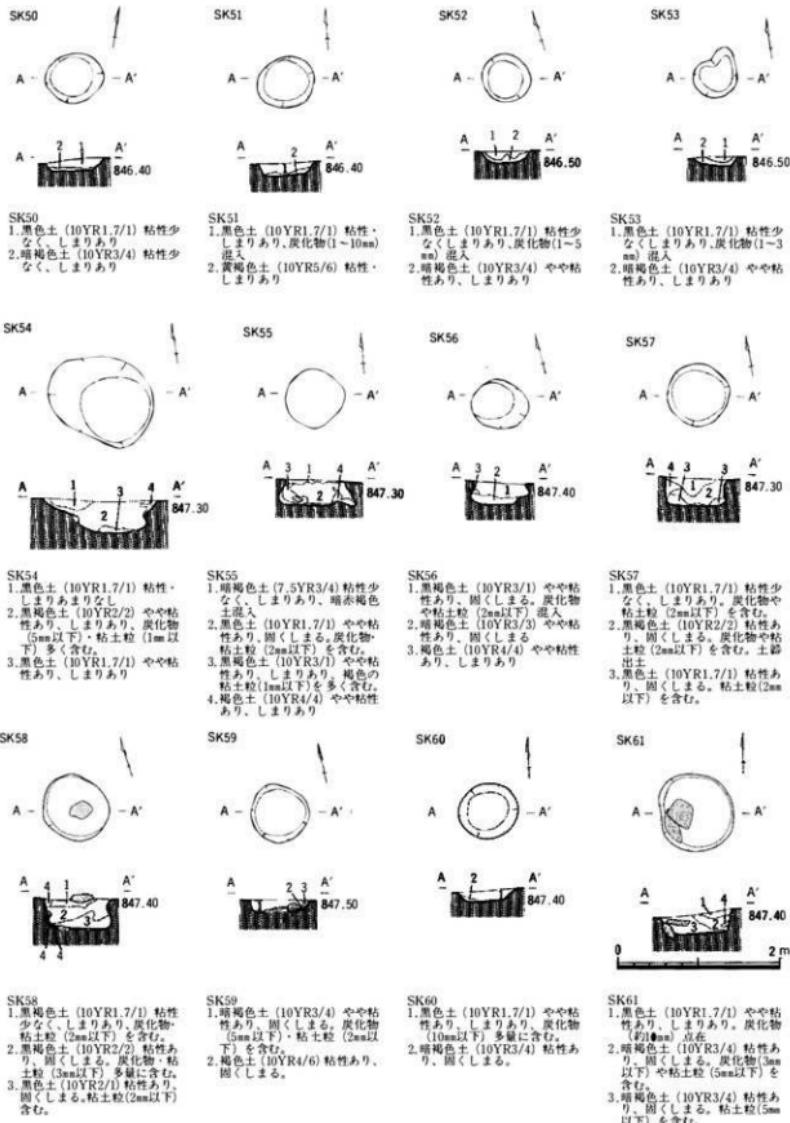
SK48

1. 黒色土 (N2/0) 粘性少なく
しまりあり
2. 黑褐色土 (10YR2/1) 粘性少
なくしまりあり、褐色の粘土粒
を炭化物 (2mm以下) を多く含
む。
3. 黑褐色土 (10YR1.7/1) 粘性少
なくしまりあり、炭化物
(5-15mm) を多く含み土壠
が崩れやすい
4. 喀斯特土 (10YR3/3) 粘性
あり、しまりあり
5. 黑褐色土 (10YR1.7/1) 粘性少
なくしまりあり

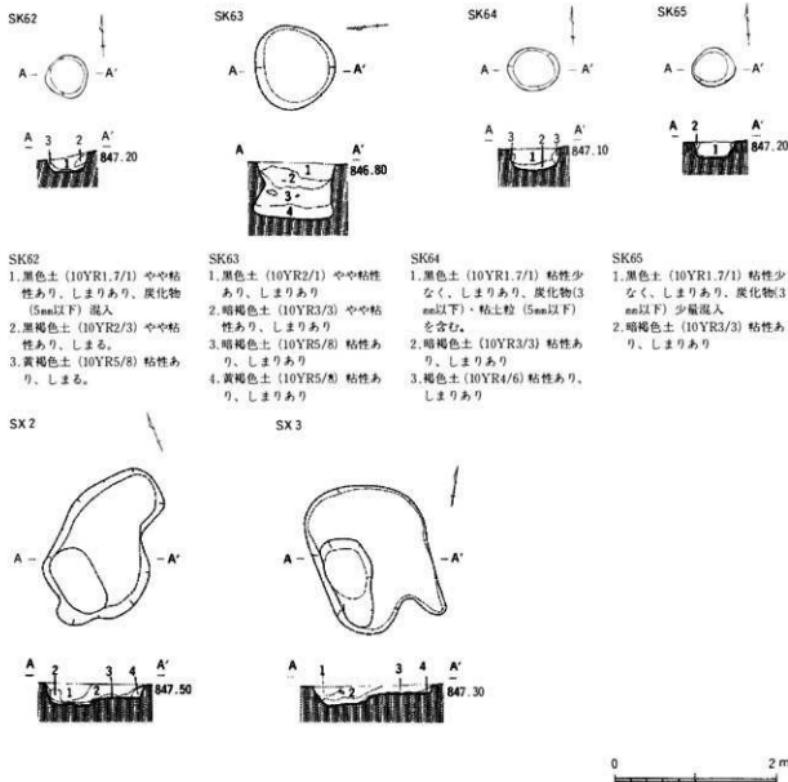
SK49

1. 黑褐色土 (N2/0) 粘性少なく
しまりなし
2. 喀斯特土 (10YR2/1) 粘性少なくし
まりあり
3. にじみ 黄褐色土 (10YR4/3)
粘性、しまりあり
4. 黑色土 (10YR1.7/1) 粘性少
なくしまりなし

第15図 土坑 (4)



第16図 土坑(5)



- SX2**
- 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性少なし、しまりあり。炭化物(2mm以下)や小石(2mm以下)混入。
 - 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性少なく、しまりあり。炭化物(2mm以下)混入。
 - 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物(3mm以下)や小石(3mm以下)が混入。
 - 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、しまりあり。
- SX3**
- 暗褐色土 (10YR2/2) 粘性少なし、しまりあり。炭化物(3mm以下)や小石(2mm以下)が少量混入。
 - 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性少なし、固くしまる。小石(3mm以下)が混入する。
 - 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物(3mm以下)混入。
 - 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、しまりあり。

第2表 土坑觀察表

遺構番号	探査	地 形	形 製	規 模 (cm)			土 器	出 土 重 物	
				上 端	下 端	深 度		石 器	
1	12	H-17	円形	77×80	70×70	9	18	2c類, 2d類, 6e類	1 RFチャート1
2	12	H-17	円形	66×70	50×50	17	2	2類	
3	12	H-17	円形	89×90	68×70	19	14	3b類, 3d類, 3f類	5 磨製石斧1, 石鏃1, フレーク1, 砂岩2
4	12	H-17	円形	63×65	尖底	48	0		
5	12	H-17	円形	45×50	20×25	17	0		
6	12	H-16	円形	75×75	60×65	9	0		
7	12	H-16	円形	36×40	15×20	13	0		
8	12	H-16	円形	34×35	20×20	7	0		
9	12	H-16	円形	46×45	30×30	10	0		
10	12	H-16	円形	22×25	18×20	14	0		1 フレーク1
11	12	G-16	円形	60×75	53×48	62	21		2 フレーク1, RFチャート1
12	12	G-16	円形	76×81	59×55	46	12	2c類, 3f類, 2d類	1 フレーク1
13	12	G-16	円形	80×77	60×56	34	1	2c類	
14	13	G-16	円形	72×79	65×58	39	15	3b類, 3d類, 3f類, 2d類	2 石鏃1, 円石1
15	13	H-15	不定形	86×115	尖底	36	3		
16	13	H-15	不定形	81×95	25×30	34	1		
17	13	G-17	不定形	67×63	55×55	31	1	2c類	
18	13	G-17	不定形	87×88	60×68	44	3	2c類	
19	13	G-17	不定形	77×75	68×64	36	15	5類, 2d類	
20	13	G-17	楕円	111×160	101×90	65	40	3f類, 2d類	31 四石1, 磨製石斧1, 石鏃1, スクリーパー1, チップ13, フレーク14
21	13	G-17	円形	94×88	64×62	71	7	2c類, 3f類, 6d類	1 円石1
22	13	G-16	楕円	120×87	109×84	21	2	不明	
23	13	G-15	円形	89×90	60×60	29	14	2c類, 3f類, 6d類	
24	13	G-17	楕円	75×168	56×96	20	4	2d類	3 四石3
25	14	F-17	円形	59×56	36×32	23	0		
26	14	F-17	楕円	70×85	58×72	16	0		
27	14	F-17	円形	87×80	78×69	50	5	2d類, 3f類	3 磨石2, フレーク1
28	14	F-17	円形	54×55	42×44	13	0		
29	14	F-17	円形	87×80	58×54	40	23	2d類, 3f類	
30	14	G-17	楕円	89×94	尖底	90	16	2d類	1 フレーク1
31	14	G-14	楕円	70×80	60×70	21	0		
32	14	G-16	楕円	78×143	78×131	17	1		3 石鏃1, フレーク1, UF1
33	14	F-14	楕円	122×104	103×87	40	12		
34	14	F-14	円形	69×64	63×58	25	0		
35	14	F-14	円形	78×85	72×74	42	0		
36	14	F-14	円形	62×54	53×46	23	0		
37	15	F-14	不定形	67×84	28×76	39	22	2d類, 2d類, 5類	
38	15	F-15	円形	80×89	75×73	29	1		
39	15	F-15	円形	73×78	62×57	35	2	5類底部	2 四石1, フレーク21
40	15	F-17	円形	95×75	67×49	55	0		
41	15	G-16	円形	50×50	20×20	36	0		
42	15	F-16	円形	45×45	35×35	19	1	1b類	
43	15	G-16	円形	43×43	26×22	22	0		1 磨石1
44	15	G-17	円形	83×75	63×71	59	8	2d類, 3f類, 6e類	2 フレーク1, チップ1
45	15	G-17	円形	93×86	73×76	35	17	2d類底部	
46	15	G-17	楕円	85×120	81×111	51	11	2d類	3 磨石1, 四石1, チップ1
47	15	G-17	円形	57×70	52×55	28	0		
48	15	G-17	円形	85×95	80×84	40	8	5類	1 磨石1
49	15	G-17	楕円	110×83	71×63	34	1		1 フレーク1
50	16	G-17	円形	71×60	59×50	15	1		
51	16	G-17	円形	69×67	54×50	15	7	2d類, 6c類	1 フレーク1
52	16	G-17	円形	56×58	45×50	14	15	5類	
53	16	G-17	楕円	50×46	39×40	11	2	4類	
54	16	F-15	円形	138×112	116×52	40	2	6e類	
55	16	F-14	円形	80×73	55×61	34	2		
56	16	F-14	円形	63×62	53×44	27	2	6e類	1 チップ1
57	16	F-14	円形	81×75	63×56	36	4	6e類	
58	16	F-14	円形	84×85	71×71	37	3		1 磨製石斧1
59	16	F-14	円形	72×72	63×57	15	5		
60	16	F-13	円形	59×67	48×46	15	1		
61	16	F-13	円形	86×85	65×65	27	2		
62	17	F-13	円形	50×50	35×35	25	1		
63	17	G-18	円形	94×101	84×93	70	0		
64	17	F-17	楕円	61×51	49×48	27	0		
65	17	F-17	円形	50×46	40×37	20	1	2d類	

第4章 遺 物

第1節 遺物の概要と分類

約3万点の遺物が出土している。縄文土器、石器が主体を占める。縄文時代の遺物では他に琥珀製品や土製品などがある。そのほかには弥生土器、中近世陶器などが若干出土している。縄文土器は大きく2時期に分けることができる。縄文早期と前期末から中期初頭である。以下にその分類を示す。

1群 早期末～前期初頭の土器群

1類 押型文系土器群

2類 前半期条痕文系土器群に属し、沈線によりモチーフを描く土器

3類 後半期条痕文系土器群に属し、刺突列によりモチーフを描く土器

4類 交互押圧の施された隆帯を持つ土器群

4 a類 外面に刺突列、内面に隆帯を持つ土器

4 b類 1条の交互押圧を施した隆帯を持つ土器

4 c類 2条以上の交互押圧の施された隆帯を持つ土器

4 d類 口唇に交互押圧状の施文がみられる他には施文がみられない土器

5類 一方向から刻まれた隆帯を持つ土器群

5 a類 口縁直下に1条の隆帯を持つ土器

5 b類 不整形な複数条の隆帯を持つ土器

5 c類 複数条の高隆帯を持つ土器

5 d類 複数条の低隆帯を持つ土器

6類 刺突列や隆帯によりモチーフを描く薄手硬質な土器群

7類 縄により施文された土器群

7 a類 縄文が施された土器

7 b類 緒状体圧痕文が施された土器

8類 I群に属する底部

II群 前期末～中期前半の土器群

1類 前期末の土器

2類 半截竹管文を施す北陸系の土器群

- 2 a類 キヤリバー形のもの
- 2 b類 口縁が外反するもの
- 2 c類 円筒形のもの
- 2 d類 器形不明の胴部破片

3類 大きめの連続した爪形文や特有の粗い縄文で施文する薄手の西日本系の土器群

- 3 a類 貝殻腹の押圧文を施す土器
- 3 b類 貝殻先端部による連続刺突を施す土器
- 3 c類 円形刺突を施す土器
- 3 d類 施文方法は同じだが厚手の土器
- 3 e類 酒杯状突起
- 3 f類 その他の胴部破片

4類 貼付隆帯上に連続した爪形文を施し三角刺突や玉抱き三叉文を施文する東海系土器群

5類 三角刺突や半截竹管文で施文し胎土に金雲母を多量に含む関東系の土器群

6類 縄文のみで施文される土器。

- 6 a類 口縁部から頸部にかけて斜縄文を施し胴部は羽状縄文を施すキヤリバー形の土器
- 6 b類 口縁部に半截竹管による調整を加えるもの。
- 6 c類 口縁部に段を形成するもの。
- 6 d類 粘土帶で口縁を形成し内面に縄文を施文するもの。
- 6 e類 その他の縄文施文の土器

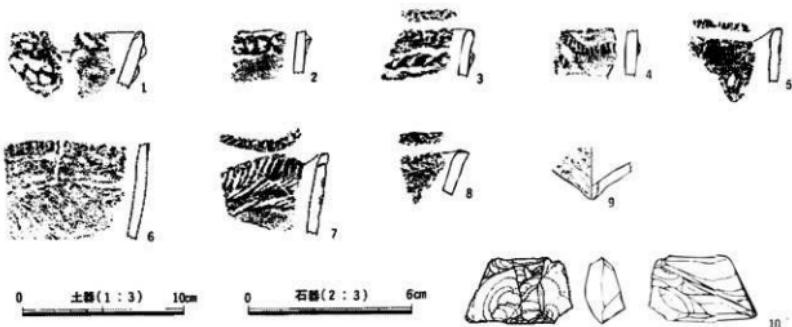
7類 その他の中期前半の土器

III群 後・晩期の土器

IV群 その他時期不明の土器

第2節 遺構出土の遺物

第1号住居跡出土の遺物 (第18図 図版3)



第18図 第1号住居跡出土の縄文土器・石器

本遺構からは4~6類の胴部片が出土した。

1は纖維をわずかに含む比較的厚手の土器である。口縁端部の内外を刻んでいる。隆帯を2条貼付し、指頭状の交互押圧を施している。2は隆帯をアナグラ属の貝殻腹縁で深く刻んだもので、隆帯の大半がつぶれている。3は比較高い隆帯を貼付し、右上がりの斜位に深く刻んでいる。口唇部には貝殻腹縁状の刻みが施されている。4は纖維をほとんど含まない硬質な土器である。低隆帯を波状に貼付し、細かい刻みを施している。一部には隆帯の端部が観察され全周しない隆帯が貼付されている可能性もある。5は纖維の混入が少ない比較的厚手の土器である。口縁に沿って3条の刺突列を施しているが、2、3条目は斜位に連続的に施しておらず、凹線文状を呈する。6、7は図示外にも同個体が多く、本遺構で最もまとまっている。纖維をわずかに含み焼成は不良である。口縁は波状で端部を面取りし浅く刻んでいる。外面には浅い連続的な刺突列が施されている。接合部が少なく不明だが、1条目は口縁に平行、2条目は波状、最下段は水平に施文されているものと推定される。8は纖維を含む無文土器であるが、刺突が施されている可能性もある。口唇部には浅い刻みが施されている。9は底部で纖維をわずかに含む。

このほかには無文の胴部片が多数出土した。纖維の混入が少なく、比較的硬質で上記の土器の胴部片に類似したものであろう。以上本遺構出土土器は入海II式から塩屋中層A式にはば取まる。現段階では混在として考えられるが、これらの土器が過渡的段階として共存した可能性も否定できず、今後検討を要する。

10はUFで、石質はチャートである。側辺部に衝撃によるつぶれが見られる。

第2号住居跡出土の遺物 (第19図 図版6)

約50点の土器片が出土している。そのほとんどが直径3センチ以下の胴部小片である。文様等が確認できるものは、II群2類が4点、II群7類が2点である。RLの斜縄文を施した大きめの胴部破片が

あるが同一個体と思われる。口縁部近くの破片形状から 6 c 類の口縁に段を有する土器の可能性もある。第19図1と2はII群2類の土器で同一個体である。1は緩やかに内湾するキャリバー型土器の口縁部付近で口縁部外面を横位に半隆起線を巡らせその下頸部までを縄文地に間隔をおいて沈線を縦に引く。北陸系土器に特有の突起部が見られる。2はその胴部である。新保式の新しいものまたは新崎の古い段階のものか。

3は「く」の字状に屈曲する口縁をもち細い粘土紐による貼付隆帯で区画しその内部に沈線で格子目文を描く。頭部下には目の粗いRLの縄文を施し細い並行沈線を縦に引いている。4は帯状に粘土を貼付した上を箆状工具によるとと思われる短沈線で連続して刻み、その下は平行沈線が横走する。

6は上下端につぶれ状の剥離痕がみられる。

第3号住居址出土の遺物（第20図・21図 図版6）

約100点の土器片が出土している。そのうちII群の土器は2a類が1点。2d類が8点。3類が3点。4類が1点。8類が2点である。そのほかは無文または縄文の小破片である。

1は2a類の土器である。口縁内面を肥厚させ内湾気味の口縁部を持つキャリバー形の土器である。地文にRLの縄文を施し、その上を半截竹管による半隆起線や平行沈線によって施文する。突起から粘土紐が懸垂する。口縁端部は半截竹管によって丁寧に地文縄文が擦り消され、その下部に3本の半隆起線が横走する。さらにその下は半截竹管による平行沈線で施文される。胴部については不明であるが同一個体の可能性が高い2、3から胴部は縄文が施されるのかも知れない。口縁内面には煤が付着している。

4・5は3類土器の口縁部である。共に薄手で大きめの爪形文を施す。5の爪形文は直線的である。

6は4類土器である。双頭波状口縁を持ち地文にRLの縄文を施しその上に半截竹管による半隆起線と爪形文、三角刺突、三叉状の楔形文などを施文する。胎土は灰黄褐で焼成堅緻な東海地方に主体を持つ土器特有のものである。内面は丁寧になで調整される。口縁内面を肥厚させ面を形成する。

8も4類土器である。6同様双頭波状口縁と思われる。口縁部は2条の貼付隆帯上に爪形文を施文する。頸部も2ないし3条の貼付隆帯上に爪形文を施文する。その間は無文であると思われる。頸部隆帯上の爪形文は途中から垂下し始めるがその後の文様展開は不明である。胴部は細い半截竹管によって集合沈線文が幾何学的に施される。頸部の隆帯直下には三角形状の模様が展開される。胎土は灰黄褐で器壁は5ミリと薄手である。口縁内面はその直下で面を形成している。

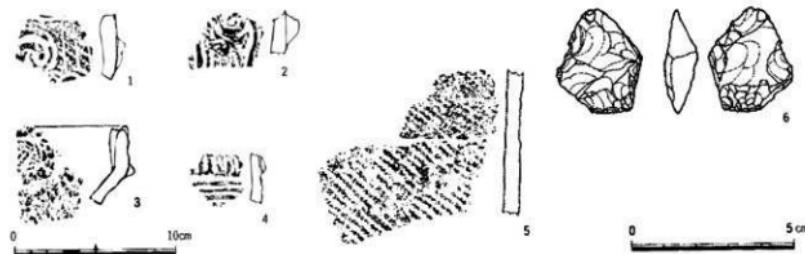
7は第3号住居跡内のビット4から出土した6d類の土器である。口縁内面に粘土帯を貼付け縄文を施文した粗製土器である。

9は薄手で、文様はないが3類と思われる。10は6類。11は2類か。

石器は主なもの6点を図示する。（第22図 図版29）

1は先端角38°側縁部の形状が凸状になる。基部の抉り込みは6mmと深く円形を呈する。2は先端角が39°側縁部の形状が凸状になる。全体が丁寧に二次加工され、基部は「く」字状に抉り込まれている。3は先端角が85°と比較的広い。側縁部の形状は直線状であり、基部は円形の小さな抉りを呈している。先端部のには使用による小さな剥離が見られる。4は貝殻状剥片を利用し、抉りが施されている。5は基部と錐部を丁寧に作出している。24mmの錐部の側辺にはつぶれが見られる。錐部先端部の断面は

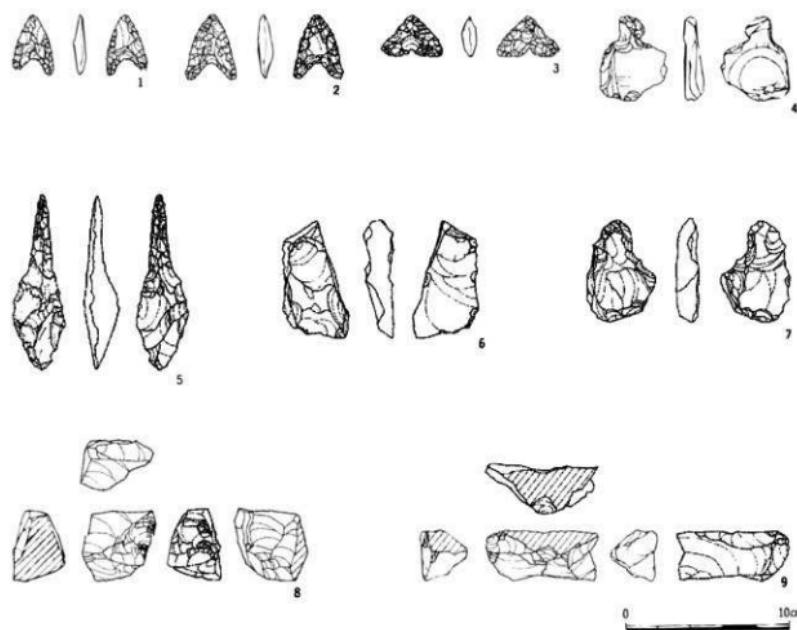
三角状を呈し、中央付近では菱形を呈している。石質はチャートである。6は両側辺が折られ、下端部には刃こぼれが見られる。7は節理面を持ち剥離作業が行われている。8は風化がはげしい凝灰岩の凹石である。中央がわずかに凹を呈している。



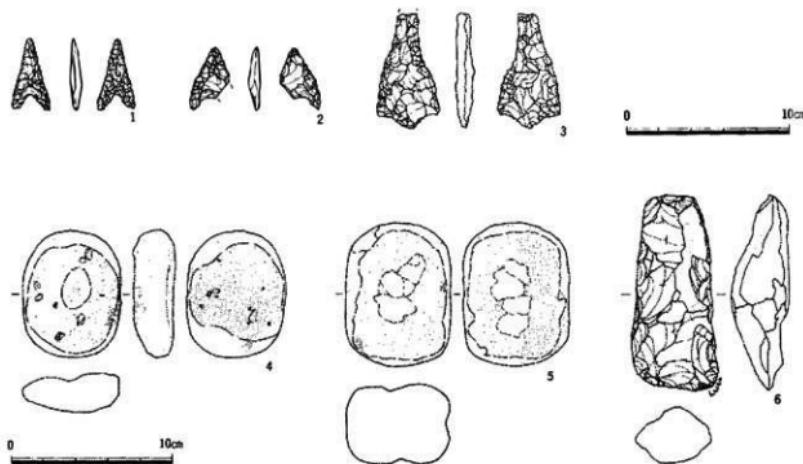
第19図 第2号住居跡出土の縄文土器・石器



第20図 第3号住居跡出土の縄文土器



第21図 第3号住居跡出土の石器



第22図 土坑出土の石器

表23回 土坑出土の縄文土器

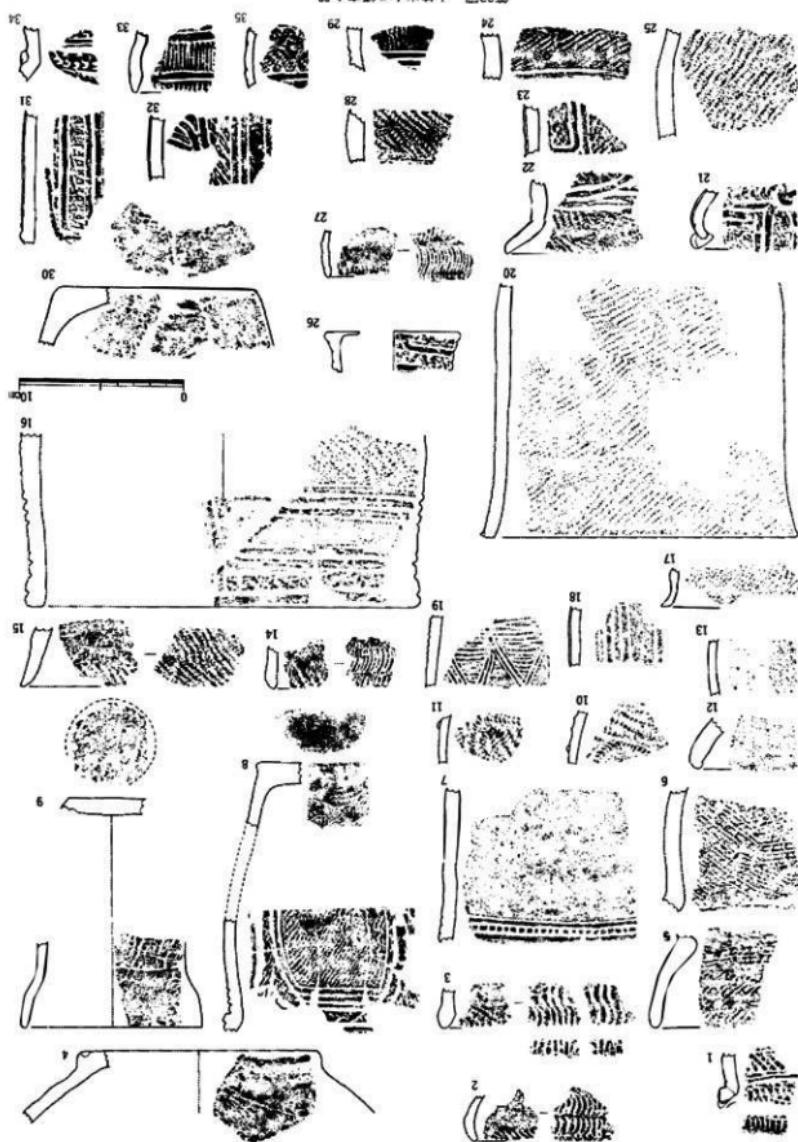
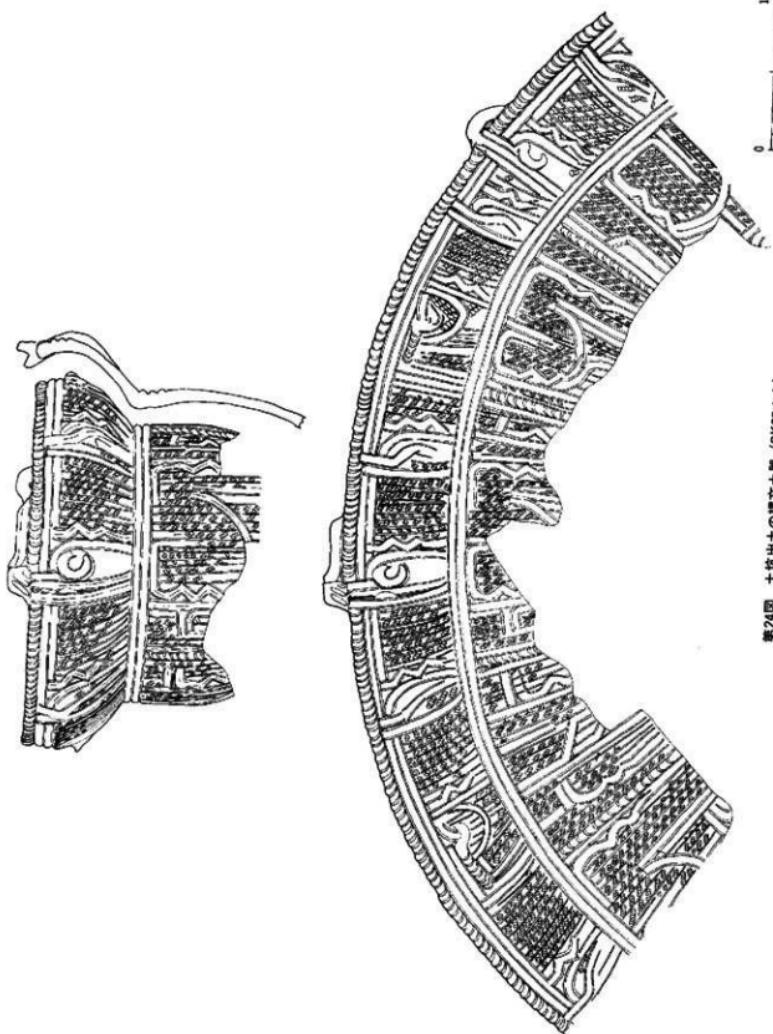


表23回 瓷器出土の遺物 35

10mm

第24図 土坑出土の縄文土器 (SK25出土)



土坑出土の土器（第23図・24図 図版6・7）

65基の土坑のうち遺物が出土していない土坑は20基である。45基の土坑からは何らかの遺物が出土している。土器についてはI群（早期末～前期初頭）とII群（前期末～中期前半）が同一土坑内から混在して出土している場合が多いが、ここでは新しい時期の土器がその遺構の時期を決定すると考えI群土器は除外した。したがって分類記号等はII群土器についてのものである。

SK1

2c類木目状撚糸文を持つ土器の破片が1点。2d類が1点。6e類が2点出土している。木目状撚糸文土器は第32図26の土器の破片である。

SK2（第23図1）

2類が1点と不明土器小片が1点出土している。1は口縁内面に撚糸圧痕文を施す。口縁は粘土を貼付け肥厚させその上を短い箇状工具によって爪形状に刻む。細い半截竹管によって区画された中を格子目状に沈線を施す。中期初頭の新保式のなかでも古い様相を持つものと思われる。

SK3（第23図 2～4）

3b類が1点。3d類2点、同一個体である。3f類が3点。底部が1点出土している。2は3b類で口縁外面に連続爪形文、内面にRLの繩文を施す。3は3d類で口縁にCその下には逆C字形の爪形文を施す。4は浅鉢の底部か。一端内傾し立ち上がる。

SK12

2c類木目状撚糸文を持つ土器の破片が1点。3f類の小片が10点余り。2d類が5点出土している。木目状撚糸文土器は第32図26の一部である。

SK13

2c類木目状撚糸文を持つ破片が1点出土している。第32図26の一部である。

SK14（第23図 5・6）

6類の土器。5・6は同一個体と思われる。5は口縁部で6はそれに続く胸部。繩文は0段のR(r)の縄に同じく0段のR(r)の細い縄を巻き付けた縄巻繩文である。口縁から頭部にかけてと胸部の施文方向を変化させている。他に3f類が1点、2d類が4点出土している。内1点は木目状撚糸文である。SK19の5類土器と接合する1点が出土している。

SK17（第23図 7）

2c類が2点。同一個体である。胸部破片で無文部の上に3条の半截竹管による半隆起線を引き中央の半隆起線上に爪形文を施している。

SK19（第23図 8・9）

本土坑から3点出土し図のように接合した。SK14からも1点出土し接合する。H17・G17グリッド包含層からも同一個体が出土し一部接合している。小型の深鉢である。胸部が緩やかに膨らむ。口縁部の形状は不明であるが外反する可能性がある。胸部は半截竹管による半隆起線で繩文を区画するY字状の懸垂文はおそらく4単位である。Y字状文と頭部で横走する半隆起線には繩文が残される。繩文原体はLRの縄文に2ヶ所別の条で縛った原体を使用したと思われる2列の結び目回転痕が残る。胎土は緻密で均一である。灰黄褐色を呈し金雲母を含む。5類の五領ヶ台式土器と思われるが他の同類

土器に比べ胎土色が異質である。同一個体と思われる底部がE 13グリッドから出土し図上復元を試みた。底面は滑らかに調整される平底である。やや内傾して立ち上がる。2 d 類の小片が5点出土している。9は6類だが口縁部は無文で小型のキャリバー形深鉢である。

SK20 (第23図 10・11)

3 f 類が12点出土している。粘土紐貼付上に爪形文を施文し、目の粗い特有の縄文を地文とする土器である。10・11は粘土帯上の爪形文は幅8ミリで他の同類土器に比べ繊細である。また地文縄文は蓮状で当遺跡の3類土器の中ではやや異色的印象を受ける。2 d 類が1点出土している。

SK21

2 c 類木目状燃糸文を持つ土器の破片が1点出土している。木目状燃糸文土器は第32図26の一部である。2 d 類が1点。3 f 類が1点出土している。

SK22 (第23図 12・13)

時期不明の上器が2点出土している。13は琥珀製品に伴って出土している。

SK23 (第23図 14~16)

2 c 類が1点。3 f 類が2点。6 d 類が1点出土している。16は2 c 類で地文はRLの縄文でその上に半截竹管による半隆起線によって文様を展開する。口縁は半截竹管によって丁寧に整形される平口縁である。地文の縄文を残し2条の半隆起線が横走する。さらに無文帯を挟んで3条の半隆起線が再び横走し胴部の縄文部となる。口唇直下から半隆起線が垂下し、横走する半隆起線とで無文帯を区画している。器形は胴がやや膨らむ筒形と思われる。14は3類。15は6類である。

SK24

2 d 類が3点出土している。

SK25 (第24図)

2 a 類が1個体出土している。胴下半が切り取られたように残存しないが胴部から口縁部までの遺存状態は良い。胴が緩やかに膨らむキャリバー形の器形で半截竹管による半隆起線と爪形文によって施文する。地文はRLの縄文である。頭部と胴部は2条の半隆起線で区切られる。口縁部は3条の半隆起線が横走し、口唇の半隆起線に爪形文を施す。口唇には2個の突起が付くが対称とはならない。口縁部には8個の突起が付くが割付けは均等でない。突起の意匠は口唇の突起下、その左右、さらにその左右が同じである。どの突起にもB字状の蛇行する懸垂文が付く。口縁部の8個の突起間は地文の縄文を残した半截竹管による集合沈線を充填する。胴部は垂下する爪形文を伴う半隆起線によって4分割される。4分割された3面はB字状文の先端が上方に向かって翻ね上がる。1面のみ異なった文様展開となっている。新崎式土器である。

SK27 (第23図 17~20)

2 d 類が1点。3 f 類が5点出土している。17は3 f 類で外反する口縁部付近である。19は5類か。20は6類である。

SK29

3 f 類が6点。2 d 類が1点出土している。

SK30

2 d 類の土器が2点出土しているが、5類の土器である可能性もある。

SK37（第23図 21～25）

2 a 類が1点。2 d 類が1点。5 類が2点。6 e 類が1点出土している。21は2 a 類の土器で口縁に粘土紐を付加し内面に面を形成し内湾させている。文様は半截竹管による半隆起線と集合沈線によって構成される。24と25は胎土に金雲母を含む厚手土器で胎土から5 類と判断した。22は胴部が膨らみ口縁部は聞く器形。内面は丁寧に撫で調整が施される。

SK39（第23図 26）

5 類と思われる土器底部。半截竹管の半隆起線と楔形刺突を交互に施す。薄手である。

SK44（第23図 27～29）

27は3 類口縁部。28は6 e 類。29は2 d 類で撫糸文を施す。

SK45（第23図 30・31）

30は底部。31は2 d 類。

SK46

2 類d 1 点

SK48（第23図 32～34）

5 類が5点。全ての胎土に金雲母を多く含む。32は半截竹管によって集合沈線文をなす。33は爪形文を意識したと思われる施文方法を持ち口唇も刻む。34は貼付した粘土紐上に刺突を連続させる。頸付近の破片である。底部1点。おそらく5 類のものであろう。

SK51

2 d 類1点。6 c 類2点。

SK52

5 類1点

SK53（第23図 35）

4 類が1点。玉抱き三叉文と楔形三角刺突を施す薄手の土器である。

SK54号

SK56

6 e 類2点

6 e 類2点

SK57号

SK65

6 e 類4点

2 d 類1点

（伊藤秀雄）

土坑出土の石器（第22図1～6 図版29）

1はSK14より出土。先端角が33°側縁部は直線状抉り、基部は「く」の字状抉り込みを呈する。石質はチャート。2はSK20より出土。脚部を欠損する。貝殻状剥片を素材とした剥離調整が施され、先端角55°側縁部は凸状を呈する。3は錐部の先端が欠損してSK32より出土。全体に丁寧な調整を行い基部の底部に茎を呈する。錐部にはつぶれが見られる。4はSK20より出土。石質は凝灰岩。6面全面に擦り面を施し、凹部が表に3ヶ所、裏に4ヶ所、側面に2ヶ所ある。5は凝灰岩。SK58より出土。背面に自然面を残す。6の刃部は2次加工の調整が行われている。

（上出巳吉）

第3節 包含層出土の土器

1. I群 早期の土器

1類 押型文系土器群（第25図1～3 図版3）

本類は図示した3点が全てである。1、2は繊維を含まない硬質な土器で、西田遺跡IA-2類段階である。（谷口他1997）1は頸部破片で比較的広い無文帯を持つ。2単位の穀粒状の構円文が密に並んだ原体で施文している。3は繊維を含むやや厚手の土器で、西田遺跡IA-3類段階である。口縁端部をやや内削ぎ気味に面取りしている。原体は2単位の穀粒状の構円文で、上段に重複して下段を施文している。

2類 前半期条痕文系土器群に属し、沈線によりモチーフを描く土器群（第25図4～8 図版3）

4～8は円棒状工具による沈線でモチーフを描く土器で全て同一個体と思われる。繊維と長石（最大4mm）を含む。7、8の内面に貝殻条痕文が残る他は内外とも器面調整は平滑である。5、7はわずかに外反している。4、5は平行する沈線により文様帯を区画し、区画内に縱位の集合沈線を充填している。区画線上2カ所に円棒状工具端部による不明瞭な刺突がみられる。7は摩耗しており破裂下端の施文の有無は明確ではない。本類は施文の特徴などから鶴ヶ島式に比定される。

3類 後半期条痕文系土器群に属し、刺突列によりモチーフを描く土器群（第25図9～17 図版3）

柏畠式に比定される土器（9～14）と、併行期と思われる土器（15～17）がある。

9は酒杯状突起である。表面の摩耗が激しく施文や調整は不明である。10は口縁端部は角頭状を呈し、口唇部にヘラ状工具による刻みを施している。11は同じく口唇にヘラ状工具による刻みを施している。外面にはアナグラ属の貝殻腹縁による刺突列を施している。12、13は同一個体と思われる。台形状の波状口縁になると推定される。繊維を多量に含むが器厚が薄い（約6mm）。内外に顯著な貝殻条痕が施されている。14は爪形の浅い連続的な刺突列が横位に施されている。また刺突列に直交するよう幅1mmほどのキャビラ状の圧痕が2条みられる。

15は繊維を含み焼成は不良で、黒褐色を呈している。口縁部は緩く外反し端部は肥厚する。口唇部は幅広の工具で深く押圧され、直下に2条の刺突列が施されている。刺突は不整形な板状工具で下方より施されたものと推定される。16、17は同一個体で、図示外にも同一個体は多い。繊維を含み焼成は不良である。円棒状工具端部で2条以上の刺突列が施されたもので貝殻条痕文もみられる。

4類 交互押圧の施された隆帯を持つ土器群（第25図18～35 第26図36～44 図版2・3～4）

4a類 外面に刺突列、内面に隆帯を持つ土器（18、19）

18、19は繊維を多量に含み焼成は不良である。同一個体もしくは類似した土器である。外面には口縁に沿って浅い爪形の刺突列を施している。口唇は指頭による押圧が施されている。口縁端部内面には高い隆帯が貼付されている。隆帯の上端から刺突し、前面から押圧してある。外面の施文は2b類に類似しており、上の山I式に併行もしくは先行すると思われる。



第25図 遺物包含層出土の縄文土器（I群）

4 b 類 1条の交互押圧を施した隆帯を持つ土器 (20~36)

本類は上の山Ⅰ式に比定される。纖維を多く含む他、長石の細粒を含み焼成は全体的に不良である。20、21は同一個体で、口唇部を斜位に刻む。口縁直下に刺突列とその下段に隆帯を貼付し、交互押圧を施している。内面には浅い刺突列が施されている。22は器面調整か粗く擦痕も残る。隆帯への交互押圧は不規則で乱雑な印象を受ける。口唇を押圧し小波状に整形するほか、内面端部にわずかな爪痕が認められる。23は砂粒を多く含みやや硬質な土器である。器面はナデ調整され比較的平滑である。波状口縁で、口唇を指頭で押圧的に刻む。口縁直下に隆帯を貼付し、指頭で摘むように交互押圧したもので下方の圧痕には爪痕が顕著である。24は内面に貝殻条痕がみられる。口唇を指頭で押圧している。隆帯は口縁端部に貼付されている。25は口縁端部が角頭状を呈しており、口唇は外面端部に指頭により浅い刺突が施されている。隆帯への押圧は特に前面からが顕著である。26は器厚が6mmと薄い。27は特に隆帶上端からの押圧が顕著である。29は口縁端部を外面から摘みながら押圧したものと看取される。30は外面の条痕が顕著である。隆帯は細く、深い刺突により蛇行気味に貼付されている。31~34には内面端部に刻みが施されている。31の隆帯は端部がみられ全周していない。33は緩く外反する口縁内面に刺突列が施されている。隆帯は比較的大く、上下方向からの刺突は比較的浅い。34は口縁内面が短く外反し刺突列を施している。器面には粗い調整痕が残る。35は22に類似した土器であるが、隆帯への施文が整然と施されている点が異なる。ほぼ直行して立ち上がる。36は底部まで器形が判明する良好な状態で出土した。口縁は全周しないが緩い波状口縁になると思われる。胴部は楕円形になる可能性もある。胴部は下影れで最大経は下半部にあり、乳房状の底部に至る。底面はわずかに面取りされ2cmに満たない平坦面を持っている。外面には部分的に貝殻条痕文が残る。また、補修孔が隆帶直下と胴下半部に穿たれている。

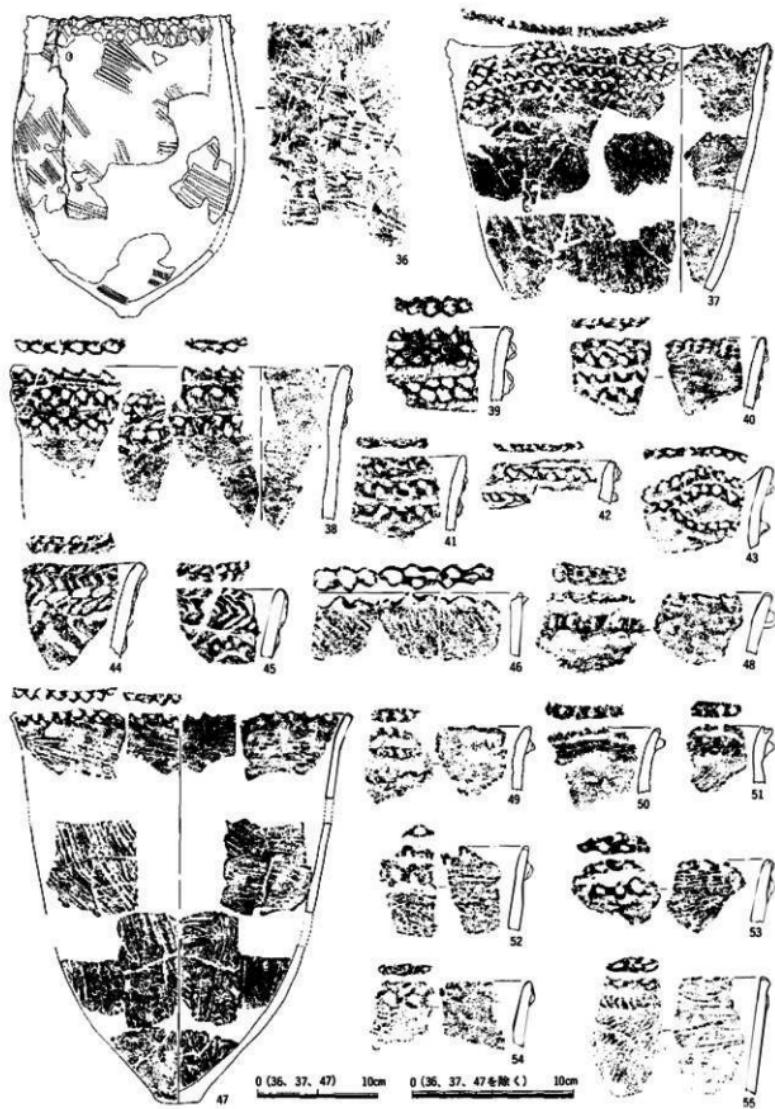
4 c 類 2条以上の交互押圧の施された隆帯を持つ土器 (37~45)

37~41は上の山Ⅱ式に類似する。器形は37のように直線的に立ち上がると思われる。纖維を含むが37以外はその量は比較的小ない。口唇は押圧気味に刻まれ小波状を呈する土器が多い。37、40は口縁端部内面にも刻みが施されている。40は貝殻腹縁による刺突である。38には外面端部に爪形の刺突が施されている。隆帯は2~3条であるが、37の3条目は全周しておらず、従って他の土器の条数も特定はできない。隆帶上には特に前面から顕著な指頭押圧が施されており爪痕が残る土器が多い。

42~45は交互押圧以外の施文も用いられているもので、後出的な様相を示している。42は2条の隆帯がみられるが下段の隆帯は円棒状工具側面による刻みが施されている。43は波状口縁で波頂部にモチーフを描いている。1条目の隆帯は交互押圧でないが、下段の隆帯は交互押圧を施しているほか、口縁端部にも交互押圧が施されている。44、45は同一個体で、幅広の隆帯に羽状の刻みが施されたものである。その下の隆帯は波状に貼付されている。下位の隆帯への刻みは單一方向からのものである。

4 d 類 口唇に交互押圧状の施文がみられる他には施文がみられない土器 (46、47)

二股貝塚のIII群b類に類似する。しかし、47には隆帯の剥離とみられる部分もあり、これらには交互押圧の施された短隆帯が貼付されていた可能性も否定できない。46は纖維を多く含み、内外面共に顕著な貝殻条痕文が施されている。口縁部で緩く外反する。底部は4cm弱の小平底となる。



第26図 遺物包含層出土の繩文土器（I群）

5類 隆帯を一方向から刻む土器群（第26図48～第29図122 図版4～5）

5a類 口縁直下に1条の隆帯を持つ土器（48～55）

隆帯の高さや刻み方にバリエーションがあり、時間幅があると思われる。48は繊維をほとんど含まない。高さの不揃いな隆帯が貼付され、貝殻腹縁による連続的な刻みが施されている。また、破片中央の隆帯上端には垂直方向に深い刺突が施され、隆帯の下端が膨らんでいる。口唇には貝殻腹縁による刺突が施されている。49は繊維を含みやや焼成が不良である。口唇と隆帯にヘラ状工具による刻みが施されている。50、51は白色砂粒を多く含み焼成は極めて不良である。口縁は短く外反している。隆帯上に不明瞭な刻みが施されている。口唇にはヘラ状工具で明瞭な刻みが施されている。52、53は白色砂粒を多く含み焼成は不良である。内面の貝殻条痕文が顕著である。52は隆帯にヘラ状工具で下方からなでるように刻みが施されている。53は口縁端部内外に刻みが施されている。54は器厚が6mmに満たない薄手の土器である。口縁直下に偏平な隆帯が貼付され、ヘラ状工具で浅い刺突が施されている。55も器厚が薄く比較的硬質な土器である。内外面に条痕文が施されているが間隔が異なり、異原体の可能性もある。低い隆帯に細い刻みが施されている。

5b類 不整形な複数条の隆帯を持つ土器（56～70）

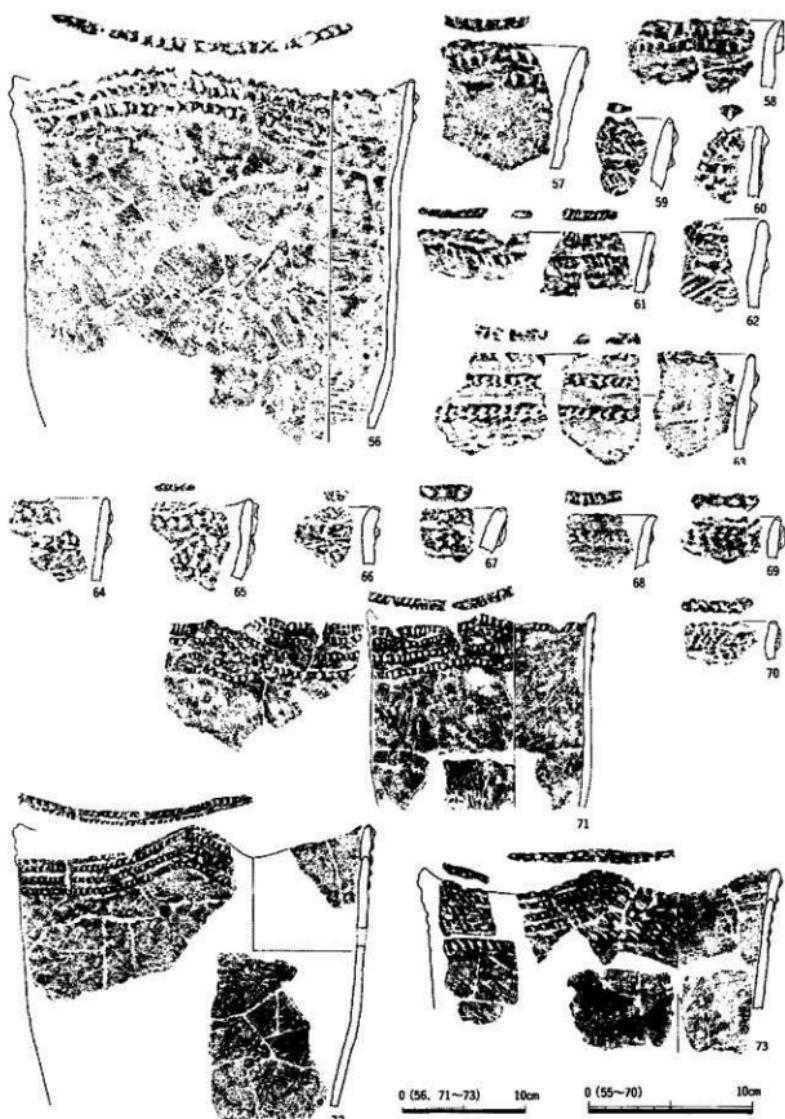
本類は56に代表される。隆帯は2条が主体で、比較的幅の広い隆帯を貼付している。ヘラ状工具による刻み（56～61）と貝殻腹縁による刻み（62～70）に細分される。本類は隆帯が多条化する過程にある土器群と思われ、入海Ⅰ式に先行もしくは併存する在地化した土器の可能性がある。

56は口径が27cmと大型の深鉢である。ほぼ直行して立ち上がる。口縁は緩い波状を呈する。器面は粗くな되어おり、外面では胴下半部から擦痕が顕著である。内面では胴下半部に貝殻条痕文が施されている。口唇部は棒状工具側面で深く刻まれている。隆帯は2条で密接に貼付され、深い刻みが施されている。隆帯の幅は不揃いで刻みも乱雑である。また、2条目の隆帯は一部で途切れている。57は56に類似した胎土と文様を持つ。58は2条の隆帯が密着し、肥厚口縁状に貼付されヘラ状工具により刺突気味の刻みがそれぞれに施されている。60は隆帯が連結する部分もみられることから何らかのモチーフが描かれていると推定される。一部に交互押圧的な部位もある。61は器厚が薄く胎土も他と異なるため早期末葉の土器群にも類似する。2条目の隆帯は非直線的なモチーフを描いているものと思われる。

62は口縁に2条の隆帯を貼付し、1ヶ所に貝殻腹縁による刻みが施されている。63は2条の隆帯が口縁に平行に貼付され、口唇と隆帯を貝殻腹縁で刻んでいる。内外面に条痕文が施されている。本類の中では隆帯が整っている。64は器厚が6mmに満たない。口縁直下に幅広の隆帯が2条密接に貼付され、貝殻腹縁で連続的に刻まれている。65～67は同一個体。口縁に平行して1条の隆帯が貼付され、65の破片では下段に波状の隆帯が貼付されている。68は同一個体がSB1から出土している。面取りされた口唇と隆帯に貝殻腹縁で斜位に刻みが施されている。複数条の隆帯が貼付されたものと推定される。69、70は同一個体。幅広の隆帯が貝殻腹縁で押さえつけるように刻まれている。

5c類 複数条の高隆帯を持つ土器（71～102）

本類は概ね入海Ⅰ式に比定される。何れも繊維を少し含む他、長石の目立つ土器もある。器形は72



第27図 遺物包含層出土の縄文土器（I群）



第28図 遺物包含層出土の縄文土器（1群）

に代表される波状口縁と74に代表される平口縁がある。隆帯は口縁に平行に3~4条貼付され、波頂部にモチーフを描く土器もある。また、口縁端部や隆帯下位に刺突列を施す土器も存在する。

71~74はまとめて出土したもので胴上半部の器形が判明した。71は平面形は楕円形を呈する。ナデ調整であるが、内面には斜方向の擦痕が顕著である。口縁端部は内削ぎに整形されている。端部外面と内面にはヘラ状工具による刻みが細かく施されている。4単位の波状口縁である。隆帯は口縁に平行に3条貼付されるが、波頂部の1ヶ所では3条目の隆帯に短い隆帯が対弧状に貼付され、右隣の波頂部では3条の隆帯が「入字状」に連結されると共にはやり最下段には短隆帯が対弧状に貼付されている。隆帯にはいずれもヘラ状工具により深い刻みが施されている。72は纖維を多く含み焼成はやや不良である。4単位の波状口縁でいわゆる砲弾型の深鉢になるものと思われる。口唇には円棒状工具側面による刻みが施されている。口縁直下に3条の隆帯が密に貼付されている。隆帯にはヘラ状工具による刻みが隆帯に垂直な方向に施されている。73は72に器形や施文が類似している。やはり4単位の波状口縁になるものと思われる。4条の隆帯が口縁に平行して密接に貼付され、刻みはやや斜位に施されている。口縁端部外面と口唇には指頭による浅い刺突がみられる。端部を摘みながら施文したものと推定される。74も72に類似した胎土である。ナデ調整であるが、外面の隆帯より下には斜位の擦痕が顕著である。口縁部は残存部で判断する限り平縁だが、波状縁になる可能性も否定できない。口唇には浅い刻みが施されている。口縁部には4条の隆帯が口縁に平行して貼付され、ヘラ状工具により斜位に深い刻みが施されている。

75~95は以上4点の復元個体に類似した口縁部破片である。75には3条目の隆帯に交互押圧の手法も用いられており注目される。79は高さの不揃いな隆帯である。砂粒の混入が少ないなどや異質な胎土である。80は2条の隆帯は口縁に沿って波状に貼付されるが、3条目は水平に貼付されている。82は比較的硬質な土器である。隆帯への刻みが深く、間隔も狭い。83は2条の隆帯が密接に貼付され、円棒状工具側面により下方より刻まれている。84~87は同一個体である。82と同様にやや硬質な土器である。波状口縁で口縁端部は尖頭状に整形される。口縁端部外面には連続的な刺突が施されているが、口唇は刻まれない。口縁に平行に4条の隆帯が貼付され、深く、押さえつけるように刻まれている。胴部外面には縱方向の擦痕、内面には横方向の擦痕が観察される。88、89は同一個体。纖維の混入が少なくやや硬質な土器である。隆帯は断面三角形を呈し、頂部を斜位に刻んでいる。口縁端部内面にも刻みを施している。90、91は同一個体と思われる。細隆帯を3条貼付し、細い刻みを施している。纖維の混入は少ない。95は破片は多いが、剥離や摩耗した破片が多く詳細は不明である。96は精緻な土器である。比較的低い隆带上を貝殻腹縁状の工具で浅く刻んでいる。

97~102は刺突列文が併用されたものである。97は3条の隆帯と2条の刺突列を併用している。隆帯は上2条と3条目の間隔が異なる。また、隆帯への刻みが右下がりなのに対して刺突列は右上がりに施されている。尚、口縁端部の刻みも右上がりに施されている。98、99は同一個体と思われる。3条の隆帯を口縁に平行して貼付し、下段に2条の刺突列を施文している。隆帯の刻みと刺突は同一手法である。100は焼成が不良である。3条の隆帯の下部に指頭押圧状の圧痕が連続している。101と102は刺突の手法など他と異なる。101は器厚が5mmに満たない。口唇部に指頭押圧痕がみられる。隆帯の上端を刺突したもので、隆帯下部には細いヘラ状工具の浅い刺突が広い間隔でみられる。102は口縁部に長く直線的な刺突が垂直に施される。口唇はヘラ状工具、隆帯は棒状工具側面で刻まれている。

5 d 類 複数条の低隆帯を持つ土器 (103~122)

本類は隆帯の形状などから概ね入海II式に比定される。106が復元された以外は破片のみで全貌は不明であるが波状文を描く隆帯が多くみられる。確認される隆帯は4~5条が主体となる。

103はまとまって出土したが、焼成が不良で摩耗が激しく接合部が少ない。纖維の混入は顕著でない。口縁は直行して立ち上がり、端部は丸頭状を呈する。口唇部は無文で、口縁端部外面には浅い刺突列が施されている。隆帯は5条が口縁に平行して貼付されている。104は胎土など103に類似する。■唇部への刻みを有する点が異なる。口縁部は緩い波状を呈し、隆帯の上3条はこれに平行するが下2条は水平に貼付されているようである。105は器厚の薄い土器で、砂粒や纖維の混入も顕著である。波状口縁で■唇部と端部外面を刻んでいる。隆帯は5条で、上4条が口縁に平行し、下1条は波状文を描いていると思われる。106は4単位の波状口縁になるものと推定される。纖維を多く含み、やや硬質である。内外共に擦痕が顕著である。口縁はわずかに外傾しながら立ち上がる。口唇部と端部外面を連続的に刻んでいる。隆帯は4条で、上3条は口縁にはば平行し、下1条は波状文を描いている。

107~122は本類に含まれる破片である。107と108、115と116は同一個体と思われる。纖維の混入は比較的少ない。口唇は(107は残存部が少なく不明だが)ほとんど刻みが施されている。口縁端部外面に刺突列を施すものが多く、107、110は2条、111、115には1条の刺突列がある。隆帯は偏平で下方から押さえつけられたようになる。口縁に平行する隆帯と波状文を描く隆帯が併用されているが、110は全てが波状文、111は2条目が波状文、114は下段が波状文を描く。120は連結するモチーフを描く。122のモチーフは不明である。隆帯以外に刺突列を施す土器もあり、110は隆帯間、114、116は隆帯下部に刻みを施している。

6 類 刺突列や隆帯によりモチーフを描く薄手硬質な土器群 (第29図123~129 図版5)

123~127は塩屋中層A式に併行する。123は3条の刺突列が口縁部に描かれている。3条目の刺突列は上2条と間隔や大きさが異なり、波状文などを描いている可能性がある。124は比較的厚いことや破片上端の剥離が隆帯の剥離であった可能性もあるため、別期に属する可能性も否定できない。125~127は細かい刺突が連続的に施されているため、一部では凹線状を呈しており、塩屋中層B式に類似する。128は短沈線気味の刺突が施されている。細かい砂粒の混入からザラザラした感じを呈する土器で、西田遺跡III C類に類似した北陸系の土器であろう。

129は細片のため詳細は不明だが、器厚の薄い土器に偏平な隆帯を貼付し、条痕もしくは棒状工具による側面圧痕を隆帯上に施している。木島III式以前の早期末に属する可能性がある。

7 類 繩文の施文された土器 (第29図130~133 図版5)

130、131は同一個体と思われる。纖維を含みやや硬質である。0段多条のLRの縄を横位に回転して施文している。口唇部にも同一原体により施文している。132も纖維を含みやや硬質な土器である。胴下半部とと思われ不均一な器厚である。これらは西田遺跡IV C-1類に類似し、早期に属する。

133は纖維を多く含む。一部で回転方向を転移させた羽状構成を持つ。前期初頭に属すると思われる。



第29図 遺物包含層出土の縄文土器（I群）

8類 絡状体圧痕が施された土器（第29図134～136 図版5）

図示した3点が全てである。何れも比較的高い隆帯を貼付し、上下に細かい絡状体圧痕を施したものである。134纖維を多く含み、焼成は不良である。口縁は短く外反し口唇を円棒状工具側面で刻んでいる。口縁に平行して高い隆帯を貼付し、上端に沿って絡状体圧痕が施されている。器面が粗く、燃りなど詳細は判然としない。135は134より密な胎土である。隆帯の上下に絡状体を横位に押圧している。これらは形態的な特徴から早期後葉に属すると思われる。

尚、137、138は同一個体で134に胎土や隆帯の形状が類似する。絡状体圧痕など隆帯以外の施文はなく所属する時期は不明であるが、本類に近似した土器である。

9類 I群に属する底部（第29図139～147）

底部を一括した。無文土器はいわゆる乳房状の尖底（139～143）と、小平底（144～146）がある。これらは2類土器の底部であろう。147は胴部と底面に縄文が施文される。纖維や砂粒を多く含む。

147は底面から大きく括れて胴部に至る。底面は内面がわずかに窪み、底面および外面には0段多条のRLの縄で施文されている。纖維を含む土器で前期初頭に属すると思われる。

3、縄文時代早期の五味原遺跡群における丸山遺跡

五味原遺跡群内では7地点から早期の遺物が出土している。前葉は少ないが中葉以降は連続と継続した様相が確認されている。最後に遺跡群内における本遺跡の位置づけを5期にわけてまとめておく。

1期に属するのは中葉の押型文土器である。該期は牛垣内遺跡と西田遺跡から、特に樋沢・細久保段階の充実した遺物が出土した。本遺跡例は特に西田遺跡との関連が想定できる。

2期は鶴ヶ島台式である。条痕文系前半期は飛驒全体では、子母口式＝牛垣内・野島式＝江名子糠塚・田影・鶴ヶ島台式＝岡前・茅山下層＝牛垣内・藤原などで断片的に確認されているにとまる。本遺跡例は交点刺突が明確ではなく、区画内に押し引き状の短沈線を充填する江名子糠塚・田影との関連が看取される土器で、鶴ヶ島台式の古段階として遺跡群内では単独に存在したと考えられる。

3期は焰烟式である。該期は西田遺跡からまとめて出土しているほか、牛垣内遺跡やたのもと遺跡でも出土するなど遺跡群内の広範な分布が確認されており、本遺跡もその中に位置付けられる。ただし、西田遺跡の土器と比較すると器厚などに相違が認められ、時間差の想定も可能である。

4期は隆帶文系（上ノ山・入海）段階で、本遺跡が遺跡群内の中心的な遺跡として位置付けられる。西田遺跡はこの段階は希薄で、遺物の分布はこの時期を境に西への移動が確認されるなど、一つの画期となっていた。本遺跡はまさしくこの間隙を埋める土器群として位置付けられる。調査した範囲では遺構は確認されていないが、廐棄状態での出土状況で数個体がまとまりをみせており、住居址などの存在が十分想定される。また、一般に上ノ山式→入海I式→入海II式の変遷が想定されるこの段階の土器群であるが、本遺跡例中には明確に位置付けることができない資料も存在しており、在地化した土器などは当地方での類例を待って再検討する必要がある。

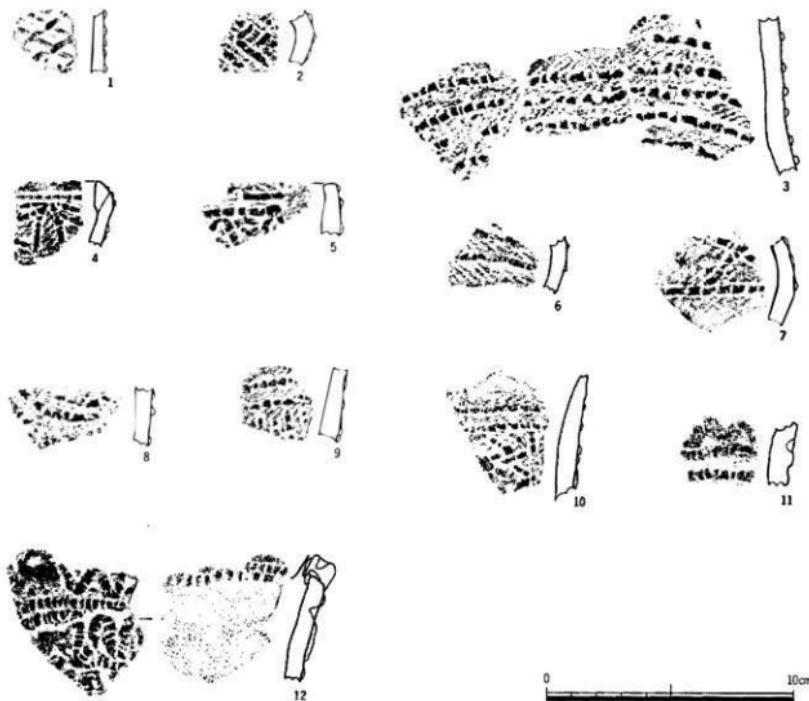
5期は薄手化が顕著となる段階で、再び西田遺跡で多数の遺物が確認されている。本遺跡の土器は数点を確認したにとまるが、その主体は前段階の隆帶文系から刺突文系へ移行した直後の遺物に限られており、SB1もその過渡的な遺物が混在している点で注目に値しよう。 （谷口 和人）

包含層出土土器

2. II群 前期末～中期前半の土器群

1類 前期末の土器（第30図1～12 図版8）

細い粘土紐を貼り付けた前期末の浮線文土器を一括した。1から11までは地文に繩文が施されている。1・2は粘土紐を格子状に貼り付ける。粘土紐上には半截竹管による押引は確認できないことからいわゆるソーメン状浮線文であるかもしれない。3から11は粘土紐上を半截竹管で押引く結節浮線文を有する。11と12は鋸歯状の印刻文を有する。粘土紐の幅が10までと比べ幅広となる。12は突起を持ち口唇に結節浮線文をシグザグに施す。口縁部破片で器形等の詳細は不明であるが石川県真賀遺跡5群土器に類似するものがある。本類土器は、結節浮線文によって施文される前期末の福浦上層式・鍋屋町式・十三菩提式などに共通する要素を持つものと考える。小片の資料であるため詳細は不明であるが施文方法から1・2、3～10、11・12に3細分できるかもしれない。



第30図 遺物包含層出土の繩文土器（II群）

2類 半截竹管文を施す北陸系の土器（第31図～34図 図版8～11）

新保式および新崎式土器である。口縁形態によって3細分し胴部その他の破片を一括した。口縁形態は直立するものを2a類、外傾するものを2b類、外傾内縛するキャリバー形のものを2c類とする。その胴部は円筒形となるものが多いことが破片などから予測される。半截竹管による半隆起線によって文様帯を区画するものが主体である。また、頸部から胴部にかけては半截竹管による半隆起線が垂下し、その起点には突起が付く。地文および胴部文様はいわゆる縄文の他に羽状縄文や木目状撚糸文が施される。

13は口縁形態から2c類に含まれる。幅約3mmの細い半截竹管によって斜格子目状に施す。斜格子目は斜めの半隆起線を施した後に薄い箇状工具によって細線を直行させて描かれる。口唇を外側にやせり出させ、口唇外面から内面へ撚糸文が施される。半截竹管による半隆起線の細さや口唇の撚糸文などから新保式段階のものであると思われる。14は小片で詳細は不明であるが半隆起線の細さや斜格子目状の文様帶を口縁部に持つことなどから13と同様と考える。わずかに残存する口唇外面の貼付隆帶には連続爪形文が施される。

15は2a類で口縁が直立するものである。本類はこの1点のみである。口縁文様は上下3条の半截竹管文とそれに挟まれた無文帶で構成される。半截竹管による半隆起線の起伏がなく平坦である。最上部の半隆起線は刻まれている。無文帶に突起を持つ。突起から半截竹管による半隆起線が胴部上半まで垂下する。胴部は横位羽状縄文である。結束のある羽状縄文である。

16から29は2b類で口縁が外傾する。

16は胴部に縱位羽状縄文が施される。結束のある羽状縄文である。口縁外面の半隆起線による区画内には胴部同様の羽状縄文が確認できる。地文の羽状縄文を磨消して半隆起線を施している。口縁部は半截竹管による半隆起線で区画される。頸部と胴部は半截竹管による押引きによって爪形文が施される。胴部に垂下する半隆起線があることから突起の存在が想定できる。口縁部の外傾は緩やかである。半隆起線の幅は約6mmである。新崎式の中頃の段階のものか。

17は緩やかに外傾する口縁を持つ。口縁部に粘土を貼付して肥厚させる。口縁外面には楔状の刺突を連続して巡らせている。半隆起線は起伏が浅く平坦である。地文は確認できない。胴部は密接した縱位の半隆起線を施し瘤から垂下する半隆起線やB字形文を配する。半隆起線の幅は約6mmである。胎土には直径2～3mmの長石が目立つ。新崎式に比定される。

18は口縁に粘土を貼付しその上に彫りの深い爪形文を巡らせる。半隆起線の幅は約6mmである。20が同一固体であるとすれば地文に縄文を持ち、垂下する半隆起線やB字形文を配するものであることが想定される。

19は口縁部に4条の深い半隆起線を巡らせ下から2条目を爪形文で深く刻んでいる。半隆起線の幅は6～7mmである。地文の縄文が口縁部に残されている。口縁部の半隆起線で挟まれた無文帶の幅が狭くなったものと解釈する。口縁部の外傾は緩やかである。

21・23は2b類、22・24は2c類である。24は縱の沈線を持つ。

25は18と同じように口縁に粘土を貼付しその上から彫りの深い爪形文を施す。口縁には突起が付き突起先端は刻まれる半隆起線に挟まれた無文帶と胴部はLRの斜縄文が施される。

26は緩やかに外傾する口縁を持つ円筒形の深鉢で本類で底部まで復元できた唯一の土器である。口



第31図 遺物包含層出土の縄文土器 (II群)

縁部は半隆起線に挟まれて帯状に LR の縄文が巡る。2条の半隆起線に挟まれて口縁下に無文帯がある。瘤を起点として垂下する半隆起線は上にも伸び、無文帯を区画している。垂下する半隆起線は短く終わる。胴部は木目状撚糸が一面に施される。整ったプロポーションや木目状撚糸文の施文などから丁寧に作られた印象を受ける。新崎式の中でも古い段階のものか。

27から33は口縁部が外傾内彎するキャリバー形深鉢の口縁部破片である。2 c 類とした。27・28はいずれも口唇が破損して口縁が完全には残存していない。口縁部と頸部を半隆起線で区画しその間を縦の集合沈線でうめるもので29にも共通する。27・29は地文が縄文である。29は口縁部の半隆起線を爪形文で刻み、口唇に付く突起から半隆起線が瘤を伴って垂下する。口縁は肥厚し内彎する。内面は丁寧に撫で調整が施される。30・31は口縁部下は無文となる。31は突起外面に沈線で格子状の文様を描く。32は本類のなかではやや異質的印象を受ける。口縁部の刻みは範状のものになり口縁部を区画して垂下する隆帯がある。その隆帯は半截竹管によって爪形文が施されている。詳細は不明だが波状口縁を呈する可能性もある。33は地文縄文の上に縦沈線を施している。口唇は平たく成型される。

34~37はいわゆる蓮華文と呼ばれるものを一括した。34は細沈線を交互に施し蓮華状の文様効果を出している。内面には玉抱き三叉文が施されわずかに赤色塗彩が残る。36・37については東海地方の土器にも似たような文様をもつものもあり、詳細は不明である。

38~84は胴部破片その他で2 d 類とした。

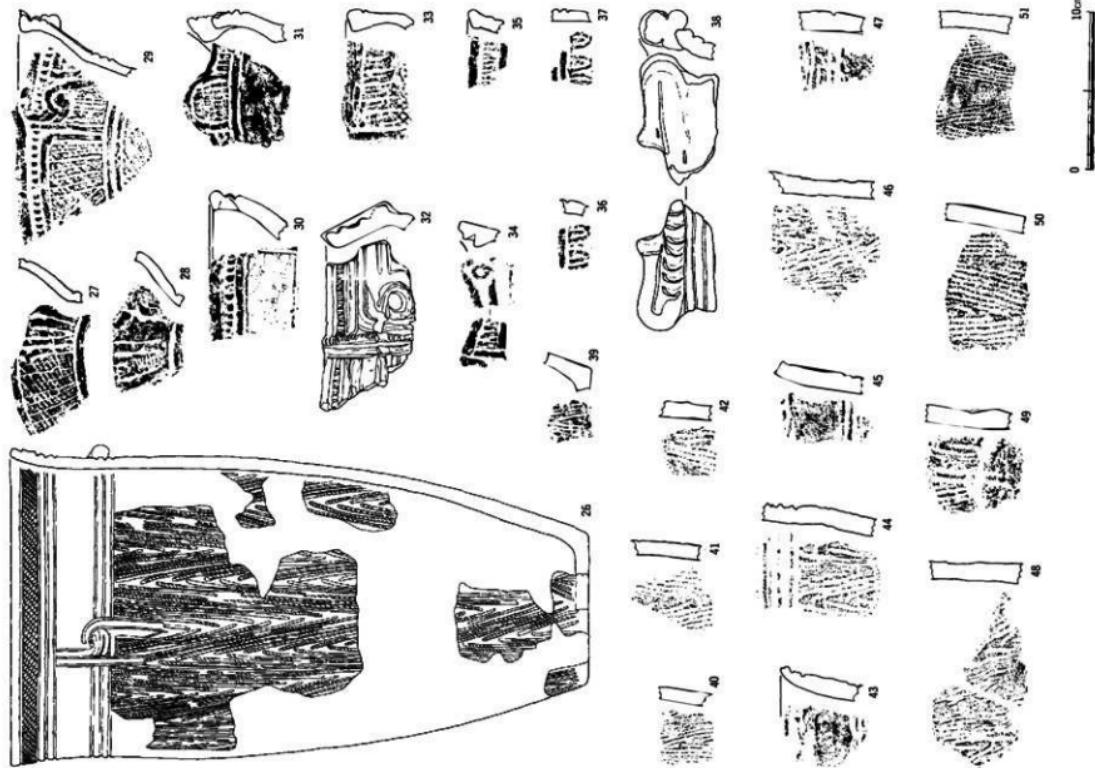
38は大型の突起である。口縁を太い2本の紐状粘土で内外面から挟みながら折り曲げて突起を形作る。突起外面は大きな爪形文が施される。

39~51は木目状撚糸文を施す胴部破片である。43~49は同一固体の可能性もある。粘土が柔らかいうちに撚糸文を施している。43は口唇が破損しているが口縁部破片である。口縁は肥厚させその下に刺突状の施文が観察できるが詳細は不明である。44はその頸部下と思われる。内面赤褐色の厚手の胎土で粗製である。外面には煤が付着する。51は焼成堅板で撚糸文は細い。

52~55は半隆起線の幅が約5 mmと細い。いずれも地文は確認できない。53は破片上部に連続爪形文を施す。54・55の半隆起線は横位にも施される。71も同じである。59は太い縦よる縦位羽状縄文が施されるかなり大型の深鉢胴部である。半隆起線上の爪形文は間隔をあけて刺突状に施される。60は地文に縦位羽状縄文を施す。61・62は地文 LR の縄文に半截竹管による押し引きによって爪形文を施している。63の地文縄文は無節。64も同様。65~71は全て地文縄文を持つ。72・73・75・82は格子目状の文様を持つ。75以外は半隆起線を施す前に細沈線で格子目文を施文している。75は半隆起線を細沈線が切って格子目状文を形成している。

80は同一個体と思われる底部からの破片で図上復元した。胴部は LR の縄文で垂下する半隆起線が胴部上部にある。81も同一固体と思われる破片によって図上復元した。器高は不明であるが口縁などから類推すればかなり大型になる可能性がある。

83は半隆起線が横方向への展開を示すもので本類の土器の中では新しい様相を持っていると思われる。84はキャリバー形の口縁部である。半隆起線は比較的細い。



第32図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）

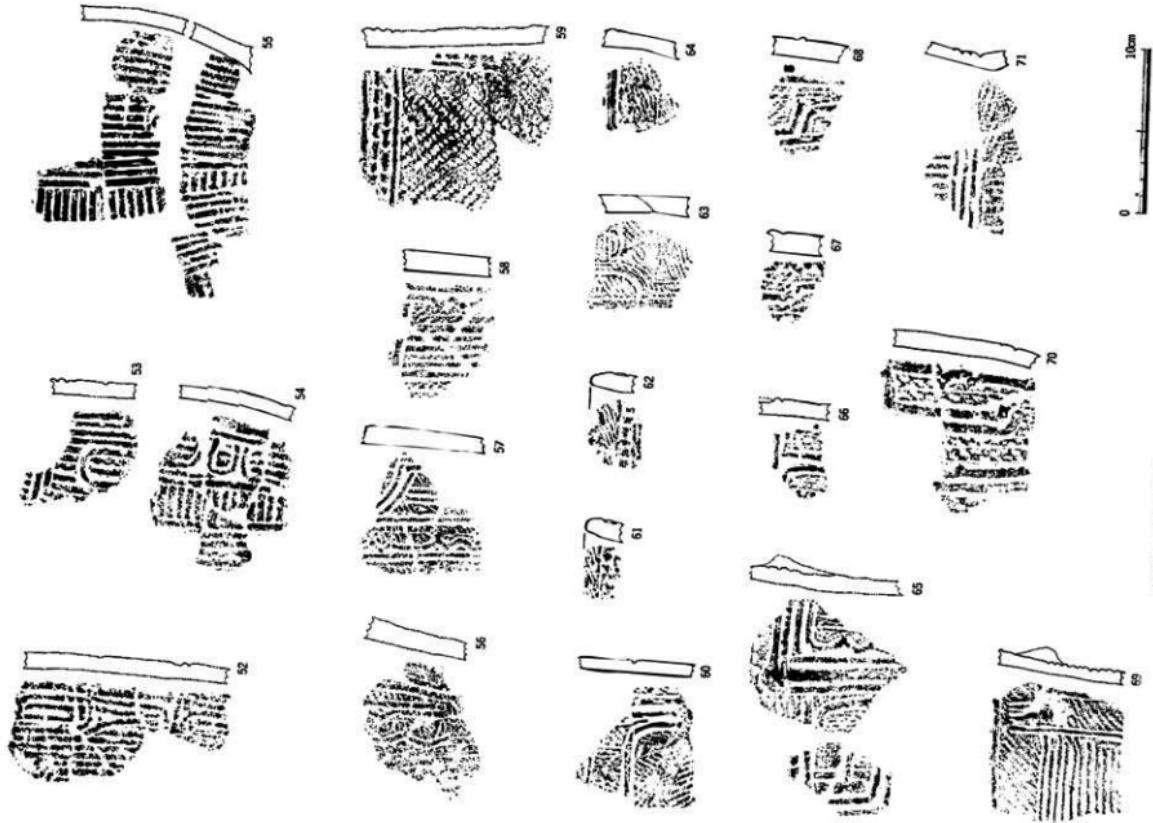
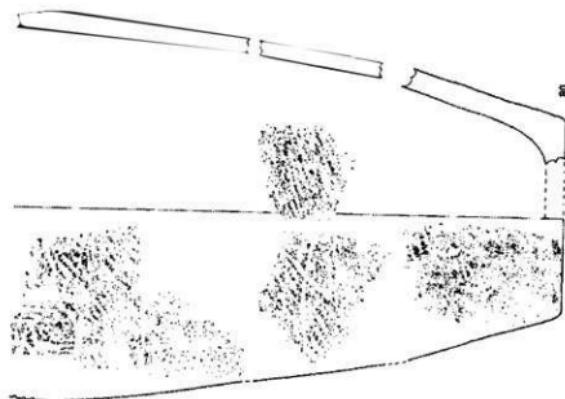
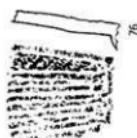
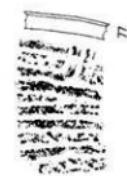
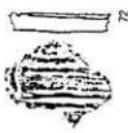


図33図 遺物包含層出土の縄文土器 (巨粒)

0 . . . 10mm



0 10cm

第3-4図 遺物包含層出土の織文土器（11群）

3類 連続した爪形文や特有の粗い縄文を施文する西日本系の土器（第35図～36図 図版11～12）

鷹島式や船本I式に比定される1群である。施文方法などによって6細分した。3a類は貝殻腹の押圧文を施すもの。3b類は連続した刺突を施すもの。3c類は厚手の土器。3d類は酒杯状突起。3e類は爪形文と粗い縄文のみによって施文されるもの。3f類は胴部破片その他である。いずれも焼成堅緻で薄手であり本遺跡で出土した土器のなかで一見して区別できるものである。口縁内面には一様に地文と同じ原体による縄文が施される。器形はキャリバー形を呈するものが多いと思われる。波状口縁のものと平口縁のものがある。3d類の酒杯状突起が付くものがある。爪形文は密のものと粗であるものがある。爪形文の形はいわゆる「C」字状である。

85は3a類の貝殻腹の押圧文を施す土器である。貝殻押圧文は2枚貝の付根部分を使っている。押圧は土器内面に及んでわずかな膨らみをもたらしている。頸部で大きくくびれ口縁部が内彎するこの時期の西日本系によく見られる土器である。器厚は薄く焼成堅緻である。連続する爪形文と特有の目の粗い縄文を施文する。内彎する口縁外面には2条の連続爪形文が巡る。2条目は貼付け隆帯上に連続爪形文を施文する。口縁の2条連続爪形文から頸部までを爪形文が蛇行する。頸部下に2条の連続爪形文が巡る。隆帯は貼付せず押引によって施文されている。胴部には特有の目の粗い縄文が全面に施文されている。口縁内面には胴部と同じ縄文が施文される。

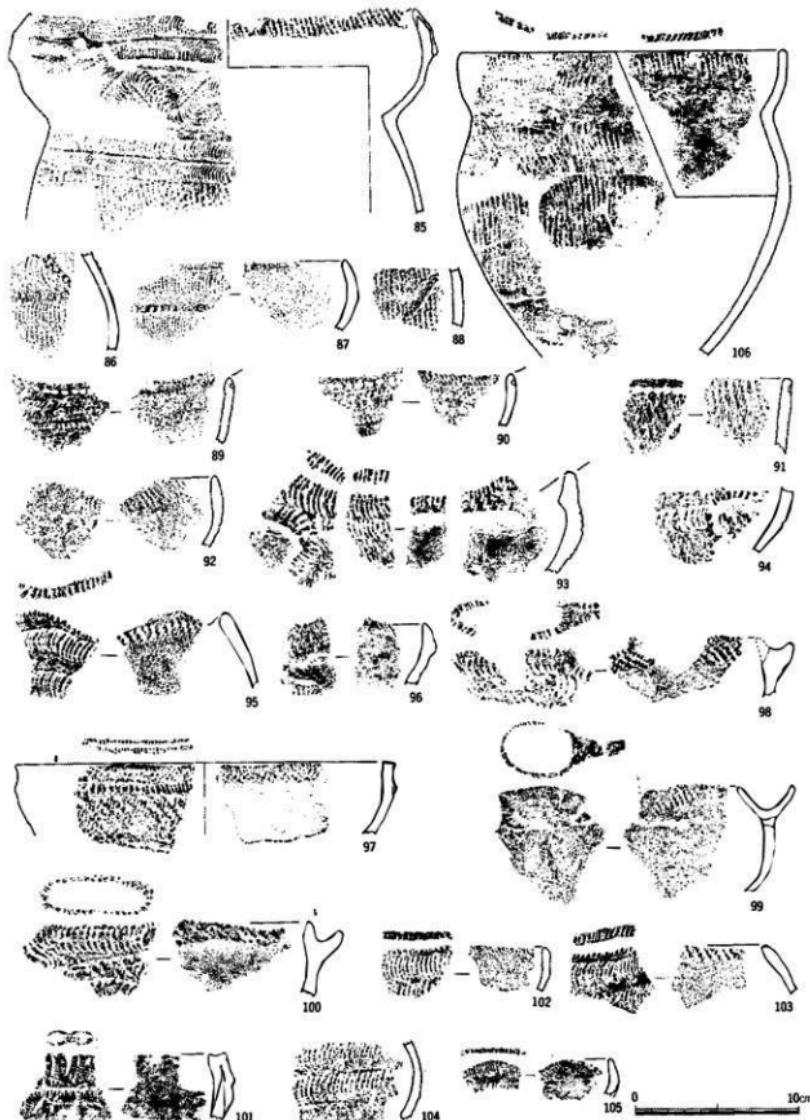
86から92は3b類の連続刺突を施す土器である。86の斜傾する連続刺突は貼付隆帯に施されている。86から88は同一個体であろう。89と90は深い連続刺突を口唇外面に施し波状口縁となる。同一個体である。刺突内に煤が付着している。91は平口縁でかなり大形の深鉢と推定される。口縁内面の縄文は破片の全面に施される。他の土器のそれに比べ幅広である。外面には刺突に使用したものと同一原体の押引によって蛇行する文様が横位に展開すると思われる。92は円形の連続刺突を施す。波状口縁である。

93から97は3c類厚手の土器である。施文方法等は3類全般に共通するが厚手である。93・94は同一個体である。円形に粘土帯を貼付し爪形文を施す。口縁端部にも爪形文を施す。口縁内面を肥厚させる。97は口唇に粘土を貼付しその上を異色の原体で施文している。これと同様の施文方法を持ったものが飛驒地方では門坂シズマ遺跡で出土している。地文の縄文は口縁外面から施文され、薄い粘土帯をやや蛇行気味に貼り付け爪形文を施している。

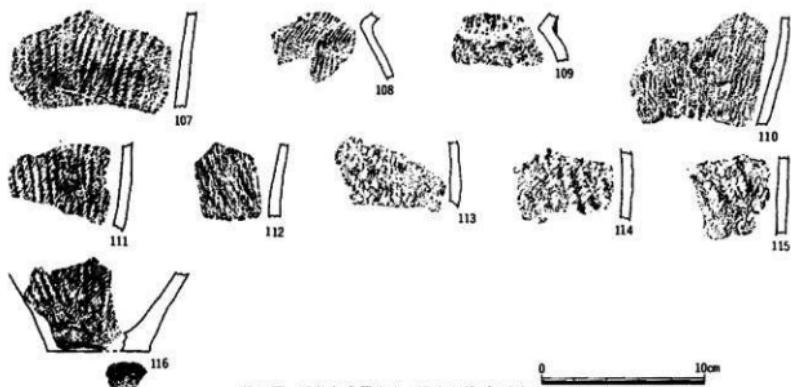
98から101は3d類酒杯状突起である。98は93と同一個体の可能性が高い。98と100の胎土には直径5mmほどの石英粒が目立つ。平面形が長楕円の酒杯状突起である。99は98・100に比べ薄手である。摩耗が激しく施文の遺存状態はよくない。平面形が楕円の酒杯状突起で穿孔が穿たれる。101は酒杯状突起ではないかもしれないが本類に位置付けた。

102から105は3e類爪形文と縄文のみによって施文される土器である。刺突を持たないこと以外は3a類と共通する。いずれも薄手である。106は器形復元できた個体でキャリバー形を呈する。口縁より胴部が膨らむ。平口縁で口縁端部に細かな割みを有する。口縁部から頸部までは連続した爪形文を施し、胴部は目の粗い縄文を施す。口縁内面も縄文で施文される。胎土には細かな金雲母が含まれる。

107から116は3f類で胴部破片その他をまとめた。いずれも薄手で焼成堅緻である。目の粗い縄文が施される。108と109はキャリバー形土器の頸部。



第35図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）



第36図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）

4類 貼付隆帶上の連続爪形文や三角刺突・玉抱き三叉文を特徴とする東海系土器(第37図～39図 図版13～14)

中期初頭の北裏C 1式に比定される一群である。全般に焼成堅緻で薄手である。器形は頸部から大きく外傾して開口口縁部を持つものが多い。胴部は樽状に膨らむものが多いと思われるが円筒形となるものもあるようだ。頸部から胴部にかけて橋状把手が付くものもある。主に施文方法によって3細分した。

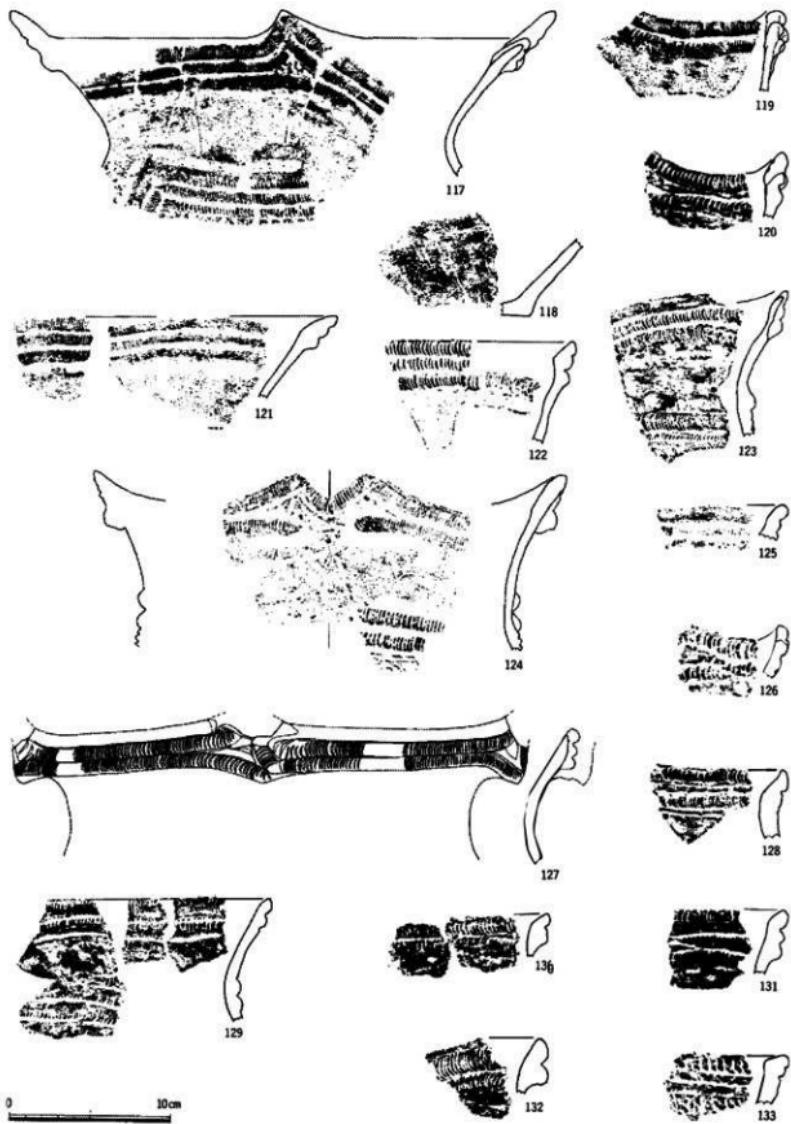
4a類は、貼付隆帶上を密に連続する爪形文によって施文されるもので縄文施文を持たないもの。

4b類は、三角刺突・玉抱き三叉文を施文し縄文を有するもの。

4c類は、把手その他である。

117から141は4a類である。貼付隆帶上を細かな爪形文を密に連続して施文する。隆帶は口縁部と頸部に確認できる。胴部の展開については詳細不明である。口縁部から頸部までは無文である。胎土は全体に黄褐色または褐色を呈する。

117は頸部から大きく外傾する。口縁部は外面に3条の貼付隆帶を持ち内面も粘土を張り付けて肥厚させる。口縁内面に面を形成し段を有する。三角形の突起部下は隆帶で三角形に開み刺突を施す。同内面は三叉状に彫り込まれている。頸部下の文様は同一個体と思われる破片で図上復元した。118と121は同一個体と思われる。117・121内面には煤が付着し118底部外面にも煤が付着する。119は連続爪形文を施す。2条の貼付隆帶を口縁部に巡らせ波状口縁となる。内面には段を持たない。120は内面に段を持つ。2条の隆帶間にわずかに三角刺突が観察できる。4b類の可能性もある。122の内面は段を有する。123も内面に段を有する。口縁端部には爪形文を施す隆帶を持たず一段下がって2条の隆帶を持つ。頸部の2条の隆帶下にわずかに三角刺突が観察できる。4b類の可能性もある。124は双頭波状口縁を有する。口縁を肥厚させ内面に段を有する。それぞれの波状口縁の内面は継に縞を形成している。胴部は細い半截竹管によって集合沈文線が描かれる。第3号住居跡から出土した土器は同一個体であろう。125は2条目の隆帶から爪形文を施す。126は2条の隆帶内を三角形に区画する。127は123・125と同じく2条目の隆帶から爪形文を施す。貼付隆帶を折り曲げて突起を形成しているようであるが詳細は不明である。他のものに比べて隆帶が高く盛り上がる。128の隆帶は貼付されたものでないかも知れない。129は124と同種の文様展開を胴部に持つかもしれない。



第37図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）

142から173は4 b類の三角刺突・玉抱き三叉文を施文し縄文を有するものである。

142は外傾する口縁を持ち、胴部が膨らむ器形である。文様帯は口縁部と胴部上半にあり他は無文である。文様帯は地文縄文が施され、無節である。口縁部は小波状である。詳細は不明であるが双頭波状またはそれに類する口縁部を持つのかもしれない。小波状下に刺突状痕跡がある。2条の爪形文を持つない半隆起線で挟まれた口縁外面は粘土を貼付け肥厚させている。胴部文様帯も2条の半隆起線で区画され上部に三角刺突を連続させる。下部の半隆起線は斜めに下降し胴半ばで止まる。半隆起線間に横走する沈線はその端部で三叉文となっている。口縁部から胴部にかけて橋状把手が付いていた痕跡がある。142~146は同一個体であると思われる。

147は口縁外面は地文縄文を残しその下に半截竹管による半隆起線を巡らせる。内面はわずかに肥厚させる。149は大波状口縁となる深鉢で胴部は円筒形となる。頸部から外傾する。口縁部は粘土を貼付けて肥厚させ、その外面は半隆起線で区画された縄文地に三角刺突を連続させる。内面は段を有する。頸部や胴部の半隆起線で区画された内側は地文が残り、三角刺突が連続して施される。頸部と胴部を結ぶ橋状把手が付く。波状口縁の単位数は不明である。150~154は同一個体の破片である。

155は、わずかに外傾する口縁部破片で半隆起線を挟んで2列楔形の刺突が連続する。楔形の刺突の施文方法は半截竹管の押し引きであろうか。左方向から押し引かれたと思われる。地文縄文に玉抱き三叉文を施文する。156は胴部破片。刺突は楔形というより細く鋭い短沈線状である。157も胴部破片。玉抱き三叉文が明瞭に残る。163・165・166も同様に玉抱き三叉文を持つ。164は胴部下部で半隆起線の終わりを示している。169は双頭波状となる口縁部破片である。波状口縁外面に玉抱き三叉文を持つ。口唇に爪形文を持つ。第3号住居跡で同一個体の口縁部破片が出土している。170の刺突は鋭く急角度で押し引かれる。

171は肥厚させた口縁外面を半隆起線で区画し地文縄文の上に三角形刺突を上下2列配する。下段の刺突は三角形をしているが上段のものは線状になるものもあることから範または板状のもので施文する方法を予想できる。刺突を施す方向を変えることによって三角形状であったり楔状になったり、あるいは線状になったりするものと思われる。

148は縄文も爪形文も持たない。粘土を貼付し口縁部を肥厚させる。突起部で半隆起線を折り曲げ三角角にすることやその内面に三角形の彫り込みをなすことは4 a・b類に共通する。

172は胴部破片で爪形文を施す半隆起線で区画された内側を三角形状の刺突を上下から施す。173と同一個体の可能性が高い。

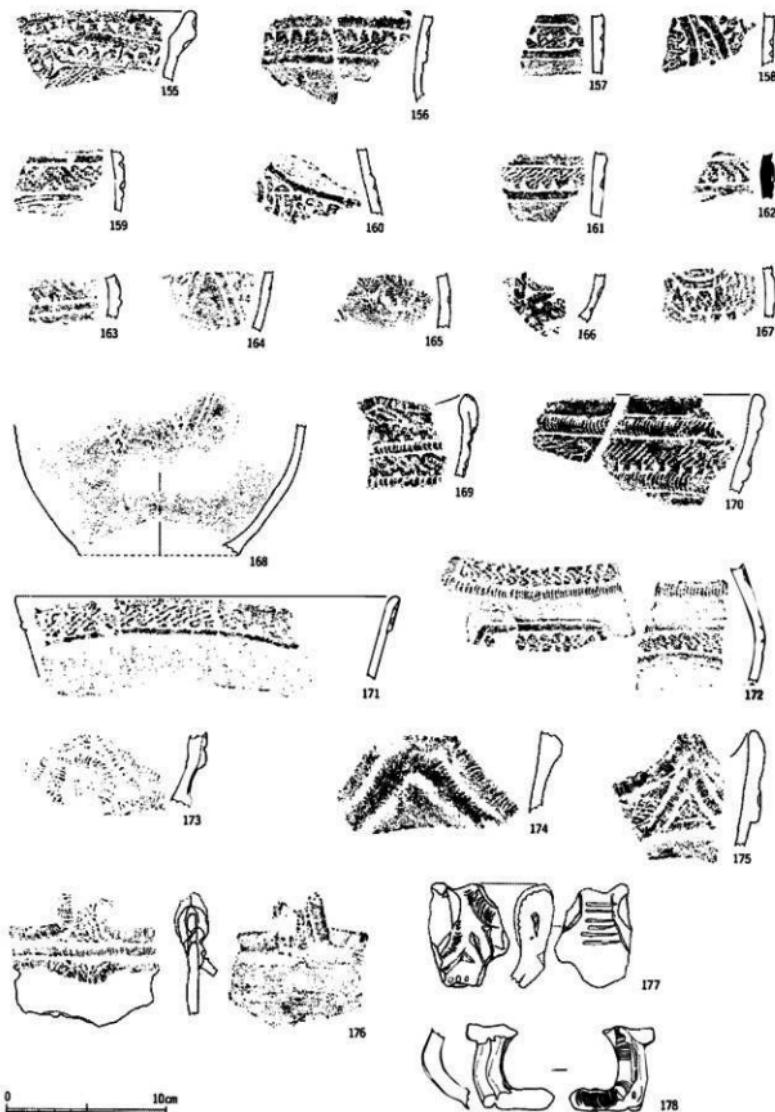
174から178は4 c類である。174は波状口縁頂部が欠損している。粘土を貼付した半隆起線上を爪形文を施し玉抱き三叉文を形成している。175は波状口縁部で摩耗が激しく詳細は不明な点が多い。半隆起線で区画された中央の三角形内に鋭い沈線を引く。

176は177は把手。176は最初に内側に把手の芯になる部分を作りその後粘土紐を内外二方向から合わせて把手作成した様子が観察できる。その下には欠損しているが橋状把手があったことがうかがえる。焼成堅緻で褐色の胎土に金雲母が目立つ。177は176より大型で胎土は灰黄褐である。外面には三角形の彫り込みや尾をもつ楔形の施文が見られる。内面は横に数段の沈線を引く。

178は橋状把手である。粘土紐を2本接着させて作成している。爪形文は胴部や頸部へ展開する半隆起線へつながっていると思われる。



第38図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）



第39図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）

5類 三角刺突や半截竹管文で施文し胎土に金雲母を多量に含む関東系の土器群（第40図～41図 図版15～16）いわゆる五領ヶ台式のものを本類とした。

179は平面形が橢円形を呈する浅鉢。口縁内面に文様帶を持つ。連続する爪形文で施文され4単位の波頂部で区画される。波頂部間の3条の爪形文は逆C字形である。波頂部施文は爪形文間に縦に三角刺突を施す。長軸の相対する波頂部は緩やかな双頭波状口縁を呈する。胎土は褐色で金雲母を多量に含む。

180は波頂部破片で口唇に爪形文を施す。外面は縦の細沈線が施される。赤褐色の胎土に金雲母が目立つことから本類とした。181はやや外傾気味に立ち上がる口縁部で頸部で屈曲する。口縁部は粘土を貼付して肥厚させる。貼付した粘土紐上を連続して細かに爪形文を施す。波状口縁を呈するがその形態は不明である。双頭状口縁である可能性もある。地文は擬繩文である。頸部と口縁外面に三角刺突を施す。波頂部内面には三角印刻が施される。胎土は赤褐色で金雲母を含まない。中部高地に系譜を持つものかもしれない。

182は口縁を肥厚させ外傾内彎する口縁部破片で頸部に突起を持つ。突起は細い棒状工具による刺突が施される。口縁部と頸部には同じく棒状施文具による刺突や沈線が施される。190の土器と共に要素がみられる。茶褐色の胎土に金雲母を含む。

183は2条の幅狭の半隆起線の下に三角刺突が施される。頸部に刺突を持つ。184は円形の粘土を押圧貼付する。細い沈線下に三角印刻文が施される。金雲母を含む。185は半截竹管による集合沈線文によって施文される。金雲母を含む。外傾内彎する口縁部で187や188と共に通する。186は口縁部下に粘土紐を貼付し爪形文を施す。187は185同様半截竹管による集合沈線文によって施文される。内面は丁寧に撫でられる。188は屈曲部の半隆起線上に爪形文を施しその上には上下交互に三角印刻文が施される。金雲母を含む。

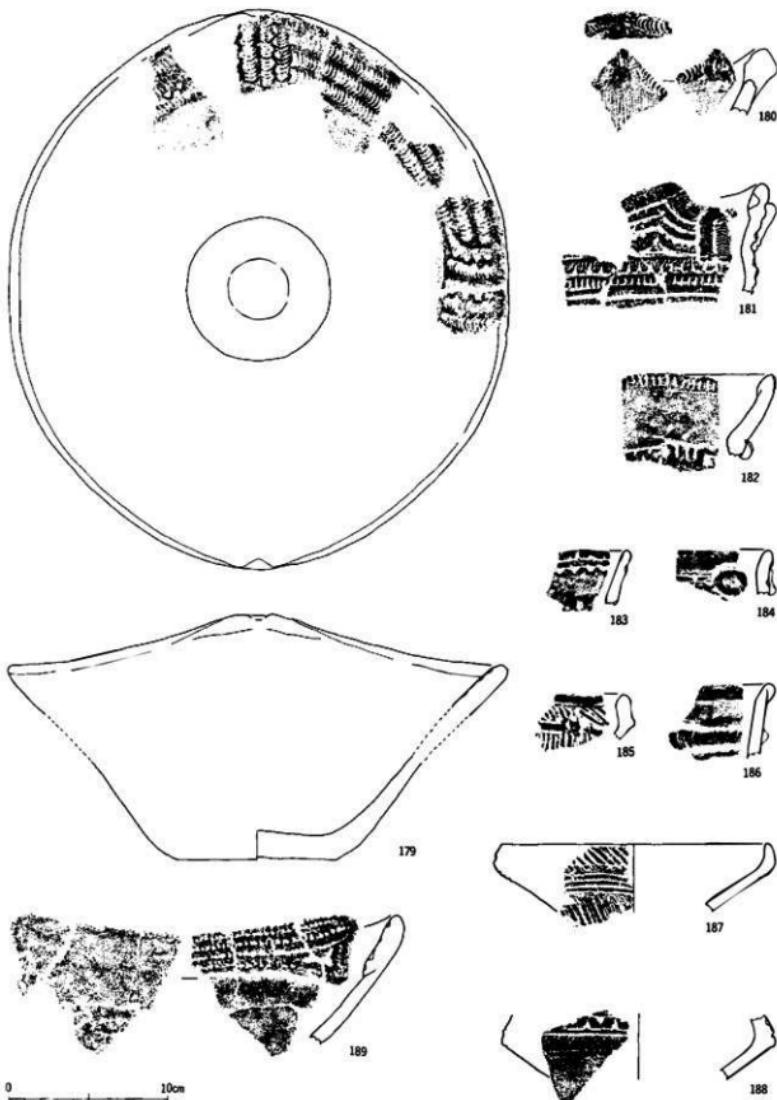
189は179と同類と思われる浅鉢で双頭状の口縁部である。肥厚した口縁内面に文様帶を持つ。細い棒状工具の押引きによって爪形文に良く似た効果を持つ。その中に三角印刻文が施される。

190は破片から器形復元したもので外傾する口縁部は小波状口縁となる可能性もある。粘土を貼付し肥厚させた口縁部に繩文を施し、その下に棒状工具による刺突が巡る。頸部に突起を持つ。頸部の刺突は上下二方向から施されいわゆる「連続コの字」文が施文される。胴部の文様の詳細は不明だが棒状工具による沈線が施され一部に繩文が見られる。胎土には長石を多く含む。

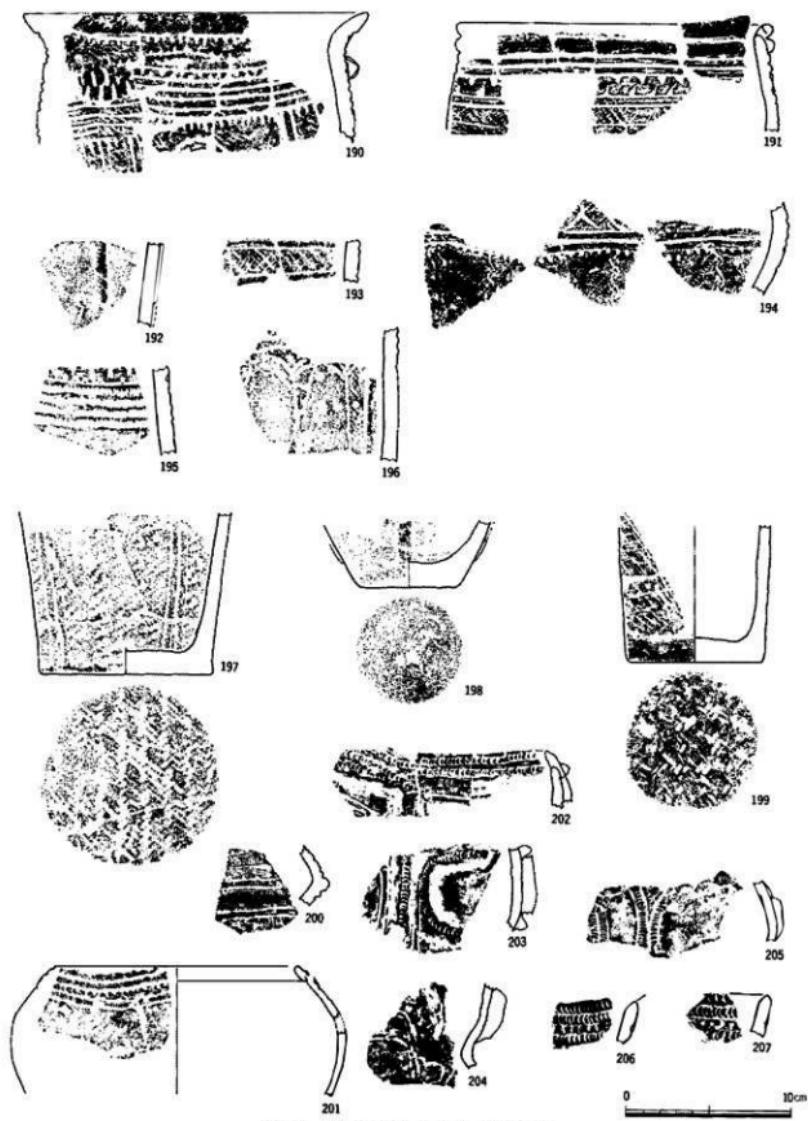
191は小波状を呈する。内傾する口縁の土器である。口縁部の半隆起線下には上下二方向からの三角印刻文が施され、その下は繩文施文。

192は赤褐色の胎土。縦の半隆起線を持ち、金雲母を含む。193は半隆起線で区画され、沈線で斜格子状に描く。茶褐色の胎土に金雲母を含む。194は胴部破片で半隆起線下に棒状工具による下方からの刺突列が並ぶ。胴部下半には縦方向に結節の回転痕が観察される。いわゆる帶繩文か。195は胴部破片で破片上部に刺突を交互に施し「連続コの字」文を形成する。その下には5条の爪形文を施す。爪形文は逆C字である。下部には細い条痕が見られる。胎土は長石と金雲母を含む。196も胴部破片で沈線で連弧文を描く。胎土に長石が目立つ。

197は底部まで半隆起線が垂下し、2条1単位で土器を4分割している。198は貼付隆帯が底部付近まで垂下する。胎土は赤褐色で長石が目立つ。本類のものか不明。199も本類のものか不明だが胎土に



第40図 遺物包含層出土の縄文土器



第41図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）

長石が目立つ。200は連続爪形文間に三角印刻文が見られる。201は口縁内面に粘土帯を貼付しわざかに肥厚させる。爪形文間に交互刺突が施される。器形は鉢と思われる。202から204は同一個体。口縁部には2条の逆C字の爪形文が施される。その下は貼付隆帯を楕円形に区画しその上に爪形文が施される。詳細は不明だがキャリバー形の可能性もある。本類か不明。205は半隆起線状に爪形文が施される。4類の可能性もある。焼成堅緻である。206・207は2条の爪形文下に刺突を施し、207では交互刺突である。胎土には金雲母を含む。

6類 主として縄文のみで施文される土器（第42図～44図 図版16～19）

器形はキャリバー形・円筒形・円筒形の胴部に開き気味の口縁が付くものなどがある。5細分した。

6 a類 口縁部から頸部は斜縄文。胴部は羽状縄文を施し頸部で外傾する器形の土器群。口縁内面を肥厚させて内湾ぎみにするものとそうでないものがある。

6 b類 口縁端部に調整を加えるもの。爪形文を施すものと施さないものがある。

6 c類 粘土を貼付して口縁部に段を形成するもの。

6 d類 粘土帶で口縁を形成し内面に縄文を施文するもの

6 e類 他の縄文施文の上器

207から216は6 a類である。

207は、頸部から外傾する口縁部を持ち。口縁端部を内面で肥厚させる。口縁部はLRの斜縄文。胴部は異方向縄文である。208から213は口縁部破片である。胴部文様は不明。頸部で屈曲するものを一括した。208は波状口縁を呈する。209は屈曲が弱い。口唇を丸く整形する。210は強く外傾する。211の縄文は無節か。212は口唇が内彎する。213は縦の隆帯を貼付する。

214は粘土を「逆の字」状に貼付して突起を形成する。胴部は結節の羽状縄文である。キャリバー型の器形で胴部が樽状に緩やかに膨らむ。215の口唇は平らに整形される。216は214と同種の突起を持つ。

217から220は6 b類である。

217は口縁端部を沈線によって区画し無文化させている。頸部までRLの斜縄文、頸部下を結び目縄文または縄の開端を別の條で説く縄文を施す。218は口縁端部外面に2条の半隆起線を持ち1条目に爪形文を施す。やや肥厚させた内面にはLRの縄文が施される。外傾しやや内彎気味のキャリバー型器形であろう。

220は、外傾する口縁部を持つ。口縁端部を丁寧に無文化させ斜縄文部を短くとる。胴部には異なる撚りの縄文を結合させた結節羽状縄文が施される。

221から236は6 c類である。

221・222・224は口唇を平らに整形する。223も粘土帯を貼付し口縁端部が強く外反する。横位羽状縄文である。224は幅1cmほどの粘土帯を貼付しRLの縄文をその上に施す。226は全面にLRの縄文を施す。227は粘土帯の幅で外反する。口縁端部及び内面は比較的丁寧に調整される。全面に単節のRL

の縄文が施される。228も口唇から内面にかけて丁寧に撫で調整される。胎土は赤褐色で本類では少ない。粘土帯下は無文化させている。229は外傾内彎するキャリバー形土器。粘土を折り曲げているかのように見えるが口縁内外面に粘土を貼付し肥厚させているのだろう。内面は丁寧に撫でられる。230は開いて立ち上がる器形で縄文はLRの無節か。231は焼成堅緻で内面は丁寧に撫で調整される。口縁端部外面にRLの縄文を施し、その下は頸部まで無文である。胸部は結び目縄文または別の条で縛る縄文が施される。232口縁内面には調整時の沈線が残る。

233は本類のなかでは比較的大きな破片資料である。開いて立ち上がる口縁部を持つ。口唇から内面にかけて丁寧に撫で調整される。外面は全面に単節のRLの斜縄文が施される。頸部屈曲部に突起を持つ。234も開く口縁部を持つものである。丁寧に撫で調整された内面に煤が付着する。

235は本類のなかでは唯一の波状口縁を有するものである。粘土帯を貼付させ口縁を肥厚させていることから本類に位置付けた。236は粘土帯上に爪形文状の刻みを並べ、口唇は刻む。内面に煤が付着。

237から239は6d類である。

237は内面に粘土帯を貼付し肥厚させ縄文を施す。

238は破片によって図上復元した。大型の深鉢である。緩やかに外傾して立ち上がる。胸部はやや膨らむ。胎土は赤褐色。

239はキャリバー型で口縁端部外面と口唇には刻みを有し内面に縄文を施す。頸部には爪形文を施す。範状工具によるのか直線的である。縄文は曲線を描く。2類の可能性も考えられる。

240から254は6e類である。

240は突起を有しバケツ状に開く口縁の土器。口縁に突起を2個持つ。1個は粘土帯を刻む手法、1個は「逆の字」状である。

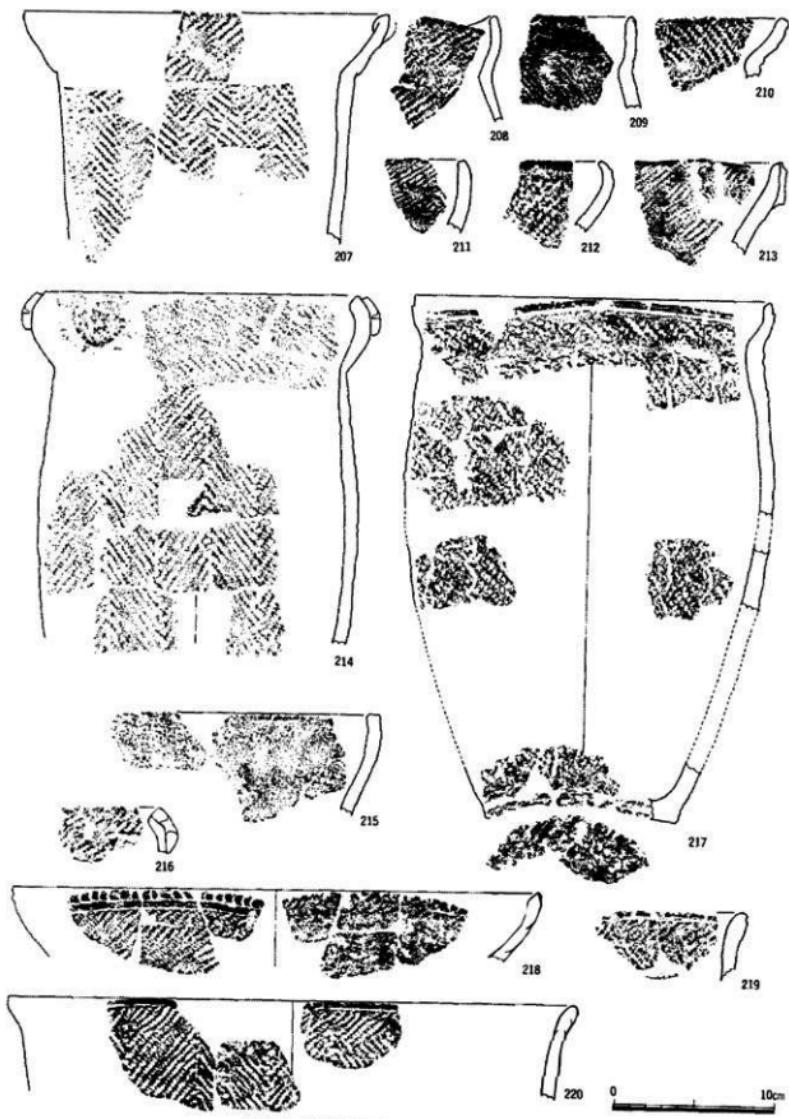
241は穿孔のある突起を口縁部に1個持つ。頸部に4単位の突起を有する。土器外面全体にRLの斜縄文が施される。口唇部から内面にかけて丁寧に整形される。器形は頸部で緩くくびれ、やや外反気味の口縁部を持ち、胸部は膨らむ小型の土器である。

242は231同様口縁部に無文部を持つ。頸部に縦に貼付隆帯が見られる。

243は内彎気味の口縁部破片。横位羽状縄文が観察できる。244は外反する口縁部。結び目縄文または別の条で縛る縄文を縦位に回転させる。「帯縄文」か。穿孔を途中まで開けている。貫通しない。

245は口縁端部外面をせりだし刻む。器形は浅鉢か。246と247は、よく似ている。土器表面に薄く粘土を被せた痕跡がよくわかる破片で土器成形の手法を観察できる。

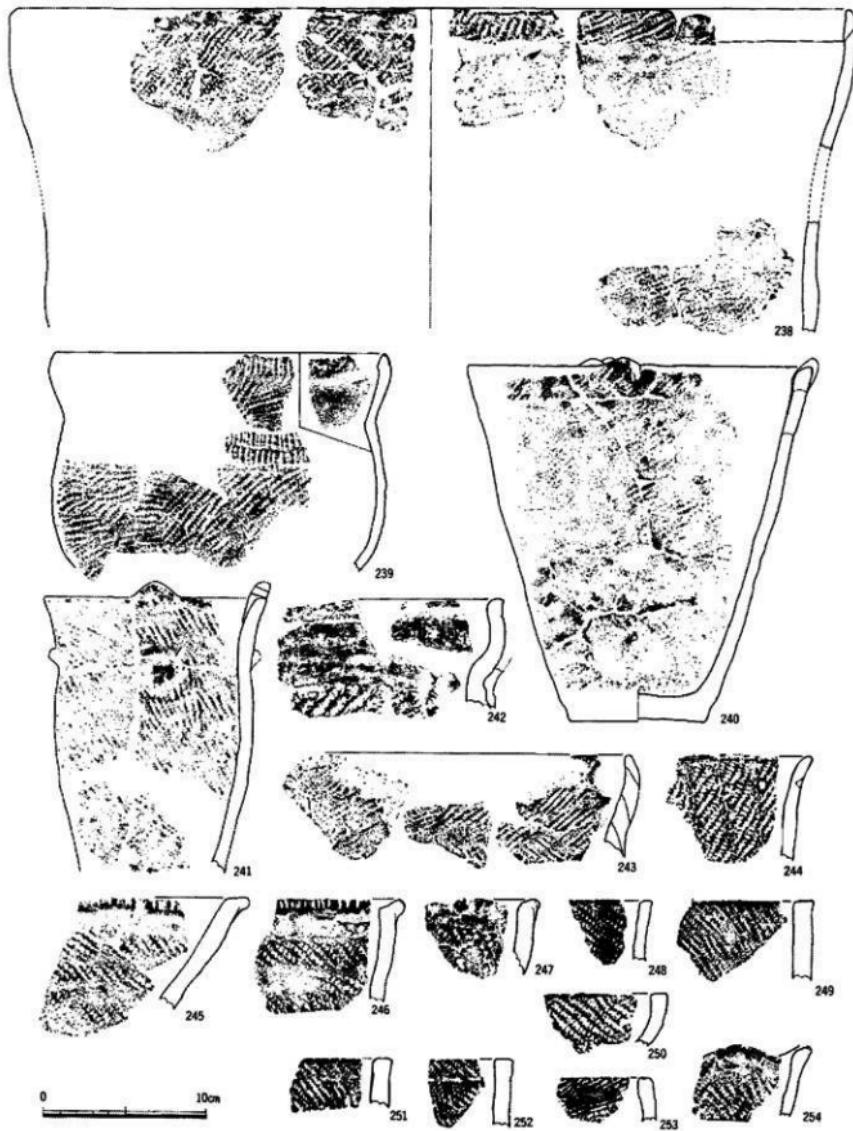
248から253は口唇部を平らにするものを一括した。253は波状口縁で口縁直下を無文としている。



第42図 遺物包含層出土の縄文土器 (II群)



第43図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）



第44図 遺物包含層出土の模文土器（II群）

7類 その他の中期の土器（第45図～47図 図版20～21）

6類までを縄文時代中期初頭と位置付け。7類はそれに後続するものを一括した。したがって時期的には縄文時代中期前半から中葉に含まれると考えられるが中には時期が明確でないものも含まれる。

255は大型の深鉢で口縁直径40cmを越える。双頭状波状口縁を呈する。4単位である。口縁外面には2条の大型の爪形文が施されその間に波状に沈線が引かれる。2条の爪形文部はやや肥厚気味であり中期初頭の半隆起線の形態化したものとも考えられる。口縁部は緩やかに開く。胴部はやや膨らむ。復元された胴部中央までのみ破片が確認されそれより下部のものは1点も見つけられなかった。4類の東海系土器にその系譜を求めることができると考える。愛知県南知多町山田平遺跡出土土器の中に類似のものがある。256は無文であるが、255に器形が似る。同じく双頭状波状口縁である。

257は内脇し口縁端部で反る鉢である。屈曲部に連弧状隆帯を形成しその上に爪形文を施す。更に口縁外面にも爪形文が施される。爪形文は「くの字」状に屈曲するもので初頭のものとは異なる。胴部は無文である。これも東海系の土器にその系譜が求められると考える。

258・259は口縁の爪形文下に縦の半隆起線を持つ。260と261は同一個体。焼成堅緻である。262は半隆起線下に刺突を施す。263は不明瞭な半隆起線が3条施される。内面を肥厚させる。口唇に煤が付着する。264と265は同一個体の可能性が高い。幅広の粘土帯を貼付け蛇行させる。波状口縁の可能性がある。

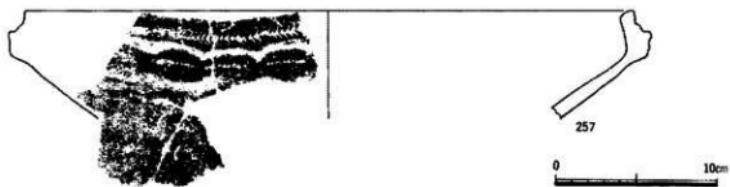
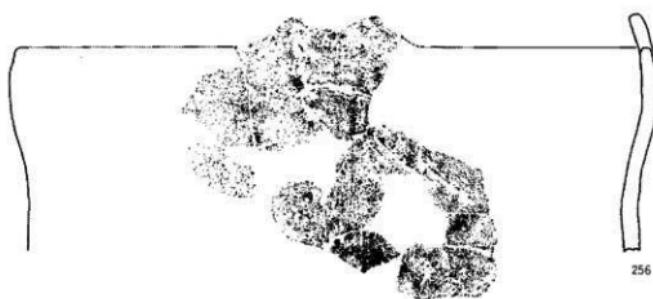
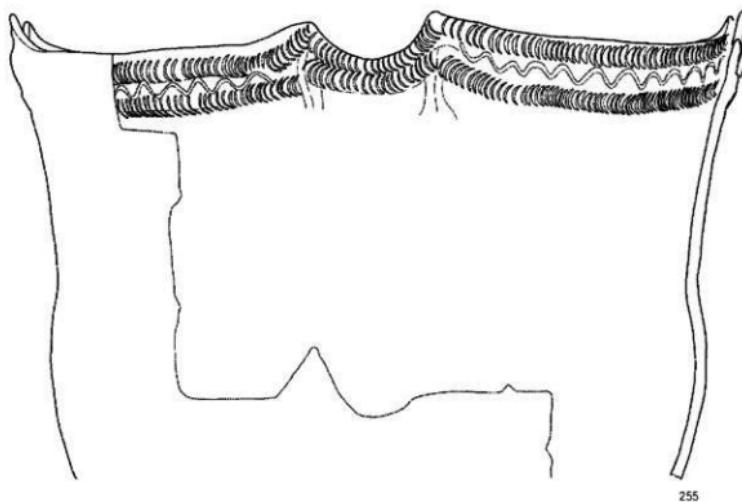
267は「逆C字」の半截竹管による刺突を連続させる。波状口縁である。268は半隆起線間に縄文帯が残る。擬縄文の可能性もある。269は幅広の粘土帯を貼り付け段を形成する。その上に粘土帯に沿って半隆起線を蛇行させる。擬縄文が残る。270は半截竹管の押し引きが2条施される。271は焼成堅緻で内面は丁寧に撫で調整される。272は半隆起線下に交互に刺突を施す。

273は「逆くの字」状に屈曲し、爪形文を2ないし3条巡らす。273までのものは東海地方にその系譜を求めることができるかもしれない。

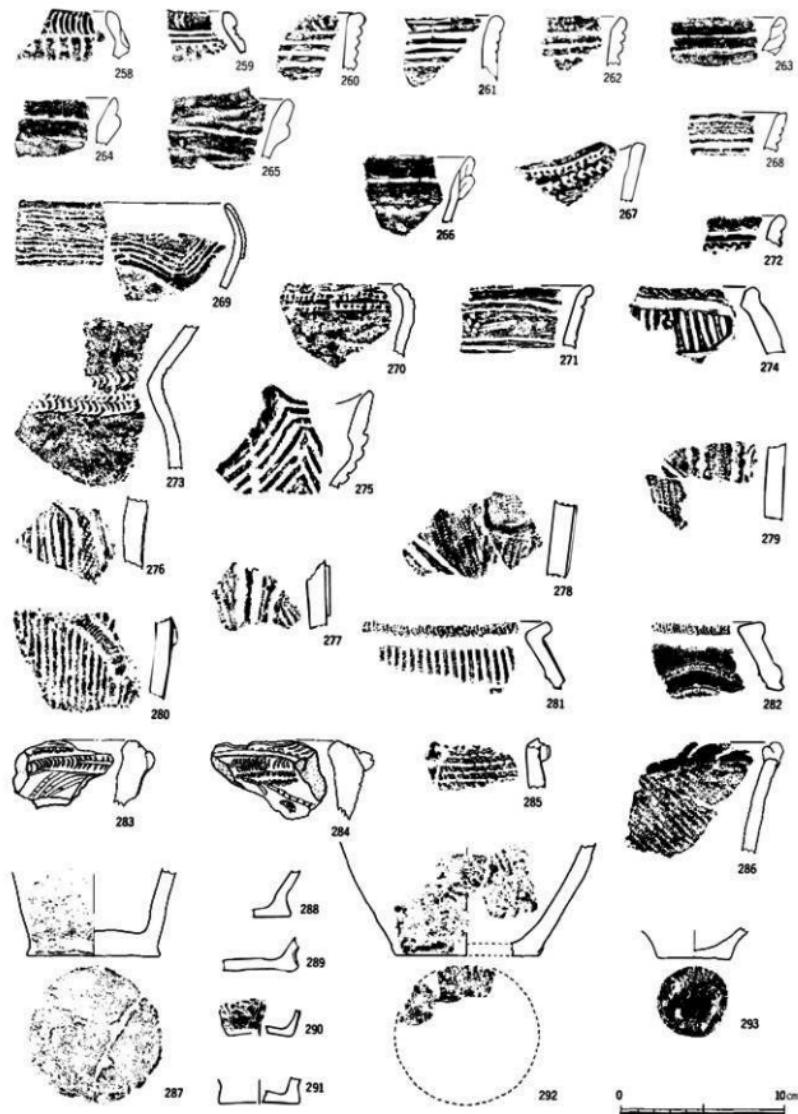
274は沈線で区画された内に縦の沈線を引く。交互に刺突を施す。275は角状となる突起を持つ波状口縁部破片で半隆起線によって施文され、胎土の様相などから5類の可能性もある。276から279は同一個体であろう。縄文地に隆帯で施文する。280は隆帯と集合沈線で構成されることから中期初頭の可能性がある。281はせりだした口縁端部外面に爪形文が施される。その下には半隆起線が縦に密接する。280同様初頭の可能性もあるが胎土は厚手で初頭のものとは異質である。282は281と同一個体の可能性が高い。蛇行する隆帯を際立たせるかのように爪形文を施す。283・284は詳細不明であるが隆帯上の爪形文と連続刺突によって構成される。285は細い棒状工具による押し引きを横走させる。286は粘土紐を擦り合わせるかのようにして形成された突起を持つ。

294は口縁部破片で外反して立ち上がる。内外面ともに丁寧に撫で調整される。厚手の土器である。295から306は同一個体である。294も同一個体の可能性もある。隆帯と沈線で施文される。隆帯に沿って沈線を引く技法や矢羽状沈線の特徴などから中期中葉以降のものと考える。

307から309は口縁部破片である。307は口縁端部外面を粘土を貼付して肥厚させる。308の沈線は細く鋭い。沈線を縦に施す技法は共通するが同一個体かどうかは不明である。310から312は同一個体である。隆帯上に指頭圧痕状の刻みを施す。沈線の霧面気から308と同一個体の可能性もある。313と314は310から312と同一個体である可能性が高く胴部破片である。

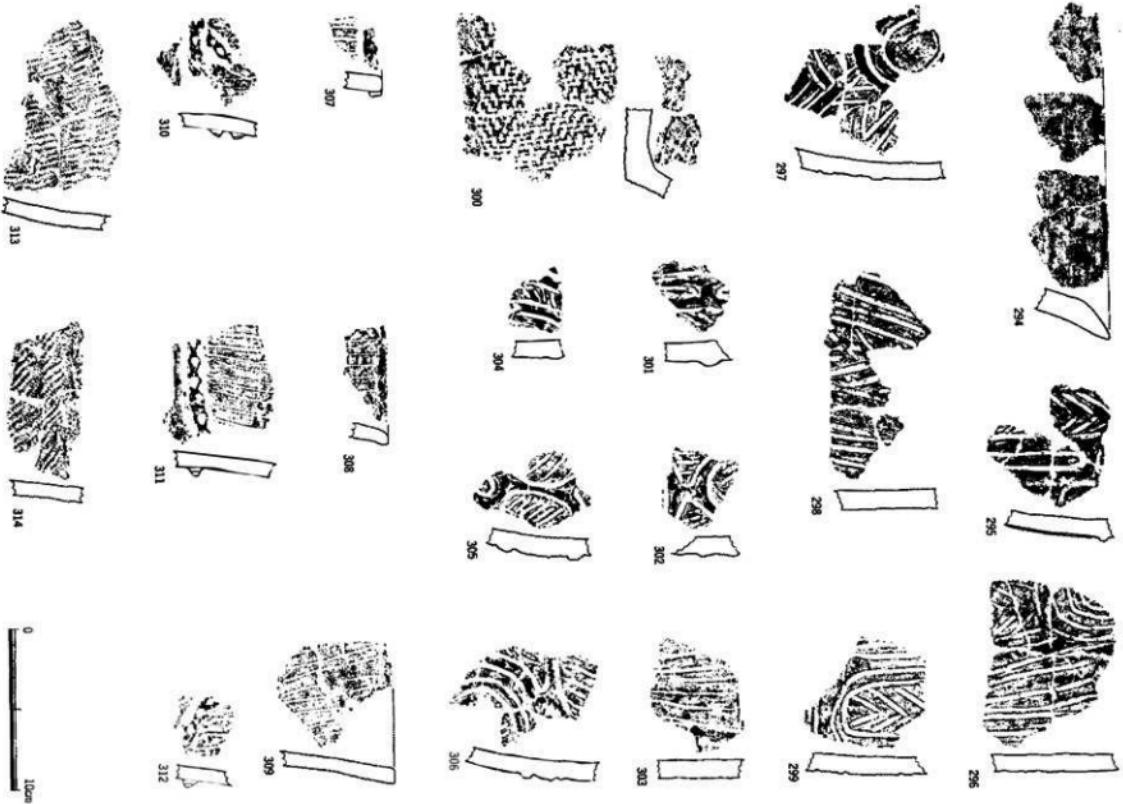


第45図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）



第46図 遺物包含層出土の縄文土器（II群）

第47図 遺物包含層出土の織文土器 (II期)



3. III群 後期・晩期の土器（第48図 図版21～22）

1から11までを後期、12から25を晩期とした。

1から4は微隆起線を有する土器である。1と2は同一個体である。微隆起線上を斜め短沈線で刻み、口縁端部外面も同様に刻まれる。3と4は刻みを伴わない。同一個体か。

5は詳細不明であるが、口縁外面に綫沈線を施す手法から後期に位置付けた。6は波状口縁の波頂部に指頭圧痕状の押圧を施しそこに向けて隆帯を集束させる。隆帯に沿って細い沈線が引かれる。

7から9は後期後半の凹線文土器に比定されるものと考える。7は内側に屈曲する口縁を持つ鉢である。口唇を刻む。2条の細い凹線が施される。口縁外面には地縄文が施されているかもしれない。

8は内傾する口縁を持つ小型の深鉢で口縁外面に2条の凹線が巡る。口唇に縄文が施される。凹線下には縦縄文が施される。口縁や凹線の様相から波状口縁の可能性もある。9は4条の凹線が巡る。口唇は平らに整形される。地文は縦縄文である。

10は台形の突起部破片で八日市新保段階のものと考える。

11はこの時期のものとしては唯一復元できた個体である。4単位の山形の突起を口縁部に配する。山形の突起は左右に更に小型の山形を配する面もある。突起下には瘤が付けられる。瘤の数は2個ずつの可能性もある。瘤と瘤の間は溝状の指頭によると思われる幅のある沈線が施される。頭部でくびれ胴部が膨らむ独特のプロポーションである。地文縄文は口縁外面からランダムに施される。明確な断定はできないが北陸系の後期後半の土器の中に突起を配し瘤を有するものがある。胴部も膨らむ形態のものがあることから同様の時期と考えた。

12から14は磨削縄文の土器。13・14は注口土器か。13は破片下部に刺突列が見られる。14口縁端部外面は短沈線で刻まれる。

15は16は「くの字」状に頭部で屈曲する深鉢である。15は口縁端部外面に刻みを有し、頭部には刺突を施す。地文は擬縄文である。胴部上部に縦長の突起を付す。17は沈線間に列点を配する。15から17は晩期中葉の段階のものであろう。18は後期の可能性もある。

19から23は晩期末の工字文あるいは浮線文系土器である。19は工字文系の土器。22は2条の浮線状沈線下にレンズ状付帯文を有する。21と22は同一個体の可能性もある。どちらも赤色塗彩が施される。

24は口唇に刻みを持つ粗製土器。穿孔は貫通していない。外面に煤が付着する。25も同じく粗製土器で内側に凸起する口縁で口唇を刻む。

4. IV類 その他時期不明の土器（第49図 図版21～22）

1は大きく外反する口縁を有する大きめの深鉢で破片から復元された。胴部はやや膨らむ。口縁部から頭部までは無文で以下に斜縄文を施す。

2は内外面に燃糸文を施す。342も燃糸文の可能性が高いが外面のみに施文される。

5は肉眼では確認にくいが拓本では縄文が確認される。内面には薄く粘土が塗られる。外面にもその痕跡がある。縄文を施した後に薄く粘土を塗ったと考えられる。

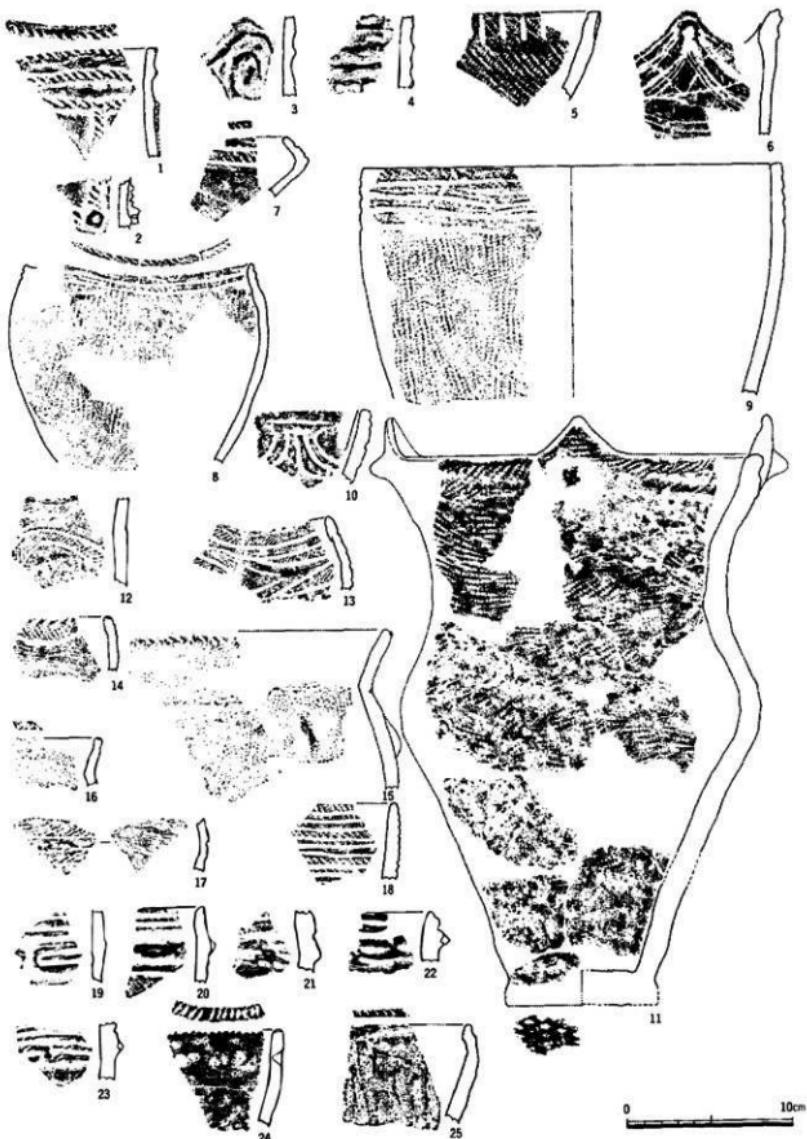
6は図上復元した。口縁外側に2条の沈線と2列の刺突列を施す。沈線には施文具の細い条が見られる。刺突は半截竹管を斜方向に施す。突起が付くものと思われる。

7と8は同一個体と考えられる。焼成堅密で薄い。

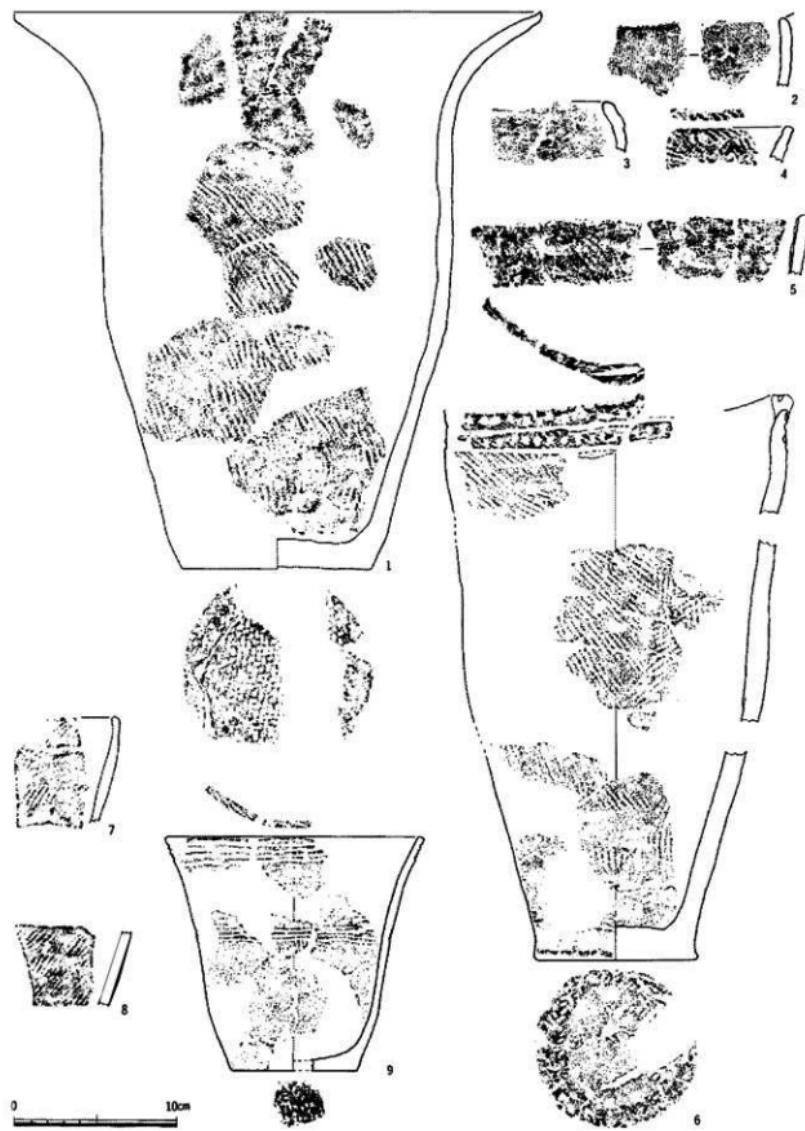
9は破片から図上復元した。口縁部と胴部に沈線が巡る。胴部の沈線から縦に垂下する沈線がある。口唇に縄文が施文される。胴部下半でやや膨らむ。

第46図、287から293は底部である。時期については不明である。287や288・289・291などは底部から内傾したあと立ち上がる。

（伊藤秀雄）



第48図 遺物包含層出土の縄文土器（Ⅲ群）



第49図 遺物包含層出土の縄文土器 (IV群)

第4節 丸山遺跡の底部

確認した底部破片は166点である。接合した後で集計したのであるが、9割以上残るものは1割に満たず大半が破片であるため、個体数はこれより少ないと推定される。

底面から一度括れて立ち上がるものが（器形判明分の）5割以上を占め、かつ底面形態が窪まず平坦になっている点を本遺跡出土の底部の特徴として挙げることができよう。胸部の出土状況などから考えるとII群に属する底部形態を示していると考えられる。

底面は84点にナデ調整が施されており全体の5割を占める。ナデの前に何らかの圧痕が存在した可能性も否定できないが、丁寧になされた底面を持つ土器が目立ち、意図的に圧痕を消す作業が行われたと推定される。網代圧痕のみられる土器は35点（2割）と少なく、反対にスダレ状圧痕が13点と、全体の1割を占める点が特筆される。スダレ状圧痕は縦糸が1mmを越え、細かいスダレはみられない。葉脈圧痕の確認された底部は6点あった。葉脈は網状脈で平行脈はみられない。

また、網代の編み方の確認できたのは以下のようである。

A a類「縫条が経条に対して1本越え1本潜り、1本送り」=3点

A b類「縫条が経条に対して2本越え2本潜り、1本送り」=4点

A c類「経条が縫条に対して2本越え2本潜りで1本送りと2本送りが交互」=2点

A i類「縫条が経条に対して3本越え3本潜りが基本で送りが不明」=1点

本遺跡は前期末葉から中期前葉の土器群が主体をなしている。従って、底部圧痕にもその時期の特徴が反映されていると考えられる。一方、中期中葉以降、晩期に至るまでの土器もわずかに含まれている点も考えなければならぬ後者に属する可能性もある。

以下、これまで報告者が観察した荒城川（宮川）流域の遺跡の土器底部の特徴を基に、本遺跡の土器底部の編年的な位置づけを簡単に検討したい。

2、五味原遺跡群を中心とした底部圧痕の変遷

① 遺跡の主体となる時期¹⁾

- ・荒城神社遺跡=中期後葉
 - ・岡前遺跡=中期中葉
 - ・西田遺跡II層=後期中葉から晩期前葉
 - ・カクシクレ遺跡A=中期後半と晩期前後半
 - ・牛垣内遺跡A=晩期中葉以降
 - ・牛垣内遺跡B C=中期後葉
 - ・丸山遺跡=前期末～中期前葉。
 - ・たのもと遺跡西区III層=後期前葉
- これらの遺跡の比較から、おおよそ丸山→岡前→カクシクレ A→牛垣内 B C→荒城神社→たのもと→西田→牛垣内 Aと、中期初頭から晩期までの変遷を辿ることが可能であり、丸山遺跡はこの変遷過程にあって初期の特徴を持ってい



第50図 遺跡分布図

るものとし位置付けられよう。以下、底部圧痕と網代の編み方を中心に特徴を比較する。

② 底部圧痕の比較

丸山遺跡では網代圧痕が少なく、ナデ調整が多いが、岡前遺跡では7割近い底部に網代圧痕がみられる。牛垣内B C地点、カクシケルA地点では5割程度である、荒城神社遺跡、たのもと遺跡では8割近い底部に網代圧痕がみられる。と共に、ナデ調整を行う土器は少ないのが特徴である。西田遺跡や牛垣内A地点では網代圧痕の確認できるのは4割程度である。スダレ状圧痕は丸山遺跡の組成が最も多い。反対に葉脈圧痕は西田遺跡や牛垣内A地点で目立っている。

③ 網代の編み方の比較

A a類は時期の変遷を最も端的に示している。岡前遺跡では6割近くで、牛垣内B C地点では7割と平織りのピークの様相を呈している。しかし、たのもと遺跡では2割を確認できたこの平織

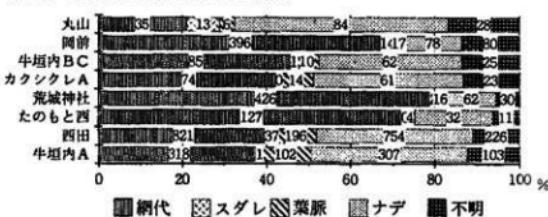
りも牛垣内遺跡A地点に至ってはほとんどみられなくなっている(約2%)。どの遺跡でも2割程度確認できたのがA b類であるが、たのもと遺跡では6割を占め、編み方の主体となっているが、牛垣内遺跡A地点では1割をきっている。この編み方では、2本を1組にして編むことが多く、中には3本を1組にして編む例もみられた。次に荒城神社遺跡で特徴的だったA c類であるが、たのもと遺跡までは1割程度確認できたあまり確認されていない。また、A d類はたのもと遺跡までは1割に満たないのに対して、西田遺跡で6割、牛垣内では8割となって際だっている。

④ まとめ

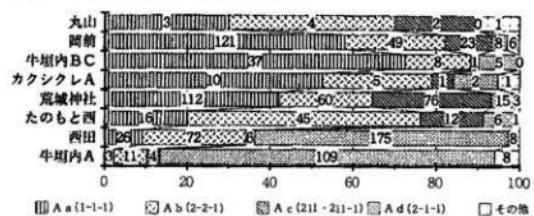
以上をまとめると、全体では以下の変遷が予察される。

- 1、網代圧痕は縄文時代前期末中期前葉では一般的ではなく、中期にピークとなる。
- 2、平織りは中期中葉でピークを迎え、後晩期ではほとんど用いられなくなる。
- 3、2本越え2本潜りは中期後葉から後晩期前葉に主体的に用いられた編み方である。
- 4、2本越え1本潜りは後晩期から晩期にかけて主体的に用いられた編み方である。(谷口和人)

第3表 低部圧痕の比較(数字は出土点数)



第4表 網代の種類の比較(数字は出土点数)



1) 土器の出土量からみた時期であり、複合遺跡である各遺跡にはこれ以外の時期も相当数含まれている。しかし、各遺跡の比較によってとらえられる底部圧痕の特徴は、各遺跡の主体となる時期の相違を反映していると考えることは可能であろう。

第5節 土製品 (第51図・52図 図版23)

本遺跡から土器片利用の円盤9点、土偶4点、不明土製品1点が出土している。遺構に伴って出土したものはなく、いずれも遺物包含層より出土している。

土器片利用の円盤 (第51図 1~9)

土器片の周辺を打ち欠いたり、磨いたりして円盤状にしたと思われるものである。胴部破片がほとんどである。1のみ底部片と思われる。無文。2も無文。3・4・8は縦文。5・6・7は半截竹管文で5と6は同一固体の可能性がある。7は繊維を含む。重量は2が6.7gで最も軽量。9が20.0gで最も重い。長径は2が2.6cmで最小。その他1から8までは3cm代である。9は4.9cmである。使用された時期については特定できないが半截竹管文のものは中期前半の土器片。7は早期の土器片であろう。

土偶 (第52図 1~4)

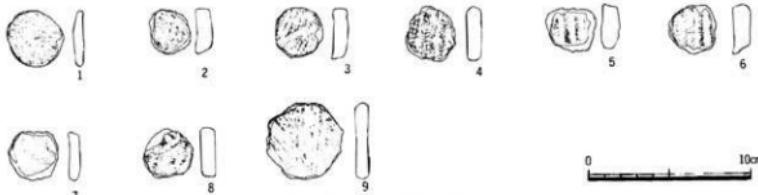
2はE13区中期遺物包含層より出土した。土偶胴部片である。片面にのみ工具圧痕とおぼしき細条を伴う微弱な線で文様が描かれている。表裏は定かでない。胴部中央にあたる破損面に縦位に貫通孔が2本認められ、そのうち1本中に直径1.5mmほどの木芯が炭化した状態で残っている。腕部は断面が綫長の楕円形となり、真ん中をやや凹ませてある。にぶい黄橙色を呈する。焼成普通。

1はF13区中期遺物包含層より出土した。整形の粗相などから判断して右腕部片と考えられるが、無文でもあり現存部分から左右は定かでない。腕部の断面は綫長の楕円形となり真ん中が凹んでいるなど、2と同一形態の土偶と思われる。胴部との接合面付近で破損したような印象を受けるが、破損面に明確な粘土接合痕および木芯痕を認めることは出来なかった。にぶい橙色を呈する。焼成普通。

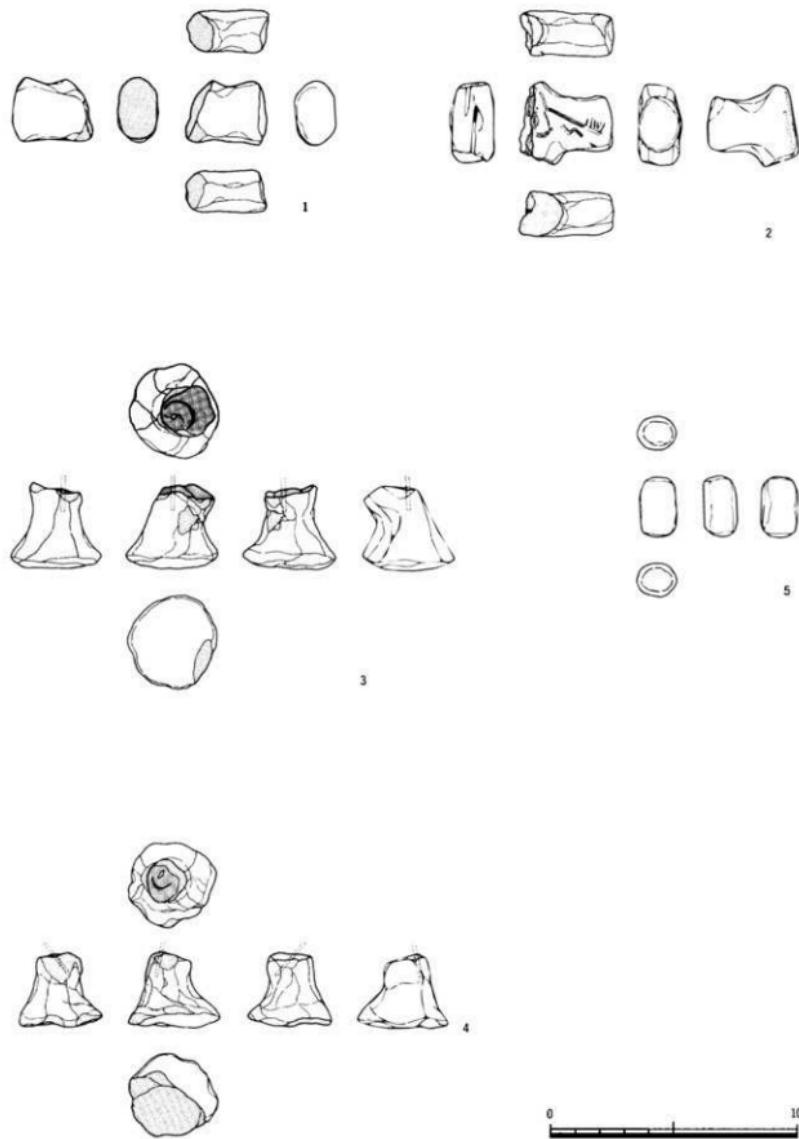
3~4は同一固体である。F15区中期遺物包含層より出土したもので、出土時における2点間の距離は50cmほどであった。ともに破損面に粘土塊の滑らかな表面が露出している。即ち、脚部粘土塊のポジティブな面と、これにより股間に移行すると思われる箇所に胴部との接合に補足的に用いられたと考えられる粘土のネガティブな面が認められる。直径1mmほどの木芯痕を有する。また4について、下端部に粘土を螺旋状に巻き付けたような接合痕が観察でき、足部部分が別個の粘土で作成されていることが判る。にぶい黄橙色を呈する。焼成普通。やや摩耗気味である。 (古田奈緒子)

不明土製品 (第52図 5)

5はE13区中期遺物包含層より出土した。全体に丁寧に成型されているが用途等遺物の性格は不明である。にぶい橙色を呈する。焼成普通。



第51図 土器片利用の円盤



第52図 土製品（土偶・不明土製品）

第6節 琥珀玉製品 (第53図・54図 図版23)

検出時には劣化が激しかったので、観察は処理後に行った。そのため色調、重量、その他検出時とは異なっているところもある。

琥珀は7個検出されたが、原形を留めて完形品として実測できたのは5個のみである。5個は全面が整形(加工)されている。琥珀玉を計測すると第3表のようになる。

最初に発見された玉は、検出時に崩壊し碎散した。色調は一見明るい赤茶色を呈していたが、よく見ると半透明で赤味を帯び、美しい鉛色を呈している部分がみられた。しかし、時間の経過と共に変色がすみ、更に取り上げ段階の薬品処理で、出土時の色調はほとんど見られなくなった。碎散片を集め復元につとめたが不可能であった。残存破片量と全部の重さから推測すると、あまり大きな製品であったとは考えられない。その量からしてNo.6の丸玉(第54図)に近いものと推測される。表では参考のためNo.7として記した。

No.1 (第53図)

連続の状態で検出された最初のものである。劣化が著しい。処理後も土の付着が認められ、表面を全て観察することはできなかった。

形状は胴張りの管玉状を呈している。細長い棗(なつめ)の果実に似ているので、このような形の玉を棗状管玉と称している。断面は扁円形を呈しているが、その調整はあまりよくない。長軸にそってC面(表面)は胴張りできれいに整形されているが、研磨時の擦痕が一部認められる。傾斜は長軸に対し約80度である。なお、整形時の剥離痕跡と認められる縦長の窪みがe面(裏面)にみられ、e面はc面と反対にやや内側しているが、長軸に平行して研磨痕と思われる擦痕が認められる。

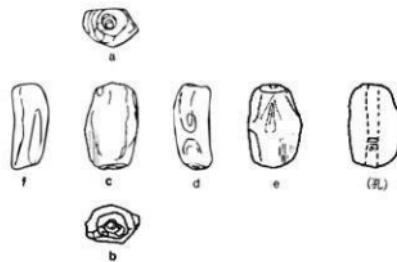
孔は両端より穿たれた両面(二方向)穿孔である。図のa面(上)からの孔をa孔、b面(下)からの孔をb孔と称すると、a孔は明らかではないが、b孔内には回転痕が若干認められた。なお、b孔開孔部には修正痕が見られる。a孔とb孔はくい違い点で約10度の孔軸の方向差がある。

第5表 琥珀玉製品観察表

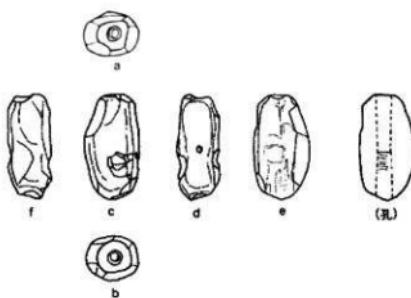
No.	玉の形態	長さ (cm)	径 (mm) 幅 (mm) 厚さ (mm)	重量 (g)	孔						表面に研磨 の擦痕	色調・備考	
					a面 開孔径 (mm)	a面 開孔深 (mm)	b面 開孔径 (mm)	b面 開孔深 (mm)	a面の孔の 深さ(cm)	b面の孔の 深さ(cm)	孔内の 回転痕	穿孔方向 の傾斜	
1	棗状管玉	3.41	2.07×1.50	5.9	5.4	3.0	5.6	3.8	2.0	1.2	有り	—	有り 暗い赤味茶
2	棗状管玉	4.21	2.18×1.71	9.0	6.0	4.0	7.0	5.3	2.2	1.8	有り	—	有り 暗い赤味
3	楕状扁平丸玉	2.59	2.31×1.57	5.3	5.0	4.0	5.0	4.5	1.3	1.1	有り	有り	無し にぶ赤
4	棗状管玉	3.13	1.98×1.77	7.0	6.0	4.0	7.0	4.9	2.4	0.7	有り	有り	暗い赤味茶
5	棗状管玉	—	約2.29	—	楕円1.5	3.7	—	4.0	—	—	—	—	土付着観察不能
6	棗状丸玉	2.13	2.11×1.94	5.1	5.0	4.0	5.3	4.4	1.0	1.2	有り	有り	有り にぶ赤
7	楕状丸玉?	—	—	破片3.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—

注1 色調は「Twilays C LOR/300」(日本色彩社刊)による。

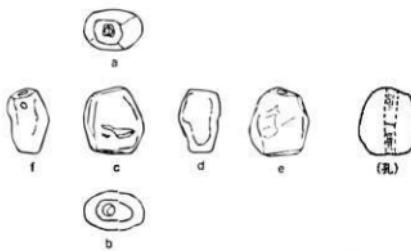
注2 a・b面の形態により、a面とb面の孔の深さの合計は必ずしも玉の全長値とは一致しない。



No. 1



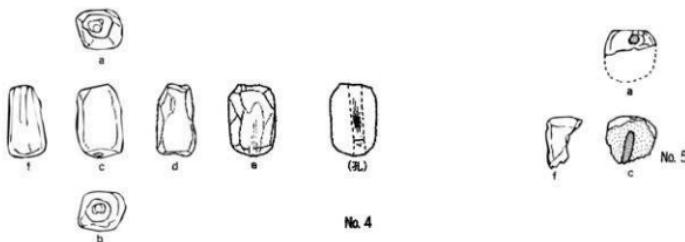
No. 2



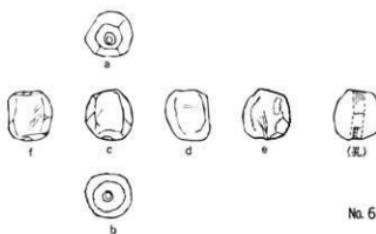
No. 3



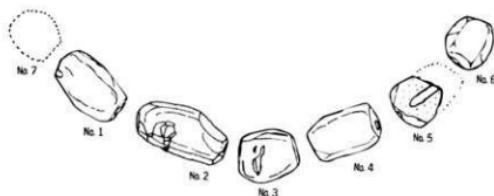
第53図 琥珀玉製品(1)



No. 4



No. 6



第54図 琥珀玉製品(2)

No.2 (第53図)

2番目に検出されたものである。糸状管玉として最も大きな法量を示す。胴張りの形状であるが、両端は細くなり断面はやや偏円形を呈する程度である。a・b面の調整はあまりきれいではない。c・eには剥離の跡と思われるネガティブの跡がみられる。また、d面の中央に径3.1mm、深さ2.2mmの孔が認められるが人工的ではない。e面の長軸にそって研磨によると思われる擦痕が見られるが、整形はe面を除けばあまりよくない。

孔は両面穿孔であるが、a面開孔部には修正痕が認められる。a孔内には確認できないが、b孔内には回転痕がわずかに認められる。a孔とb孔の交わりは約2度のくい違いを有している。

No.3 (第53図)

3番目に検出されたものである。糸状に近い扁平丸玉である。劣化が比較的少なく土の付着は少ない。断面は楕円形であるが全面がきれいに整形されている。c・f面に剥離痕と思われる窪みが少し残存しているが、擦痕もほとんど見られず、他のものと比較すれば全体に非常に滑らかな面をしている。

a・b穿孔面の調整も大変きれいである。穿孔は両面穿孔であるが、特にb面からの穿孔は修正痕も見られずきれいである。b孔内には回転痕が認められる。さらに縦の擦痕がa孔内・b孔内に認められる。a孔とb孔は交点で約10度傾いている。

No.4 (第54図)

4番目に検出されたものである。断面は扁円形というより隅丸方形に近い。調整はあまり滑らかではない。基本的には長方形の素材の稜を整形して丸みをもたせたように見える。剥離の痕跡が見当らず、整形時の痕跡はe面に若干見える程度である。

穿孔は両面穿孔である。開孔部がやや楕円形となっているのは修正痕と思われる。a孔内・b孔内には回転痕や縦の擦痕が認められる。a孔とb孔とは約5度の傾斜で交わる。

No.5 (第54図)

完全な糸状管玉の形で検出されたが、検出直後にはほとんど崩壊してしまった。しかし、一部残存した部分を実測することができた。実測図に示すように孔内に土が残っている。

No.6 (第54図)

発掘現場では確認することができず、元興寺文化財研究所で処理作業中に検出されたものである。長さと幅の差はほとんど無い。球形で、まさに丸玉といえるものである。調整はあまり滑らかではない。e面には剥離痕と思われる小さな窪みが見られる。調整時の研磨痕と思われる擦痕は、長軸に対し平行もしくは約70度の角度で若干見られる。

穿孔は両面穿孔である。a孔内には縦の擦痕が認められ、b孔内には縦の擦痕および回転痕も認められる。a孔とb孔とは約10度のくい違いがある。

丸山遺跡の琥珀製品について

丸山遺跡の琥珀は県下では最初の出土であり、一土壤内から出土したその量においては現在のところ全国でも類例がみられず、第一級の資料として高く評価されるものであろう。

縄文時代遺物として発見される琥珀は、劣化しており大変脆いため検出が困難である。本遺跡の琥

珀も、もし一個のみであったなら見過ごされた可能性がある。

琥珀(Amber)は、植物の樹脂が変質して化石化した脆弱な有機物である。硬度は2~2.5(爪より堅く10円玉より柔らかい)と比較的柔らかく、比重は1.05~1.096で軽く海水に浮くものもある。150°Cで柔らかくなり300°Cで溶けて燃える。燃焼時や高温を受けると、樹脂特有の芳香を発する。色調は黄色、黄褐色、赤褐色などで透明から半透明を呈し綺麗である。中に虫や植物の葉、果実などの化石を含むものがあり、これらは虫入り琥珀などと呼ばれて珍重されている。

丸山遺跡の琥珀もこうした特徴を有していると思われるが、残念ながら劣化が激しく、琥珀としての本来の特徴的な色を見ることはできない。しかし、肉眼では見えにくいか拡大鏡でよく観察すると、半透明で赤味を帯びた飴色を呈している部分が確認できる。

丸山遺跡の琥珀の加工には、どのような工具が使用されたのか現在のところ分かっていない。しかし琥珀は柔らかく脆いため無理な加工(調整)を行わず、主として研磨の方法が用いられたと思われる。その工具は製品の形状から、筋のあるいわゆる玉磨き砥石等は使用されていない、平砥石であったと想定される。また、穿孔には、骨もしくは竹の棒状錐のような工具に、細砂等の媒材を使用して穿孔したと考えられるが、管錐使用の痕跡は本遺跡出土のものには認められなかった。孔内の回転痕は媒材によるものと理解できる。ところが、縦の擦痕がなぜ残存しているのかわからない。錐をぬくときあるいは孔内修正の際、または紐を通す時に針などによってついたとも考えられるが、現段階では何とも言えない。

日本列島における琥珀は、北海道厚田郡周辺・岩手県久慈市とその周辺・福島県いわき市・千葉県銚子市・岐阜県瑞浪市等が主な産地としてあげられている。しかし、縄文時代の琥珀出土地は北海道を除けば久慈市周辺と銚子市周辺に集中している。

本遺跡に最も近い琥珀産地である瑞浪市は良好な琥珀産地として知られていたが、中央高速道路建設の際コンクリート吹き付けがなされ、現在は実見できない。また、縄文時代遺物として近辺の遺跡から出土したという報告例はない。それは琥珀が当時露出していないかったか、または風化のために脆く砕けやすくなっているため、気付くことが容易でなかったためと思われる。後者であれば今後出土する可能性は大きいと思われる。

本遺跡に近い出土琥珀を検索すると、山梨県大泉村の甲ツ原(かぶつはら)遺跡において、土壙墓より琥珀製垂玉が出土しており、時期は縄文時代中期初頭であるという。このなかに、No.3の形に類似したものが出土している。長野県諏訪湖近辺では数ヶ所の遺跡で、縄文時代中期の住居跡内より琥珀製の玉が出土している。岡谷市の梨久保遺跡では、土壙内より不定形の琥珀製垂玉が出土している。時期は縄文時代中期初頭から中葉であるといわれている。また、岐阜県に一番近い所では、木曾郡南木曾町の太田垣外遺跡で、不定形でやや大きめの琥珀の垂玉が一個出土している。時期は縄文時代中期後葉といわれている。

富山県の境A遺跡においても、長さ2.5cm、幅1.6cm、厚さ1.4cmで形は「やや扁平ななつめ形」といわれ、本来は長さ3cm、幅2.6cm、厚さ1.6cmになると報告された琥珀が出土している。包含層出土で、時期は縄文時代後・晚期でないかと言われているが中期初頭の土器も出土しており丸山遺跡の琥珀と類似していて興味深い。石川県真駒遺跡でも琥珀の丸玉が一個出土していて、時期は縄文時代前中期と報告されている。縄文時代前中期の例では、千葉県四街道市木戸先遺跡から、前期後半の境

珀出土が報告されている。山武考古学研究所の長井正欣氏のご教示によれば、群馬県松井田町の行田（おくだな）大道北遺跡では、住居跡内より棗状管玉の琥珀が一個出土していて、縄文時代前期末の諸磯b式土器が伴出している。

丸山遺跡の琥珀は、土壤内に時期が分かる土器を伴っていない。周辺より出土した土器は縄文時代前期末から中期初頭のものである。したがって、縄文時代前期に属する真脇遺跡や行田大道北遺跡の琥珀の類例などから、縄文時代前期末から中期初頭の範囲に入る可能性が高い。しかし、形態上から行田大道北遺跡出土の棗状管玉に最も類似している。この点縄文前期に属する可能性がきわめて大きいと思われる。

当遺跡の琥珀は、先にも述べたように一土壤内から出土した数量としては最多であり、他に類例が見られない。さらに7個の琥珀が棗状に全面加工され連続の状態で装飾品（首飾り）として使用されたと実証される類例は、当遺跡の琥珀に限らず大変珍しい。配列は出土状況から考察して、第54図の下段図の如く復元される。No.7は発見と同時に碎けてしまったが、No.1～6は番号順に検出された。No.4・6は何らかの理由で移動したと想定される。玉の配列は、No.7をNo.6と同様の丸玉と考えると残存量がNo.6に最も近い。『丸玉・棗状管玉・棗状管玉・棗状扁平丸玉・棗状管玉・棗状管玉・丸玉』と扁平丸玉を中心に左右対称に無理なく配置される。琥珀がこの時期に、このような状態で利用されていたことを示す最初の例である。しかも、産地から遠い飛驒山中で出土したことの意義は大きい。また、そのアンバールートを探る上でも注目されるべき貴重な資料である。

産地については、元興寺文化財研究所および報告（第5章）に述べられているように産地同定はできなかった。ちなみに、他の遺跡の琥珀の産地については、下記のような報告がなされている。

甲ツ原遺跡の琥珀については、山梨県埋蔵文化財センターの五味信吾・野代幸和氏による赤外線吸収スペクトル分析による産地同定が試みられた。その結果、福島県いわき産に近いと言われながらも断定はできないとされている。

梨久保遺跡の琥珀については、長野県史によれば八王子市北浅川産をあげられているが、五味信吾・野代幸和氏によると北浅川産の琥珀は諸条件が整っていない無理であろうと指摘されている。吉田格氏は産状からして北浅川産琥珀は採取されなかっただろうと述べられている。その他の遺跡出土の琥珀も、栗島台遺跡など若干を除いては、現在のところ多くは産地がはっきりしていない。しかし、分析化学が発達すれば、いずれ科学的に産地同定がなされる時がくると思われる。その時、丸山遺跡出土琥珀の産地も再び検討され解明されるであろう。

丸山遺跡の発掘調査・報告書の作成にあたり、格別にご指導、ご助言くださった寺村光晴先生、藤田富士夫先生には特記して感謝の意を表する次第である。

（野村宗作）

〈参考文献〉

- 石川県能登町教育委員会 1986「真脇遺跡」
- 五味信吾・野代幸和 1994「山梨県北巨摩郡大泉村甲ツ原遺跡出土琥珀の産地同定(1)」
- 寺村光晴 1985「日本先史時代の琥珀—その出現と様相」
- 【和洋女子大学学部創設35周年記念論文集】

寺村光晴 1984「古代人の交流・交易」

『別冊 歴史読本 再現！古代人の知恵と生活』(琥珀) 新人物社

寺村光晴 1995「日本の玉」—赤と青—『和洋国文研究』30

富山県埋蔵文化財センター 1992『境A遺跡』

長野県岡谷市教育委員会 1986『梨久保遺跡』

藤田富士夫 1989「玉」ニュー・サイエンス社

南木曾町教育委員会・木曾郡町村会 1995『太田垣外遺跡』

山梨県埋蔵文化財センター 1993『甲ツ原遺跡II』

吉田格 1992「縄文時代の琥珀—南関東・山梨県下の出土例について—」『考古学論究』

第7節 遺物包含層出土の石器

本遺跡から出土した石器は4421点である。そのうち遺構内からの出土は269点、包含層からの石器の出土は1600点、表土など攪乱した場所や区一括扱いの石器やチップが2552点である。包含層から出土した石器の器種別内訳は、石鎚213点、石錐51点、石匙20点、両極石器31点、ヘラ形石器8点、削器33点、搔器20点、RF46点、UF55点、コア9点、打製石器141点、磨製石器16点、磨石108点、凹石186点、石皿8点、抉入石器1点、石垂4点、有溝石製品1点、横刃型石器1点、フレーク648点である。出土した剥片石器の石材を見るとチャート481点、下呂石220点、黒曜石193点、凝灰岩362点、緑色片岩26点、頁岩6点、砂岩4点、玉隨4点である。これらの石器は、縄文時代早期～中期に製作・使用されたものと思われるが、包含層における層位の違いが確認されにくく、土器型式に見合うような詳細な時期区分ができなかった。詳細については、以下の各器種において説明する。

石鎚（第55図1～28 図版25）

石鎚は折損したものも含め213点である。石材の内訳はチャート79点、下呂石65点、黒曜石68点、頁岩1点である。本遺跡の石鎚の分類は矢先として機能する尖頭部と矢柄装着部である基部に着目し、尖頭部と基部との組み合わせで分類した。

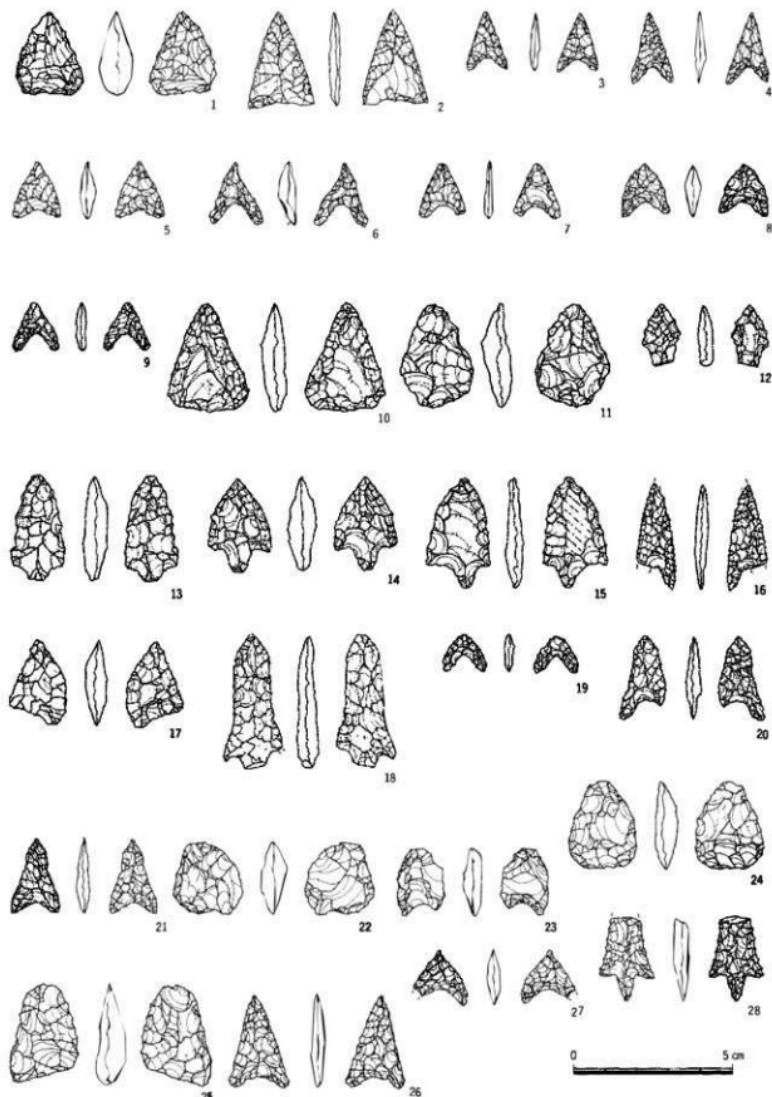
尖頭部の分類

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1類 先端が鋭角なもの。 | A類 脚部が片方のみか、極端に片方が短いもの。 |
| 2類 先端が鋭角であり全体が細長いもの。 | B類 基部の凹状のもの。 |
| 3類 先端が鈍角なもの。 | C類 基部の凹状の抉りが浅く不明瞭なもの。 |
| 4類 先端が小さく尖り側線部の肩が張った形状を持つもの。 | D類 平基鎚で基部が直線状になるもの。 |
| 5類 先端が丸いカーブを描くもの。 | E類 円基鎚で基部が丸みを帯びるもの。 |
| 6類 先端が小さく尖っているもの。 | F類 有茎鎚で基部に茎を持つもの。 |
| | G類 平基鎚に茎を持つもの。 |
| | H類 有茎鎚に両脚があるもの。 |

折損部位

- | | |
|---------------|---------------|
| a 尖頭部の欠損 | f 基部から胸部の半身欠損 |
| b 片方の脚部の欠損 | g 両脚を欠損 |
| c 脚部のみ残存 | h 基部を欠損 |
| d 尖頭部のみ残存 | i その他 |
| e 尖頭部と脚部の一部欠損 | |

分類した石鎚の内訳は、1-A類10点、1-B類72点、1-C類15点、1-D類7点、1-E類7点、1-F類3点、1-G類1点、1-H類12点、2-B類1点、2-H類2点、3-A類1点、3-B類5点、3-D類1点、4-A類2点、4-B類5点、5-A類2点、5-B類1点、5-C類3点、5-D類1点、5-F類2点、6-C類3点である。欠損した石鎚のうち1類と分かるものが24点、3類は1点、4類1点、5類1点、基部が確認できたものでB類は7点、C類は1点、D類は1点、E類1点、H類1点、その他石鎚と思われるもの19点であった。



第55回 遺物包含層出土の石器(1)

1-A類の先端角は30°～60°であり、その中心となるものは30°～40°である。側縁部の形状については直線状に開くものが4点、凹状となるものが1点、凸状になるものが4点(17)である。17は厚みが7mmと比較的厚い。側縁部の一辺は鋸歯状になり、もう一辺は凸状に膨らんでいる。脚部については片方の内側に二次加工の調整が見られるが、もう一方は脚部として製作されず加工されている。

1-B類の先端角の中心となるものは30°～35°である。側縁部の形状については直線状に開くものが40点(3.7.9)、凹状となるものが10点(4.6)、凸状になるものが20点(5.8)である。抉入部の深さは2～7mmまであり、主となるのが3mm(38%)～4mm(28%)である。3は先端角が36°基部は大きな抉りを施し開き角が93°である。側縁部は直線状を呈している。4は先端角が32°基部は「く」の字状の抉りが施され開き角が100°である。側縁部一辺は直線状だが、もう一辺は凹状を呈している。5は先端角が48°基部は「く」の字状の抉りを施し開き角が125°である。側縁部は凹状を呈している。6は先端角が50°基部は「U」の字状の抉りを施し、深さは7mmあり、開き角が77°である。側縁部は凹状を呈している。7は先端角が48°基部は「U」の字状の抉りを施し、開き角が75°である。厚みは2mmと比較的薄い。側縁部は直線状を呈している。8は先端角が53°基部は「く」の字状の抉りを施し、開き角が99°である。側縁部は凸状である。9は先端角が50°基部の抉り込みが6mmと比較的深く、開き角が76°である。

1-C類の先端角は34°～58°であり、中心となるのは35°～45°である。側縁部の形状については直線状に開くものが6点(2)、凹状となるものが1点、凸状になるものが7点(1)である。基部への抉り込みは1～2mmと浅い。1の厚さは10mmと比較的厚く、先端角が57°基部にはつぶれが見られるが、開き角は不明瞭である。2は先端角が38°基部にわずかな抉りが施される。裏面に素材剥片のネガ面を残している。厚みは2mmと比較的薄い。側縁部は直線状を呈している。

1-D類の先端角は45°～55°が主である。側縁部の形状については直線状に開くものが4点(10)、凸状になるものが3点である。10は素材剥片のネガ面を残し、側辺部などに粗い調整が施されている。

1-E類の先端角は33°～47°である。側縁部の形状については直線状に開くものが4点、凸状になるものが2点(11)である。11は全体的に粗い調整が施されている。

1-F類は2点とも19mmと22mmの比較的小型の石鎌である。12は先端角が55°である。裏面に素材剥片を残すが、側縁部には鋸歯状となる剥離を施している。

1-G類は13の1点だけである。全体的に粗い調整を施し、鋸歯状の側縁部は凸状に膨らんでいる。

1-H類の側縁部の形状については凹状となるものが1点、凸状になるものが10点(14)である。また、鋸歯状の側縁部を呈するものが7点(15)ある。14の先端角は49°基部は8mmと比較的厚みのあるが全体が丁寧に調整がされている。15は両面とも素材剥離を残している。茎部が中心線からはずれて作り出されている。

2-B類は16の1点である。16は先端角が24°鋸歯状の側縁部は凸状に膨らんでいる。

2-H類は3点出土する。18は側縁部が平行し上半部で肩がつく凹基有茎鎌である。丁寧な二次加工が施される。

3-B類の先端角は55°～79°と広角であるが78°前後のものが3点出土している。法量は12～16mm、重量は0.3～0.8gと比較的小さく、側縁部は凸状である。19は先端角78°開き角81°とほぼ同数で長い脚部を呈している。先端部には衝撃によるつぶれが見られる。

4-A類の側縁部は上半部に肩を持ち、先端角は共に77°である。20は側縁部の一辺が凹状、もう一片が凸状を呈している。基部は大きく抉り込み、片方の脚部は小さく、他方は調整された長い脚部を呈

している。

4-B類の先端角は58°～80°と広角である。側縁部は上半部に肩を持ち、先端が小さく突出した先端部を呈するものもある(21)。21は突出した先端部まで丁寧に二次加工されている。基部は「く」の字状の抉りを施し、開き角は128°である。

5-A類は基部を調整するが脚部を作出する意図が不明確である。25は先端部に衝撃による痕を残す。

5-B類は先端が丸いカーブを描き全体に粗い調整がされている。23は貝殻状剥片を使用し二次加工が施されている。

5-C類は22の1点である。裏面に貝殻状剥片の面を残し周辺部に二次加工が施されている。

5-D類は24の1点である。丸い先端部に凸状の側縁部を呈する。基部も調整されるが抉りはない。

6-B類は先端部に突出した尖頭部をもつもので先端角は35°～73°と幅が広い。26は側縁部が直線状を呈し、基部は円形に抉り込まれている。27は著しく突出した尖頭部をもち、側縁部が凸状を呈す。基部は円形に抉り込まれている。

28は尖頭部が折損し、鋸歯状になった側縁部は凹状を呈している。全体に丁寧な二次加工が施されている。

石錐（第56図29～33 図版25）

石錐は折損したものも含め51点である。石材の内訳はチャート33点、下呂石12点、黒曜石4点、頁岩2点である。本遺跡の石錐は形状と錐部の組み合わせで分類した。

1類 長い棒状の形状であり、基部と錐部の区別がはっきりしないもの。

1-A 錐部が両端にあるもの。

1-B 錐部が一端にあるもの。

2類 剥片の一端を尖らせて錐部を作り、つまみ状の基部を持つもの。

2-A 長い錐部を持つもの。

2-B 短い錐部をもつもの。

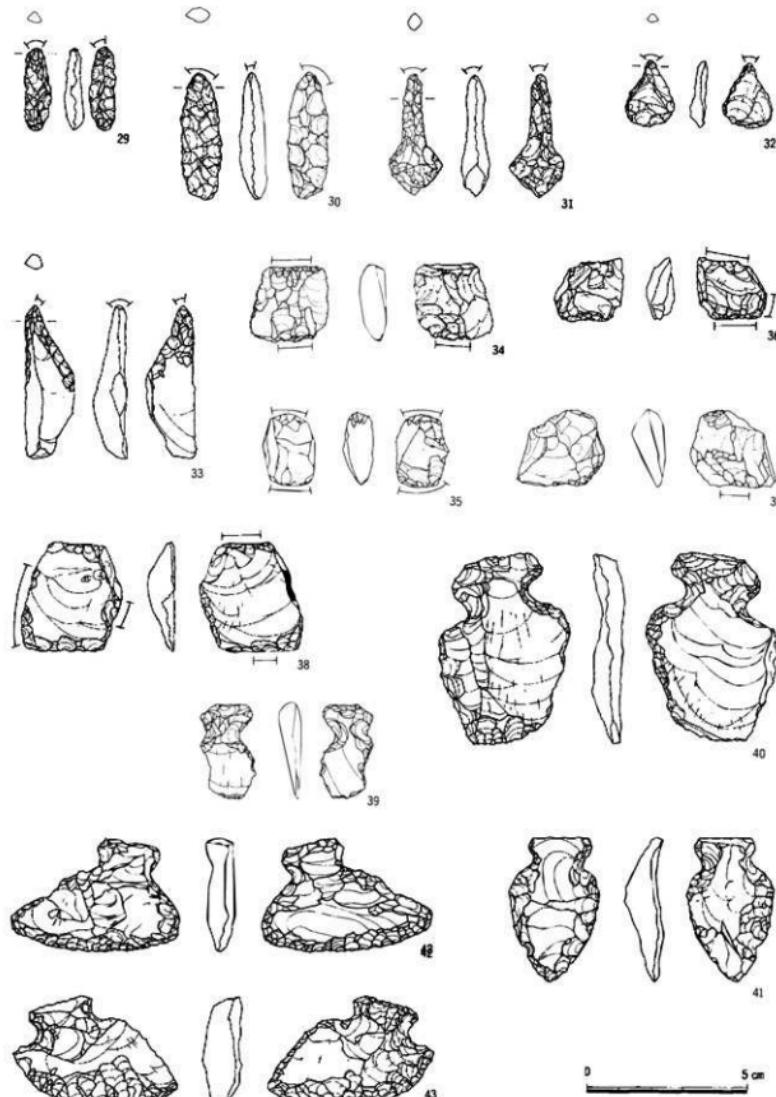
3類 錐部と基部との区別がはっきりしないもの。

素材を大きく変えることなく、多様な形態をとり錐部が短い。

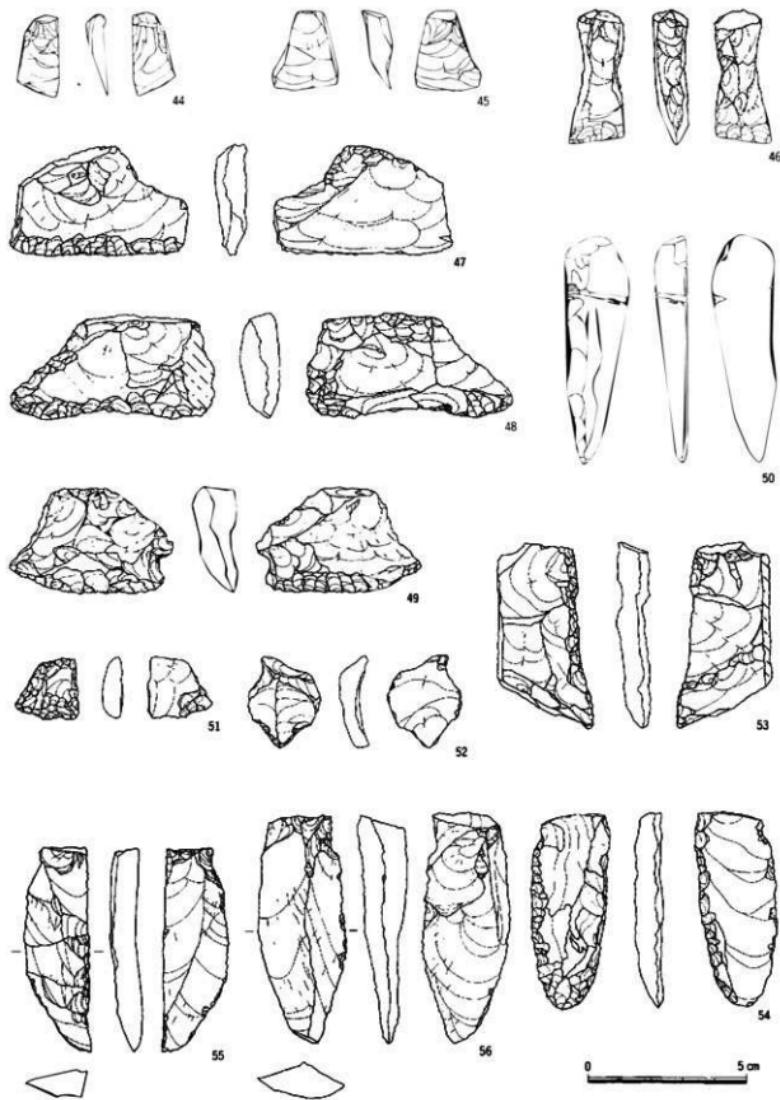
29は1-A類に属し両面調整を施している。錐部となる両端には使用によるつぶれがある。30は1-B類に属し両面調整を施す。また、側辺上半部にわずかなつぶれがある。錐部の先端角は80°であり、使用による磨耗がある。31は2-A類に属し、錐部は両面調整されている。錐部の断面は菱形であり、両縁辺部につぶれがある。32は2-B類に属し、貝殻状剥片を素材として側縁部に調整を施している。錐部と基部に僅かに角度を変え区分化をしている。33は3類に属する。素材剥片の形状をあまり変えず錐部に調整を施す。錐部の側辺部につぶれが見られ、先端に僅かな磨耗が確認できる。

両極石器（第56図34～36 図版25）

両極に剥離痕を持つ石器やビエス・エスキューと思われる石器が31点出土している。石材の内訳はチャート13点、下呂石16点、黒曜石2点である。向かい合う二辺ないし、四辺の側辺部に剥離痕やつぶれが認められる石器を下記のように分類した。



第56図 遺物包含層出土の石器(2)



第57図 遺物包含層出土の石器(3)

- 1類 縦長で縦に1対の剥離痕がみられるもの。
 - 2類 1類以外で、1対の剥離痕がみられるもの。
 - 3類 2対以上の複合的な剥離痕がみられるもの。
- 34は1類に属する。自然面が残る剥片を使用し上下端部につぶれが入る。35は1類に属し、上下端部につぶれと衝撃時にできたと思われる剥離痕が縦に発達している。36は2類に属し、上下端部と裏面右側辺部につぶれと剥離痕が入る。37は2類に属する。貝殻状剥片の素材を使用し、衝撃による剥離痕が入る。38は3類に属する。打痕が残りバルブの発達した貝殻状剥片を使用している。素材の側辺部全体に使用時のつぶれが状の剥離が入る。

抉入石器（第56図39 図版25）

抉入（ノッチ）状の加工を施すものを抉入石器とした。39は剥片素材を用いて側辺部を調整し、厚みのある上半部の両側からノッチ状の調整を入れ刃部を作出している。

石匙（第56図40～43 図版25）

石匙は折損したものも含め20点出土した。石材の内訳はチャート15点、下呂石3点、黒曜石1点、頁岩1点である。本遺跡の石匙は、つまみ部分（基部）と刃部の位置関係で分け、さらに二次加工のあり方で細分した。

- 1類 つまみを上に置いた時、刃部が左右の側縁にあるもの。
- 2類 つまみを上に置いた時、刃部が向かい側にあるもの。
- 2-A 刀部が片面にあるもの。
- 2-B 刀部が両面にあるもの。

縦型石匙は8点出土した。40は1類に属し、縦長剥片を素材としている。剥離は基部と表面両側辺部と裏面左側辺部に調整を施している。41は1類に属し、縦長剥片を素材としている。剥離は基部にノッチ状の調整を加え、さらに両側辺部から下端まで調整を施している。横型石匙は12点が出土した。42は2-B類に属し、横長剥片を素材としている。刃部は鋸歯状となる下端部が主である。両側辺部にも粗い剥離を作出している。43は2-Bに属し、横長剥片を素材とし二次調整によってバルブの厚み削剝している。

ヘラ形石器（第57図44～46 図版26）

ヘラ形石器は8点出土した。石材の内訳はチャート6点、下呂石1点、黒曜石1点である。本遺跡のヘラ形石器は、剥片の両側を折り取り、その部分に挟まれた一端に刃部を持つ石器をいう。刃部の作出方法によって、2つに分類した。

- 1類 剥離した時の鋭利な刃部を利用しているもの。
 - 2類 刀部に剥離を加えたもの。
- 1類は2点出土した。44は貝殻状剥片のバルブの部分で構成され、表面左側辺上部につぶれ状の剥離と下端の刃部に刃こぼれが認められる。45は貝殻状剥片を素材としており、刃部には細かい刃こぼれが認められる。2類は6点出土し、46は2類に属し、刃部の両面には剥離が施され、わずかなつぶ

れがみられる。裏面左側辺部より力が加わり粗い剥離を呈する。

削器（第57図47～49 図版26）

削器は33点出土した。石材の内訳はチャート18点、下呂石9点、黒曜石4点、頁岩1点、玄武岩1点である。本遺跡の削器は、剥片の縁辺部に連続的な調整によって刃部を作出したものであり、その作出方法によって下記のように分類した。

- 1類 片面加工により刃部を作出したもの。
- 2類 片面加工により作出した刃部と、両面加工により作出した刃部を合わせ持つもの。
- 3類 両面加工により刃部を作出したもの。

1類は14点であり、47は1類に属する。横長剥片を素材とし、腹面下端部に丁寧な剥離が調整される。剥片にバルバースカーが残る。48は2類に属する。横長剥片を素材とし腹面左側縁部と下端部に剥離が施される。特に腹面左の先端部には表裏とも細かな剥離を作出する。49は3類に属し下端部に両面加工を施す。腹部右側縁部には抉りを入れている。

有溝石製品（第57図50 図版26）

1点のみの出土で、石材は凝灰岩である。断面は三角形となり、裏面となる一面は偏平を呈している。石器上半部には、幅1～2mmほどの溝状の凹が横走し、その線を挟んで平行に上下に1本ずつの細い線がわずかに入る。

搔器（第57図51～54 図版26）

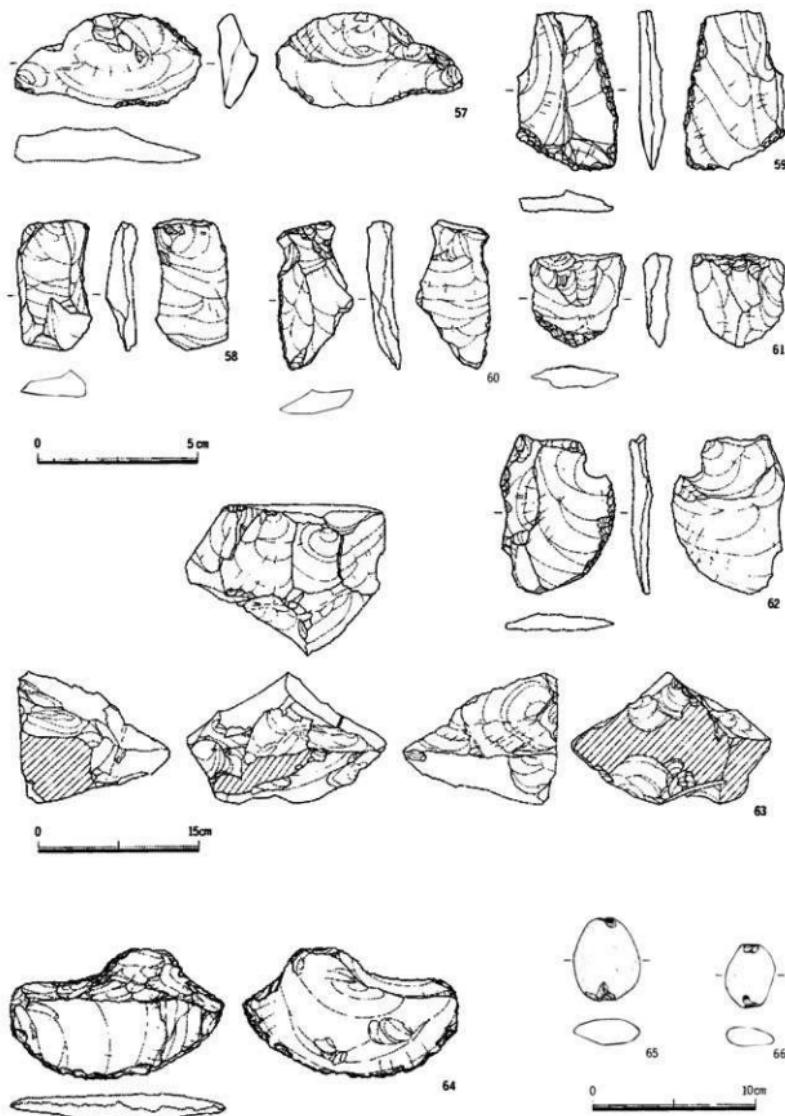
搔器は20点出土した。石材の内訳はチャート11点、下呂石8点、黒曜石1点である。剥片の縁辺に急角度な調整を加え刃部とした石器を搔器とした。刃部の位置と数により下記のように分類した。

- 1類 縦長剥片を用いその側辺と末端が刃部となるもの。
- 2類 素材の長軸先端部に刃部を作出したもの。
- 3類 素材の三側辺が刃部となるもの。
- 4類 剥片の素材全周が刃部となるもの。

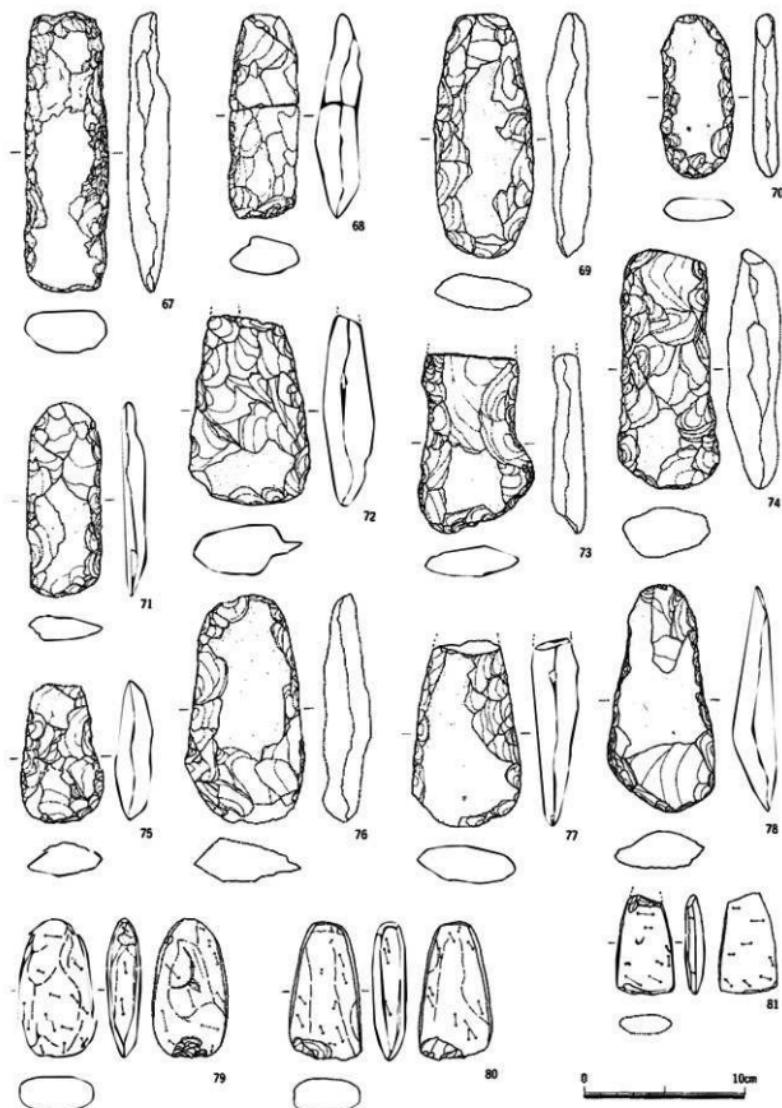
1類は6点、2類9点、3類2点、4類3点が出土している。51は4類に属し台形を呈している。それぞれの4側辺の片面に調整を施している。52は2類に属し、下端部に刃部を作出している。53は1類に属している。剥片素材の形状を用い表面右側辺部と裏面左側辺下部に調整を施し刃部を作出している。54は3類に属し、自然面を持つ表面の3側辺と裏面の左側辺部に刃部を作出している。

UF（第57図55～56 第58図57～58 図版26）

UFは55点出土した。石材の内訳はチャート38点、下呂石12点、黒曜石4点、頁岩1点である。剥片の側辺部に不規則な剥離痕が認められる石器をUFとした。55は縦長剥片を素材とし、左側辺部から先端部にかけて微細な剥離痕が認められる。56は背面右側縁部に刃こぼれ状の細かい剥離がみられる。57は横長剥片を素材とし下端部の表裏に剥離痕が見られる。表面にバルバースカーが残る。58は縦長剥片を素材とし、その背面左側辺部に微細な剥離がみられる。



第58図 遺物包含層出土の石器(4)



第59図 遺物包含層出土の石器(5)

RF（第58図59～62 図版26）

RFは46点出土した。石材の内訳はチャート28点、下呂石10点、黒曜石8点である。剥片の側辺部に連続した剝離痕を施した石器をRFとした。59は縦長剥片を素材とするが、左側辺部は大きく剝離され右側辺部の表裏に連続的な剝離痕を作出している。60は縦長剥片を素材としている。左側辺部から先端部にかけて連続剝離がみられる。61は貝殻状剥片の表面下端部に剝離を作出する。62は縦長剥片を素材として表面右側辺部に剝離を作出する。

コア（第58図63 図版26）

RFは9点出土した。石材の内訳はチャート1点、下呂石2点、黒曜石6点である。63は黒曜石を素材として作業面が全周している。

横刃型石器（第58図64 図版27）

1点のみ出土で片岩の横長剥片を素材とし、裏面より基部や刃部を作出している。刃部右半分は裏面からの衝撃で折れ、左半分は連続した剝離を作出している。刃角は19°～25°を呈しているが、裏面の剝離は刃こぼれである。

石垂（第58図65.66 図版27）

礫石垂が4点出土した。石材の内訳は凝灰岩2点、泥石1点、砂石1点である。礫石錐の重量は18.9～47.1gである。65の重量は47.1gで、石錐の上下端部を打ち欠き紐掛け部を作出する。上端部の幅外は7.4mm、下端部は9.5mmである。66の重量は18.9gで石錐の上下端部を打ち欠き紐掛け部を作出する。上端部の幅外は9.6mm、下端部は10.9mmである。

打製石斧（第59図67～78 図版26）

打製石斧は141点出土した。石材の内訳は凝灰岩110点（78%）、緑色片岩26点（18%）、砂岩4点、粘板岩1点である。打製石斧は平面と断面の形状から下記のように分類した。

平面形態

- 1類 脊部がほぼ平行な短角形とよばれるもの。
- 2類 脊部がくびれる分鋸形とよばれるもの。
- 3類 基部に向かいやや収束するバチ形とよばれるもの。

断面形態

- A類 片刃のもの。
- B類 両刃のもの。

折損部位

a 刃部を欠く。 b 基部を欠く。 c 基部の一部を欠く。 d 両端を欠き脣部のみ e 破片。

分類できたのは1-A類は4点、1-B類は5点、2-A類は7点、2-B類は32点、3-A類は13点、3-B類は16点の合計77点であった。背面（表面）に自然石を残すものは120点（85%）が存在した。67は1-A類に属する。基部には柄の装着用と思われる剝離痕が残り、両側辺部にはつぶれ状の敲打痕

がある。刃部は素材の表面の緩やかなカーブを利用している。68は基部中央で折れ、2つは少し離れて出土した。1-B類に属し、基部に左側辺部に剥離痕を残す。69は2-B類に属し、腹面右側辺部より横長剝片として作出した打痕が残る。形状は横長楕円状となる。70は2-B類に属する。腹面右側辺部より横長剝片として作出し、側辺部全体に二次加工を施し形状を整えている。71は3-B類に属し僅かに自然面を残す。基部には柄装着のための剥離痕が残る。72は1-A類に属し、両面に自然面を有する板状の素材を加工し、刃部は自然面を利用している。73は3-B類に属する。背面に両側辺部からの剥離痕が残る。74は2-B類に属し覆面の左側辺部から横長剝片として作出し二次加工によって形状が整えられている。75は2-B類に属し、両面とも剥離面で覆われ基部の両側辺部に剥離痕が残る。76は2-B類に属し、背面に両側辺部からの剥離痕が残る。77は2-A類に属し基端部を折損する。78は3-A類に属し下端部より打撃を与え背面刃部を形成しているが、その面に縦位の擦痕を残している。

磨製石斧（第59図79～81 第60図82～84 図版27）

磨製石斧は折損したものを含め16点出土し、そのうち分割されたものを接合すると12本の磨製石斧が出土したことになる。石材の内訳は蛇紋岩7点、片岩4点、砂岩1点である。砂岩の石斧は破片4点が接合可能となった。磨製石斧の形状から下記のように分類した。

1類 石斧の長さが10cm以上のもの。

1-A 頭部に丸みがあるもの。

1-B 頭部に角があるもの。

2類 石斧の長さが10cm未満のもの。

2-A 頭部に丸みがあるもの。

2-B 頭部に角があるもの。

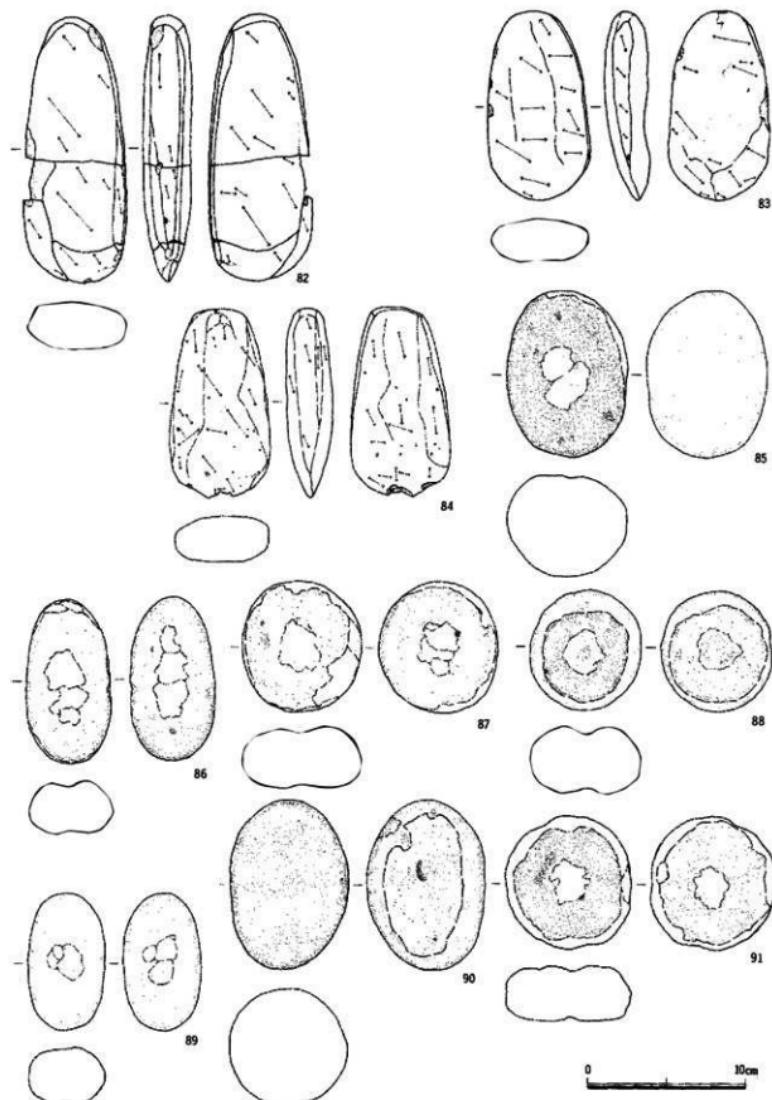
折損部位

a 刃部を欠く。 b 基部を欠く。 c 基部の一部を欠く。 d 両端を欠き胸部のみ e 破片。

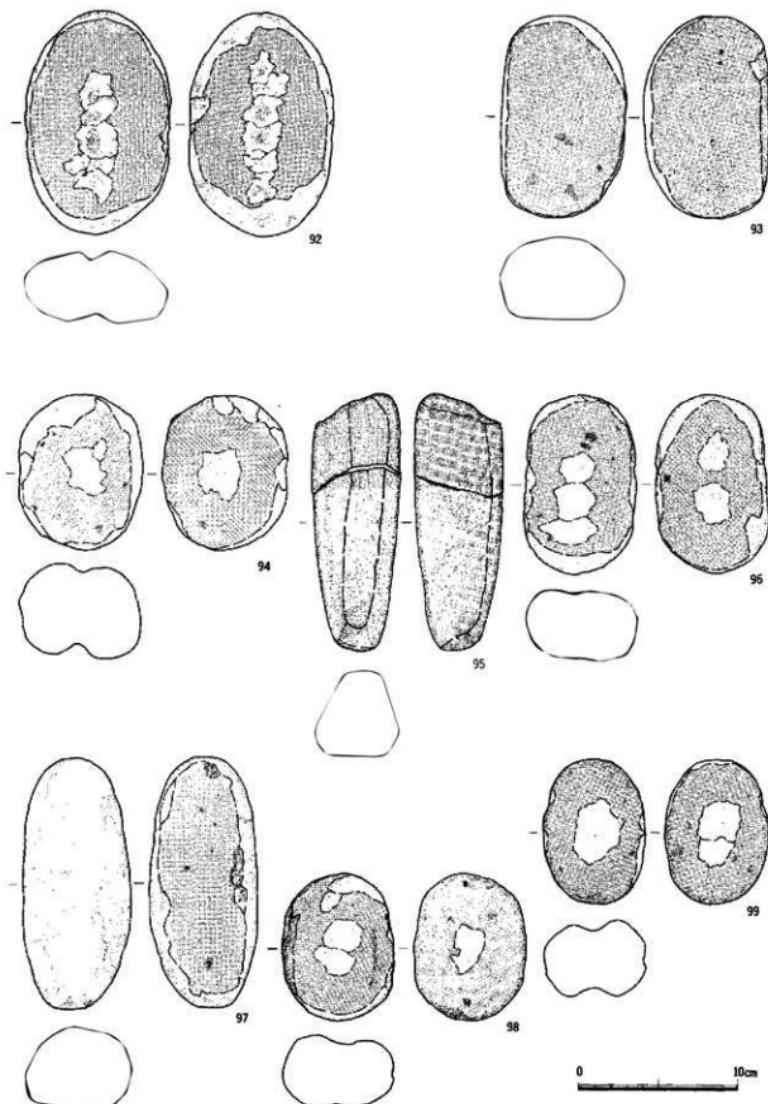
刃部の形状で弧を描く丸刀のものは5点、縁部から刃部に移るとき角をもち平らな平刀が1点であった。79の刃部先端は衝撃により破損するが、刃部は両刃を呈する。断面は隅丸方形を呈する定角式の範疇に含まれる。左上がりに傾斜する研磨痕がみられる。80の断面は隅丸方形を呈し、刃部は折損する。全面に縦方向の研磨痕がみられる。81は刃部と基端部を欠損する。表面は平らな面を持ち裏面は緩やかな弧を描く。82は第3号住居跡とその付近から出土した。表面左側辺部に打痕が残り、基部が折損したとみられる。石斧は5個以上の破片に分かれ、4点が接合可能となりほぼ原型を取り戻した。断面は隅丸方形を呈し、刃角は75°刃部は弧を描く両刃である。また、左上がりに傾斜する研磨痕がみられる。83の刃角は63°刃部は弧を描く両刃である。表面は緩やかな膨らみを持ち裏面は凹状を呈する。研磨痕は全体に左上がりに傾斜する。84は刃角が51°一部を欠損するが、丸刀の両面加工を施す刃部を呈する。研磨痕は全体に左上がりに傾斜する。

磨石・凹石（第60図85～91 第61図92～99 図版27～28）

磨石が108点、凹石が186点出土した。磨石・凹石を平面と断面の形状から下記のように分類した。



第60図 遺物包含層出土の石器(6)



第61図 遺物包含層出土の石器(7)

平面形態

- 1類 円形のもの。
2類 楕円形のもの。
3類 方形のもの。

断面形態 (1~3類は断面を細分した。)

- A類 円形のもの。
B類 楕円形のもの。
C類 凸レンズ状のもの。
D類 方形のもの。

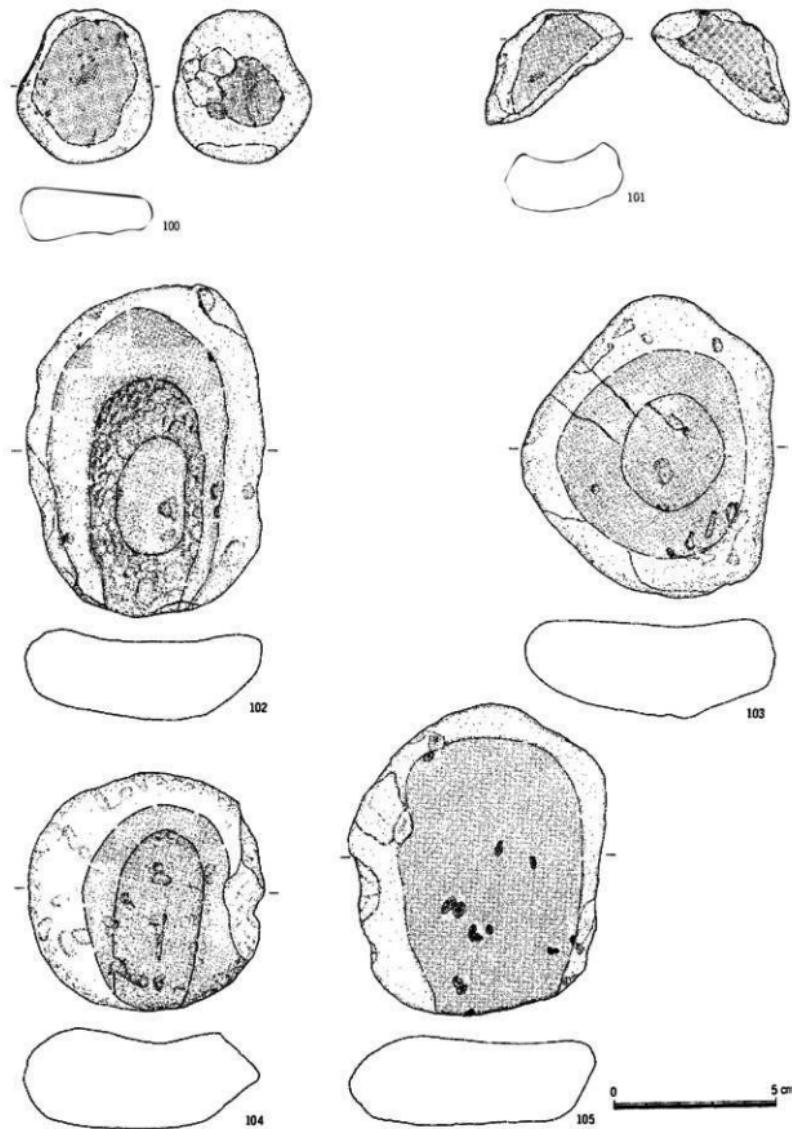
4類 角柱状などの自然礫を用い断面が多角形 (いわゆる特殊磨石)

使用による凹みの形状は、ア・細かい敲打痕が集中しているもの、イ・擂り鉢状に凹みができるものの、ウ・右上がりの凹みを有するものとして分けた。分類により、1-B類は23点(7.8%)、2-B類は191点(65%)、2-D類は3点、3-D類は1点、4類は1点、欠損しているが、2類と分かるものの49点(17%)であった。85は2-B類に属する。表面に擦り面を持ち、擂り鉢状と右上がり状に広がる凹みを有する。86は2-B類に属する。表裏に擦り面を持ち、擂り鉢状の凹みが繋がっている。87は1-Bに属し表裏に擦り面を持ち擂り鉢状の凹みを呈する。88は1-B類に属する。表裏に擦り面を持ち、表面に1つ裏面に2つ擂り鉢状の凹みを有する。89は2-B類に属する。上部にアバタ状敲打痕が認められる。また、凹みが表面に2つ、裏面に3つ有する。90は2-A類に属し断面が円形を呈する。1面だけ僅かに平面を作出している。91は1-B類に属する。表面に擦り面と擂り鉢状の凹みを有する。92は2-B類に属し、表面には中央を境に2面と裏面に1面の擦り面を有する。凹みは表裏側面とも多数の凹みが繋がり、使用する頻度の高さをあらわしている。93は2類に属する。全体に擦られているが左側辺部は偏平気味に擦り減っている。94は2-B類に属する。表裏と側辺部に擦り痕を残し擂り鉢状の凹みを有する。95は4類に属し、3つに割れ2点が出土した。1点はSK3より、もう1点は20m程離れた地点(1-15区)より出土した。断面は三角形の頂点を平らにした形状で、擦り面を4面有する特殊磨石である。96は2-B類に属し、表裏と側辺部に擦り面を有する。表面に3つ、裏面に2つの擂り鉢状の凹みを有し、側辺部はアバタ状の凹凸が観察される。97は2-B類に属し長楕円礫を素材としている。擦った一面が偏平状を呈している。98は2-B類に属し、熱による一部変色が見られる。表裏と側辺部に擦り面を持ち、表面に擂り鉢状の2つの凹みと裏面にはアバタ状の凹凸が観察される。99は2-B類に属し、焼土より出土した。表面に1つ裏面に2つの擂り鉢状の凹みと両側面に2つずつの凹みを有する。

石皿 (第62図100~105 図版28~29)

石皿は8点出土した。石材の内訳は全て凝灰岩である。100は表面と裏面の凹面に擦痕がみられる。101の石皿の多くは欠損している。皿部はU字状に凹みを呈し、滑らかな表面を有する。裏面はやや膨らみ、側辺部の表面は凹凸を呈している。102は表面の縁部は馬蹄形を呈し、かき出し部を持つ。皿部外側にアバタ状の敲打痕がみられ、中央部分に滑らかな擦痕が残る。裏面はわずかな膨らみを呈している。103の形状は五角形である。表面に敲打痕が残るが全体を皿部とし、中央に向かいわずかな凹みを呈する。裏面は中央に高い膨らみを持ち、一部に擦痕がある。104は円形の石皿である。表面の縁部は馬蹄形の膨らみを持ち、下部にかき出し部を呈する。■部はU字状を呈し、表面は滑らかである。右側縁部を欠損し裏面は緩やかな凸状のカーブを呈する。105はSK30より出土し、表裏に皿部を施す。表面の皿部は敲打痕と中央部分の滑らかな擦痕を持ちかき出し部に繋がる。裏面の縁部は際だった膨らみを持たず、皿部中央にわずかな凹みを呈する。

(上出巳吉)



第62図 遺物包含層出土の石器(8)

第6章 石油計測與

168	II-15	田	3043	下呂石	43	24	10	9.8	基部	I-B	・
169	II-15	田	3168	チャート	19	13	4	6.7	3	I-B	・
170	II-15	田	3675	黒曜石	(18)	13	3	0.5	5	I-B	・
171	II-15	田	7-62	チャート	29	15	5	1.3	3	I-B	・
172	II-15	・	・	チャート	(21)	(11)	4	1.2	2	I-B	・
173	II-16	田	48-1	黒曜石	(16)	13	5	0.6	6	I-B	・
174	II-16	田	207	下呂石	(13)	13	3	0.4	1	I-B	・
175	II-16	田	991	チャート	17	12	3	0.3	1	I-B	・
176	II-16	田	1440	黒曜石	13	13	5	0.4	1	I-B	・
177	II-16	田	1292	下呂石	29	12	4	0.7	1	I-B	・
178	II-16	田	1450	下呂石	24	13	2	1.3	3	I-B	・
179	II-16	田	1481	黒曜石	(15)	11	3	0.6	1	I-B	・
180	II-16	田	1950	チャート	(19)	10	3	0.6	1	I-B	・
181	II-16	田	2030	チャート	17	12	2	0.6	3	I-B	・
182	II-16	田	2156	チャート	23	12	6	1.1	1	I-B	・
183	II-16	田	2181	チャート	24	12	6	1.1	1	I-B	・
184	II-16	田	2183	下呂石	24	16	5	0.3	1	I-B	・
185	II-16	田	2252	黒曜石	13	12	3	0.3	1	I-B	・
186	II-16	田	2256	チャート	(19)	13	2	0.6	3	I-B	・
187	II-16	田	2278	チャート	(22)	(14)	4	0.6	3	I-B	・
188	II-16	田	2543	下呂石	(28)	29	6	2.7	1	I-B	・
189	II-16	・	・	チャート	(22)	(12)	4	0.6	2	六院	・
190	II-16	・	・	黒曜石	(15)	11	3	0.4	1	六院	・
191	II-16	・	・	下呂石	(18)	19	6	0.3	1	六院	・
192	II-16	・	・	チャート	29	12	3	0.9	1	六院	・
193	II-17	田	353	黒曜石	17	12	3	0.5	3	I-B	・
194	II-17	田	914	チャート	25	15	5	0.5	6	I-B	・
195	II-17	田	1163	チャート	(23)	(7)	3	0.3	1	I-B	・
196	II-17	田	1161	チャート	(17)	11	4	0.9	1	I-B	・
197	II-17	田	1356	チャート	24	12	4	0.6	4	I-B	・
198	II-17	田	1277	チャート	24	12	9	0.3	1	I-B	・
199	II-17	田	1467	チャート	24	12	4	0.6	4	I-B	・
200	II-17	田	1476	下呂石	25	12	5	0.6	3	I-B	・
201	II-17	田	1479	下呂石	24	12	4	0.6	3	I-B	・
202	II-17	田	1478	下呂石	13	12	3	0.7	1	I-B	・
203	II-17	田	1520	チャート	12	7	4	0.7	1	I-B	・
204	II-17	田	1672	下呂石	34	29	9	0.4	6	I-B	・
205	II-17	田	1866	黒曜石	(13)	11	3	0.2	1	I-B	・
206	II-17	田	2078	チャート	(17)	12	3	0.7	1	I-B	・
207	II-17	田	2094	下呂石	15	12	1	0.6	4	I-B	・
208	II-17	田	2251	下呂石	12	4	3	0.4	1	I-B	・
209	II-17	田	6760	チャート	25	17	5	1.8	3	I-B	・
210	II-17	・	・	チャート	(22)	(14)	4	0.7	1	I-B	・
211	II-17	・	・	チャート	28	25	7	3.6	1	I-B	・
212	II-18	田	7514	チャート	25	16	4	0.8	4	I-B	・
213	II-18	田	7694	黒曜石	(14)	12	4	0.8	3	I-B	・

石器石刀

No	出土区	解説	遺物番号	石	材	大きさ 長×幅 mm	厚 mm	形 状	分 類	解説	出 所
1	E-13	・	・	下呂石	26	15	7	2.1	1	○	
2	E-11	田	3596	下呂石	37	21	5	1.9	1	○	
3	E-11	・	・	チャート	24	24	8	1.8	1	○	34
4	E-12	・	・	下呂石	15	12	6	2.1	1	○	
5	E-13	・	・	チャート	22	22	6	2.5	2	○	
6	E-16	・	・	黒曜石	15	17	3	0.9	2	○	
7	G-10	田	3761	下呂石	46	43	11	20.5	2	○	
8	G-12	・	・	下呂石	26	16	6	2.8	1	○	
9	G-15	甲	1298	下呂石	27	22	9	6.1	2	○	
10	G-15	・	・	チャート	16	15	5	1.6	1	○	
11	G-16	田	414	チャート	21	24	8	4.1	2	○	
12	G-16	・	・	下呂石	20	17	5	2.1	3	○	
13	G-17	田	3968	下呂石	41	38	11	15.4	3	○	
14	G-17	・	・	チャート	19	14	4	1.5	1	○	
15	G-17	・	・	下呂石	26	20	9	5.4	2	○	36
16	G-17	・	・	下呂石	29	20	8	3.2	2	○	
17	G-17	・	・	下呂石	22	15	6	2.2	1	○	
18	G-18	・	・	チャート	21	16	2	2.5	1	○	
19	H-17	田	4594	下呂石	34	30	2	2.4	1	○	36
20	H-15	・	・	下呂石	13	12	4	2.6	2	○	
21	H-16	田	247	下呂石	36	19	10	2.6	1	○	
22	H-16	・	・	下呂石	25	16	7	3.3	1	○	
23	H-16	・	・	チャート	26	16	7	3.8	1	○	
24	H-16	・	・	チャート	24	27	10	4.6	2	○	
25	H-16	・	・	黒曜石	19	17	9	3.7	2	○	
26	H-17	田	1107	下呂石	25	25	9	2.6	1	○	
27	H-17	田	1459	チャート	27	24	6	4.1	2	○	
28	H-17	・	・	チャート	31	18	10	3.2	1	○	
29	H-17	・	・	チャート	25	21	10	4.2	2	○	
30	H-18	田	2380	チャート	(21)	17	6	0.2	1	○	
31	H-18	・	・	チャート	22	16	4	4.2	1	○	35

石刀

No	出土区	解説	遺物番号	石	材	大きさ 長×幅 mm	厚 mm	形 状	分 類	解説	出 所
1	E-12	・	・	チャート	24	9	5	1.2	1-A	・	○
2	E-12	田	5606	チャート	(19)	12	6	0.9	1-A	・	○

No.	地名	標高	植物番号	科	種	花期	葉期	根期	果期	分類	分類	分類	分類	分類
1	F-13	山	5161	クサニシキ	48	16	10	5.7	3-+	●	●	●	●	●
2	F-13	山	5182	クサニシキ	(49)	16	5	11.5	3-+	●	●	●	●	●
3	F-13	山	5182	クサニシキ	(50)	9	5	11.1	1-H	●	●	●	●	●
4	F-13	山	5182	クサニシキ	(51)	7	5	10.4	1-A	●	●	●	●	●
5	F-13	山	5062	下呂石竹	26	15	4	0.9	2-A	●	●	●	●	●
6	F-13	山	6420	下呂石竹	(27)	13	5	1.7	1-A	●	●	●	●	●
7	F-13	山	6420	下呂石竹	(28)	9	3	0.0	1-H	●	●	●	●	●
8	F-13	山	6420	下呂石竹	(29)	8	6	1.6	1-A	●	●	●	●	●
9	F-13	山	6420	下呂石竹	(30)	9	8	3.0	1-H	●	●	●	●	●
10	F-14	山	2097	下呂石竹	38	8	6	1.6	1-A	●	●	●	●	●
11	F-16	山	6	クサニシキ	39	14	8	3.6	1-A	●	●	●	●	●
12	G-12	山	404	クサニシキ	23	7	4	0.8	1-A	●	●	●	●	●
13	G-12	山	2552	下呂石竹	26	9	2	0.9	1-A	●	●	●	●	●
14	G-12	山	2082	クサニシキ	31	19	3	2.6	2-A	●	●	●	●	●
15	G-13	山	1196	クサニシキ	34	13	9	3.0	2-A	●	●	●	●	●
16	G-16	山	311	クサニシキ	37	13	8	2.7	2-A	●	●	●	●	●
17	G-16	山	311	クサニシキ	38	13	6	1.2	2-A	●	●	●	●	●
18	G-14	山	805	クサニシキ	41	13	10	11.2	3-A	●	●	●	●	●
19	G-15	山	745	クサニシキ	(42)	11	6	11.8	1-A	●	●	●	●	●
20	G-15	山	7220	下呂石竹	26	9	5	1.5	2-B	●	●	●	●	●
21	G-15	山	6452	下呂石竹	26	7	2	1.6	1-A	●	●	●	●	●
22	G-17	山	7888	クサニシキ	(43)	18	4	1.6	1-A	●	●	●	●	●
23	G-17	山	7888	クサニシキ	(44)	18	6	0.6	2-B	●	●	●	●	●
24	G-17	山	7888	クサニシキ	(45)	18	5	1.2	2-B	●	●	●	●	●
25	G-18	山	7888	クサニシキ	(46)	18	8	1.6	2-B	●	●	●	●	●
26	G-18	山	7888	クサニシキ	(47)	9	3	0.9	1-B	●	●	●	●	●
27	H-14	山	1424	クサニシキ	(48)	12	7	2.3	1-A	●	●	●	●	●
28	H-15	山	855	下呂石竹	33	11	6	2.0	1-A	●	●	●	●	●
29	H-15	山	1638	クサニシキ	(49)	11	3	0.6	2-B	●	●	●	●	●
30	H-15	山	1746	クサニシキ	(50)	6	4	0.6	2-A	●	●	●	●	●
31	H-15	山	3131	クサニシキ	(51)	12	8	3.0	1-A	●	●	●	●	●
32	H-15	山	6766	クサニシキ	38	16	9	3.3	2-A	●	●	●	●	●
33	H-15	山	6766	クサニシキ	(52)	7	3	0.6	1-B	●	●	●	●	●
34	H-15	山	1715	クサニシキ	(53)	12	3	1.6	3-+	●	●	●	●	●
35	H-16	山	1712	クサニシキ	35	11	4	1.3	3-+	●	●	●	●	●
36	H-16	山	2438	下呂石竹	27	17	6	2.3	2-A	●	●	●	●	●
37	H-16	山	2082	クサニシキ	25	11	4	1.0	2-A	●	●	●	●	●
38	H-16	山	2575	クサニシキ	(54)	8	5	1.2	1-A	●	●	●	●	●
39	H-17	山	1659	クサニシキ	25	12	3	1.2	3-	●	●	●	●	●
40	H-17	山	2129	クサニシキ	(55)	8	4	0.7	1-H	●	●	●	●	●
41	H-17	山	2129	クサニシキ	(56)	5	3	0.8	2-B	●	●	●	●	●
42	H-17	山	2129	クサニシキ	(57)	5	3	1.3	2-A	●	●	●	●	●
43	H-17	山	2129	クサニシキ	(58)	5	3	0.8	2-B	●	●	●	●	●
44	H-17	山	2129	クサニシキ	(59)	5	3	0.8	2-B	●	●	●	●	●
45	H-16	山	1418	クサニシキ	29	14	4	1.0	3-	●	●	●	●	●
46	H-16	山	27	クサニシキ	27	10	5	1.5	1-A	●	●	●	●	●
47	H-16	山	27	クサニシキ	17	9	5	0.9	2-B	●	●	●	●	●
48	H-15	山	27	クサニシキ	27	13	3	1.3	1-H	●	●	●	●	●
49	H-15	山	27	クサニシキ	27	13	5	1.4	2-B	●	●	●	●	●
50	H-15	山	27	クサニシキ	27	13	4	0.4	2-B	●	●	●	●	●
51	H-15	山	27	クサニシキ	(60)	19	21	4	1.5	2-A	●	●	●	●

ヒトヅル科

No.	地名	標高	植物番号	科	種	花期	葉期	根期	果期	分類	分類	分類	分類	分類
1	F-12	山	2224	下呂石竹	(69)	39	9	21.0	3-H	●	●	●	●	●
2	F-12	山	6791	クサニシキ	45	20	6	6.2	1-H	●	●	●	●	●
3	F-12	山	·	クサニシキ	(70)	26	7	5.4	1-H	●	●	●	●	●
4	F-11	山	3869	クサニシキ	(71)	27	7	4.6	1-H	●	●	●	●	●
5	G-17	山	1045	クサニシキ	45	28	10	11.4	1-B	●	●	●	●	●
6	G-17	山	4959	下呂石竹	45	29	6	8.4	1-H	●	●	●	●	●
7	H-15	山	2758	下呂石竹	44	33	7	9.0	1-B	●	●	●	●	●
8	H-12	山	5065	クサニシキ	58	40	8	20.2	4-H	●	●	●	●	●
9	H-12	山	7046	クサニシキ	59	35	8	8.8	2-B	●	●	●	●	●
10	H-13	山	5562	下呂石竹	(72)	29	2	15.8	4-H	●	●	●	●	●
11	H-12	山	5981	クサニシキ	27	44	8	11.3	2-B	●	●	●	●	●
12	H-12	山	3519	クサニシキ	41	46	5	10.3	2-B	●	●	●	●	●
13	H-12	山	7210	クサニシキ	34	52	12	14.5	1-B	●	●	●	●	●
14	G-16	山	·	下呂石竹	(73)	112	5	1.0	2-B	●	●	●	●	●
15	G-15	山	292	クサニシキ	35	47	4	4.1	2-B	●	●	●	●	●
16	G-15	山	132	クサニシキ	35	47	4	2.8	2-B	●	●	●	●	●
17	G-17	山	7841-1	クサニシキ	35	33	9	4.7	2-B	●	●	●	●	●
18	H-17	山	918	クサニシキ	35	43	4	5.3	2-B	●	●	●	●	●
19	H-17	山	7206	クサニシキ	35	43	4	5.3	2-B	●	●	●	●	●
20	H-16	山	7151	クサニシキ	35	53	8	12.2	2-B	●	●	●	●	●

ヒトヅル科

No.	地名	標高	植物番号	科	種	花期	葉期	根期	果期	分類	分類	分類	分類	分類
1	F-31	·	·	クサニシキ	26	13	9	1.6	1	●	●	●	●	●
2	F-31	山	3217	クサニシキ	29	19	·	5.3	2	●	●	●	●	●
3	F-34	山	2432	下呂石竹	23	21	10	3.2	3	●	●	●	●	●
4	F-32	山	·	クサニシキ	21	—	—	5.5	2	●	●	●	●	●
5	H-11	山	3768	クサニシキ	18	26	6	0.6	2-B	●	●	●	●	●
6	H-16	山	·	下呂石竹	26	16	7	5.3	2	●	●	●	●	●
7	H-16	山	·	クサニシキ	22	12	4	1.4	2	●	●	●	●	●
8	H-16	山	3222	クサニシキ	42	17	11	8.2	2	●	●	●	●	●

四四

卷之三

10

有機質		H-L		H-U		U-L		U-U		無機質	
No.	出 土 地 區	部位	遺物名	No.	出 土 地 區	部位	遺物名	No.	出 土 地 區	部位	遺物名
1				2				3			
4				5				6			
7				8				9			
10				11				12			
13				14				15			
16				17				18			
19				20				21			
22				23				24			
25				26				27			
28				29				30			
31				32				33			
34				35				36			
37				38				39			
40				41				42			
43				44				45			
46				47				48			
49				50				51			

被験者別												被験者別											
性別			年齢			学年			学年			性別			年齢			学年			学年		
男	女	合計	10歳未満	11歳未満	合計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	男	女	合計	10歳未満	11歳未満	合計	1年	2年	3年	4年	5年	6年
男	女	合計	10歳未満	11歳未満	合計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	男	女	合計	10歳未満	11歳未満	合計	1年	2年	3年	4年	5年	6年
10	10	20	10	10	20	10	10	10	10	10	10	10	10	20	10	10	20	10	10	10	10	10	10
11	11	22	11	11	22	11	11	11	11	11	11	11	11	22	11	11	22	11	11	11	11	11	11
12	12	24	12	12	24	12	12	12	12	12	12	12	12	24	12	12	24	12	12	12	12	12	12
13	13	26	13	13	26	13	13	13	13	13	13	13	13	26	13	13	26	13	13	13	13	13	13
14	14	28	14	14	28	14	14	14	14	14	14	14	14	28	14	14	28	14	14	14	14	14	14
15	15	30	15	15	30	15	15	15	15	15	15	15	15	30	15	15	30	15	15	15	15	15	15
16	16	32	16	16	32	16	16	16	16	16	16	16	16	32	16	16	32	16	16	16	16	16	16
17	17	34	17	17	34	17	17	17	17	17	17	17	17	34	17	17	34	17	17	17	17	17	17
18	18	36	18	18	36	18	18	18	18	18	18	18	18	36	18	18	36	18	18	18	18	18	18
19	19	38	19	19	38	19	19	19	19	19	19	19	19	38	19	19	38	19	19	19	19	19	19
20	20	40	20	20	40	20	20	20	20	20	20	20	20	40	20	20	40	20	20	20	20	20	20
21	21	42	21	21	42	21	21	21	21	21	21	21	21	42	21	21	42	21	21	21	21	21	21
22	22	44	22	22	44	22	22	22	22	22	22	22	22	44	22	22	44	22	22	22	22	22	22
23	23	46	23	23	46	23	23	23	23	23	23	23	23	46	23	23	46	23	23	23	23	23	23
24	24	48	24	24	48	24	24	24	24	24	24	24	24	48	24	24	48	24	24	24	24	24	24
25	25	50	25	25	50	25	25	25	25	25	25	25	25	50	25	25	50	25	25	25	25	25	25
26	26	52	26	26	52	26	26	26	26	26	26	26	26	52	26	26	52	26	26	26	26	26	26
27	27	54	27	27	54	27	27	27	27	27	27	27	27	54	27	27	54	27	27	27	27	27	27
28	28	56	28	28	56	28	28	28	28	28	28	28	28	56	28	28	56	28	28	28	28	28	28
29	29	58	29	29	58	29	29	29	29	29	29	29	29	58	29	29	58	29	29	29	29	29	29
30	30	60	30	30	60	30	30	30	30	30	30	30	30	60	30	30	60	30	30	30	30	30	30
31	31	62	31	31	62	31	31	31	31	31	31	31	31	62	31	31	62	31	31	31	31	31	31
32	32	64	32	32	64	32	32	32	32	32	32	32	32	64	32	32	64	32	32	32	32	32	32
33	33	66	33	33	66	33	33	33	33	33	33	33	33	66	33	33	66	33	33	33	33	33	33
34	34	68	34	34	68	34	34	34	34	34	34	34	34	68	34	34	68	34	34	34	34	34	34
35	35	70	35	35	70	35	35	35	35	35	35	35	35	70	35	35	70	35	35	35	35	35	35
36	36	72	36	36	72	36	36	36	36	36	36	36	36	72	36	36	72	36	36	36	36	36	36
37	37	74	37	37	74	37	37	37	37	37	37	37	37	74	37	37	74	37	37	37	37	37	37
38	38	76	38	38	76	38	38	38	38	38	38	38	38	76	38	38	76	38	38	38	38	38	38
39	39	78	39	39	78	39	39	39	39	39	39	39	39	78	39	39	78	39	39	39	39	39	39
40	40	80	40	40	80	40	40	40	40	40	40	40	40	80	40	40	80	40	40	40	40	40	40
41	41	82	41	41	82	41	41	41	41	41	41	41	41	82	41	41	82	41	41	41	41	41	41
42	42	84	42	42	84	42	42	42	42	42	42	42	42	84	42	42	84	42	42	42	42	42	42
43	43	86	43	43	86	43	43	43	43	43	43	43	43	86	43	43	86	43	43	43	43	43	43
44	44	88	44	44	88	44	44	44	44	44	44	44	44	88	44	44	88	44	44	44	44	44	44
45	45	90	45	45	90	45	45	45	45	45	45	45	45	90	45	45	90	45	45	45	45	45	45
46	46	92	46	46	92	46	46	46	46	46	46	46	46	92	46	46	92	46	46	46	46	46	46
47	47	94	47	47	94	47	47	47	47	47	47	47	47	94	47	47	94	47	47	47	47	47	47
48	48	96	48	48	96	48	48	48	48	48	48	48	48	96	48	48	96	48	48	48	48	48	48
49	49	98	49	49	98	49	49	49	49	49	49	49	49	98	49	49	98	49	49	49	49	49	49
50	50	100	50	50	100	50	50	50	50	50	50	50	50	100	50	50	100	50	50	50	50	50	50

25	G-13	*	*	下凹石	27	32	10	9.8
26	G-15	*	*	下凹石	22	52	5	4.6
27	G-15	*	*	下凹石	25	29	6	5.6
28	G-15	*	*	下凹石	29	21	7	6.0
29	G-15	*	*	下凹石	20	20	5	2.1
30	G-16	H	313	下凹石	36	21	8	5.7
31	G-16	H	1445	下凹石	38	26	8	6.4
32	G-16	*	*	黑曜石	19	11	3	6.7
33	G-17	*	*	下凹石	19	18	4	3.4
34	G-17	*	*	下凹石	13	25	7	2.5
35	G-17	*	*	下凹石	29	15	3	2.4
36	G-17	*	*	黑曜石	21	10	5	0.8
37	G-18	*	*	下凹石	21	7	4	4.0
38	G-18	*	*	下凹石	17	9	2	6.0
39	G-18	*	*	下凹石	20	27	5	9.9
40	H-11	H	4737	下凹石	19	21	4	3.4
41	H-15	H	4221	下凹石	31	24	-	5.5
42	H-15	H	3049	下凹石	22	25	9	10.5
43	H-15	H	3119	下凹石	46	35	8	13.5
44	H-15	*	*	下凹石	40	21	13	11.1
45	H-16	H	354	下凹石	72	27	11	19.2
46	H-16	H	1529	下凹石	31	28	5	4.4
47	H-16	H	2219	下凹石	40	20	8	7.2
48	H-16	H	2255	下凹石	27	21	4	3.1
49	H-16	H	2502	下凹石	29	32	5	4.1
50	H-16	IV	3221	下凹石	16	49	9	6.0
51	H-16	H	7342	下凹石	42	35	8	11.5
52	H-17	*	*	下凹石	41	20	9	8.4
53	H-17	*	*	下凹石	31	22	6	3.8
54	H-17	*	*	下凹石	33	32	8	8.2
55	I-16	H	3278	下凹石	40	21	5	5.2

打製石斧

No.	出土所	器種	石 材	大きさ 長さ 幅 厚さ mm	重 量 kg	基部 形態	分 類	断面 形状	欠損 部位	自然面	特 徴
1	D-16	H	542	黒曜石	(45)	50	14	(41)	2	A	b
2	E-9	H	3388	黒曜石	(49)	(45)	13	(42)	2	-	c
3	E-9	H	3515	黒曜石	(36)	(58)	(14)	(32)	-	B	b
4	E-9	H	3517	黒曜石	(117)	50	19	(39)	1	B	c
5	E-9	H	3573	黒曜石	(106)	52	24	(152)	-	-	a
6	E-9	H	3633	黒曜石	(102)	(49)	36	(202)	-	-	a
7	E-9	H	3638	黒曜石	(64)	62	16	(93)	-	B	b
8	E-10	H	2880	黒曜石	141	55	23	238	-	A	-
9	E-10	H	3578	黒曜石	88	52	22	(106)	-	-	a
10	E-10	H	3632	黒曜石	54	53	17	164	-	B	b
11	E-11	H	5337	黒曜石	75	42	14	(59)	-	B	b
12	E-11	H	5187	黒曜石	(124)	(70)	32	(331)	-	-	a
13	E-11	H	5789	黒曜石	(75)	(58)	24	(124)	3	-	B
14	E-12	H	4858	黒曜石	(83)	46	16	(83)	1	-	d
15	E-12	H	5812	黒曜石	(116)	61	23	(250)	3	A	c
16	E-13	H	6385	黒曜石	175	51	26	336	1	A	-
17	E-13	*	*	黒色石	(44)	37	17	(37)	1	-	a
18	F-8	H	3746	黒色石	(69)	54	13	(65)	3	B	b
19	F-9	H	3565	黒曜石	(85)	51	19	(84)	3	A	c
20	F-9	H	3658	黒色石	(55)	63	9	(45)	3	A	d
21	F-9	H	3695	黒曜石	(53)	59	8	(33)	-	-	d
22	F-9	H	4158	黒曜石	(142)	58	21	(221)	3	B	c
23	F-9	H	4237	黒曜石	110	46	25	113	3	A	-
24	F-9	H	4630	黒曜石	116	60	25	175	3	-	d
25	F-10	H	3291	黒曜石	127	46	23	200	1	-	a
26	F-10	H	3352	黒曜石	(119)	65	33	(316)	1	A	b
27	F-10	H	3554	黒曜石	(113)	52	19	(195)	2	B	c
28	F-10	H	3776	黒曜石	(103)	49	17	(117)	1	-	d
29	F-10	H	3873	黒曜石	95	53	21	(104)	1	A	c
30	F-10	H	3874	黒曜石	88	43	14	67	1	B	-
31	F-10	H	3875	黒曜石	142	67	25	319	3	B	-
32	F-10	H	3881	黒曜石	81	45	18	(84)	3	-	a
33	F-10	H	4135	黒曜石	73	46	11	1	1	B	c
34	F-10	H	4188	黒曜石	121	49	16	112	1	B	-
35	F-10	H	4197	黒色石	62	59	8	34	1	-	b
36	F-10	H	4214	黒曜石	114	56	26	209	3	B	-
37	F-10	H	3889	黒曜石	(69)	52	18	(194)	1	-	d
38	F-10	H	5610	黒色石	(102)	53	16	(123)	1	A	c
39	F-10	*	*	黒色石	46	26	11	18	-	-	-
40	F-17	H	5783	黒曜石	(131)	56	28	272	3	B	-
41	F-17	H	5879	黒色石	(86)	49	15	(72)	3	-	a
42	F-17	H	6418	黒曜石	(91)	54	24	(144)	1	-	a
43	F-17	IV	6728	黒曜石	(95)	47	19	(90)	3	B	c
44	F-17	H	24	黒曜石	(57)	46	15	(54)	1	-	a
45	F-17	*	*	黒色石	(31)	28	7	(7)	-	-	a
46	F-17	H	5075	黒曜石	(67)	44	21	(88)	1	-	a
47	G-8	H	4101	黒曜石	87	45	21	165	3	B	-
48	G-8	H	4177	黒曜石	(60)	66	11	(55)	1	A	b
49	G-8	H	4202	黒曜石	(63)	51	28	(90)	-	-	a
50	G-9	H	4093	黒曜石	(97)	58	21	(176)	3	-	a
51	G-9	H	4094	黒曜石	134	65	33	316	1	B	-

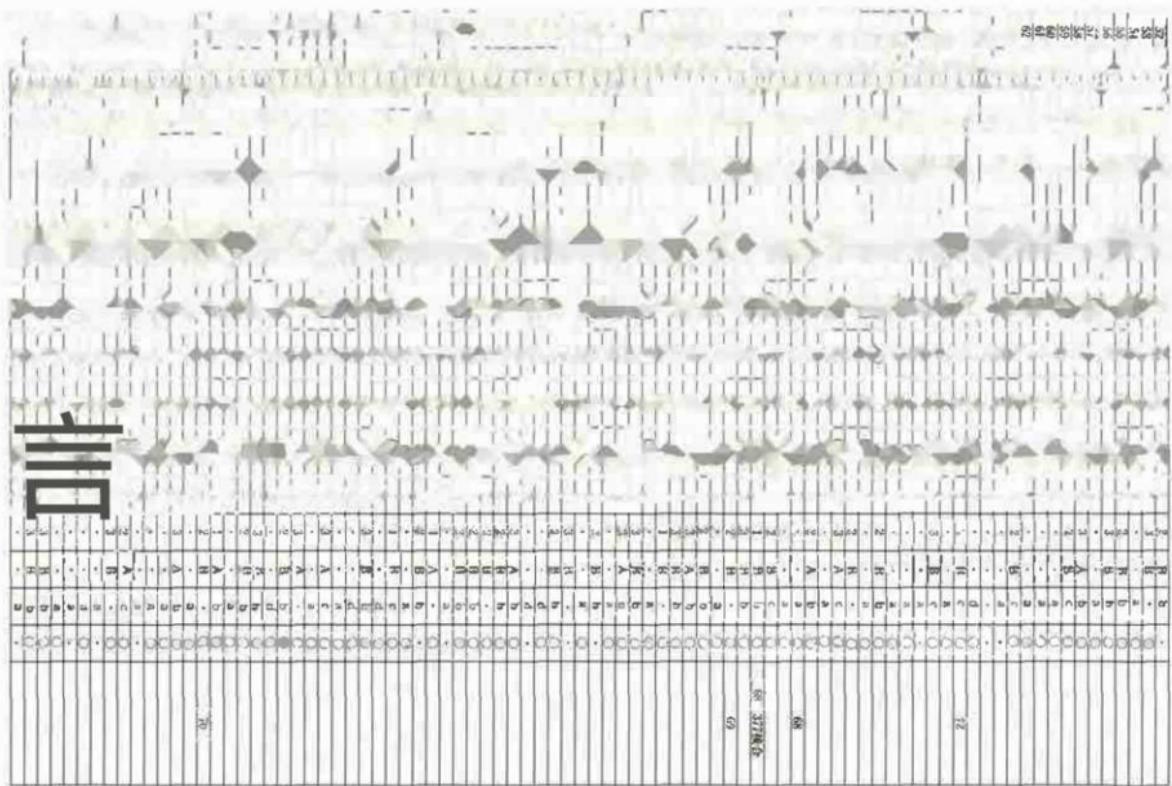
78

73

76

71

75



130	丸	-	-	褐灰岩	86	57	79	1125	3	2	B	b	○
131	丸	-	-	褐灰岩	43	51	50	127	1	-	d	-	○
132	丸	-	-	綠色片岩	93	48	18	1134	1	-	a	○	○
133	丸	-	-	褐灰岩	150	63	29	271	1	2	B	-	○

四七・備考

No.	出土区	層位	遺物番号	石 材	大きさ 長さ	幅 mm	厚 mm	重 量 (g)	直 径	表 面	凹 凸 溝 溝	分 類	使 用	打 削	種 別
1	E-9	H	3389	褐灰岩	159	76	63	771	-	-	-	-	-	○	
2	E-9	-	-	褐灰岩	119	67	50	442	-	-	1	2	2	○	
3	E-9	-	-	褐灰岩	109	91	53	693	-	-	1	1	2	○	
4	E-9	-	-	褐灰岩	150	73	49	565	-	-	1	1	2	○	
5	E-10	H	3689	褐灰岩	(66)	(52)	(38)	(113)	-	-	1	2	2	-	
6	E-10	H	3077	褐灰岩	106	74	72	820	-	1	1	2	2-A	○	
7	E-11	H	6040	褐灰岩	93	82	43	399	1	-	1	2	B	○	
8	E-11	H	6041	褐灰岩	99	80	45	464	2	-	2	2	B	○	
9	E-11	H	6318	褐灰岩	92	64	46	335	1	-	1	2	B	○	
10	E-12	H	5683	褐灰岩	115	91	66	873	-	-	1	1	2	-	○
11	E-12	H	5816	褐灰岩	119	59	37	305	3	-	1	1	2	-	○
12	E-12	H	5932	褐灰岩	141	77	63	666	5	1	2	1	2-B	○	
13	E-12	H	6648	褐灰岩	75	69	42	281	1	-	1	1	1-B	○	88
14	E-12	H	6951	褐灰岩	114	91	59	748	-	-	1	1	2	-	○
15	E-12	H	7183	褐灰岩	103	74	41	380	2	2	1	1	2	B	○
16	E-12	H	7467	褐灰岩	115	75	51	463	-	-	1	1	2	B	○
17	E-12	H	7661	褐灰岩	85	68	54	357	1	-	1	1	2	-	○
18	E-13	IV	5469	褐灰岩	116	(75)	52	(541)	-	-	1	1	2	B	
19	E-13	H	5514	褐灰岩	105	89	45	506	1	-	1	1	2	B	
20	E-13	H	5515	褐灰岩	(82)	(80)	(51)	(338)	3	-	1	2	2	-	○
21	E-13	H	5742	褐灰岩	(72)	(74)	(52)	(362)	-	-	1	1	2	B	
22	E-13	H	5795	褐灰岩	97	79	51	493	1	-	1	1	2	B	
23	E-13	H	5852	褐灰岩	132	108	49	1141	1	-	1	1	2	B	
24	E-13	H	5854	褐灰岩	137	75	51	631	3	3	2	1	2	B	○
25	E-13	H	5905	褐灰岩	(68)	(65)	(51)	(218)	1	-	1	1	2	B	
26	E-13	H	6067	褐灰岩	87	75	51	336	1	-	1	1	2	B	
27	E-13	H	6069	褐灰岩	75	55	33	213	2	-	1	1	2	B	
28	E-13	H	6102	褐灰岩	(60)	(58)	(48)	(217)	-	-	1	2	1	B	
29	E-13	H	6197	褐灰岩	100	78	44	426	-	-	1	1	2	B	
30	E-13	H	6211	褐灰岩	106	72	45	380	2	2	1	1	2	B	
31	E-13	H	6348	褐灰岩	105	78	52	594	2	2	1	1	2	B	
32	E-13	H	6384	褐灰岩	96	79	49	437	2	2	1	1	2	B	○
33	E-13	H	6388	褐灰岩	106	82	54	248	1	3	1	1	2	B	○
34	E-13	H	6407	褐灰岩	166	148	53	2000	-	-	1	1	2	B	
35	E-13	H	6582	褐灰岩	89	67	44	285	2	-	1	2	1	B	○
36	E-13	H	6814	褐灰岩	102	90	39	443	1	-	1	2	2	-	○
37	E-13	H	-	褐灰岩	101	88	58	660	1	-	1	2	2	B	
38	E-14	H	5162	褐灰岩	110	84	59	615	-	-	1	2	1	B	
39	E-16	H	643	褐灰岩	116	85	60	806	1	-	1	2	2	-	○
40	F-9	H	3860	褐灰岩	111	80	52	572	3	-	1	1	2	-	○
41	F-9	H	3949	褐灰岩	126	95	61	999	-	-	1	2	2	B	
42	F-9	H	4127	褐灰岩	111	87	51	734	2	3	1	1	2	B	○
43	F-9	H	4210	褐灰岩	101	58	38	304	1	-	1	2	2	B	○
44	F-10	H	4819	褐灰岩	128	80	47	643	-	-	1	2	2	B	
45	F-10	H	5620	褐灰岩	(63)	(85)	(38)	(274)	2	-	1	1	2	B	
46	F-10	H	4808	褐灰岩	78	72	35	247	1	-	1	1	1-B	○	
47	F-10	H	4880	褐灰岩	87	67	45	330	1	-	1	1	2	B	○
48	F-11	H	2484	褐灰岩	60	46	22	70	-	-	1	1	2	B	○
49	F-11	H	2557	褐灰岩	111	69	55	491	1	1	1	2	2	B	○
50	F-11	H	2793	褐灰岩	115	52	47	468	-	-	1	1	2	D	○
51	F-11	H	2927	褐灰岩	57	44	41	117	-	-	1	3	2	A	
52	F-11	H	3163	褐灰岩	85	61	46	292	1	-	1	1	2	-	4
53	F-11	H	3296	褐灰岩	78	77	53	270	-	-	1	1	1	2	B
54	F-11	H	3451	褐灰岩	57	38	29	59	-	-	1	1	1	2	B
55	F-11	H	3454	褐灰岩	89	54	43	272	-	-	1	1	2	2	D
56	F-11	H	3456	褐灰岩	124	145	65	165	1	-	1	1	2	B	○
57	F-11	H	3598	褐灰岩	71	51	34	242	-	-	1	1	2	B	
58	F-11	H	5491	褐灰岩	111	55	32	497	1	-	1	2	2	-	○
59	F-11	H	5494	褐灰岩	110	54	45	661	2	-	1	1	2	B	
60	F-12	H	5683	褐灰岩	109	93	52	258	2	-	1	2	2	B	
61	F-12	H	7297	褐灰岩	(106)	(75)	(36)	(258)	2	-	1	2	2	B	
62	F-12	H	7445	褐灰岩	87	83	52	479	-	-	1	1	2	B	
63	F-12	H	7528	褐灰岩	102	96	62	814	1	-	1	1	2	B	
64	F-12	H	7266	褐灰岩	104	85	56	608	-	-	1	1	2	B	
65	F-12	H	2291	褐灰岩	82	77	58	441	-	-	1	1	2	B	
66	F-12	H	4871	褐灰岩	116	48	41	278	1	-	1	2	2	○	
67	F-12	H	5161	褐灰岩	91	81	41	444	-	-	1	1	2	B	
68	F-12	H	5343	褐灰岩	143	88	59	932	-	-	1	1	2	B	
69	F-12	H	5431	褐灰岩	127	78	57	798	-	-	1	2	1	2	
70	F-12	H	5548	褐灰岩	128	88	46	660	1	-	1	2	2	B	○
71	F-12	H	5559	褐灰岩	120	73	60	709	-	-	1	1	2	B	
72	F-12	H	5560	褐灰岩	104	86	62	715	1	-	1	4	1	2	○
73	F-12	H	5566	褐灰岩	81	46	32	121	-	-	1	1	2	B	
74	F-12	H	5645	褐灰岩	(72)	59	46	(226)	-	-	1	1	2	B	
75	F-12	H	5877	褐灰岩	102	89	45	440	1	-	1	1	1	2	5
76	F-12	H	5928	褐灰岩	(63)	57	52	212	-	-	1	2	2	B	
77	F-12	H	6286	褐灰岩	77	64	42	241	1	-	1	1	1	2	5
78	F-12	H	6307	褐灰岩	97	87	51	596	-	-	1	1	1	2	B

79	F-15	III	6409	銀灰石	97	77	59	546	2	3	1	1	1	1	2-B	イ		94
80	F-15	III	6411	銀灰石	75	71	56	322	2	-	-	-	-	-	2-B	テ		
81	F-15	III	6501	銀灰石	56	72	43	355	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
82	F-15	III	6529	銀灰石	101	82	48	493	-	-	-	-	-	-	1-B	テ		
83	F-15	III	6683	銀灰石	110	87	54	687	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
84	F-15	III	6858	銀灰石	113	67	41	380	1	-	-	-	-	-	2-B	テ	*	
85	F-15	III	6908	銀灰石	100	75	39	323	2	-	-	-	-	-	2-B	テ	*	
86	F-15	III	6916	銀灰石	101	71	61	569	2	3	1	-	-	-	2-B	テ		
87	F-15	III	6924	銀灰石	89	66	42	331	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
88	F-15	III	6994	銀灰石	93	83	49	509	2	3	1	-	-	-	1-B	テ		
89	F-15	III	7003	銀灰石	103	83	45	494	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
90	F-15	III	7035	銀灰石	93	84	49	491	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
91	F-15	III	7036	銀灰石	100	84	51	561	1	-	-	-	-	-	1-B	テ		
92	F-15	III	7038	銀灰石	98	79	43	570	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
93	F-15	III	7043	銀灰石	(65)	86	52	(266)	-	-	-	-	-	-	1-B	テ		
94	F-15	III	7072	銀灰石	116	76	47	476	2	-	-	-	-	-	2-B	テ		
95	F-15	III	7083	銀灰石	116	78	53	581	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
96	F-15	III	7100	銀灰石	111	70	58	619	1	-	-	2	1	2-B	テ			
97	F-15	III	7145	銀灰石	84	79	39	325	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
98	F-15	III	7284	銀灰石	101	76	40	341	4	-	-	-	-	-	2-B	イ		
99	F-15	III	7298	銀灰石	117	80	59	790	-	-	-	-	-	-	1-B	テ		
100	F-15	III	7475	銀灰石	108	94	50	546	1	-	-	-	-	-	1-B	イ		
101	F-15	III	7681	銀灰石	97	70	52	414	2	-	1	-	-	-	2-B	テ		
102	F-15	III	7682	銀灰石	95	69	41	387	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
103	F-14	III	5396	銀灰石	98	82	55	538	2	-	1	1	1	2-B	イ			
104	F-14	III	5762	銀灰石	96	80	48	414	1	-	-	2	1	2-B	テ			
105	F-14	III	6992	銀灰石	95	53	42	269	1	-	1	2	1	2-B	イ			
106	F-15	III	4772	銀灰石	107	78	57	474	2	1	2	1	1	2-B	テ			
107	F-15	IV	7771	銀灰石	144	91	71	1200	-	4	-	1	1	1	2-B	テ		
108	F-16	II	34	銀灰石	53	49	24	73	1	-	-	-	-	-	1-B	イ		
109	F-16	IV	6736	銀灰石	(72)	73	48	(255)	2	-	1	-	-	-	1-B	イ		
110	F-16	IV	7560	銀灰石	92	91	56	607	-	-	-	1	1	1	2-B	テ		
111	F-16	III	7573	銀灰石	(51)	79	57	345	-	-	-	1	1	2-B	テ			
112	F-16	III	*	銀灰石	118	110	74	1194	-	-	-	1	1	1	2-B	テ		
113	F-17	IV	40	銀灰石	94	69	46	319	2	6	1	-	-	-	2-B	テ		
114	F-17	IV	7898	銀灰石	110	64	49	390	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
115	G-9	III	4100	銀灰石	88	78	45	391	2	-	1	-	-	-	2-B	テ		
116	G-9	III	6204	銀灰石	(111)	62	32	(472)	2	-	-	-	-	-	2-B	テ		
117	G-9	III	6205	銀灰石	105	45	46	245	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
118	G-9	III	6358	銀灰石	96	84	45	448	-	-	-	2	1	2-B	テ			
119	G-9	III	6608	銀灰石	93	77	(47)	(336)	1	-	-	-	-	-	2-B	テ		
120	G-9	III	6679	銀灰石	96	59	58	394	-	-	-	-	-	-	2-B	テ		
121	G-9	III	6754	銀灰石	91	57	36	242	-	-	-	2	1	2-B	テ			
122	G-9	III	6756	銀灰石	95	58	81	312	-	-	-	2	1	2-B	テ			
123	G-10	IV	3715	銀灰石	128	67	67	598	-	-	-	2	1	2-B	テ			
124	G-11	IV	5575	銀灰石	101	64	47	274	-	-	-	2	1	2-B	テ			
125	G-11	IV	5576	銀灰石	25	47	25	(105)	-	-	-	1	-	-	2-B	テ		
126	G-11	III	3368	銀灰石	(59)	77	43	(257)	-	-	-	1	-	-	2-B	テ		
127	G-11	III	3385	銀灰石	162	75	46	441	2	-	1	-	-	-	2-B	テ		
128	G-11	III	3440	銀灰石	65	57	43	149	1	-	-	-	-	-	2-B	テ		
129	G-12	III	165	銀灰石	99	95	62	738	-	-	-	2	1	2-B	テ			
130	G-12	III	166	銀灰石	110	73	56	586	-	-	-	2	1	2-B	テ			
131	G-12	III	167	銀灰石	116	95	54	783	1	-	-	1	1	2-B	テ			
132	G-12	III	174	銀灰石	107	65	50	388	1	-	-	1	2	2-B	テ			
133	G-12	III	2241	銀灰石	101	74	36	340	4	-	4	1	1	2-B	テ			
134	G-12	III	2462	銀灰石	99	71	45	347	-	-	-	2	-	-	2-B	テ		
135	G-12	III	2568	銀灰石	63	96	42	(383)	2	-	1	-	-	-	2-B	テ		
136	G-12	III	2673	銀灰石	99	81	61	583	-	-	-	2	1	2-B	テ			
137	G-12	III	2929	銀灰石	161	65	48	384	1	-	1	-	-	-	2-B	テ		
138	G-12	III	3084	銀灰石	82	66	57	346	1	3	-	2	2	2-B	テ			
139	G-12	III	4469	銀灰石	86	63	36	243	1	-	-	1	1	2-B	テ			
140	G-12	III	4492	銀灰石	142	67	37	470	-	-	-	1	1	2-B	テ			
141	G-12	III	7221	銀灰石	63	59	37	169	1	-	1	1	1	2-B	テ			
142	G-12	III	7750	銀灰石	67	62	45	200	1	-	-	1	1	2-B	テ			
143	G-12	IV	7780	銀灰石	114	68	48	490	2	-	-	2	2	2-B	テ			
144	G-13	III	186	銀灰石	163	101	53	697	1	-	1	1	1	2-B	イ			
145	G-13	III	3228	銀灰石	162	84	37	586	-	-	-	1	1	2-B	テ			
146	G-13	III	4357	銀灰石	105	94	45	549	-	-	-	2	1	2-B	テ			
147	G-13	III	4361	銀灰石	98	80	51	513	2	-	-	1	1	2-B	イ			
148	G-14	IV	6894	銀灰石	(96)	(67)	(28)	(144)	1	-	-	1	1	2-B	テ			
149	G-14	III	*	銀灰石	70	59	41	199	-	-	-	2	-	-	2-B	テ		
150	G-5	III	374	銀灰石	90	80	38	326	2	-	2	-	-	-	2-B	テ	*	
151	G-5	III	708	銀灰石	106	88	46	614	1	-	2	-	-	-	2-B	テ	*	
152	G-5	III	758	銀灰石	118	91	56	697	-	-	-	2	-	-	2-B	テ	*	
153	G-5	III	2242	銀灰石	118	94	62	721	-	-	-	1	1	2-B	テ	*		
154	G-6	III	2341	銀灰石	67	65	48	(289)	-	-	-	1	1	2-B	テ	*		
155	G-6	III	385	銀灰石	82	77	54	(414)	2	1	-	-	-	-	2-B	テ	*	
156	G-6	III	418	銀灰石	109	85	49	(584)	-	-	-	1	1	2-B	テ	*		
157	G-6	III	439	銀灰石	87	60	34	310	-	-	-	1	1	2-B	テ	*		
158	G-6	III	502	銀灰石	72	63	34	183	-	-	-	1	1	2-B	テ	*		
159	G-6	III	506	銀灰石	(84)	72	79	(286)	1	-	1	1	1	2-B	テ	*		
160	G-6	III	654	銀灰石	86	(67)	(45)	(248)	-	-	-	1	1	2-B	テ	*		
161	G-6	III	775	銀灰石	100	70	49	344	2	2	2	-	-	-	2-B	イ		
162	G-6	III	5032	銀灰石	58	72	38	141	2	-	-	1	1	2-B	テ	*		
163	G-6	III	7326	銀灰石	89	73	52	424	3	-	-	2	2	2-B	テ			
164	G-6	III	7327	銀灰石	82	74	39	294	2	-	4	1	-	-	2-B	イ		87

165	G-16	田	2530	麻袋石	21	88	73	45	378	1	-	-	-	2	2	ア	○	
166	G-16	IV	2580	麻袋石	21	84	96	17	138	2	-	-	-	1	2	ア	○	
167	G-17	田	472	麻袋石	21	80	46	481	2	-	-	-	1	2	ア	○		
168	G-17	田	473	麻袋石	21	80	73	52	727	2	-	-	-	1	2	ア	●	
169	G-17	田	788	麻袋石	21	83	42	496	1	-	-	-	-	-	ア	○		
170	G-17	田	798	麻袋石	21	63	83	254	-	-	2	2	2	2	ア	○		
171	G-17	田	803	麻袋石	21	70	15	411	2	4	1	1	1	2	ア	●		
172	G-17	田	941	麻袋石	21	110	95	55	673	1	-	-	-	1	2	ア	○	
173	G-17	田	951	麻袋石	21	100	30	42	152	-	-	-	-	1	2	ア	○	
174	G-17	田	1552	麻袋石	21	86	25	280	-	-	1	-	1	2	ア	○		
175	G-17	田	954	麻袋石	21	92	26	192	1	2	1	1	-	1	ア	○		
176	G-17	田	955	麻袋石	21	77	63	36	225	1	2	1	1	-	1	イ	○	
177	G-17	田	956	麻袋石	21	122	92	11	437	2	-	-	-	1	2	ア	○	
178	G-17	田	2524	麻袋石	21	100	11	541	-	-	1	-	1	2	ア	○		
179	G-17	田	2535	麻袋石	21	30	77	14	327	-	-	-	-	1	2	ア	○	
180	G-17	田	2786	麻袋石	21	97	71	50	432	-	-	-	-	1	2	ア	○	
181	G-18	田	879	麻袋石	21	108	89	68	1400	-	-	-	-	2	2	ア	○	
182	G-18	田	1983	麻袋石	21	102	94	80	976	-	-	-	-	1	2	ア	○	
183	G-18	田	1987	麻袋石	21	91	65	13	156	1	1	1	1	-	1	2	ア	○
184	G-18	田	1988	麻袋石	21	75	82	39	1510	1	1	1	1	-	1	2	ア	○
185	G-18	田	2201	麻袋石	21	85	41	51	910	1	1	1	1	-	1	2	ア	○
186	II-2	田	2772	麻袋石	21	26	79	12	246	2	-	2	1	1	2	ア	○	
187	II-2	田	2952	麻袋石	21	123	110	80	1000	-	-	-	-	1	2	ア	○	
188	II-2	田	3031	麻袋石	21	120	88	67	651	3	-	2	1	1	2	ア	○	
189	II-11	田	3016	麻袋石	21	108	85	25	427	-	-	-	-	1	2	ア	○	
190	II-11	田	4462	麻袋石	21	105	97	16	599	2	-	2	1	1	2	ア	○	
191	II-11	田	4538	麻袋石	21	95	89	29	277	1	4	1	1	-	1	2	ア	○
192	II-12	田	6725	麻袋石	21	86	66	17	347	-	-	-	-	1	2	ア	○	
193	II-12	田	6726	麻袋石	21	94	68	29	756	-	-	-	-	1	2	ア	○	
194	II-12	田	2898	麻袋石	21	113	24	91	491	-	-	-	-	1	2	ア	○	
195	II-14	田	2521	麻袋石	21	52	62	54	593	1	-	1	1	2	2	ア	○	
196	II-14	田	2786	麻袋石	21	72	65	68	741	-	-	-	-	2	2	ア	○	
197	II-15	田	60	麻袋石	21	63	42	938	1	1	1	1	1	2	ア	○		
198	II-15	田	1194	麻袋石	21	105	75	62	686	2	-	1	1	1	2	ア	○	
199	II-15	田	1260	麻袋石	21	74	72	35	174	3	-	1	1	1	2	ア	○	
200	II-15	田	1355	麻袋石	21	120	88	44	916	-	-	-	-	1	2	ア	○	
201	II-15	田	1437	麻袋石	21	86	73	57	107	2	-	1	1	1	2	ア	○	
202	II-15	田	1517	麻袋石	21	92	89	18	450	1	-	1	1	-	1	2	ア	○
203	II-15	田	2216	麻袋石	21	91	57	31	161	1	4	1	1	1	2	ア	○	
204	II-15	田	2654	麻袋石	21	150	62	52	5741	2	-	1	1	2	2	ア	○	
205	II-15	田	2698	麻袋石	21	170	85	57	3135	-	-	-	-	2	2	ア	○	
206	II-15	田	3070	麻袋石	21	76	56	45	265	1	1	1	1	2	2	ア	○	
207	II-15	田	3112	麻袋石	21	64	51	213	1	3	1	1	2	2	ア	○		
208	II-15	田	3118	麻袋石	21	74	63	33	325	2	-	1	1	1	2	ア	○	
209	II-15	田	5765	麻袋石	21	82	52	35	510	1	-	1	1	2	2	ア	○	
210	II-15	田	5959	麻袋石	21	81	78	38	299	1	1	1	1	1	2	ア	○	
211	II-15	田	2348	麻袋石	21	88	67	45	307	2	-	1	1	1	2	ア	○	
212	II-15	田	2582	麻袋石	21	115	76	56	603	-	-	-	-	1	2	ア	○	
213	II-15	田	2570	麻袋石	21	141	106	71	1401	-	1	1	1	4	1	2	ア	○
214	II-15	田	2571	麻袋石	21	81	36	28	111	-	-	2	1	2	2	ア	○	
215	II-16	田	76	麻袋石	21	115	93	53	59	-	-	1	-	2	2	ア	○	
216	II-16	田	432	麻袋石	21	103	65	44	226	1	-	1	1	2	2	ア	○	
217	II-16	田	4428	麻袋石	21	114	51	49	505	-	-	1	-	1	2	ア	○	
218	II-16	田	2847	麻袋石	21	158	67	51	935	-	-	-	-	2	2	ア	○	
219	II-16	田	2905	麻袋石	21	65	55	55	151	-	-	-	-	2	2	ア	○	
220	II-16	田	3125	麻袋石	21	112	97	57	2002	-	-	1	-	1	2	ア	○	
221	II-16	田	3186	麻袋石	21	89	68	44	215	1	-	-	-	1	2	ア	○	
222	II-16	田	2779	麻袋石	21	68	62	48	327	-	-	-	-	2	2	ア	○	
223	II-16	田	2802	麻袋石	21	100	86	41	1246	1	-	1	1	2	2	ア	○	
224	II-16	田	2815	麻袋石	21	78	68	35	189	1	-	1	1	2	2	ア	○	
225	II-16	田	2956	麻袋石	21	76	46	42	121	-	-	-	-	1	2	2	ア	○
226	II-16	田	2957	麻袋石	21	93	76	47	262	-	1	1	1	2	2	ア	○	
227	II-16	田	2959	麻袋石	21	99	76	50	327	2	-	1	1	2	2	ア	○	
228	II-16	田	3151	麻袋石	21	108	97	57	717	-	-	-	-	1	2	ア	○	
229	II-16	田	3153	麻袋石	21	100	71	54	327	1	-	1	1	2	2	ア	○	
230	II-16	田	3154	麻袋石	21	98	56	53	164	-	-	-	-	2	2	ア	○	
231	II-16	田	3155	麻袋石	21	100	71	54	303	-	-	-	-	1	2	ア	○	
232	II-16	田	3156	麻袋石	21	86	80	53	326	-	-	-	-	1	2	ア	○	
233	II-16	田	3157	麻袋石	21	78	55	526	-	-	-	-	1	2	ア	○		
234	II-16	田	-	麻袋石	21	88	42	461	-	-	1	1	2	2	ア	○		
235	II-16	田	-	麻袋石	21	84	35	619	-	-	1	2	1	-	-	-		
236	II-16	田	-	麻袋石	21	100	82	45	342	-	-	1	1	2	2	ア	○	
237	II-17	田	906	麻袋石	21	114	78	40	3007	2	-	1	1	2	2	ア	○	
238	II-17	田	906	麻袋石	21	103	63	62	1296	1	-	2	1	2	2	ア	○	
239	II-17	田	11	麻袋石	21	110	93	69	750	6	2	7	1	1	2	2	ア	○
240	II-17	田	1109	麻袋石	21	109	91	45	750	6	2	7	1	1	2	2	ア	○
241	II-17	田	1119	麻袋石	21	117	97	50	705	-	-	1	1	2	2	ア	○	
242	II-17	田	1153	麻袋石	21	93	48	48	150	1	2	1	1	2	2	ア	○	
243	II-17	田	1154	麻袋石	21	72	57	57	2880	1	1	1	1	2	2	ア	○	
244	II-17	田	1155	麻袋石	21	112	42	48	118	3	2	2	1	1	2	2	ア	○
245	II-17	田	1160	麻袋石	21	106	46	67	996	-	-	1	1	2	2	ア	○	
246	II-17	田	1170	麻袋石	21	103	51	41	252	-	-	1	1	2	2	ア	○	
247	II-17	田	1171	麻袋石	21	102	46	55	558	-	-	1	1	2	2	ア	○	
248	II-17	田	1185	麻袋石	21	94	38	51	345	-	-	1	1	2	2	ア	○	
249	II-17	田	1194	麻袋石	21	97	46	49	766	2	-	1	1	1	2	ア	○	
250	II-17	田	1194	麻袋石	21	63	29	73	187	2	-	1	1	1	2	ア	○	

251	1-17	出	1850	葛底子	93	73	41	1743	1	-	1	1	1	2-2-H	ア	
252	1-17	出	1910	葛底子	97	65	39	644	1	-	1	1	1	2-2-H	ア	
253	1-17	出	1911	葛底子	94	75	45	308	-	-	1	-	-	2-2-H	ウ	
254	1-17	出	2012	葛底子	92	65	33	388	1	1	1	1	1	2-2-H	ウ	
255	1-17	出	2012	葛底子	101	90	44	518	-	-	1	-	-	1-1-B	ア	
256	1-17	出	2007	葛底子	126	105	65	365	1	-	1	-	-	2-2-H	ア	
257	1-17	出	2081	葛底子	106	51	34	262	2	-	1	-	-	-	イ	
258	1-17	出	IV	5991	葛底子	98	72	69	554	-	-	1	1	1	2-2-H	ア
259	H-17	出	5116	葛底子	93	71	55	367	1	1	1	1	1	-	イ	
260	H-17	出	7427	葛底子	81	61	78	43	373	3	-	1	1	1	2-2-H	ア
261	H-18	-	-	葛底子	90	60	41	356	-	-	1	-	-	1-2-B	ア	
262	H-18	-	-	葛底子	92	66	49	521	1	-	1	1	1	1-2-B	ア	
263	H-18	出	1962	葛底子	76	58	38	225	-	-	1	1	1	-	ア	
264	H-18	出	341	葛底子	135	97	72	1900	1	-	1	-	-	1-2-B	イ	
265	H-18	出	383	葛底子	108	74	69	619	1	-	1	-	-	2-2-H	ウ	
266	H-18	出	384	葛底子	92	81	47	385	3	-	2	2	2	1-2-B	イ	
267	H-18	出	1443	葛底子	102	88	51	504	-	-	1	-	-	1-2-B	ア	
268	H-18	出	1066	葛底子	102	76	55	561	1	-	1	-	-	1-2-B	ア	
269	H-18	出	2372	葛底子	82	71	46	134	1	1	1	1	1	1-2-B	ア	
270	H-18	出	2479	葛底子	96	70	46	134	1	1	1	1	1	1-2-B	ア	
271	H-18	出	2480	葛底子	102	75	42	3411	2	2	2	2	2	1-2-B	ア	
272	H-18	出	5771	葛底子	53	51	45	454	-	-	1	1	1	1-2-B	ア	
273	H-18	出	1625	葛底子	94	76	46	427	-	-	1	-	-	1-2-B	ア	
274	H-18	出	2214	葛底子	88	55	31	645	1	-	3	1	1	1-2-B	ウ	
275	H-18	出	2675	葛底子	104	83	51	501	-	-	1	-	-	1-2-B	ア	
276	H-18	出	3181	葛底子	129	107	58	1798	1	-	2	1	1	2-2-H	ア	
277	H-18	出	3210	葛底子	103	71	64	524	1	-	1	-	-	2-2-H	ウ	
278	H-18	出	3325	葛底子	95	60	36	222	2	-	1	1	1	2-2-H	ア	
279	H-18	出	2165	葛底子	91	89	45	(330)	1	-	1	1	1	1-2-B	ア	
280	H-18	出	7159	葛底子	94	89	41	151	1	-	1	1	1	2-2-B	ア	
281	H-18	出	7168	葛底子	89	36	36	568	-	-	1	-	-	1-2-B	ア	
282	H-18	出	7170	葛底子	87	43	49	3	1	1	1	1	2-2-B	ア		
283	H-18	出	IV	2172	葛底子	77	47	47	1247	1	-	1	-	-	1-2-B	ア
284	H-18	-	-	-	93	34	274	-	-	1	-	-	1-2-B	ア		
285	H-18	出	2119	葛底子	117	91	56	621	1	-	1	-	-	2-2-H	ア	
286	H-18	出	IV	5991	葛底子	82	58	37	257	-	-	1	-	-	2-2-H	ウ
287	1-19	出	-	-	92	44	49	651	-	-	2	-	-	1-2-B	ア	
288	1-19	出	1841	葛底子	110	58	38	911	1	-	1	1	1	1-2-B	ア	
289	1-19	出	1842	葛底子	97	67	51	819	1	-	1	1	1	1-2-B	ウ	
290	1-19	出	1843	葛底子	96	46	45	217	2	-	1	1	1	1-2-B	ア	
291	1-19	出	1844	葛底子	94	63	50	491	1	-	1	1	1	2-2-H	ア	
292	1-19	出	1845	葛底子	109	57	45	500	1	-	1	1	1	2-2-H	ア	
293	1-19	出	2	酒店店	95	69	53	199	2	-	1	1	1	2-2-H	ア	
294	F.O-1	出	1425	葛底子	91	61	38	508	1	1	1	1	1	2-2-H	イ	

50125

No.	出露地	層位	遺跡番号	石	目	古生代		用(量)	分類	測定	大體	地圖
						枚	個					
1	SK-3	+	6750	砂岩	(34)	(41)	16	(24)	2-A	馬足	b	953上層合
2	E-12	出	6863	砾石岩	(27)	(23)	65	(4)	2-B	-	c	6863上層合
3	E-13	出	4861	泥質岩	66	47	22	(5)	2-C	-	d	
4	E-13	出	5729	鰐鱗岩	118	61	25	321	1-A	魚	e	85
5	E-13	出	5741	鰐鱗岩	74	43	25	(19)	2-C	-	d	
6	E-13	出	6425	鰐鱗岩	52	39	15	(8)	2-C	平行	b	6425上層合
7	E-13	出	6426	鰐鱗岩	(17)	12	28	(50)	2-C	平行	a	6426上層合
8	G-12	出	2965	鰐鱗岩	52	32	25	(5)	2-C	-	d	
9	G-16	出	621	鰐鱗岩	(63)	32	22	(4)	1-A	-	d	朝
10	G-16	出	270	鰐鱗岩	(68)	46	21	(16)	2-A	-	a	79
11	G-16	出	322	鰐鱗岩	(60)	40	34	(26)	2-A	-	d	
12	G-17	出	653	鰐鱗岩	(57)	61	30	(17)	2-C	-	a	82
13	G-17	出	1700	鰐鱗岩	33	(62)	20	(21)	2-C	-	a	953上層合
14	G-18	出	306	鰐鱗岩	(62)	41	21	(9)	2-C	-	a	80
15	H-16	出	1719	鰐鱗岩	32	19	69	2-A	-	a		
16	H-17	出	1802	鰐鱗岩	(52)	(13)	(7)	16	2-C	-	e	953上層合

六

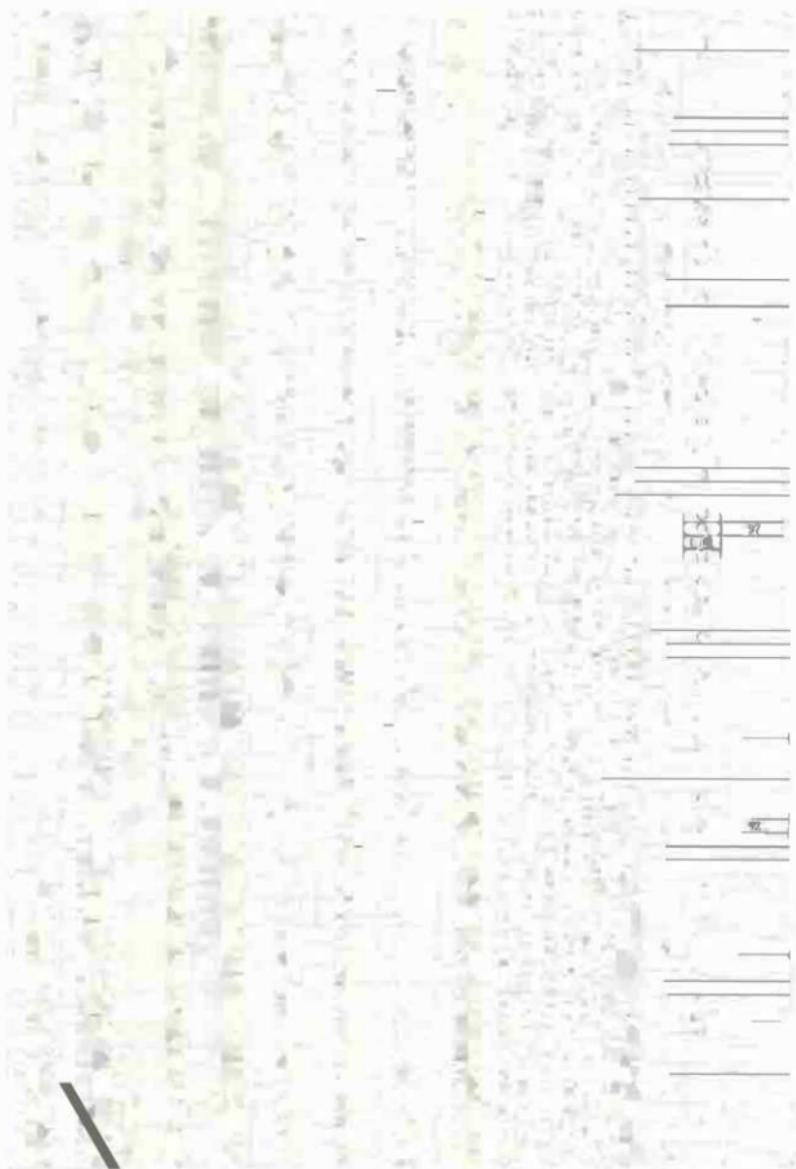
Sr.	出土點	層級	地質學名	有 題	± 5.5		標	記	重 量 (g)	度	目
					± 5	± 5					
1	F-12	Ⅲ	560	鐵礦岩	216	305	110	1540	●	103	
2	F-14	Ⅲ	4683	鈣長石	320	312	114	1470	○	102	
3	F-15	Ⅲ	4650	鈣長石	245	245	124	1475	○	102	
4	G-12	Ⅳ	4105	鐵礦岩	404	292	97	1620	○	102	
5	G-16	Ⅳ	18.21	鐵礦岩	294	222	109	1370	○	103	
6	H-16	Ⅳ	4993	鐵礦岩	291	169	75	1850	○	101	
7	H-14	Ⅳ	1208	鐵礦岩	188	164	65	2900	○	100	

11

No.	地點	解	地圖編號	行	列	大			風		向	雨	水	雨	水	分	質	打	備
						數	量	率	風	向	雨	水	雨	水	雨	水	分	質	
1	E-9	日	3308	-	-	159	76	63	771	-	-	-	-	-	1	2	2-A	○	
2	E-9	-	-	-	-	119	67	50	442	-	-	-	-	-	3	2	2-B	○	
3	E-9	-	-	-	-	91	53	53	603	-	-	-	-	-	1	2	2-H		
4	E-9	-	-	-	-	73	46	56	565	-	-	-	-	-	1	2	2-B		
5	E-16	田	3682	-	-	154	72	76	1133	-	-	-	-	-	1	2	2-C		
6	F-10	田	3072	-	-	74	37	23	829	-	-	-	-	-	2	2	2-A	○	90
7	F-13	田	3619	-	-	82	43	43	899	1	2	-	-	-	1	2	2-B	○	

6	E-11	501	骨刀身	99	30	45	463	2	1	1	1	2-R	4
9	E-12	525	骨刀身	92	64	46	333	1	1	1	1	2-R	4
10	E-12	526	骨刀身	115	91	66	873	1	1	1	1	2-	○
11	E-12	527	骨刀身	112	59	37	305	3	1	1	1	2-	○
12	E-12	528	骨刀身	141	77	63	666	5	1	2	1	2-R	4
13	E-12	529	骨刀身	75	69	42	281	1	1	1	1	1-R	7
14	E-12	530	骨刀身	111	91	58	748	1	1	1	1	2-	○
15	E-12	531	骨刀身	103	74	41	780	2	1	1	1	2-R	4
16	E-12	532	骨刀身	115	75	21	150	1	1	1	1	2-B	○
17	E-12	533	骨刀身	85	68	53	352	1	1	1	1	2-	○
18	E-12	534	骨刀身	116	75	52	180	1	1	1	1	2-B	○
19	E-12	535	骨刀身	103	89	45	505	1	1	1	1	2-B	○
20	E-12	536	骨刀身	100	80	45	(358)	2	1	1	2	2-	○
21	E-12	537	骨刀身	151	74	34	360	1	1	1	1	2-R	4
22	E-12	538	骨刀身	95	79	51	342	1	1	1	1	2-B	○
23	E-12	539	骨刀身	106	80	29	152	1	1	1	1	2-B	○
24	E-12	540	骨刀身	121	83	23	200	2	1	1	1	2-B	○
25	E-12	541	骨刀身	100	76	21	231	1	1	1	1	2-B	○
26	E-12	542	骨刀身	75	29	33	330	1	1	1	1	2-B	○
27	E-12	543	骨刀身	103	51	33	213	1	1	1	1	2-B	○
28	E-12	544	骨刀身	100	51	49	121	1	1	1	1	2-B	○
29	E-12	545	骨刀身	100	74	41	63	1	1	1	1	2-B	○
30	E-12	546	骨刀身	100	72	45	280	2	1	1	1	2-B	○
31	E-12	547	骨刀身	105	78	59	294	2	1	1	1	2-B	○
32	E-12	548	骨刀身	96	70	19	425	1	1	1	1	2-B	○
33	E-12	549	骨刀身	106	87	54	248	1	1	1	1	2-B	○
34	E-12	550	骨刀身	106	146	53	2000	1	1	1	1	2-B	○
35	E-12	551	骨刀身	29	67	44	285	1	1	1	1	2-B	○
36	E-12	552	骨刀身	102	90	29	112	1	1	1	1	2-B	○
37	E-12	553	骨刀身	101	84	58	569	1	1	1	1	2-B	○
38	E-12	554	骨刀身	119	83	59	513	1	1	1	1	2-B	○
39	E-12	555	骨刀身	116	85	55	505	1	1	1	1	2-B	○
40	E-9	560	骨刀身	111	80	51	372	1	1	1	1	2-B	○
41	E-9	561	骨刀身	126	85	81	570	1	1	1	1	2-B	○
42	E-9	562	骨刀身	111	81	81	534	2	1	1	1	2-B	○
43	E-9	563	骨刀身	101	58	35	301	1	1	1	1	2-B	○
44	F-10	564	骨刀身	128	80	47	646	1	1	1	1	2-B	○
45	F-10	565	骨刀身	100	80	47	112	1	1	1	1	2-B	○
46	F-10	566	骨刀身	100	83	38	(383)	2	1	1	1	2-B	○
47	F-10	567	骨刀身	78	35	35	247	1	1	1	1	1-R	4
48	F-10	568	骨刀身	87	67	65	330	1	1	1	1	2-B	○
49	F-11	569	骨刀身	80	46	22	70	1	1	1	1	2-B	○
50	F-11	570	骨刀身	111	50	25	491	1	1	1	1	2-B	○
51	F-11	571	骨刀身	115	52	25	492	1	1	1	1	2-A	○
52	F-11	572	骨刀身	57	14	31	112	1	1	1	1	2-A	○
53	F-11	573	骨刀身	87	61	35	250	1	1	1	1	2-B	○
54	F-11	574	骨刀身	78	27	25	249	1	1	1	1	2-B	○
55	F-11	575	骨刀身	89	19	43	227	1	1	1	1	2-B	○
56	F-12	576	骨刀身	114	43	25	165	1	1	1	1	2-B	○
57	F-12	577	骨刀身	116	71	57	469	2	1	1	1	2-B	○
58	F-12	578	骨刀身	116	25	29	262	1	1	1	1	2-B	○
59	F-12	579	骨刀身	118	21	21	301	3	1	1	1	2-B	○
60	F-12	580	骨刀身	109	73	21	611	1	1	1	1	2-B	○
61	F-12	581	骨刀身	100	135	36	479	2	1	1	1	2-B	○
62	F-12	582	骨刀身	94	87	35	479	1	1	1	1	2-B	○
63	F-12	583	骨刀身	102	95	63	344	1	1	1	1	2-B	○
64	F-12	584	骨刀身	104	56	35	665	1	1	1	1	2-B	○
65	F-12	585	骨刀身	104	77	58	441	1	1	1	1	2-B	○
66	F-12	586	骨刀身	119	48	41	278	1	1	1	1	2-B	○
67	F-12	587	骨刀身	91	41	41	444	1	1	1	1	2-B	○
68	F-12	588	骨刀身	114	42	39	592	1	1	1	1	2-B	○
69	F-12	589	骨刀身	113	29	52	598	1	1	1	1	2-B	○
70	F-12	590	骨刀身	97	89	46	660	1	1	1	1	2-H	○
71	F-12	591	骨刀身	104	78	69	79	1	1	1	1	2-H	○
72	F-12	592	骨刀身	104	87	62	710	1	1	1	1	2-H	○
73	F-12	593	骨刀身	81	45	32	121	1	1	1	1	2-B	○
74	F-12	594	骨刀身	72	59	46	(26)	1	1	1	1	2-B	○
75	F-12	595	骨刀身	102	89	35	440	1	1	1	1	2-B	○
76	F-12	596	骨刀身	103	57	52	216	1	1	1	1	2-B	○
77	F-12	597	骨刀身	77	61	25	241	1	1	1	1	2-B	○
78	F-12	598	骨刀身	97	89	31	356	1	1	1	1	2-B	○
79	F-12	599	骨刀身	79	89	46	560	2	1	1	1	2-H	○
80	F-12	600	骨刀身	75	21	59	525	1	1	1	1	2-H	○
81	F-12	601	骨刀身	74	43	55	505	1	1	1	1	2-B	○
82	F-12	602	骨刀身	101	82	48	693	1	1	1	1	2-B	○
83	F-12	603	骨刀身	110	82	54	687	1	1	1	1	2-B	○
84	F-12	604	骨刀身	101	62	41	540	1	1	1	1	2-B	○
85	F-12	605	骨刀身	101	75	29	320	2	1	1	1	2-B	○
86	F-12	606	骨刀身	97	89	46	521	1	1	1	1	2-B	○
87	F-12	607	骨刀身	91	42	19	500	2	1	1	1	2-B	○
88	F-12	608	骨刀身	102	67	45	505	1	1	1	1	2-B	○
89	F-12	609	骨刀身	102	67	45	505	1	1	1	1	2-B	○
90	F-12	610	骨刀身	95	84	50	621	1	1	1	1	2-B	○
91	F-12	611	骨刀身	101	81	51	561	1	1	1	1	2-B	○
92	F-12	612	骨刀身	98	79	43	570	1	1	1	1	2-B	○
93	F-12	613	骨刀身	101	89	52	(366)	1	1	1	1	2-B	○

81	F-12	III	2972	蜜灰岩	115	76	67	109	2	1	1	1	1	2-B	ア
95	F-12	III	7081	蜜灰岩	116	78	59	581	2	1	1	2	1	2-B	イ
96	F-12	III	7120	蜜灰岩	111	76	56	619	2	1	1	2	1	2-B	ア
97	F-12	III	7145	蜜灰岩	81	79	56	375	2	1	1	1	1	2-B	ア
98	F-12	III	7281	蜜灰岩	101	76	46	341	4	3	1	1	2	2-B	ア
99	F-12	III	7295	蜜灰岩	117	80	58	290	-	-	1	1	1	2-B	ア
100	F-12	III	7472	蜜灰岩	108	81	50	546	1	-	1	1	2	2-B	イ
101	F-12	III	7581	蜜灰岩	87	50	57	414	2	1	2	2	2	2-B	ウ
102	F-12	III	7682	蜜灰岩	95	60	41	392	-	-	1	2	2	2-B	ア
103	F-12	III	7695	蜜灰岩	98	82	55	558	2	1	1	1	2	2-M	ア
104	F-12	III	7698	蜜灰岩	98	80	48	314	1	-	2	2	2	2-B	ア
105	F-12	III	7699	蜜灰岩	95	52	42	269	1	-	1	2	2	2-B	ア
106	F-12	III	7712	蜜灰岩	107	26	21	474	2	1	2	1	1	2-B	ア
107	F-12	III	7713	蜜灰岩	111	91	19	128	4	-	1	1	1	2-B	ア
108	F-12	III	7745	蜜灰岩	119	24	24	73	-	-	1	1	1	2-B	ア
109	F-12	IV	6726	蜜灰岩	21	57	48	257	2	1	-	1	1	1-B	ア
110	F-12	IV	7556	蜜灰岩	92	79	55	487	-	-	1	1	1	2-B	ア
111	F-12	IV	7573	蜜灰岩	(51)	79	57	345	-	-	1	1	1	1-B	ア
112	F-12	IV	7593	蜜灰岩	118	110	74	116	-	-	1	1	1	2-B	ア
113	F-12	IV	7604	蜜灰岩	94	69	46	316	2	1	1	1	1	2-B	ア
114	F-12	IV	7698	蜜灰岩	110	61	49	98	2	-	1	1	1	2-B	ア
115	G-9	III	4102	蜜灰岩	88	78	45	360	2	1	-	2	2	2-B	ア
116	G-9	III	4104	蜜灰岩	(111)	(72)	56	(472)	2	-	-	1	-	2-B	ア
117	G-9	III	4285	蜜灰岩	105	45	45	415	-	-	1	1	1	2-B	ア
118	G-9	III	4559	蜜灰岩	98	81	45	449	-	-	2	1	2	2-B	ア
119	G-9	III	4668	蜜灰岩	93	77	47	147	-	-	1	1	1	2-B	ア
120	G-9	III	4679	蜜灰岩	96	58	78	294	-	-	1	1	1	2-B	ア
121	G-9	III	4754	蜜灰岩	91	57	36	254	2	1	1	1	1	2-B	ア
122	G-9	III	4956	蜜灰岩	95	81	52	411	1	-	1	1	1	2-B	ア
123	G-10	III	5971	蜜灰岩	133	108	67	1200	1	-	2	2	2	2-B	ア
124	G-11	IV	3247	蜜灰岩	101	64	47	374	2	-	1	1	1	2-B	ア
125	G-11	IV	3367	蜜灰岩	147	63	29	105	2	1	1	1	1	2-B	ア
126	G-11	IV	3368	蜜灰岩	(58)	77	43	257	1	-	1	1	1	2-B	ア
127	G-11	IV	3385	蜜灰岩	102	75	46	441	2	1	-	2	2	2-B	ア
128	G-11	IV	3441	蜜灰岩	65	53	43	149	1	-	2	2	2	2-B	ア
129	G-12	IV	1657	蜜灰岩	98	95	62	736	-	-	2	2	2	2-B	ア
130	G-12	IV	1658	蜜灰岩	110	73	56	586	-	-	2	2	2	2-B	ア
131	G-12	IV	1659	蜜灰岩	116	96	51	783	1	-	1	1	2	2-B	ア
132	G-12	IV	1747	蜜灰岩	107	65	30	595	1	-	1	1	2	2-B	ア
133	G-12	IV	2221	蜜灰岩	101	74	30	340	4	4	2	1	2	2-B	ア
134	G-12	IV	2465	蜜灰岩	99	21	45	347	-	-	2	1	2	2-B	ア
135	G-12	IV	2525	蜜灰岩	63	36	41	(385)	2	1	1	1	1	2-B	ア
136	G-12	IV	2675	蜜灰岩	99	81	61	563	-	-	2	2	2	2-B	ア
137	G-12	IV	2742	蜜灰岩	101	66	46	251	1	-	1	1	2	2-B	ア
138	G-12	IV	3084	蜜灰岩	82	96	57	246	1	3	2	2	2	2-B	ア
139	G-12	IV	4116	蜜灰岩	85	61	56	243	1	-	1	1	2	2-B	ア
140	G-12	IV	4192	蜜灰岩	115	57	37	425	-	-	1	1	2	2-B	ア
141	G-12	IV	4247	蜜灰岩	67	57	37	169	1	-	1	1	2	2-B	ア
142	G-12	IV	4255	蜜灰岩	67	62	45	259	-	-	1	1	2	2-B	ア
143	G-12	IV	7789	蜜灰岩	114	66	36	490	2	-	1	1	2	2-B	ア
144	G-13	IV	1186	蜜灰岩	101	53	59	697	1	-	1	1	2	2-B	ア
145	G-12	IV	1238	蜜灰岩	102	84	57	589	-	-	1	1	2	2-B	ア
146	G-12	IV	1255	蜜灰岩	105	91	15	519	-	-	2	1	2	2-B	ア
147	G-12	IV	1261	蜜灰岩	98	30	51	513	2	-	1	1	2	2-B	ア
148	G-12	IV	5692	蜜灰岩	95	62	29	(144)	1	-	2	2	2	2-B	ア
149	G-13	IV	7	蜜灰岩	50	32	41	195	1	-	1	1	2	2-B	ア
150	G-13	IV	3573	蜜灰岩	90	80	38	326	2	2	1	1	2	2-B	ア
151	G-13	IV	7078	蜜灰岩	106	81	46	614	1	-	2	2	2	2-B	ア
152	G-13	IV	2558	蜜灰岩	115	91	55	709	-	-	2	2	2	2-B	ア
153	G-16	III	3442	蜜灰岩	108	81	62	741	1	-	2	1	2	2-B	ア
154	G-16	III	3444	蜜灰岩	77	65	48	(269)	1	-	1	1	2	2-B	ア
155	G-16	III	3485	蜜灰岩	77	77	54	624	1	2	1	-	1	2-B	ア
156	G-16	III	4119	蜜灰岩	121	85	19	(184)	-	-	1	1	2	2-B	ア
157	G-16	III	4149	蜜灰岩	64	54	54	310	-	-	1	1	1	2-B	ア
158	G-16	III	5025	蜜灰岩	73	81	34	163	-	-	1	1	1	2-B	ア
159	G-16	III	5058	蜜灰岩	(61)	73	39	286	1	-	1	1	1	2-B	ア
160	G-16	III	6554	蜜灰岩	86	671	(65)	(248)	-	-	1	1	1	2-B	ア
161	G-16	III	7775	蜜灰岩	109	40	36	344	2	2	2	1	1	2-B	ア
162	G-16	III	8012	蜜灰岩	581	72	38	141	2	-	1	1	2	2-B	ア
163	G-16	III	7526	蜜灰岩	891	73	32	624	3	-	2	2	1	2-B	ア
164	G-16	III	7527	蜜灰岩	82	82	74	284	2	4	1	-	1	2-B	ア
165	G-16	III	7530	蜜灰岩	68	73	45	328	1	-	1	1	2	2-B	ア
166	G-16	III	2590	蜜灰岩	32	86	47	260	2	-	1	1	2	2-B	ア
167	G-16	III	3472	蜜灰岩	76	80	36	461	2	-	1	1	2	2-B	ア
168	G-16	III	2591	蜜灰岩	124	75	55	227	-	-	1	1	2	2-B	ア
169	G-17	IV	2565	蜜灰岩	115	84	48	261	-	-	2	2	2	2-B	ア
170	G-17	IV	2598	蜜灰岩	99	83	42	361	-	-	2	2	2	2-B	ア
171	G-17	IV	6053	蜜灰岩	95	70	45	341	2	2	1	1	2	2-B	ア
172	G-17	IV	5941	蜜灰岩	110	33	25	673	1	-	1	1	2	2-B	ア
173	G-17	IV	951	蜜灰岩	100	89	65	652	-	-	1	1	2	2-B	ア
174	G-17	IV	8552	蜜灰岩	26	59	33	269	-	-	1	1	2	2-B	ア
175	G-17	IV	954	蜜灰岩	103	69	53	682	2	1	1	1	2	2-B	ア
176	G-17	IV	955	蜜灰岩	77	65	28	223	1	2	1	1	1	2-B	ア
177	G-17	IV	956	蜜灰岩	122	41	43	434	-	-	1	1	1	2-B	ア
178	G-17	IV	5254	蜜灰岩	109	100	41	511	1	-	1	1	2	2-B	ア
179	G-17	IV	7535	蜜灰岩	80	77	49	321	1	-	1	1	2	2-B	ア



		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
01		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
(2)		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	
因時		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z	

第8節 弥生土器その他

弥生土器（第63図1～13 図版24）

1は受け口状を呈する甕の口縁部片。端部には平坦面を有し、下端には棒状工具による刺突文が施文される。口縁外面には半截竹管による刺突文が認められる。わずかに残存する頭部には櫛描簾状文が認められる。2は1同様、受け口状の甕の口縁部片。端部には平坦面ではなく、外面のみ刺突文が認められる。3は甕の頭部片で櫛描簾状文が認められる。簾状文は、等間隔止めである。2点は簾状文下に振幅の短い波状文がわずかに残る。4・5・6・7・8・10は櫛描きによる横線文を有す甕頭部の破片資料。ただし横線文は間に粗密のある多連止め簾状文の可能性も否定できない。横線文の上下には細片のため1部のみにしか波状文は確認できない。9、11の2点は横位の櫛描波状文を有す甕の胴部片。刷毛整形の後、波状文を施している。波状文のは5本1組の単位で施文されている。12・13は底部。2点ともやや底部が突出気味である。12の外面には刷毛目、13の底部外面には木葉痕が認められる。

波状文・簾状文から本資料が中部高地に系譜をもつ弥生土器であることは明らかである。中部高地の弥生土器と比較すると次の点が指摘できる。

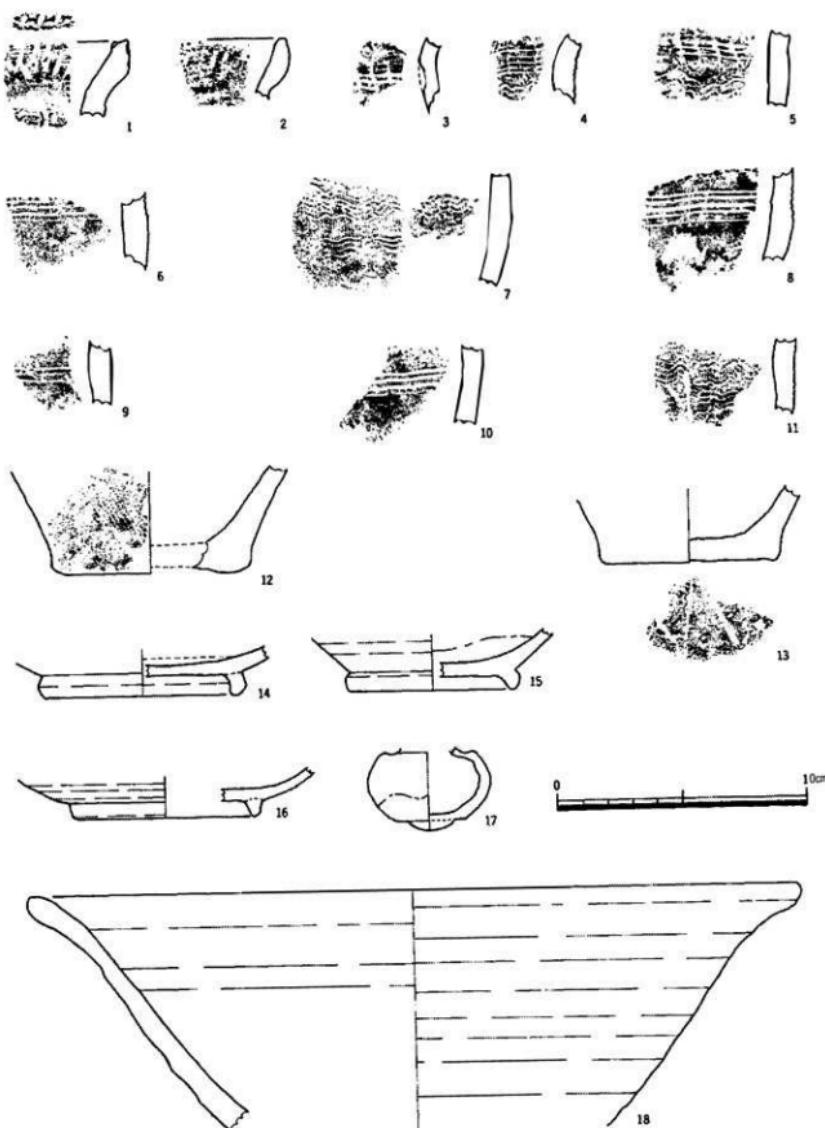
- ①簾状文に等間隔止めが認められ、口縁部が受け口状になる形態は中部高地の弥生中期（菜林式）に認められる特徴である。
- ②波状文及び等間隔止めにはならない甕頭部片資料などは弥生後期の特徴として指摘できる。
- ③胎土は中部高地のものとは全く異なり褐色を呈し、調整もミガキが認められず中部高地とは相違する特徴が認められる。
- ④受け口状の口縁端部下端に刺突を施す例は中部高地では認められず、むしろ東海地方の員田町式に類似する可能性がある。

以上の観点から推測すると本資料の時期は弥生中期末～弥生後期初頭の百瀬式に類似する資料と考えられるが、その一方では中部高地とは異なる特徴が認められどのような系譜をもつもののか検討する必要がある。現段階では資料が少なくその判断は不可能だが、資料の増加によって中部高地と飛驒との繋がりが解明されることが期待される。

（藤田英博）

中・近世遺物（第63図14～18 図版24）

14～16は灰釉陶器底部。高台の形態から光ヶ丘段階から大原段階までが想定できる。口縁部破片も10数点出土している。17は難倉時代末の灰釉小壺。18は難倉時代初期のものとされる。



第63図 弥生土器・中近世遺物

第5章 自然科学的分析

第1節 丸山遺跡出土琥珀分析報告

(財)元興寺文化財研究所 植田直見

分析の概要

1. 分析目的

丸山遺跡出土琥珀製品が、琥珀であるかどうかの確認と、産地同定を行う。

2. 使用機器・原理

- ・フーリエ変換型赤外分光光度計 (FT-IR) (日本電子㈱製 JIR-6000)
- ・赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し化合物の種類を同定する。

3. 分析方法・条件

- ・KBr 錠剤法・

(*KBr (臭化カルシウム) 錠剤法 試料を KBr と混合、圧縮し錠剤を作成して行う分析法)

- ・分解能 4 cm^{-1} 、検出器 TGS

分析結果

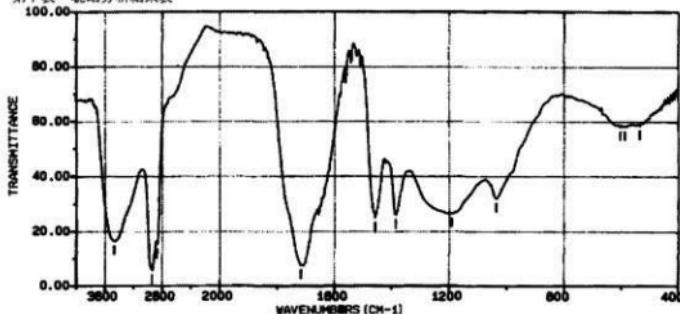
肉眼による観察では、全体的にどの部分も劣化しているが、その中でも特に劣化の顕著な部分とそうでない部分について FT-IR による分析を行った。その結果琥珀であることは確認できたが、産地同定に有効な $1800\text{~}800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収がかなり幅広く、顕著なピークが見られず、両者はほぼ同様なピークが見られた(1、2)。これは、肉眼観察と同様に、丸山遺跡出土琥珀が全体にかなり劣化が激しいことを示している。出土琥珀は、劣化していない部分の赤外吸収スペクトルが得られればその産地同定は可能である。しかし、劣化が激しいと、全体的に吸収はブロードになり特徴的なピークが消失し、新たに異なった位置にピークが表れることがある。そのため、産地の判明している琥珀から得られたピークとの比較が困難になる。

そこで、劣化部がより溶剤に溶けやすいとの推定より溶剤不溶部の FT-IR 分析を行った。(3)。その結果図 1、2 とは若干異なるピークが得られた。しかし、この結果も産地の判明している標準試料とは完全に一致しなかった。これは、この琥珀がかなり劣化が激しく構成成分のほとんどが変化しているためか標準とする主要な産地以外の少量産出地の琥珀であるか現在のところ確認は困難である。日本でも FT-IR 以外の分析法も行われているがその方法での産地の同定は今のところ出来ていない。劣化した琥珀の FT-IR 分析での同定は困難であることより、今後は FT-IR 以外の分析を試みることが必要であると考える。

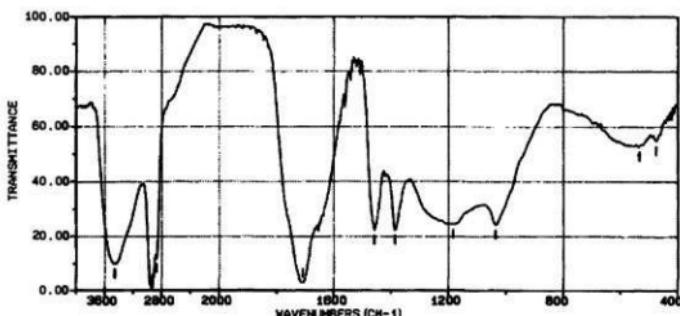
〈参考文献〉

寛賀照子 1976 「赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析」『考古学と自然科学』9

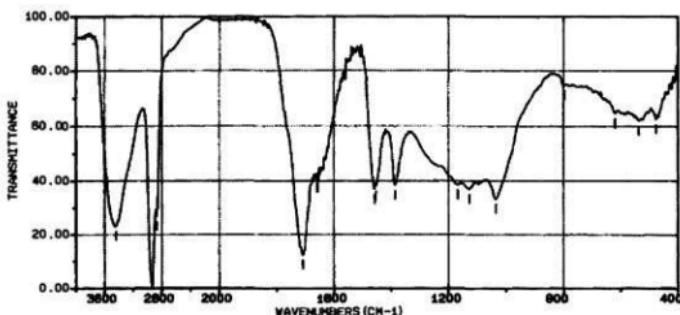
第7表 琥珀分析結果表



1. 劣化部分



2. 劣化部分（顯者）



3. エタノール抽出残部

第2節 丸山遺跡から出土した土壌に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと^①、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子^②、約5千年前のハーゼルナッツ種子^③に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した^④。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量とともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて丸山遺跡から出土した土壌の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

岐阜県大野郡丹生川村に所在する丸山遺跡はおよそ縄文時代中期初頭のものと推定されている。この遺跡の土壌SK-22内外から土壌試料を採取し分析した。試料No.1を土壌の底部中央部、No.2を土壌の外で数m離れた地点から、それぞれ採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料743と939gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を第8表に示す。抽出率は試料No.1が0.0029%、No.2が0.0019%、平均0.0024%であった。この値は全国各地の遺跡か

第8表 土壤試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試 料 名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	SK-22 底部中央部	742.9	21.5	0.0029
2	" 周辺部	938.9	18.3	0.0019

ら出土した土壤、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%の範囲内のものではあるが、低めであった。しかし、土壤内外の残存脂肪の抽出率を比較すると土壤試料No.1の方が、土壤外の試料No.2よりも若干高かった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

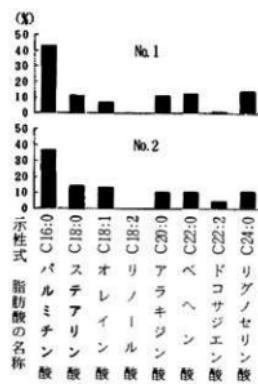
3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸（80:30:1）またはヘキサン-エーテル（85:15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽⁵⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を第9表に示す。残存脂肪から8種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16:0）、ステアリン酸（C18:0）、オレイン酸（C18:1）、リノール酸（C18:2）、アラキシン酸（C20:0）、ベヘン酸（C22:0）、リグノセリン酸（C24:0）の7種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成パターンを見ると、2試料がほぼ同一の組成パターンを示していた。このうち炭素数18までの中級脂肪酸は、主要な脂肪酸がパルミチン酸で、次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多かった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するため、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合が高い。リノール酸は主として植物種子、葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキシン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率が試料No.1で約37%、No.2で約31%であった。通常の遺跡出土土壤中のアラキシン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つ



第9表 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

の合計含有率は約4~10%であるから、2試料中での高級脂肪酸含有量は多かった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合がある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、丸山遺跡の試料中にはパルミチン酸が主要な脂肪酸として含まれており、高級脂肪酸も多いことがわかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第10表に示す。残存脂肪から21~25種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

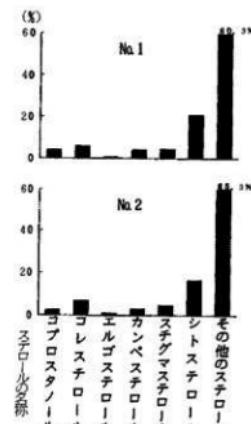
試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.1に約6%、No.2に約7%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2~6%分布している。従って、2試料中のコレステロール含有量は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールは試料No.1に約21%、No.2に約16%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはシトステロールは30~40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、2試料中のシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが試料No.1に約4%、No.2に約3%、スチグマステロールがNo.1に約4%、No.2に約5%分布していた。通常の遺跡出土土壤中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中に含まれているカンペステロール、スチグマステロール含有量は通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは2試料中に1%前後分布していた。この程度の量は土壤微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸もしくは糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1に約4%、No.2に約3%分布していた。コプロスタノールは通常の植物腐植土壤中には分布していないが、1%程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノール



第10表 試料中に残存する脂肪のステロール組成

はその分布により試料中の哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合があるが⁽⁶⁾、今回は含まれていても約4%以下そのため、それらの判定はできなかった。しかし、コプロスタノールがわずかではあるが含まれているということは、試料中に哺乳動物由来の脂肪が残存している可能性が若干あることを示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壤で0.6以上⁽⁷⁾、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる^(8,9)。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、分布比は試料No.1が0.28、No.2が0.42であった。従って、分布比から見る限りでは、2試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性が殆どない。

以上、丸山遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、すべて通常の遺跡出土土壤中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比も2試料ともに0.6以下で、試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が殆ど残存していないことを示唆していた。このことは試料中に哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールがわずかではあるが残存しており、試料中に哺乳動物由来の脂肪が残存している可能性が若干あるということと一致しない。コレステロール含有量を考えると、脂肪酸分析で多く含まれていた高級脂肪酸は植物体の表面を覆うワックスの構成成分由来のものである可能性が高い。このことは、残存する脂肪が植物腐植土に由来するものが多く、動物脂肪に由来するものがごく微量であることを示している。

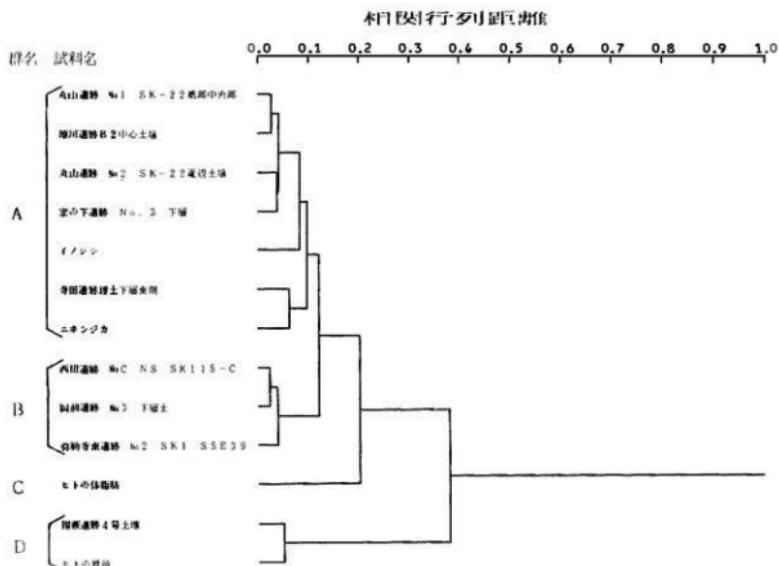
5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に同じ岐阜県内の遺跡で出土土壤に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料と類似していると判定した家の下遺跡⁽¹⁰⁾、西田遺跡⁽¹¹⁾、出土した埋甕に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪、もしくはヒトの胎盤試料と類似していると判定した岡前遺跡⁽¹²⁾、出土した土壤に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料と類似していると判定した弥勒寺東遺跡⁽¹³⁾、出土土器を効児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡⁽¹⁴⁾、出土土壤を土壤墓と判定した兵庫県寺田遺跡⁽¹⁵⁾、ヒトの体脂肪、出土土壤を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡⁽¹⁶⁾、ヒトの膏油、イノシシ、ニホンジカのような動物試料など、各種遺跡試料や現生動物試料などに残存する脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが第11表である。

表からわかるように、丸山遺跡の2試料は原川遺跡、家の下遺跡、寺田遺跡の試料やイノシシ、ニホンジカのような動物試料と共に相関行列距離0.1内でA群を形成し、よく類

第11表 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	5.77	20.73	0.28
2	6.90	16.43	0.42



第64図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

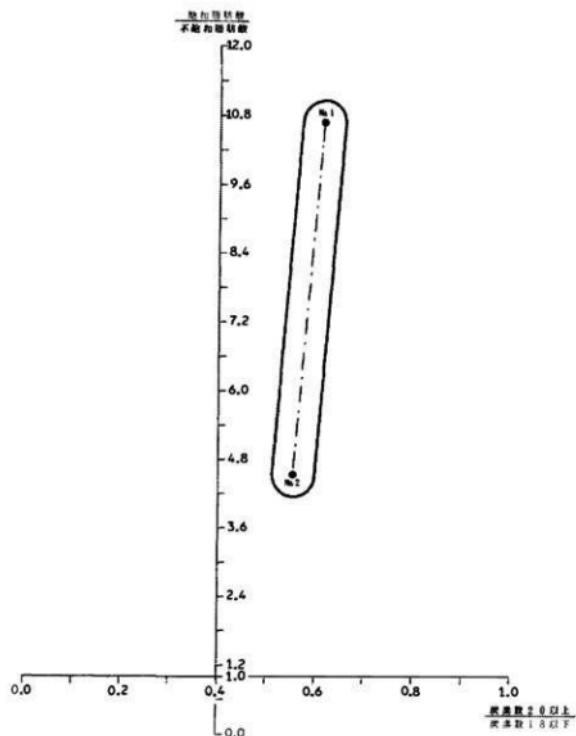
似ていた。他の対照試料はB-D群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.15以内の所にあり、互いに類似していた。C群もA、B群と樹状図全体からすれば同一の系統樹に属していた。

以上、丸山遺跡の2試料中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡やヒトの体脂肪試料、またイノシシ、ニホンジカのような動物試料の脂肪と類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壤試料の残存脂肪から求めた相関図を第64図に示す。図からわかるように、2試料は第1象限内の原点から離れたY軸寄りの所に分布した。この分布位置は通常は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆しているが、今回は炭素数



第65図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

20以上の高級脂肪酸が多かったためにそのような位置に分布したと考えられる。

以上、丸山遺跡の試料中に残存する脂肪は通常は高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等の特殊な部分に由来する傾向のものであるが、今回は植物体の表面を覆うワックスの構成成分である高級脂肪酸が多かったためにそのような傾向を示すことがわかった。

7. 総括

丸山遺跡から出土した土壌の性格を判定するために、土壤内外の土壤試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、土壤 SK-22 に残存する脂肪は、その脂肪量は少ないがヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料、またイノシシ、ニホンジカのような動物試料の脂肪と類似していることがわかった。土壤外の対照試料も土壤内の試料とはほぼ同じ傾向を示した。これはこの土壤が周辺一帯の植物腐植土中の脂肪の影響を強く受けていて、残存する動物脂肪がごく微量であるためと考えられる。精確な判定

には土壤内の試料採取地点を多くする必要がある。

参考文献

- (1) R. C. A. Rottlander and H. Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10卷, 1979, pp260.
- (2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292卷, 1981, pp146.
- (3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäß-inhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70卷, 1983, pp33.
- (4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10卷(6), 1984, pp124。
- (5) M. Nakano and W. Fischer: 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」, 『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.』, 358卷, 1977, pp1439.
- (6) 中野益男: 「残留脂肪酸による古代復元」, 「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」, 田中琢、佐原 真編, クバプロ, 1995, pp148。
- (7) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、細 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26卷, 1984, pp40。
- (8) 中野益男: 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡—農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401。
- (9) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子: 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191。
- (10) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男: 「家の下遺跡の土壤に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 岐阜県吉城郡宮川村教育委員会。
- (11) 中野益男、中野寛子、長田正宏: 「西田遺跡から出土した土壤に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 勅岐阜県文化財保護センター。
- (12) 中野益男、中野寛子、長田正宏: 「岡前遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 勅岐阜県文化財保護センター。
- (13) 中野益男、中野寛子、長田正宏: 「弥勒寺東遺跡から出土した土壤に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 岐阜県関市教育委員会。
- (14) 中野益男、幅口 利、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡I—昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集, 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79。
- (15) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏: 「寺田遺跡土壤墓状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会。
- (16) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「摺薪遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会。

第6章 まとめ（丸山遺跡の縄文時代中期初頭の土器について）

丸山遺跡は、五味原遺跡群の他の遺跡ではほとんど検出されていない縄文時代中期初頭の遺構・遺物が検出されたということで特出される。丸山遺跡で検出された縄文時代中期初頭の土器は、第4章遺物で述べたように北陸、東海、関東、西日本にそれぞれ主体を置く土器によって構成される。このように各地域の土器が混在する様相は他の遺跡でも見られ、飛驒地方においては上宝村上灘下野切遺跡においても似たような現象がうかがえる。（岐阜県史資料編原始古代）

また、若干ではあるが前期末に位置付けられると考えられる浮線文系の土器片の存在から特に北陸系の土器に関しては前期末からの一連の影響を考えることができる。

北陸系の中期初頭に位置付けられる土器は新保式土器で斜格子目文、燃糸押圧、連続爪形文などの文様を指標とする。当遺跡ではこれに該当するものは少数である。第31図13・14がこれに当てはまるのではないかと考える。これに統く土器は新崎式であり、当遺跡ではこの時期の土器が主体を占めると思われる。木目状燃糸を施すものを新崎式に近いものと考え、縦の羽状縄文を施すものを新崎式の中段階、斜縄文のものを新段階とする見解に沿うと当遺跡のものは新崎式の古い段階のものから新段階のものまで見られる。また、胴部の文様展開で言えば第25図SK25出土の土器のように文様を4分割するものやB字形文を配すものが見られることなどからも同様のことが言える。

新崎式が厳密な意味では中期初頭に位置付けられていないことからすれば丸山遺跡の北陸系土器については中期前半とするのが正確なのかもしれない。しかし、後述するように関東系の土器や西日本系土器との関連から中期初頭の言葉を使用した。

II群6類の縄文のみで施文される土器のうち、キャリバー形のものやバケツ状に口縁が開く器形のものは羽状縄文や斜縄文の様相から上記北陸系の土器とつながるものと考える。

西日本系土器は薄手で独特の目の粗い縄文を施すことから他の土器と区別しやすい。連続爪形文や貝殻の押圧、口縁内面に縄文を施すことや酒杯状の突起などを指標とし、器形はキャリバー形が多い。船元1式と考えられる。（鷹島式については厳密な意味において鷹島式の定義全てに適応するものがないことからここでは船元1式とした）。

II群6類の中には口縁内面に縄文を施す粗製土器が含まれる。西日本の手法を受け継いだものと考えたいがこの手法に時期幅があることから船元1式段階のものとは厳密には言えないかもしれない。

東海系土器は飛驒地方では半起線上の連続爪形文や三角印刻、楔形文などの文様手法などから五領ヶ台式と見られてきた時期があるが比較的薄手で焼成堅緻の胎土を持つ土器は雲母を多量に含み赤褐色の胎土の五領ヶ台式土器と区別され北裏C1式土器であることが明らかになっている。当遺跡出土のものは貼付隆帯上に密に連続爪形文を刻み縄文を伴わないものと、三角刺突・玉抱き三叉文を持ち縄文を施すものがある。器形は頸部から開いて立ち上がる波状口縁で胴部はやや膨らむものが多い。

関東系土器は金雲母を多量に含む赤褐色胎土のものを五領ヶ台式としたが不明なものも若干ある。

北陸、東海、関東、西日本のそれぞれの土器の併行関係については3号住居跡の出土状況などから北陸の新崎式段階に東海系の北裏C1式や五領ヶ台式や西日本系の船元1式が並行すると考えられるが、不勉強のため詳細なる区別ができなかったことと検出状況の十分な検討が力不足のためできな

かったため厳密な併行関係を示すことができなかった。今後の研究に期待したい。
(伊藤秀雄)

引用・参考文献

- 青木 修 1991 『二股貝塚』知多市教育委員会
- 麻生 優 1998 『日本における洞穴遺跡の構造論的研究』
- 石川埋蔵文化財センター 1986 『庵島町徳前C遺跡調査報告（I・II）』
- 石川埋蔵文化財センター 1997 『能美丘陵東遺跡群II』
- 磯部幸男 1984 「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』1
- 今村啓輔 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4
- 印旛都市文化財センター 1994 『千葉県四街道市木戸先遺跡』
- 大江 命 1958 『上宝の先史時代』
- 柏崎町教育委員会 1960 『鍋屋町遺跡』
- 加藤三千雄はか 1986 『真脇遺跡』能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 加藤三千雄 1997 「北陸における縄文時代前期末葉土器群の展開」『石川考古学会会誌第40号』
- 金森昭憲 1991 『入海貝塚の入海式土器』『人類学博物館紀要』14 南山大学人類学部博物館
- 仲村 透 1997 『大岩橋』長野県木曾郡王滝村教育委員会・木曾郡町村会
- 上宝村教育委員会 1988 『本郷中学校保管の縄文土器・石器』
- 岐阜県文化財保護センター 1991 『門坂シズマ遺跡』
- 小島俊彰 1974 「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』富山考古学会誌5
- 財団法人長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編
- 田中彰・吉朝則富 1992 『江名子糠塚・無手無冠農場遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 谷口和人 1993 『底部』『荒城神社遺跡』岐阜県文化財保護センター
- 同 1995 『底部』『岡前遺跡』岐阜県文化財保護センター
- 同 1997 『早期～前期初頭の土器』『底部』『西田遺跡』岐阜県文化財保護センター
- 知多古文化研究会 1997 『南知多町の考古学資料』
- 坪井清足 1956 『石山貝塚』平安学園考古学クラブ
- 増子康真 1972 「八ツ崎I式土器をめぐって」『古代人』42
- 増子康真 1980 『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告書』八百津町教育委員会
- 増子康真 1995 『飛驒と考古学』飛驒考古学会
- 八尾町教育委員会 1985 『長山遺跡』
- 山下勝年 1989 『いわゆる石山式土器の再検討』『知多古文化研究』5
- 同 1990 『東海西部地域における縄文時代早期中葉の土器群』『知多古文化研究』6
- 同 1993 『柏畠式・上ノ山式・入海0式の再検討』『知多古文化研究』7

図 版

图版 1



丸山遗址全景



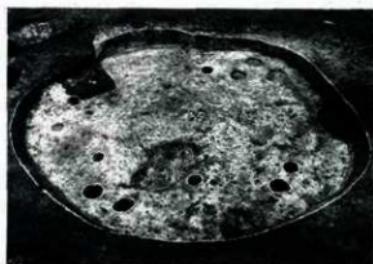
土坑群发掘状况



第1号住居跡



第2号住居跡



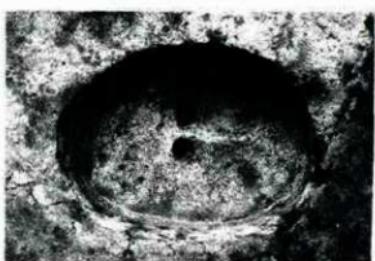
第3号住居跡



SK25



碧玉出土状况



SK22



1

2



3



4

1. 遺物包含層出土の縄文土器 1群 4b類
3. //

2. 遺物包含層出土の縄文土器 1群 5b類
4. //

5c

図版3



1



2

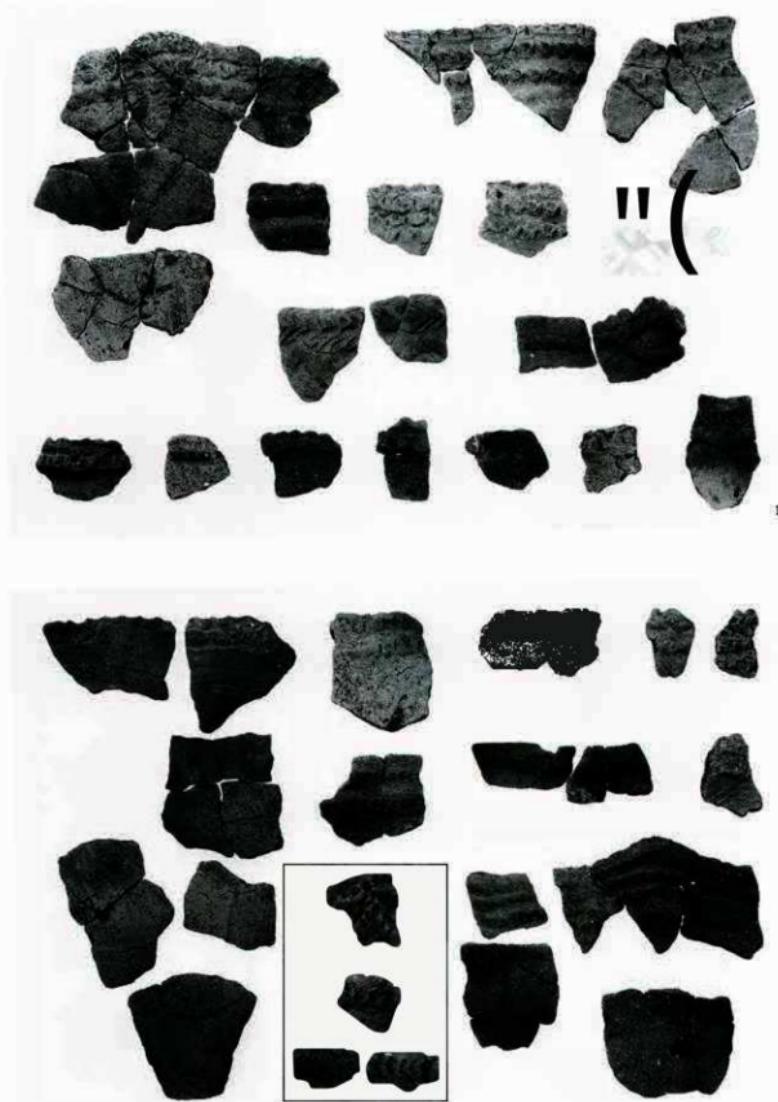


3



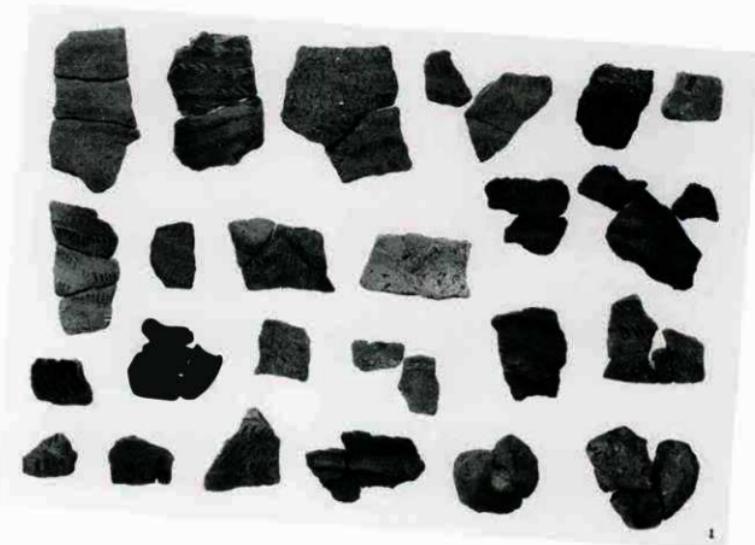
4

1. 造物包含層出土の縄文土器Ⅰ群 5C類 2. 造物包含層出土の縄文土器Ⅰ群 5C類
3. 1号住居跡出土の縄文土器Ⅰ群 4. 造物包含層出土の縄文土器Ⅰ群

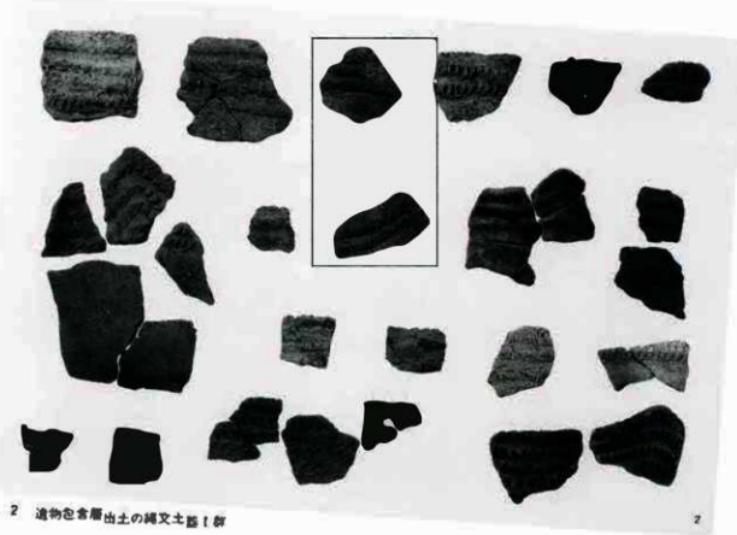


1. 2 遺物包含層出土の縄文土器
1群

図版5

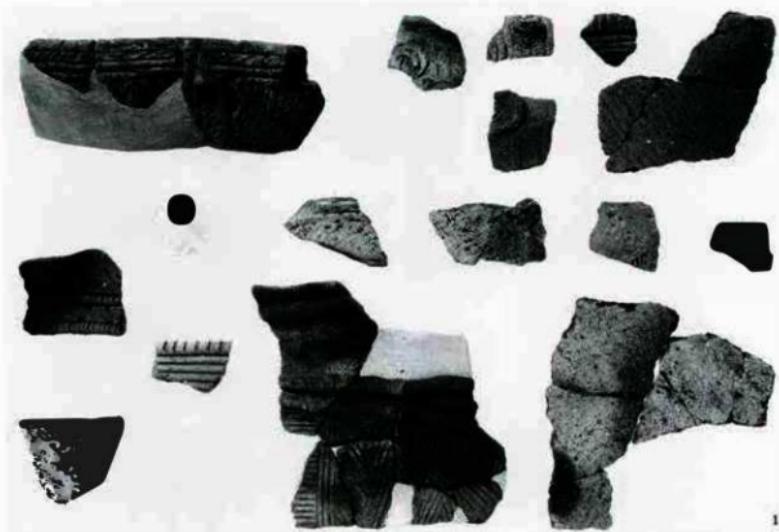


1



2

1. 2 造物包含層出土の縄文土器 1群



1



2

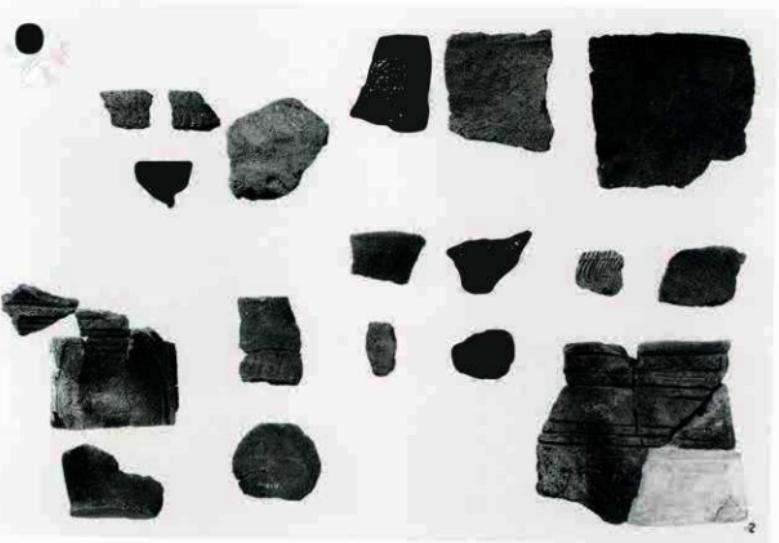
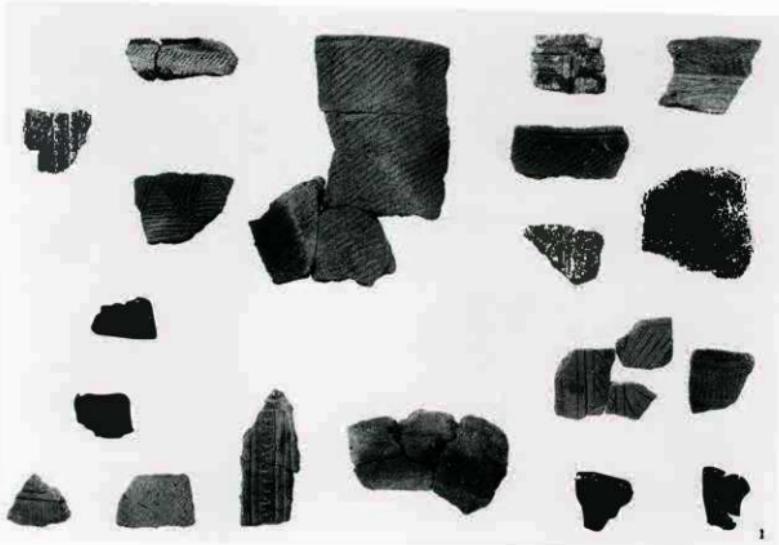


3

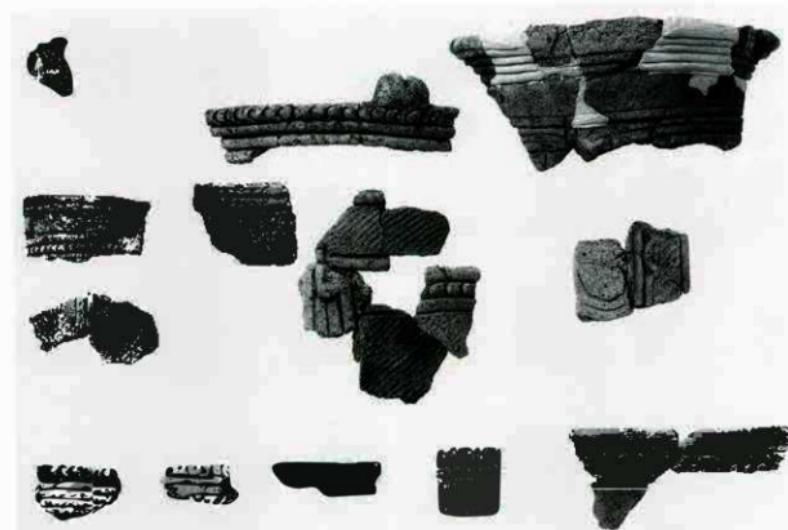
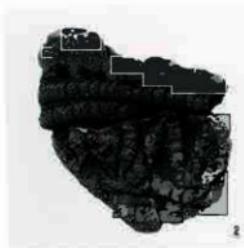
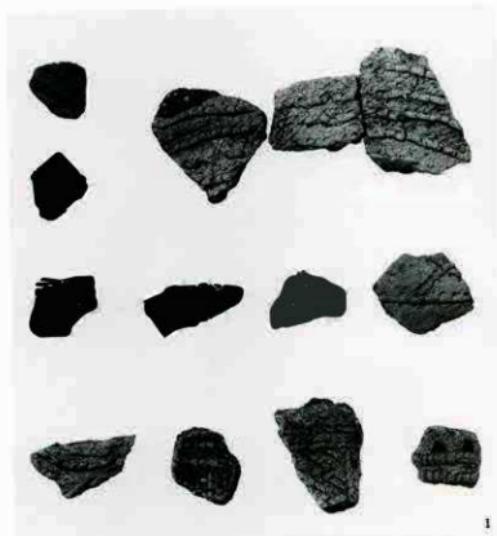
1, 2号住居跡・3号住居跡出土の縄文土器

2, 3 SK25出土の縄文土器（2方向より）

図版7



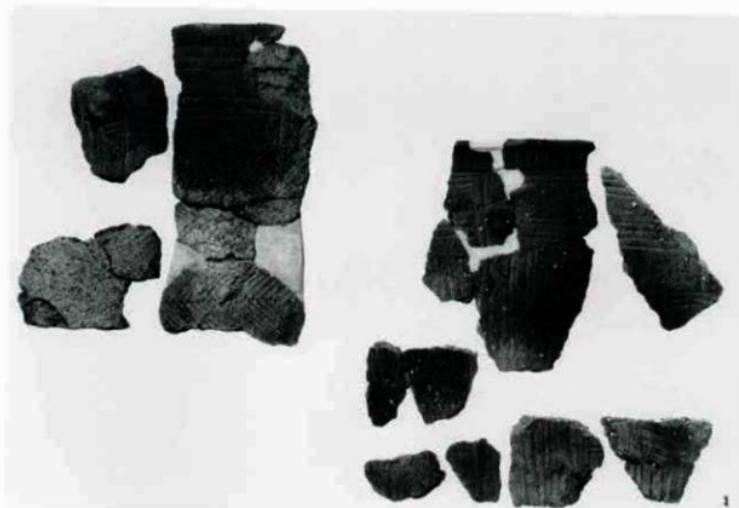
1, 2 土坑出土の縄文土器



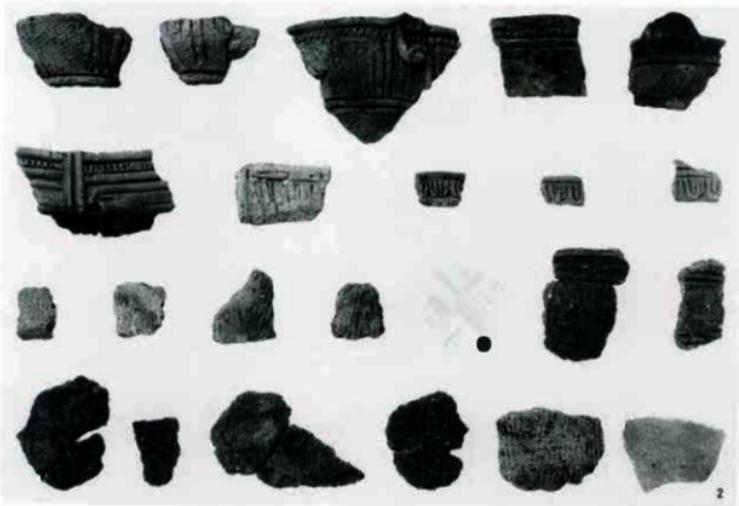
1. 遺物包含層出土の縄文土器 II群 1類
4. //

2. 3. 遺物包含層出土の縄文土器 II群 1類 (2表、3表)

図版9



1



2

1, 2 遺物包含層出土の陶文土器Ⅱ群2類



I. 2 遺物包含層出土の縄文土器II群2類



1



2

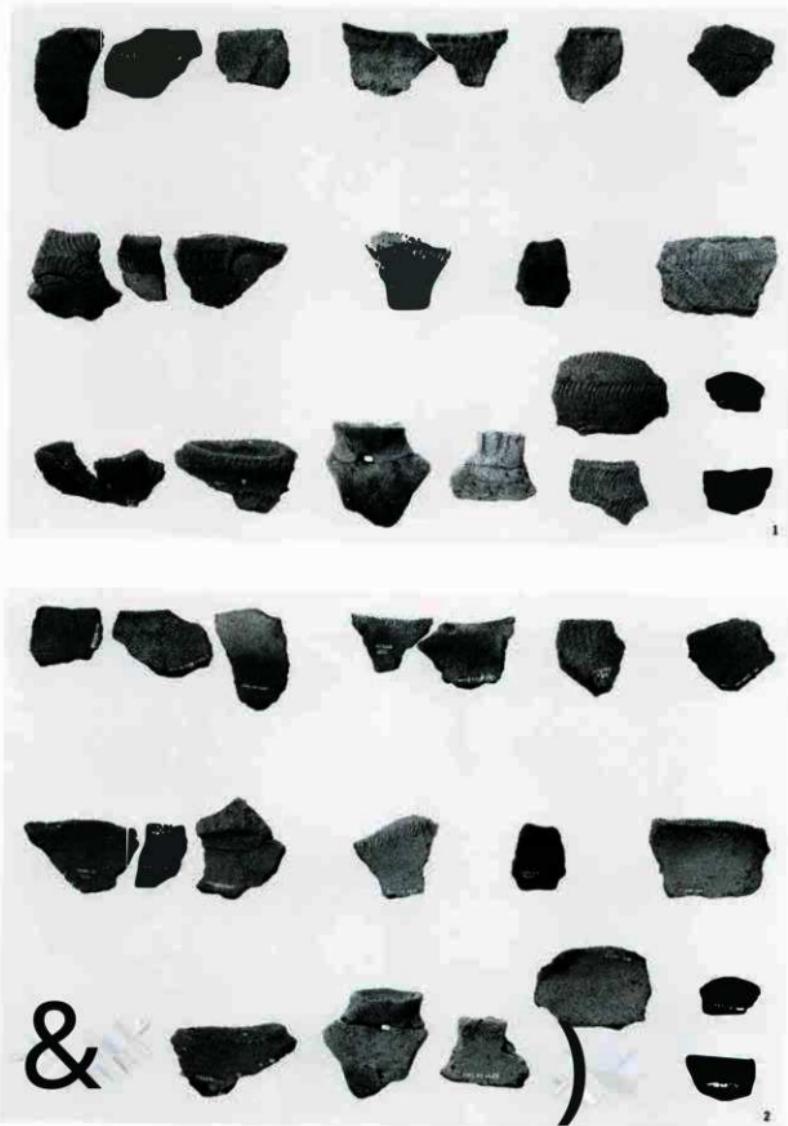


3



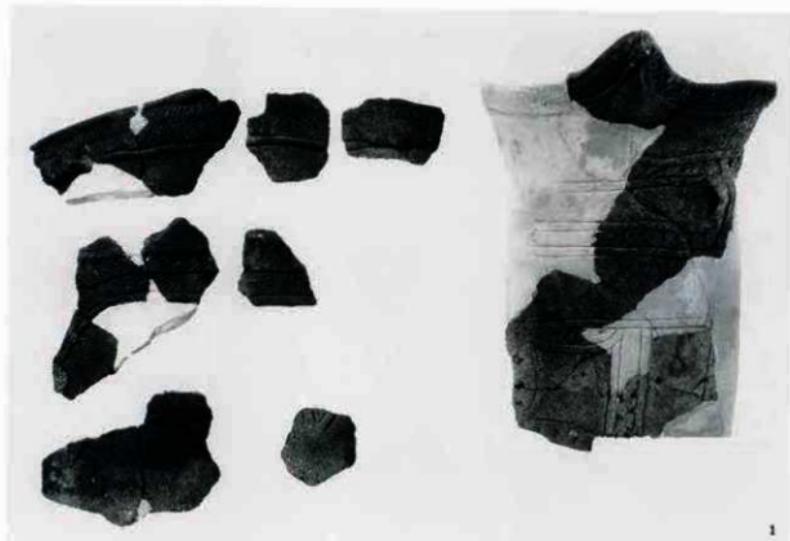
4

1. 遺物包含層出土の縄文土器II群2類 2. 遺物包含層出土の縄文土器II群3類
3. 4 ハ II群3類 (3枚、4箇)

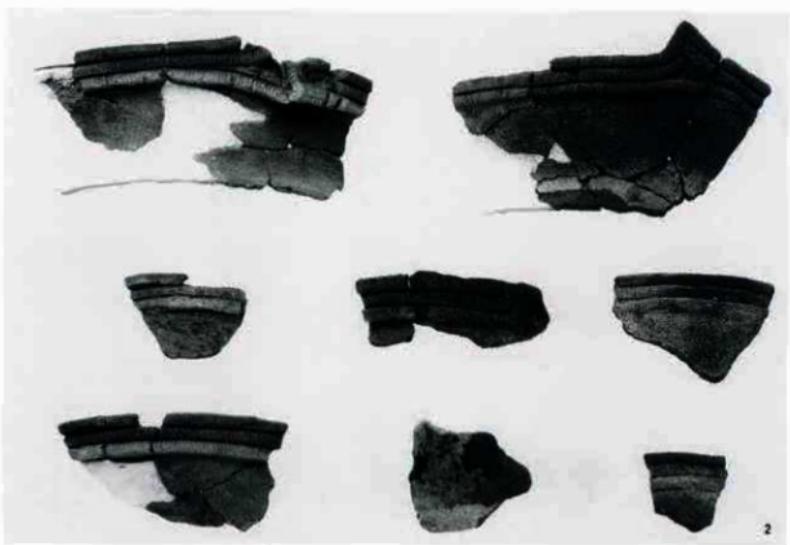


1, 2 遺物包含層出土の縄文土器Ⅱ群3類 (1表、2表)

図版13

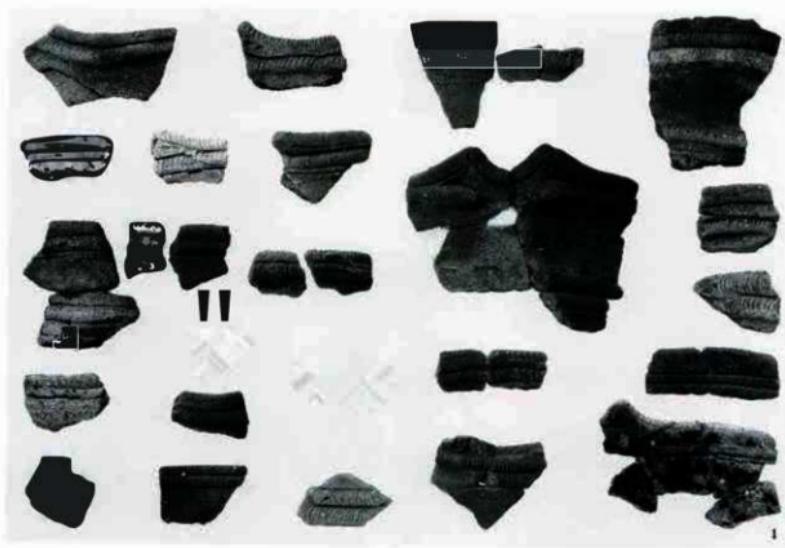


1



2

1. 2 遺物包含層出土の縄文土器 1群4項



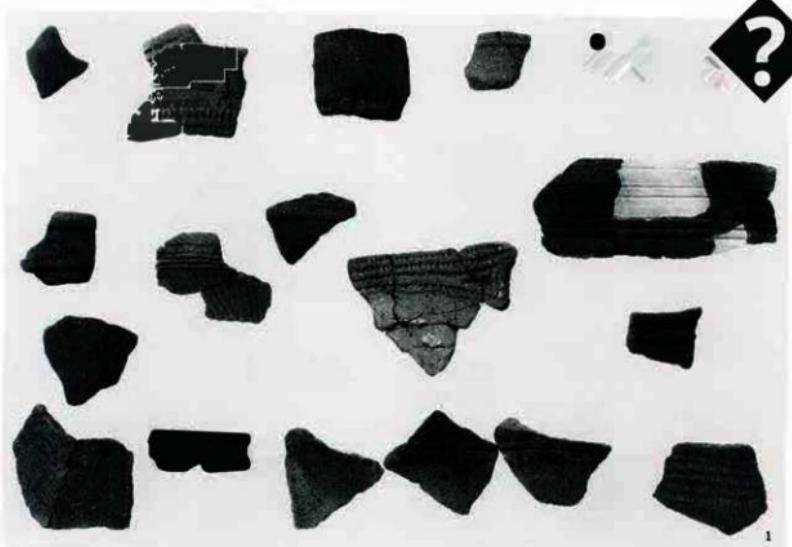
1



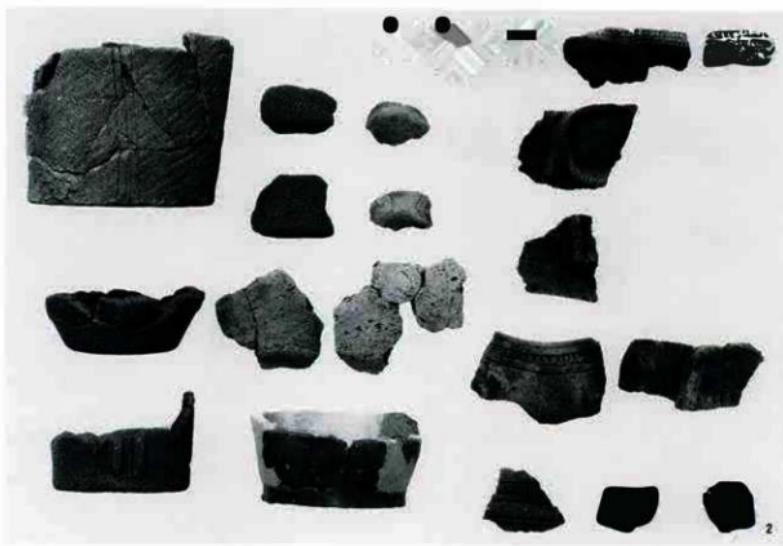
2

1, 2 遺物包含層出土の縄文土器II群 4種

図版15

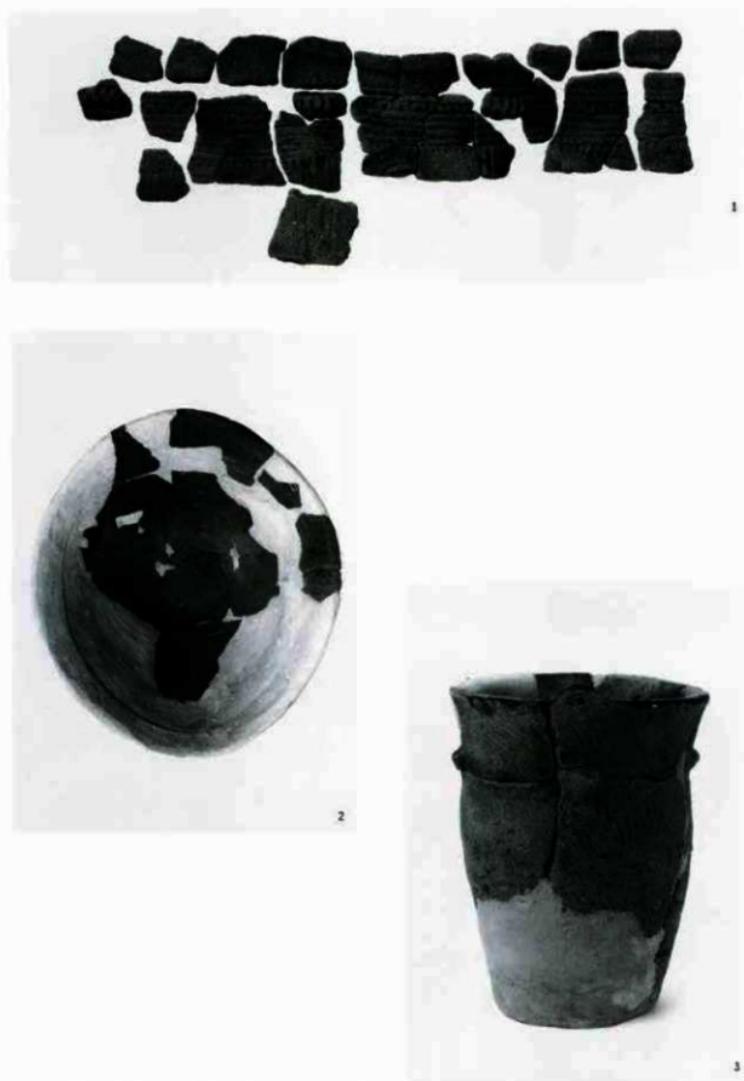


1



2

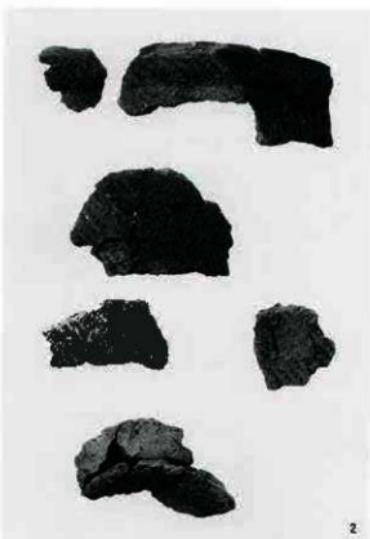
1, 2 遺物包含層出土の縄文土器15点



1. 2 退物包含層出土の縄文土器11件5類 3. 退物包含層出土の縄文土器5件



1

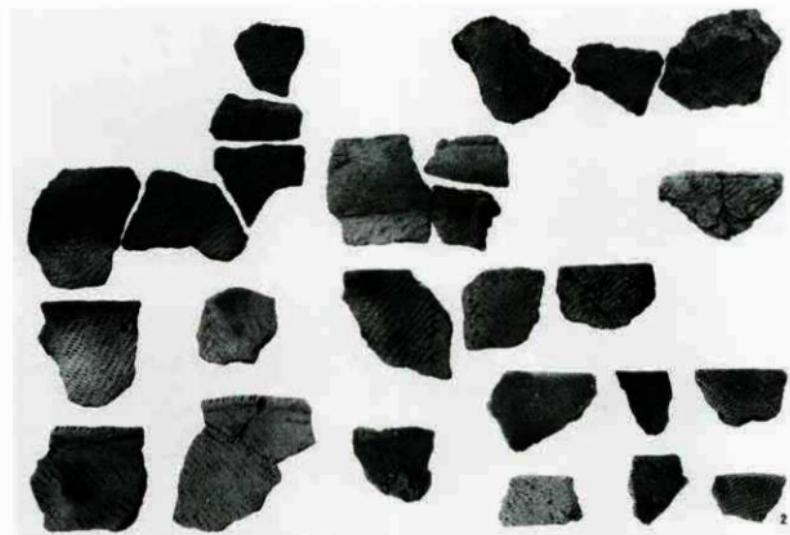
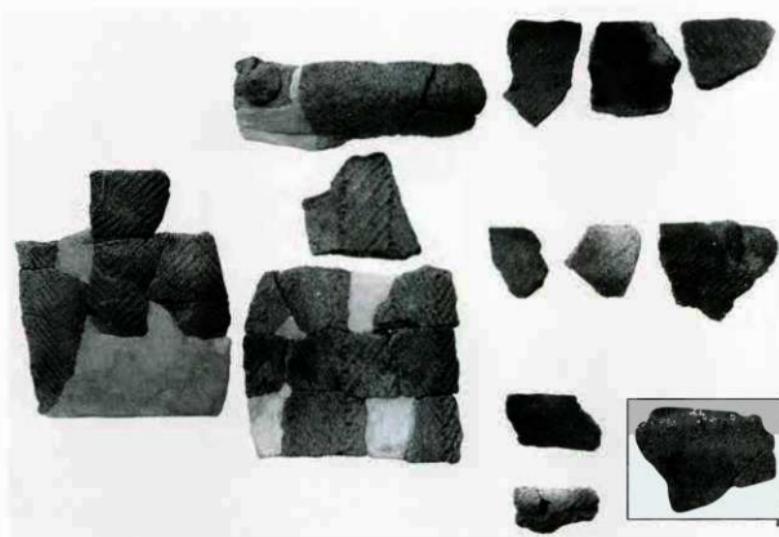


2



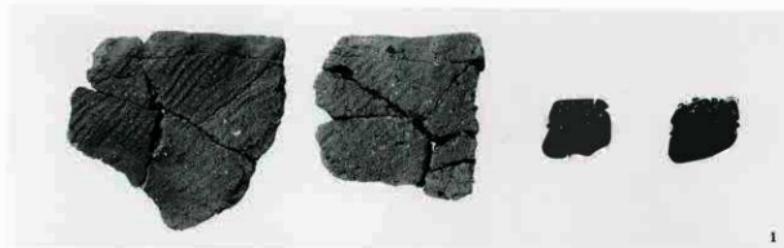
3

1. 2. 3 遺物包含層出土の縄文土器群5類

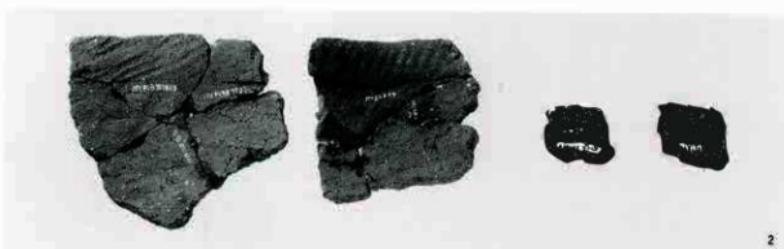


1, 2 遺物包含層出土の縄文土器Ⅱ群6類

図版19



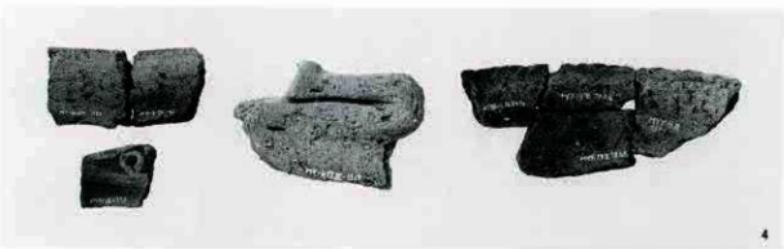
1



2



3



4

1, 2 遺物包含層出土の縄文土器II群5類 (1表、2表) 3, 4 遺物包含層出土の縄文土器 (3表、4表)



1

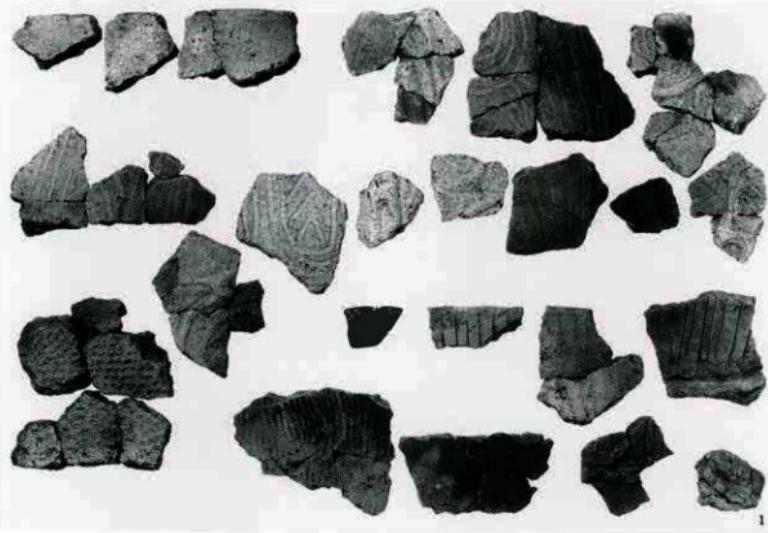


2

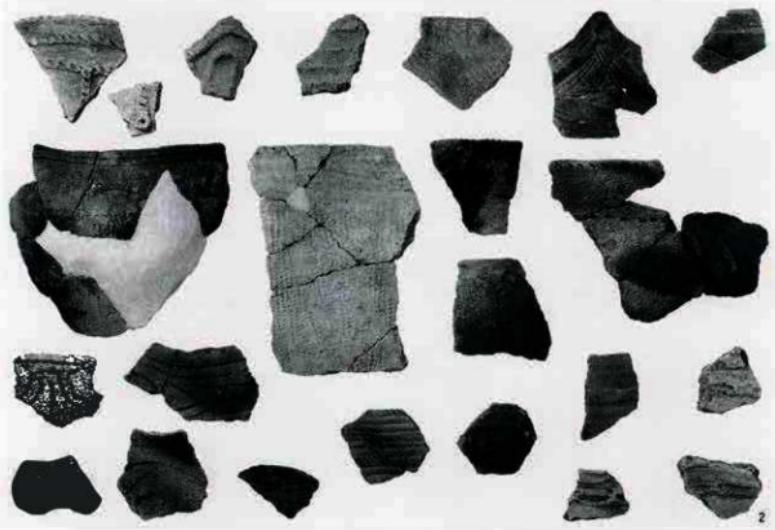


3

1. 2. 3 遺物包含層出土の縄文土器 1187 類

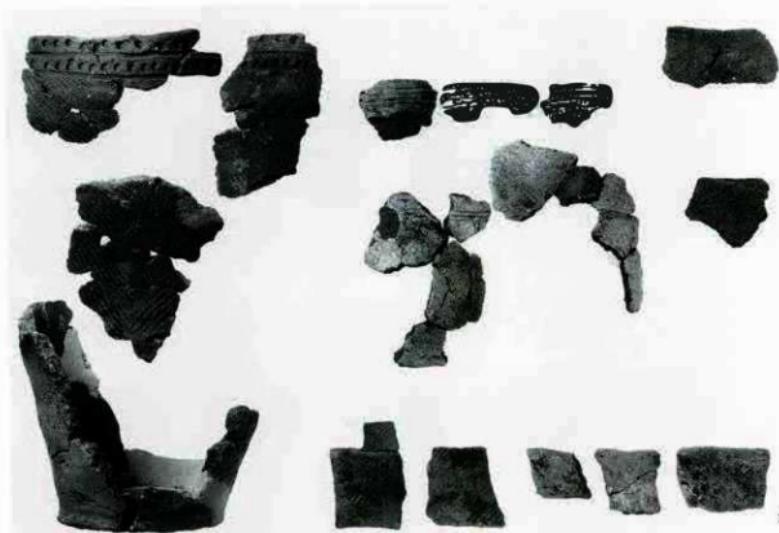


1



2

1. 遺物包含層出土の縄文土器群
2. ハシマ群

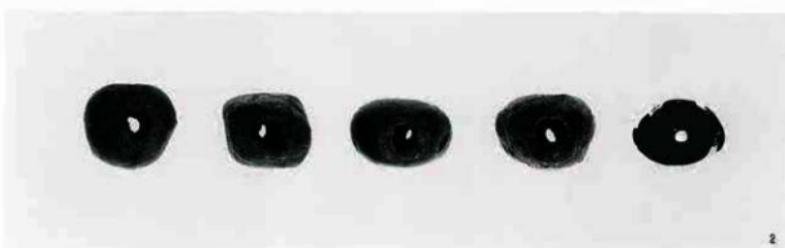


2. 遺物包含層出土の縄文土器III群 1. 3. 遺物包含層出土の縄文土器IV群

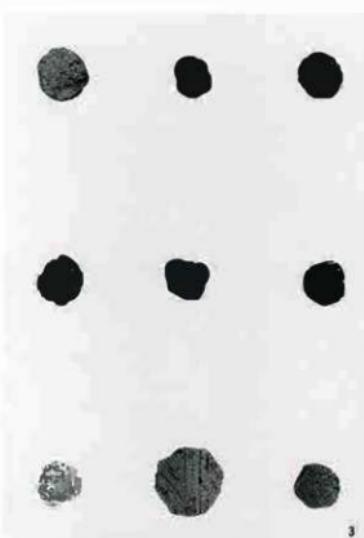
図版23



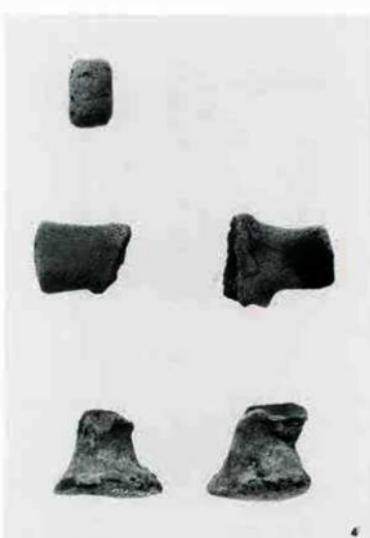
1



2



3

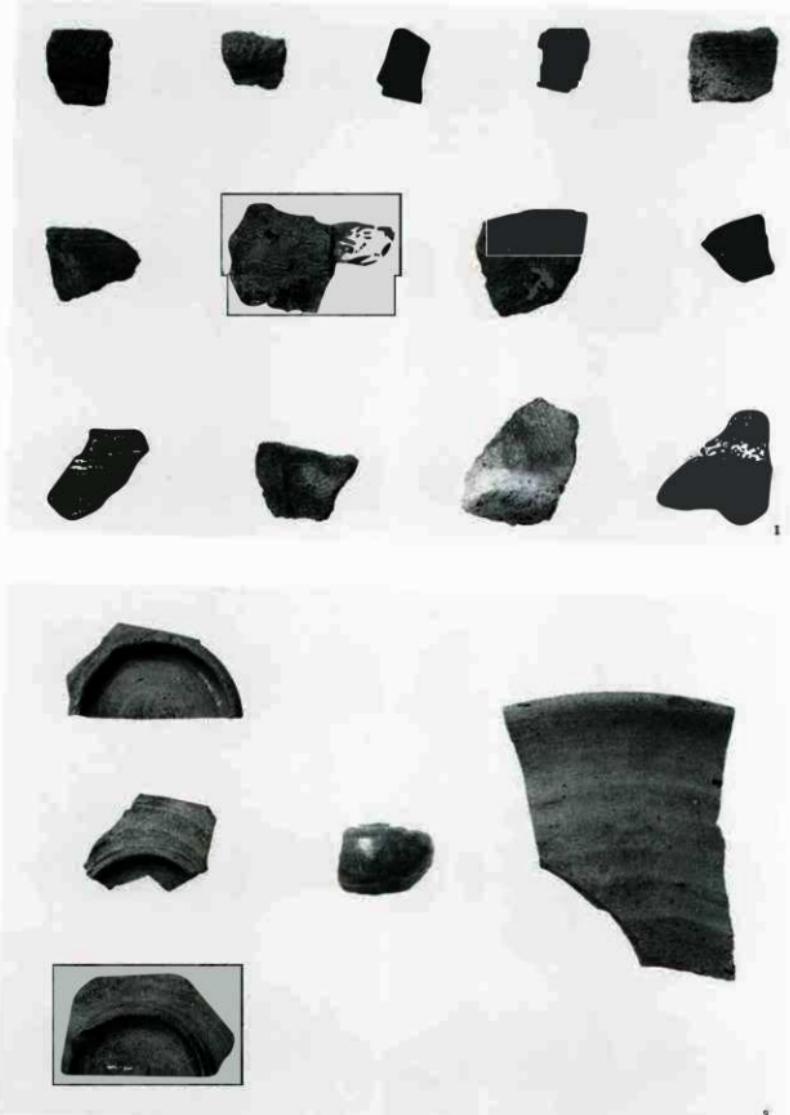


4

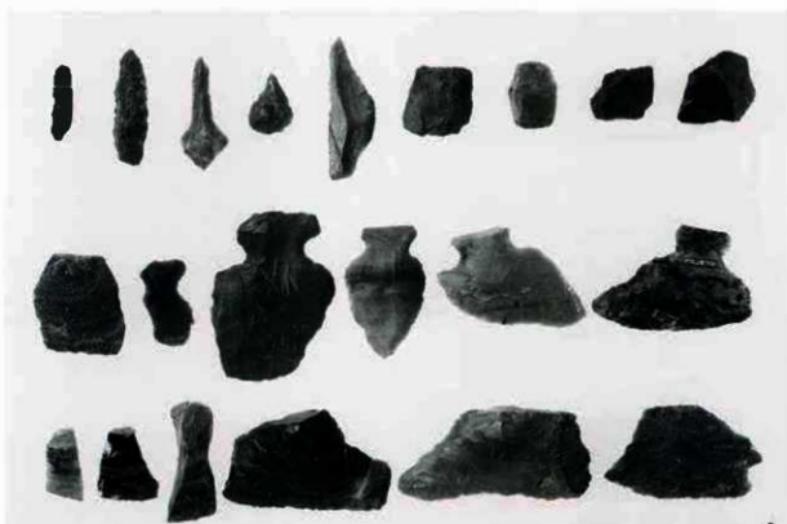
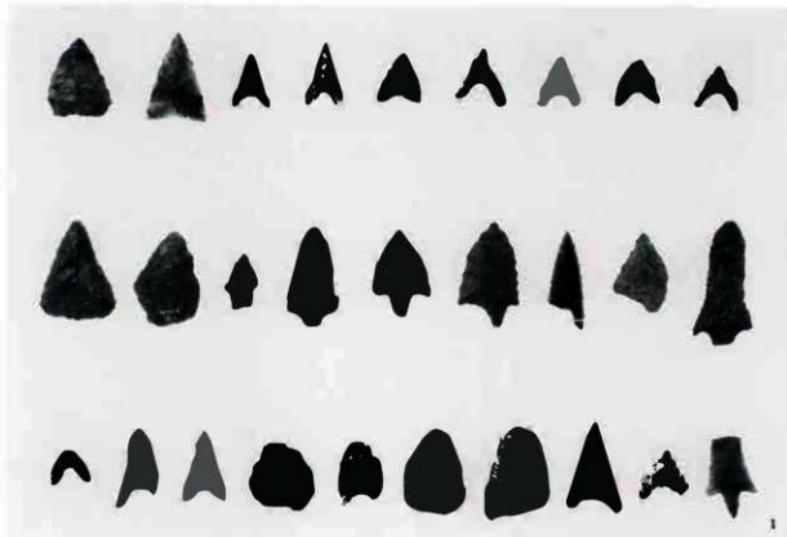
1. 2 SK22出土の被培玉製品

4. 遺物包含層出土の土製品・土偶

3. 遺物包含層出土の土製品（土器片利用の円盤）

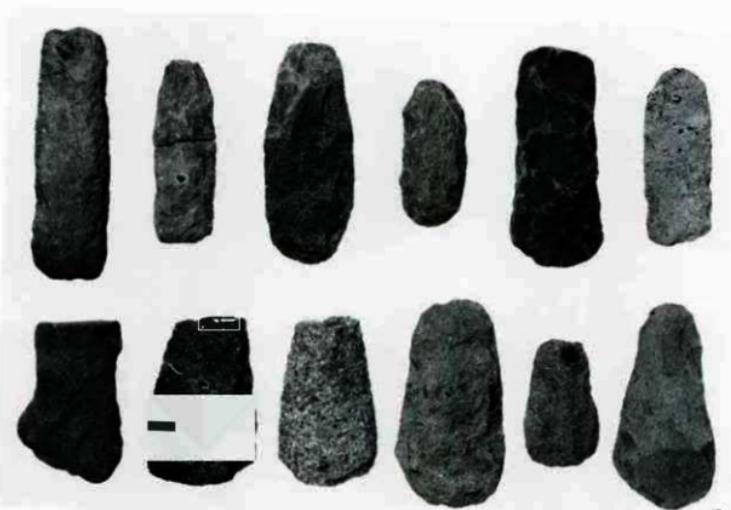


1. 遺物包含層出土の茶生土器 2. 遺物包含層出土の中近世陶器類

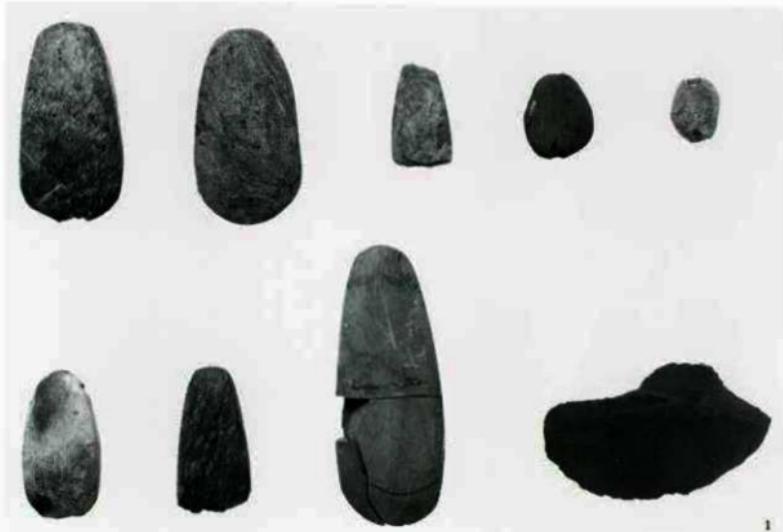


1. 造物包含層出土の石器（石頭）

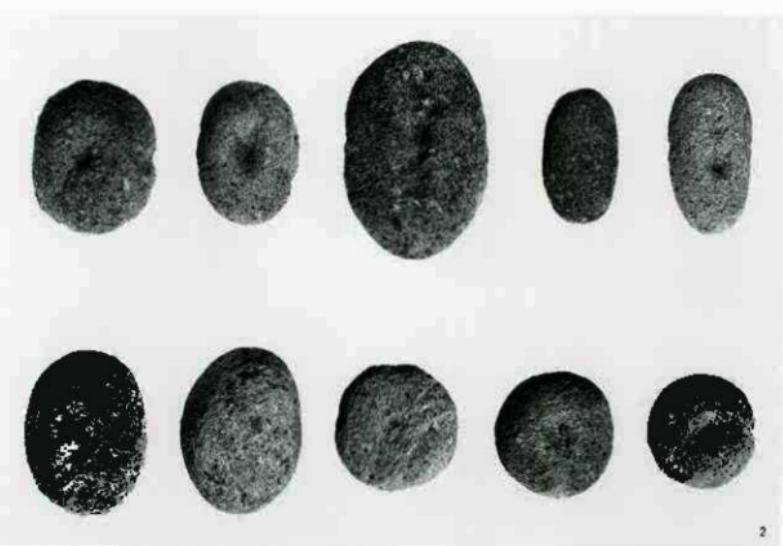
2. 造物包含層出土の石器（石頭・片打石器・抉入石器・石匙・へら形石器・削器）



1. 遺物包含層出土の石器（有刃石製品・核器・UF-RF-Cア）
2. (打削石片)



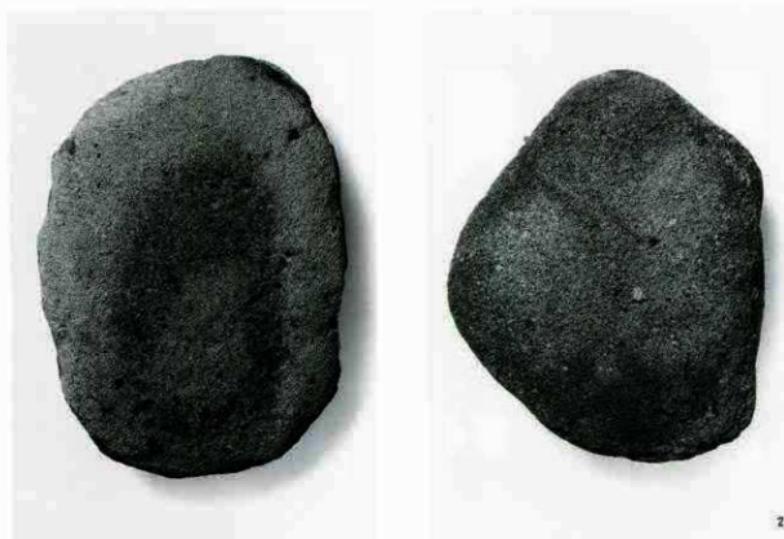
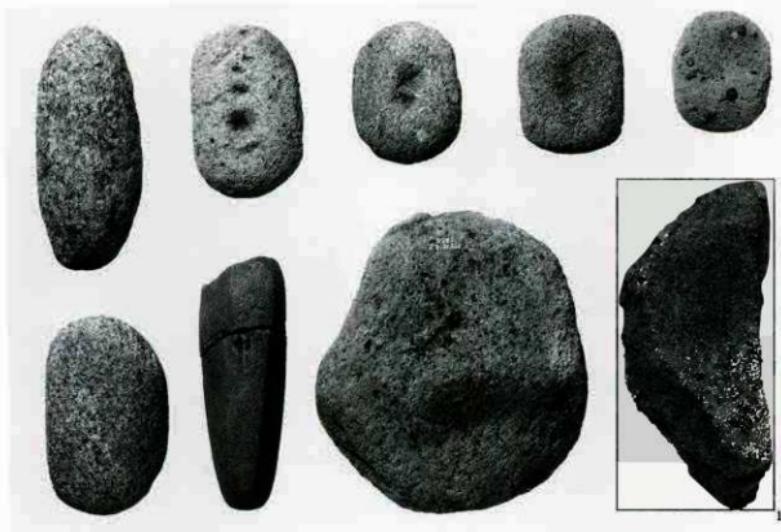
1



2

1. 遺物包含層出土の石器 (磨製石斧・石鎚・横刃型石器)

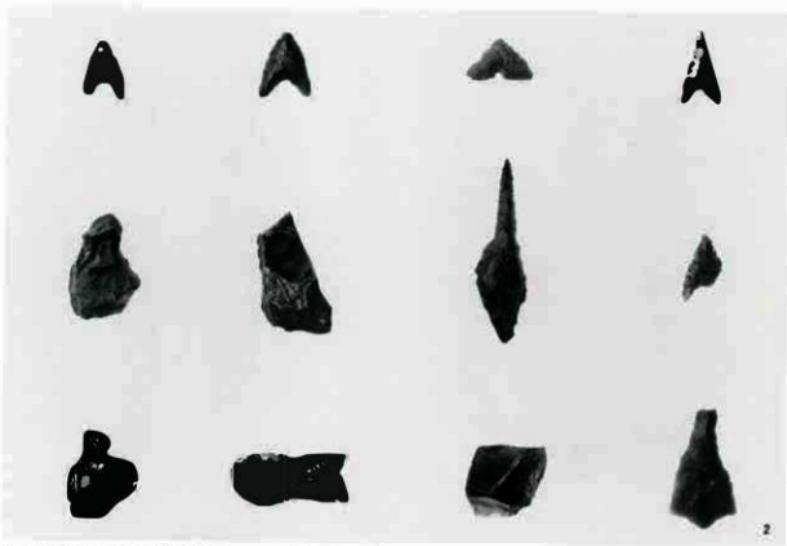
2. // (磨石・凹石)



1. 遺物包含層出土の石器（凸石・石皿）

2. // (石皿)

図版29



1. 遺物包含層出土の石器（石頭）
2. 遺構出土の石器

報告書抄録

ふりがな	まるやまいせき						
書名	丸山遺跡						
副書名	丹生川ダム水没地区(五味原遺跡群)埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	第4集						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第45集						
編著者名	伊藤秀雄 上出巳吉 谷口和人 野村宗作 藤田英博 岩田 修 吉田奈穂子 中野益男 中野寛子 長田正宏 横田直見						
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒500-8708 岐阜県岐阜市町上(岐阜競合内)TEL058-(264)-1111(814)						
発行年月日	西暦1998年3月30日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査方法
所取遺跡名	所在名	市町村	遺跡番号			調査面積	測量方法
丸山遺跡	岐阜県大野郡 丹生川村折敷地	21601	08761	36°12'57"	137°22'38"	1996.4.1 1996.11.2 2,500m ²	丹生川ダム 建設事業に 伴う事前調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
丸山遺跡	聚落	縄文	堅穴住居跡・軒 主瓦群	縄文土器 石器 琥珀玉製品		縄文時代中期初頭の まとまった主器群が出土した。 墓と推定される土坑 から琥珀玉製品が出土した。	

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第45集

丸 山 遺 跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）
埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

1998年3月25日 印刷

1998年3月31日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内)

印 刷 西 渡 印 刷 株 式 会 社